

an
ociation
olied
chology

jaap 2005

**日本応用心理学会
第72回大会 発表論文集**

2005年9月3日(土)・4日(日)

福島学院大学

日本応用心理学会 第72回大会
発表論文集

大会テーマ

「地域福祉に果たす応用心理の役割」

2005. 9. 3-4

福島学院大学

目 次

特別記念講演・特別招待講演・公開シンポジウム・
公開パネルディスカッション・ワークショップ・自主シンポジウム・研修会

特別記念講演.....1

9月3日(土) 14:40~16:00 (カーサフローラ 千葉記念ホール)

講演者 柏木 恵子 (文京学院大学教授)
演 題 発達・家族の心理学と地域福祉ー地域子育て支援の理論と実践、そして提案ー
司 会 星野 仁彦 (福島学院大学 大会準備委員長)

特別招待講演.....3

9月4日(日) 13:00~14:20 (カーサフローラ 千葉記念ホール)

講演者 瀧本 孝雄 (獨協大学外国語学部教授)
演 題 大学生とメンタルケア
司 会 渡辺 俊彦 (福島学院大学)

公開シンポジウム I5

9月3日(土) 16:15~17:30 (カーサフローラ 千葉記念ホール)

「血液型性格判断、ホントかウソか」

企画・司会者 藤田 主一 (日本体育大学)
話題提供者 大村 政男 (日本大学名誉教授)
荒木 英幸 (福島県新聞社)
指定討論者 浮谷 秀一 (東京富士大学)
星野 仁彦 (福島学院大学)

公開シンポジウムⅡ 7

9月4日(日) 14:30~16:30 (カーサフローラ 千葉記念ホール)

「福祉現場におけるメンタルケア」

企画・司会者 安田 道子 (福島学院大学)
話題提供者 橋本 輝雄 (福島県精神保健福祉士会会長)
品川 満紀 (福島学院大学)
須田 弘子 (まごころケアホーム高湯の里)
指定討論者 南 隆男 (慶應義塾大学)
本田 久市 (福島学院大学)

公開パネルディスカッション 9

9月4日(日) 13:00~14:20 (カーサ21 214)

「地域で取り組む自殺予防の諸条件」

パネラー 畑 哲信 (福島県精神保健福祉センター)
金子久美子 (自死遺族ケアを考える会・れんげの会)
企画・司会 梅宮れいか (福島学院大学福祉学部)

ワークショップⅠ 11

9月4日(日) 10:00~11:30 (しらゆり館 5研)

「軽度発達障害の思春期・青年期の二次障害をめぐって」

司会者 桃井 真帆 (福島学院大学)
報告1 軽度発達障害—ADHD、LD、アスペルガー症候群—の二次障害
星野 仁彦 (福島学院大学)
報告2 スクールカウンセリングの現場から
大島 典子 (福島学院大学)
報告3 二次障害を予防する新しい取り組み
桃井 真帆 (福島学院大学)

ワークショップⅡ12

9月4日(日) 10:00~11:30 (図書館情報センター 大視聴覚室)

「日英ソーシャルワーク教育カリキュラムについて

—子ども家庭福祉・虐待・家族支援・愛着理論をキーワードとして—

司会者 藤原 正子 (福島学院大学)

報告1 1980年前後の日英のソーシャルワーク教育から
～ソーシャルワークにおける家族支援と愛着理論～
藤原 正子 (福島学院大学)

報告2 2000年前後の日英のソーシャルワーク教育から
～ソーシャルワークにおける子ども家庭福祉と虐待支援～
伊藤嘉余子 (福島学院大学)

自主シンポジウム13

9月3日(土) 9:30~11:00 (図書館情報センター 大視聴覚室)

「臨床心理学とコミュニティーサービス

大学と地域の小・中学校との相互援助・協力体制の研究」

企画者 近藤 俊明 (東京福祉大学教授)

司会者 手島 茂樹 (東京福祉大学教授)

話題提供者 山極 和佳 (東京福祉大学院講師)

新井 雅人 (東京福祉大学院助手)

田中 朋子、岡田 恵理子、深澤 大地 (東京福祉大学院学生)

今泉 紀嘉 (群馬県スクールカウンセラー、東京福祉大学教授)

湯浅 とも子 (群馬県スクールカウンセラー、

元伊勢崎市学校教育相談員)

石川 清子 (東京福祉大学教授)

指定討論者 萩原 元昭 (埼玉学園大学人間学部、幼児発達学科学科長)

※上記発表者以外の研究分担者

原千恵子 (東京福祉大学教授)、馬場史津 (東京福祉大学助教授)

大澤靖彦 (東京福祉大学助教授)、三井真紀 (東京福祉大学講師)

柳澤利之 (東京福祉大学講師)

学会研修委員会企画第4回研修会 研修会 A.....15

9月3日(土) 10:00~11:30 (しらゆり館 5研)

講義題目 マイクロカウンセリング

講師 福原真知子 (常磐大学教授)

学会研修委員会企画第4回研修会 研修会 B.....16

9月3日(土) 13:00~14:30 (しらゆり館 5研)

講義題目 応用心理学の道程を歩んで—医療、企業、教育、文化の面に跨って—

講師 大久保康彦 (国学院大学栃木短期大学名誉教授)

研究発表（ポスター発表）

第1日 9月3日(土) ポスター発表Ⅰ ポスター掲示時間 10:00～11:30

在席責任時間 奇数番号 10:00～10:40 偶数番号 10:50～11:30

かとれあ館 51 番教室 発達・教育

051-A-1	4・5歳児の「物の代用」に対する理解の発達の变化	立命館大学大学院 社会学研究科	○井上洋平	17
051-A-2	造形遊びにおける幼児親子のコミュニケーション －美術的手法による遊びと発達への支援－	台東区社会福祉事業団 児童厚生員	○片岡杏子	18
051-A-3	非選抜型大学における学生の入学動機と生活意識の分析	神戸国際大学 経済学部 神戸国際大学 経済学部	○三宅義和 遠藤竜馬	19
051-A-4	子どもの言語による行動調整機能の発達の研究	立命館大学大学院 社会学研究科	○前田明日香	20
051-A-5	日米の児童の自己統制とその規定要因の検討 日米の児童の異文化適応過程の行動分析を中心に	愛知学院大学	○中田 栄	21
051-A-6	青年期女子の性役割観および性役割行動	文京学院大学	○神谷有里子	22
051-A-7	幼児期初期における対象操作活動と認知・言語機能 及び社会的交流活動の発達連関	京都大学 高等教育研究開発推進センター	○田中真介	23

かとれあ館 52 番教室 人 格

052-A-1	恋愛類型と性格特性の関連について	浅井学園大学大学院 人間福祉学研究科	○佐藤祐基	24
052-A-2	人格の偉大性要因についてX －中高年者による「親孝行」への回想－	日本体育大学 共立女子大学	○藤田圭一 高嶋正士	25
052-A-3	ユーモア測定尺度の作成(3)	関西福祉科学大学 社会福祉学部臨床心理学科	○宇恵 弘	26
052-A-4	インターネットと自己に関する研究(2)	常磐大学 大学院人間科学研究科	○田中道弘	27
052-A-5	性能的性格(4) －性能に関する自己評定値と作業成績との関連－	東海女子大学 適合性評価研究所	○川島大司 久米 稔	28
052-A-6	イップスの研究(3) 完全主義尺度とEPPS	白梅学園短期大学 中央学院大学	○林 潔 八木孝彦	29
052-A-7	青年の自我同一性と主観的ウェルビーイング	駒澤大学 教職課程(非常勤)	○角野善司	30
052-A-8	MSC(創造的構え)テスト改訂の試み(9) タイプ・グループによる検討そのIII －質問項目の識別度	日本福祉教育専門学校 適合性評価研究所 秋田看護福祉大学 文化女子大学 松本短期大学	○寺澤美彦 久米 稔 成田 猛 高野隆一 伊賀憲子 内藤美智子	31

かとれあ館 53 番教室
看護

053-A-1	看護学生の老年者観と背景との関連 －老人観スケールを用いて－	東京都立北多摩看護専門学校 千葉大学	○前田恵利 内海 滉	32
053-A-2	「絵本の読み聞かせ」を実施している母親の読み聞かせの実態と育児意識に与える影響	県立長崎シーボルト大学 県立長崎シーボルト大学 群馬大学 千葉大学	○中 淑子 林田りか 草野美根子 内海 滉	33
053-A-3	学習効果が上がらない学生のもつ要因 －技術修得のための個別指導を通して－	埼玉医科大学短期大学 看護学科 埼玉医科大学短期大学 看護学科 埼玉医科大学短期大学 看護学科 埼玉医科大学短期大学 看護学科 埼玉医科大学短期大学 看護学科 埼玉医科大学短期大学 看護学科	○臼井恵美 高原素子 藤島和子 玉木ミヨ子 嶺瀬葉月 蒲生澄美子 関口恵子	34
053-A-4	看護学生のストレスについて	東京都立北多摩看護専門学校 千葉大学	○加藤奈保美 内海 滉	35
053-A-5	精神障害者と交流経験を持った看護系短大生の自由記載に表現された精神障害者に対する見解	信州大学 医学部保健学科 信州大学 医学部保健学科	○小林千世 松永保子	36
053-A-6	不妊治療における心理カウンセラーの役割	聖徳大学 日本大学 医学部 さちレディースクリニック	花沢成一 ○殿村由希 櫻井 薫	37
053-A-7	死別経験が死生観に与える影響	駒沢大学	○間島英俊 神田和美	38

第1日 9月3日(土) ポスター発表Ⅱ ポスター掲示時間 12:50～14:20

在席責任時間 奇数番号 12:50～13:30 偶数番号 13:40～14:20

かとれあ館 51 番教室
産業・職業

051-B-1	中小企業の労働安全衛生管理 －体制と安全衛生推進阻害要因について－	常磐大学大学院 人間科学研究科 常磐大学 人間科学部	○杉村正子 正田 亘	39
051-B-2	IT企業における顧客業務把握手法の開発と実践	株式会社 富士通研究所 ソリューション研究 開発室CRM研究部	○矢島彩子 指田直毅 石垣一司	40
051-B-3	常連客に関する一考察③ －ファミリーレストランで常連になれるのか－	北星学園大学 文学部心理・ 応用コミュニケーション学科	○濱 保久	41

051-B-4	大学生のパーソナリティと職業志向性（2） 能力感の項目反応率と因子構造	流通科学大学 サービス産業学部 流通科学大学 サービス産業学部 関西福祉科学大学 健康福祉学部 文京学院大学 人間学部 日本能率協会マネジメントセンター HRM コンサルティング部 白百合大学大学院 文学研究科	○銅直優子 森下高治 三戸秀樹 松田浩平 片岡大輔 佐藤恵美	42
051-B-5	障害のある従業員の社内キャリア	九州看護福祉大学 看護福祉学部 社会福祉学科	○吉光 清	43
051-B-6	日藝版「癒し評価スケール」の作成に向けて	日本大学 芸術学部	○松本 洸	44
051-B-7	ヒューマンエラーを防止するための教育とその効果	財団法人労働科学研究所 研究部 関東学院大学 文学部 財団法人労働科学研究所 研究部 財団法人労働科学研究所 研究部 関東学院大学 人間環境学部	○施 桂栄 細田 聡 奥村隆志 余村朋樹 井上枝一郎	45

かとれあ館 52 番教室 産業・職業

052-B-1	大学生のパーソナリティと職業志向性 3	文京学院大学 白百合女子大学 流通科学大学 流通科学大学 関西福祉科学大学 日本能率協会マネジメントセンター	○松田浩平 佐藤恵美 銅直優子 森下高治 三戸秀樹 片岡大輔	46
052-B-2	心理会計 －旅行、家具、スーツが前払い・後払いされる割合の 比較（1）－	流通科学大学	○蜂屋 真	47
052-B-3	大学生のパーソナリティと職業志向性 1	白百合女子大学大学院 流通科学大学 流通科学大学 文京学院大学 関西福祉科学大学 日本能率協会マネジメントセンター	○佐藤恵美 銅直優子 森下高治 松田浩平 三戸秀樹 片岡大輔	48
052-B-4	騒音感受性と人格特性および感受性の関係の検討	京都大学 教育学研究科教育認知心理学講座	○宮原道子	49
052-B-5	「白紙に世界地図を描け！」でどんなことが分かるか	首都大学東京 システムデザイン学部 経営システムデザイン・コース	○大澤 光	50
052-B-6	課題遂行コストとリスク教示が違反行動に及ぼす効果	平安女学院大学 短期大学部保育科 大阪大学大学院 人間科学研究科 大阪大学大学院 人間科学研究科 名古屋工業大学大学院 工学研究科 独立行政法人産業安全研究所 境界領域・ 人間科学安全研究グループ 大阪大学大学院 人間科学研究科	○和田一成 臼井伸之介 篠原一光 神田幸治 中村隆宏 太刀掛俊之	51
052-B-7	企業選択に見られる大学生の職業観（3） －特に、1年生前期の性別による比較－	城西短期大学 経営情報実務学科	○和田美知子	52

かとれあ館 53 番教室
産業・職業

053-B-1 注意機能尺度の作成の試み (8)	東北大学 情報科学研究科 東北大学 情報科学研究科 東北大学 情報科学研究科	○鈴木大輔 和田裕一 岩崎祥一	53
053-B-2 評価状況が反応時間課題に与える影響	文京学院大学大学院 人間学研究科 文京学院大学 人間学部 文京学院大学 人間学部	○田中翔子 長野祐一郎 松田浩平	54
053-B-3 歩き方が点字ブロックの認知に及ぼす影響 - 白杖を利用する歩き方と利用しない歩き方の比較 -	東京大学 先端科学技術研究センター 東京大学 先端科学技術研究センター 東京大学 先端科学技術研究センター	○布川清彦 中野泰志 井手口範男	55
053-B-4 犯罪報道のインパクトとデモグラフィック要因の関係 - 地域住民に対する意識調査より -	日本学術振興会 名古屋大学大学院環境学研究科 山形県警察本部 科学捜査研究所	○小野寺理江 桐生正幸	56
053-B-5 ERP による虚偽検出	愛知県警察本部 科学捜査研究所	○横井幸久	57

第 1 日 9 月 4 日 (日) ポスター発表Ⅲ ポスター掲示時間 10:00~11:30

在席責任時間 奇数番号 10:00~10:40 偶数番号 10:50~11:30

かとれあ館 51 番教室
臨床相談、社会・文化

051-C-1 中学生のコンピタンスと心理に関する研究	桜美林大学大学院 国際学研究科人間科学専攻 臨床心理学専修	○橋本泰子	58
051-C-2 日本語版自覚ストレス調査票の短縮版作成の検討	財団法人エム・オー・エー健康科学センター 生命科学研究所 文京学院大学大学院 人間学研究科	○木村友昭 山岡 淳	59
051-C-3 タイ人の人間関係スキーマ - 日本人日本語教師による P A C 分析 -	信州大学 人文学部	○内藤哲雄	60
051-C-4 対人状況場面とコミュニケーション形態による話題 カテゴリの変化	文京学院大学大学院 人間学研究科 文京学院大学 人間学部	○田原理恵 松田浩平	61
051-C-5 福祉施設における転職者の Q W L に関する研究	東京富士大学学生相談室 東京富士大学	○木村たき子 岡村一成	62
051-C-6 自由な行為の心理学的範囲について(1)	名古屋市立大学 大学院 人間文化研究科	○久保田健市	63

かとれあ館 52 番教室
社会・文化

052-C-1 ポジティブな自己評価とネガティブな自己呈示 - 日本人は本当に自己評価が低いのか -	白梅学園短期大学 立正大学心理学部	○荻野七重 齊藤 勇	64
052-C-2 日本人と中国人の人間関係スキーマの差異	信州大学 人文科学研究科 信州大学 人文学部	○閻 喜 内藤哲雄	65

052-C-3	Family System Test による家族関係認知の社会・ 文化的研究 —日本・ベトナムの大学生の比較から—	立命館大学大学院 社会学研究科	○河野 望	66
052-C-4	仰臥姿勢のパーソナルスペース(2)	NPO 法人 信州、大学地域連携プロジェクト 信州大学	○石橋里美 内藤哲雄	67
052-C-5	日常ストレス事態での自己開示とソーシャル・サポート の受容	静岡文化芸術大学 文化政策学部	○福岡欣治	68
052-C-6	幼児にかかわる犯罪	山形県警察本部 科学捜査研究所 日本学術振興会 名古屋大学大学院環境学研究科	○桐生正幸 小野寺理江	69

かとれあ館 53 番教室 認知・感情

053-C-3	重心動揺計を用いた偽薬効果の検討	文京学院大学大学院 人間学研究科心理学専攻 文京学院大学 人間学部心理学科	○森 昇子 坂本正裕	70
053-C-4	看護経験を持つ看護学生の課題分割プラン	放送大学 教養学部発達と教育専攻 放送大学 教養学部	○星 薫 八つ橋のぞみ	71
053-C-5	「気まずさ」に関する研究	信州大学大学院 信州大学大学院	○小松桂子 内藤哲雄	72
053-C-6	職業ラベルと顔のマッチング	山口県警科学捜査研究所 山口大学教育学部	○福本純一 福田 廣	73

研究発表（口頭発表）

第1日 9月3日(土) 口頭発表Ⅰ 9:30～11:30

カーサ 20 203 教室
産業・職業

座長：松浦常夫・南隆男

203-01	9:30	T字型交差点におけるドライバーのリスクテイキングに関する研究	大阪大学大学院 人間科学研究科 大阪大学大学院 人間科学研究科	○中井 宏 臼井伸之介	75
203-02	9:50	高齢運転者の補償的運転行動	実践女子大学 人間社会学部人間社会学科	○松浦常夫	76
203-03	10:10	高速道路走行におけるクルーズコントロール使用の心理学的意義	八戸大学 人間健康学部人間健康学科 東北大学大学院 文学研究科	○畑山俊輝 北村康宏	77
203-04	10:30	家電製品のイメージ形成に関する研究 日本市場における調査から	大阪経済大学 経営情報学部ビジネス 情報学科 大阪経済大学大学院 経営情報研究科	○家本 修 劉 莉	78
203-05	10:50	高齢運転者の運転断念に及ぼす各種要因の分析(1)	実践女子大学 生活科学部人間工学研究室	○垣本由紀子	79

カーサ 21 212 教室
検査・測定

座長：服部環・若原克文

212-01	9:30	模倣筆字からの書き癖固定化の機構解析 書き癖固体化を利用した筆者識別	愛知工業大学 応用化学科 愛知県警察本部 科学捜査研究所 愛知県警察本部 科学捜査研究所 科学警察研究所 情報科学第二研究室	○三井利幸 若原克文 菅原博嗣 関 陽子	80
212-02	9:50	書字中の手首の回転運動の測定	科学警察研究所 法科学第四部情報科学 第二研究室	○関 陽子	81
212-03	10:10	筆跡の個人間変動について	愛知県警察本部 愛知県警察本部 愛知工業大学	○若原克文 菅原博嗣 三井利幸	82
212-04	10:30	筆跡からの筆圧の指標化に関する研究(III)	愛知県警察本部 愛知県警察本部 愛知工業大学	○菅原博嗣 若原克文 三井利幸	83
212-05	10:50	情報量の差異を最小化する等化係数の推移 —一般化部分採点モデルの場合—	筑波大学	○服部 環	84
212-06	11:10	自己認知からのパーソナリティ(適応)の把握	キャリアダイナミック研究所 福島学院大学	○三浦公一 玉井 寛	85

カーサ 21 213 教室
看護

座長：今留忍・高橋友子

213-01	9:30	基礎看護学実習後の看護学生の自己像の変化	兵庫医科大学 附属看護専門学校 千葉大学 医学部	○高橋友子 内海 澁	86
--------	------	----------------------	-----------------------------	---------------	----

213-02	9:50	基礎看護技術の効果的教育方法の検討 ーデモンストレーション提示方法の違いにおける 「無菌操作」技術の習得に関する経時的变化ー	信州大学 医学部保健学科 信州大学 医学部保健学科 熊本大学 医学部保健学科 千葉大学 医学部	○松永保子 87 小林千世 森田敏子 内海 混
213-03	10:10	看護学生のストレス因子に関する研究 その1	杏林大学 保健学部看護学科 杏林大学 保健学部看護学科 千葉大学 教育学部	○今留 忍 88 小竹久実子 内海 混
213-04	10:30	看護学生のストレス因子に関する研究 その2 ー全日制と定時制の因子構造の差異ー	杏林大学 保健学部看護学科 杏林大学 保健学部看護学科 千葉大学 教育学部	○小竹久実子 89 今留 忍 内海 混

カーサ 21 214 教室
発達・教育

座長：草野美根子・荷見一恵

214-01	9:30	教育教材の工夫について ー高校生のやる気を導くためにー	桐生短期大学 庶務課	○青木憲樹 90
214-02	9:50	教員免許状取得希望者の意識に関する一考察 ー一般大学の教職科目履修学生を対象にー	関西学院大学 教職教育研究センター	○小谷正登 91
214-03	10:10	現代の青年の時間展望意識について (1)	茨城大学 教育学研究科 茨城大学	○荷見一恵 92 安達喜美子
214-04	10:30	教育評価の研究 (その 45) ヒト ー一生の学習時代を考える		○岸本英男 93
214-05	10:50	小児看護学実習における事故とリスク要因の検討 (第 2 報)	群馬大学 県立長崎シーボルト大学 県立長崎シーボルト大学 千葉大学	○草野美根子 94 中 淑子 林田りか 内海 混

第 1 日 9 月 3 日 (土) 口頭発表 II 12:50~14:30

カーサ 21 212 教室
社会・文化

座長：浮谷秀一・佐々木美加

212-07	12:50	児童福祉とジェンダー ー戦後日本の理論的展開を端緒としてー	日本認定心理士会 日本心理学会内	○望月雅和 95
212-08	13:10	ヒューマン・サービスへの意欲を保つには(2) ー心理・社会的側面からの縦断的研究ー	常磐大学 人間科学部	○佐々木美加 96
212-09	13:30	「血液型性格学は信頼できるか」第 22 報	日本大学 東京富士大学 日本体育大学	○大村政男 97 浮谷秀一 藤田主一
212-10	13:50	「血液型性格学は信頼できるか」 第 22 報 (2)	東京富士大学 経営学部 日本大学 名誉教授 日本体育大学 体育学部	○浮谷秀一 98 大村政男 藤田主一

212-11	14:10	柔道の応用心理学的研究 (2) 柔道に対するイメージ調査の検討	国士舘大学 国士舘大学 国士舘大学 日本体育大学 日本体育大学 日本体育大学	○森脇保彦 中島たけし 飯田頼男 山本洋祐 田辺 勝 藤田主一	99
--------	-------	------------------------------------	---	--	----

カーサ 21 213 教室
介護・福祉

座長：零石礼子・岩崎久志

213-05	12:50	終末期うつ病に関する取り組みと実態	京都大学 人間・環境学研究科	○幸野里寿	100
213-06	13:10	ソーシャルワークにおける臨床の意義	流通科学大学	○岩崎久志	101
213-07	13:30	高齢者介護に従事するケア・スタッフの慢性疲労	熊本保健科学大学 保健科学部看護学科 熊本保健科学大学 保健科学部看護学科	○多久島寛孝 山本勝則	102
213-08	13:50	育児と仕事の両立に関する意識調査	岩手県立大学 社会福祉学部 岩手県立大学 社会福祉学部	○零石礼子 井上孝之	103

第2日 9月4日(日) 口頭発表Ⅲ 9:30~11:10

カーサ 21 212 教室
その他

座長：山本勝則・森下高治

212-12	9:30	中年期に在る「親」の将来展望 - 「自我同一性/配偶者との関係性/子どもとの関係性」 との関連において -	慶應義塾大学大学院 社会学研究科 慶應義塾大学 慶應義塾大学	○滝澤 麗 南 隆男 高橋 溪	104
212-13	9:50	男子大学生の「就労」への将来展望 - 「処遇原理」との関連において -	慶應義塾大学 文学部 慶應義塾大学 文学部 慶應義塾大学大学院 社会学研究科 日本大学 商学部	○高橋 溪 南 隆男 滝澤 麗 外島 裕	105
212-14	10:10	他者理解と自己理解	熊本保健科学大学 保健科学部看護学科 熊本保健科学大学 保健科学部看護学科 熊本保健科学大学 保健科学部看護学科 千葉大学 名誉教授	山本勝則 ○吉田一子 多久島寛孝 内海 滉	106
212-15	10:30	パートタイム従事者の職業意識	流通科学大学	○森下高治	107

カーサ 21 213 教室
看護

座長：森田敏子・弓削美鈴

213-09	9:30	精神的負荷を与えた場合におけるタッチングの効果 - 心理的・生理的側面から -	山梨大学 大学院医学工学総合教育部 人間環境医工学 国立看護大学校 精神・老年看護学講座	○小西奈美 森 千鶴	108
213-10	9:50	看護学生の精神看護学実習前後における不安 - 2年間の基礎項目の調査研究から -	相模原市老人福祉センター 千葉大学	○宮原紀子 内海 滉	109

213-11	10:10	慢性的健康問題を持つ患者の保健行動 －行動予測要因－	静岡県立大学短期大学部	○坂本知子	110
213-12	10:30	達成動機を刺激する模擬患者を用いた看護技術教育方法 の開発に関する研究 －模擬患者を導入した看護技術試験に対する学生の認識 から－	熊本大学 医学部保健学科 信州大学 医学部保健学科 千葉大学	○森田敏子 松永保子 内海 滉	111
213-13	10:50	看護学生の怒りの表出方法 －事例分析による類型の試み－	足利短期大学 看護科 呉大学 看護科 東京都立広尾看護専門学校 東京都立板橋看護専門学校 千葉大学	○弓削美鈴 金子潔子 渡辺ナツ子 網野寛子 内海 洸	112

カーサ 21 214 教室
発達・教育

座長：伊藤典幸・豊村和真

214-06	9:30	四つ這い移動をする重度重複障害児についての授業研究 ～第3者を第2者と共有し、人悪の発達の基礎を豊かに 形成する授業のあり方についての検討～	龍谷大学大学院研究生 滋賀県立草津養護学校	○羽田千恵子	113
214-08	10:10	コンピュータ入門教育における諸問題(3) －EXCELの操作方法と初心者の反応－	関東学院大学 人間環境学部人間発達学科	○伊藤典幸	114
214-09	10:30	障害児に関する態度の発達の变化 (2)	北星学園大学 社会福祉学部福祉心理学科	○豊村和真	115
214-10	10:50	発達と発達保障への研究 －人間発達における創出の階層について－	京都発達研究会 人間発達研究所	○小倉昭平 田中昌人	116

特別記念講演

特別記念講演

9月3日(土) 14:40 ~ 16:00

(カーサフローラ 千葉記念ホール)

講演者： 柏木 恵子 (文京学院大学教授)
演 題： 『発達・家族の心理学と地域福祉
—地域子育て支援の理論と実践、そして提案—』
司 会： 星野 仁彦 (福島学院大学 大会準備委員長)

【講演要旨】

ここ10年来、[子育て支援] [育児の社会的支援] [子育ての地域支援] といったことが盛んに叫ばれ、行政・民間レベルでさまざまな[子育て支援]が行われてきています。これは、長らく育児・家庭教育は私事であり外部まして行政が立ち入るべきではないとされてきたことを考えると、極めて大きな変化です。ところが、この変化がなぜ生じたのかについてしっかりと検討されないまま、“家族は危機だ”“家族の崩壊”との認識と少子化という問題を食い止めようとの意図などから 極めて安直に[子育ての社会的地域支援]が行われている感があります。

私はまずこの変化が一体何故起こったのか、その必然的背景を家族発達心理学の理論と実証から明らかにし、その上で、[子育て支援]とは何のためなのか？ 誰が・誰のために・どのような支援が必要なのか・重要かを、具体的な実践例を挙げながら人間の生涯発達および well-being の視点から考えたいと思います。このことは、子どもの問題以上におとなとりわけ男性の発達の問題であり、男性/女性の生き方—ライフ & ワークバランスの問題であり、日本人の行き方の再編を提案することになりましょう。

【講演者略歴】

1932年生まれ。1986年教育学博士(東京大学)。1960年東京女子大学講師、助教授、教授、1990年白百合女子大学教授を経て、2002年文京学院大学・大学院教授 東京女子大学名誉教授、日本学術会議第19期会員

研究テーマは幼児期の認知発達/子どもの自己の発達/青年期の性役割/母親の態度・行動と子どもの知的発達の日米比較/高学歴女性のキャリア・ディベロップメント/父親の発達。現在は、社会変動と家族・個人の生活・発達モデルの検証。

【主な著書・活動】

『子どもの「自己」の発達』、『文化心理学：理論と実証』、『家族心理学：社会変動・発達・ジェンダーの視点』(東京大学出版会)、『父親の発達心理学』(川島書店)、『親の発達心理学：今、よい親とはなにか』、『子育て支援を考える：変わる家族の時代に』(岩波書店)、『子育て広場武蔵野市立 0123 吉祥寺：地域子育て支援への挑戦』、『結婚・家族の心理学』(ミネルヴァ書房)、『子どもという価値：少子化時代の女性の心理』(中公新書)など多数。

社会的活動としては、1992年地域子育て支援施設(0123 吉祥寺)設立に、武蔵野市子ども協会理事・(0123 吉祥寺)企画委員会委員長として尽力。

特別招待講演

特別招待講演

9月4日(日) 13:00 ~ 14:20

(カーサフローラ 千葉記念ホール)

講演者： 瀧本 孝雄 (獨協大学外国語学部教授)
演 題： 『大学生とメンタルケア』
司 会： 渡辺 俊彦 (福島学院大学)

【講演要旨】

本講演では、現代学生に関する諸問題とメンタルケアについて、次のような順序にしたがって述べる。

(1) 現代学生の自己認知

70項目の性格特性について、それぞれの学生が、自己をどのように認知しているかについて、調査結果をもとに述べる。

(2) 現代学生への他者認知

同様の特性について、それぞれの学生が学生一般に対して、どのように認知しているかを、調査の結果をもとに述べる。さらに、自己認知と他者認知とのズレについて検討する。

(3) 現代学生の悩みの構造

家族、勉学、将来、人間関係など30の領域についての悩みの調査をもとに、その構造を明確にする。

(4) 学生相談実態調査結果の報告

日本と米国の学生相談室(カウンセリング・センター)を対象とした実態調査の結果について、その概略について述べる。

以上のように、本講演では最近実施した学生への調査結果をもとに、今後大学生のメンタルケアに関して、大学、学生部、学生相談室等が、どのように対応していく必要があるかを検討していきたい。

【講演者略歴】

学習院大学文学部哲学科(心理学)卒業、青山学院大学大学院文学研究科(修士)修了
獨協大学外国語学部言語文化学科教授(カウンセリング・センター所長)
聖心女子大学講師、金子書房・金子心理研究所・所長
早稲田大学人間科学部客員研究員、上智大学文学部客員研究員(歴任)

【主な著書】

現代カウンセリング事典(責任編集)金子書房
カウンセリングと心理テスト(編著)ブレーン出版
性格心理学への招待(共著)サイエンス社
性格のタイプ(単著)サイエンス社 他

公開シンポジウム

公開シンポジウムⅠ

9月3日(土) 16:15 ~ 17:30

(カーサフローラ 千葉記念ホール)

『血液型性格判断、ホントかウソか』

企画・司会者	日本体育大学	藤田 主一
話題提供者	日本大学名誉教授	大村 政男
	福島県新聞社	荒木 英幸
指定討論者	東京富士大学	浮谷 秀一
	福島学院大学	星野 仁彦

企画趣旨

1994年(平成6年)9月に開催された日本応用心理学会第61回大会(会場:城西大学)において、「血液型性格判断」に関するパネル・ディスカッションが企画されている。当時は血液型と性格との関連性について賛否両論が相克し、それぞれの立場の代表者が自説を展開しメディアでも取り上げられたため、その歴史的な背景と心理学的な知見を検討するものであった。ディスカッションは注目され新聞でも報道された。しばらく沈静化していた議論がテレビ番組を通して復活したのはここ1年の出来事であるが、ある種の血液型に対する新たな偏見につながるとして、こちらも収まったかにみえる。4月24日付の朝日新聞「天声人語」でも「ブームがひとまず去った」とコメントしている。歴史的にも血液型と性格との関連性は復活と沈静を繰り返している。このシンポジウムでは、血液型性格判断の現状や今後の見通しについて多方面から議論したいと考える。

大村政男(日本大学)

ABO式4種の血液型と人間の気質・性格とが関連している——という学説は、昭和2年、東京女子高等師範学校(現在のお茶の水女子大学)の古川竹二教授によって発表された。この学説は大きな反響を巻き起こしたが、昭和8年、岡山で開催された日本法医学会での大論争に破れ、昭和15年の古川の病死とともに日本発の新学説は立

消えになってしまった。その後、約 30 年後、目黒宏次・澄子によって『気質と血液型』が出版され、さらに鈴木芳正や能見正比古によって血液型性格学についての多くの書籍が刊行された。なかでも有名なのは能見正比古の労作である。彼は『血液型でわかる相性』を皮切りに多数の血液型性格関係の本を書きまくった。彼が活動しはじめた時代は、テレビをはじめとするマスメディアの発展が著しく、能見の「血液型人間学」は隆盛をきわめた。わが国の大衆文化のなかに「血液型」が根づいた原因の最大の要因は能見正比古にある。しかし、彼の「血液型人間学」は古川竹二の学説の大幅な模倣にほかならない。彼の本のなかの資料には出鱈目のものが多く散見されている。正比古の没後養嗣子の俊賢が「血液型人間学」の衣鉢を継いだが、往年の繁栄は見られない。かれらは自分たちの学説は 10 万を超えるデータによって裏づけされているといっているが、そのようなものはどこにも発表されていない。私は一部の「血の商人」たちの俗説を無視して古川学説を再検討すべきだと思っている。

「血液型に見る新聞記者」

荒木 英幸（福島民報社）

日本応用心理学会第 72 回大会の福島での開催を、地元新聞社として心よりお慶び申し上げます。

血液型と報道ということで、よく紙面を飾るのは宝くじの当せん番号ではないでしょうか。これには、星座も絡んで興味深いデータが示されます。

今回、新聞社の立場で何をご提示できるのか、正直なところ苦戦してきました。例えば、犯罪を犯してしまった人の血液型の傾向分析は関心をひきそうですが、個人情報の関わりあいなどから新聞社といえど、調査は困難でした。

さらに、会社経営で成功しやすい人も検討しましたが、同じような理由に加え、サンプル数の課題などが横たわりました。

そこで、弊社内同人である記者の協力を得て血液型と自分の性格の関連について、どのように自己分析しているのかを中心に話題を提供させていただきます。関連があると思っているのか、まったく意識していないのかなどが中心です。極めて雑駁な話題提供になりますこと、さらに紀要に至らない内容でありますこと、ご海容いただきたく存じます。

公開シンポジウムⅡ

9月4日(日) 14:30 ~ 16:30

(カーサフローラ 千葉記念ホール)

『福祉現場におけるメンタルケア』

企画・司会者	福島学院大学	安田 道子	
話題提供者	福島県精神保健福祉士会会長	橋本 輝雄	
	福島学院大学	品川 満紀	
	まごころケアホーム高湯の里	須田 弘子	
指定討論者	応用心理学の立場から	慶應義塾大学	南 隆男
	社会福祉の立場から	福島学院大学	本田 久市

企画趣旨

近年、ようやく社会の目が福祉に向けられるようになり、高齢者・障がい者等の生活の質の向上が叫ばれるようになりました。しかし、精神保健福祉法、介護保険法等により、制度としてはさまざまなケアが提供されるようになりましたが、個人の生きがいや精神的な豊かさの面での対応は十分とはいえません。そこで、このシンポジウムでは、精神保健福祉、社会福祉、介護福祉の各現場からメンタルケアの実情と問題点について話題提供していただき、フロアの方々と共に、利用者のクオリティ向上に向けて今私達が考えなければならないことについて討議したいと考えております。

「精神保健福祉現場における実情と問題点」 橋本 輝雄(福島県精神保健福祉士会会長)

精神保健福祉士法の成立や国が打ち出した障害者プラン等の推進のもとで、社会復帰施設等や地域での生活支援体制の整備が進み、ノーマライゼーションの普及で地域での福祉が徐々に定着し広がりを見せております。こうした中で、精神医療現場では社会的入院者が入院者全体の3割を超え、社会復帰の出口が見えない為に入院生活を余儀なくされている現実があります。

精神障害者の社会復帰や生活の質の問題は地域の社会資源や支援体制といった受け皿の量や質と、地域に送り出す精神医療側の姿勢や取り組みがうまく連携して初めて効果をあらわすこととなります。国家資格化され、社会復帰に関する相談や生活支援を主な業務としている精神保健福祉士が、社会復帰施設や地域生活支援センターに配置が義務付けられ位置づけや役割が明確化されましたが、精神医療現場においては配置基準がなく、立場や業務内容がまちまちで、本来の役割が充分機能させられていないことが、入院者の生活そして社会復帰のあり方に影響を与えているといえます。

そこで、社会的入院者のケアについてその実情と問題点を①精神医療と福祉、②精神疾患と生活障害、③精神保健福祉士のかかわりの3点にまとめ、ソーシャルワーカー(精神保健福祉士)の立場から説明させていただきたいと思っております。

「社会福祉施設におけるメンタルケア ー歴史的過程ー」 品川 満紀（福島学院大学）

施設におけるメンタルヘルスの考察は、児童養護施設の場合、1965年ジョンポールビーの「Maternal Care and Mental Health」報告書に始まると言っても過言ではない。彼は乳幼児院での乳幼児死亡率が非常に高いところから、幼児期の人間関係の大切さを指摘し、我が国における施設経営者に「ホスピタリズム論争」を惹起した。その主な内容は施設利用者のストレス問題であった。

これを克服する方法として、児童福祉施設の最低基準の改正と、専門家のなかでは大・中・小舎制、グループホーム、里親制へ養護形態の変革の検討が行われた。

さらに、昭和60年代あたりから、ノーマライゼーションの福祉観の普及で、利用者の生活を一般の人の生活に近づけ、個室化・選択の自由化による質の向上がみられた。また、施設の形態からは、隔離から地域へ・地域にとけ込む努力などがなされた。最初は施設設備の地域への開放から・施設の専門性の地域への提供・地域住民の経営参加が求められている。

平成に入ると社会福祉の基礎構造改革(1990～)が進み、利用者の個人の選択・契約の範囲を最大限に拡張する処遇へとようになってきた。個別化の原則も徹底し、支援費制度の時代を迎えサービスの充足を施設内での充足から地域での充足へと移行した。

さらに、施設の形態からは、平成になると施設解体論の検討期に入る。施設から在宅サービスの方向性は、生活の諸問題を、地域の場におけるホリスティックな対応に主眼をおくこととなり、このような過程の中でストレス解消が具体化されてきている。

最後に、職員のストレスからの研究は、1977年あたりからアメリカの論文を通して職員の「バーンアウトケース」が紹介されだすが、我が国のストレス解消に関する研究は近年増加している。

「介護福祉現場における実情と問題点」 須田 弘子（まごころケアホーム高湯の里）

人間の本質をとらえたものに「人間は社会的動物である」という言葉がある。これは、人間が社会という人間関係の中でないと一人では生きていけない存在であることを述べている。言い換えれば、人は、助けたり助けられたりという相互関係の中で生きがいを感じる存在であるとも言える。

ところが、高齢者が要介護状態になった時は、行動範囲が狭まり、常に世話を受ける側あり、人の本質である社会性という側面が崩れてしまった状態である。したがって、介護の現場では、喪失した社会関係・人間関係をいかにして再構築し、生きがいを持つ場を創造していくかが重要になってくると思われる。

その手段として、多くの施設では、行事・レクリエーション・趣味活動が行なわれている。これらは、目に見え、わかりやすい具体的な方法であり、やったという実感が持てるからである。しかし、逆にいえば、これらのことをこなしていくというところに逃げていないだろうか。利用者の「幼稚園みたいな事はしたくない」と言う発言や、「風船バレーデイサービス」という批判は何を意味しているのだろうか。「早くお迎えがこないだろうか」「生きていても仕方がない」との言葉を重く受け止めたいと思う。

一方、利用者の多くは「自分のことを見て欲しい」「声をかけて欲しい」と待っている。会話は、人間関係を結ぶための大切なコミュニケーションである。しかし、介護員が利用者とはゆったり会話をしている時間は、殆どない。

高齢者が増加している今日、より利用者側に立った介護を考えていきたいと思う。

公開パネルディスカッション

公開パネルディスカッション

9月4日(日) 13:00~14:20

(カーサ21 214)

演題 : 地域で取り組む自殺予防の諸条件

パネラー : 畑 哲信 (福島県精神保健福祉センター)
金子久美子 (自死遺族ケアを考える会・れんげの会)

企画・司会 : 梅宮れいか (福島学院大学福祉学部)

【企画趣旨】 梅宮れいか (福島学院大学)

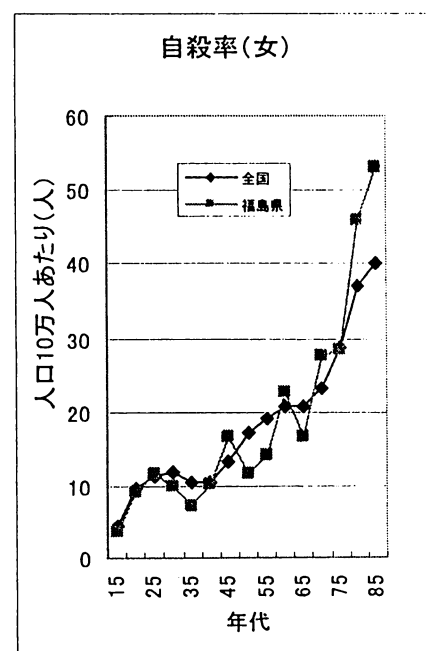
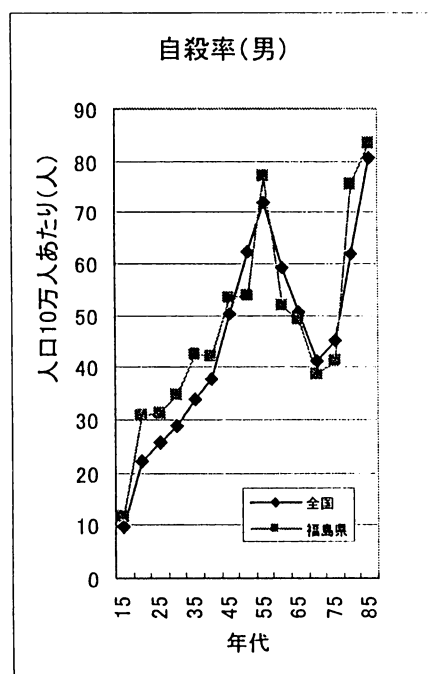
平成15年度の自殺者総数は、34,427人(平成16年は32,325人: 察庁統計資料)である。この数字は交通事故の死亡者数の3倍以上である。福島県に於ける自殺者数も毎年500を超え、平成15年には661人(平成16年は645人)となり過去10年で最も高い数字となった。

自殺の精神医学的背景としてはうつ病があげられるが、それ以外に、独居、高ストレス、経済的困窮などが複雑に絡み合っている場合が多い。一般身体科における大うつ病の有病率は、2.6%(WHO, 1994)~5.8%(Mino, 1994)、小うつ病の有病率は7.2%(Mino)といわれ、そのうちプライマリ・ケア医による診断率は19.3%(WHO)と報告されていることから、身体症状としての愁訴がうつ症状ととられることが少ないことがわかる。このことは、初期対応の難しさをも示唆する。

Patterson(1983)があげた自殺の危険因子は、精神疾患や精神的負荷の高いイベント、未遂歴(未遂者の10%は完遂する)といったものから、社会的サポートの欠除、配偶者の不在など地域と個人とのつながりに関する項目までである。秋田県やフィンランドの例を見ると、特に高年齢層における自殺は、当事者の人的リソースのなさ起因するところが多いと考えられる。そのため人的リソースの確保/提供は、自殺予防にとって重要な鍵であるといわれている。

さて、福島県に於ける661人の自殺者の年齢別内訳を年齢別にみると、ほぼ全国の平均と同じ傾向が見て取れる。だが、男性の若年齢層に、女性では高年齢層に全国平均を上回る値が認められる。さらに若干ながら、男女ともに中年層に全国平均を上回る傾向が認められる。高年齢層は、上に述べたとおりの理由によるだろうし、中年層に見られる傾向は、昨今の経済的不況と職場に於けるストレスの増加、当事者の価値観の拡散などが想像に容易い。しかし若年齢層の自殺に関しては、いじめなどの学校内ストレスの問題や思春期特有の不安定なこころの状態、その表出形態を伴う友人関係などに起因すると一概に解釈してよいとは思えない。スクールカウンセラーの充実や精神衛生環境の向上に教育現場が努力していたとしても、統計に表れる数字は、教育現場が考えている内容では足りない何かを示す。

「自殺予防文化」を構築する条件とは何か。このパネルディスカッションでは、「地域」と「人間関係」をキーワードに自殺予防について議論を進めたい。



医学的観点からの自殺予防の趨勢と県の動きについて

畑 哲信（福島県精神保健福祉センター）

自殺が「頻度が少ない」ものでありつつ「取り返しのつかない」ものであることが、自殺予防の対策を難しくしている。すなわち、前者からは、(1)多量の偽陽性者が検出されてしまう、(2)介入の効果判定の精度が低くなるという問題が、後者からは、(3)人道的立場から、感度を下げるわけにはいかないという問題がもたらされる。これらの問題に対する対策の一つとして、より頻度が高く、自殺との関連が密接である指標を取り上げる方法がある。たとえば、現在、欧米における自殺予防の取り組みにおいては、自殺そのものではなく「自傷行動」を指標とすることが多い。もう一つの対策は、自殺を「氷山の一角」として、その背景となる問題に、主に取り組んでいくというものである。福島県では背景の問題として「うつ病」を取り上げ、うつ病・自殺予防として対策を行っている。いずれの方法を用いるにせよ、対策からもれてしまう人がいるという(3)の問題を常に意識する必要がある。

畑 哲信（はた あきのぶ）

平成2年3月東京大学医学部卒、東京大学医学部附属病院精神神経科助手をへて
平成12年11月福島県精神保健福祉センター科長
平成15年4月より現職

自死遺族ケアから発する自殺予防

金子久美子（自死遺族ケアを考える会・れんげの会）

身近な人の死は、それ自体が大きな精神的衝撃を伴うものです。葬儀をはじめとした一連の行事は、死によって生じる様々な感情を癒すために重要な役割を果たします。しかし、自死遺族の場合、そういった機会さえ、故人の思い出を語り合うことが出来にくく、複雑な感情を抱えたままにしているのが現状です。『自死遺族の会』は、そんな遺族同士がつながりを持つための空間です。

遺族ケアの目的は、遺族の方々が、出会い、安心して心のうちを語ることによって、心身をほんの少し楽にできるようにする事です。そうした経験を経て、悲しみの連鎖の危険性を自らの手で止めることができます。また、少しずつ身近な人々へ、そしていずれは地域社会へ自死という出来事を語れるようになったとき、こうして語られる言葉は大きな自殺抑止効果をもち得ます。地域全体が自殺を社会の問題として考え始めるとき…これこそが究極の自殺予防に他なりません。

金子久美子（かねこ くみこ）

福島県立医科大学救急医学講座秘書
自殺遺族ケアを考える会・れんげの会事務局長

ワークショップ

ワークショップⅠ 9月4日(日) 10:00 ~ 11:30

(しらゆり館 5研)

『軽度発達障害の思春期・青年期の二次障害をめぐって』

司会者

福島学院大学

桃井真帆

「軽度発達障害—ADHD、LD、アスペルガー症候群—の二次障害」

星野仁彦(福島学院大学)

発達障害への臨床的取り組みにおいては、その時点での治療及び療育にとどまらず、思春期・青年期以降に起こる可能性のある「二次障害」と呼ばれる状態を予防することも大きな要素となる。発達障害の二次障害としてよく知られているものは不登校やひきこもりなどの非社会的行動、非行などの反社会的行動などである。こうした二次障害の具体例、及び、それらの行動や症状が発達障害から二次的に引き起こされるメカニズム、二次障害の出現を阻止するために早期からどのような対応が必要なのかを医師の立場から紹介する。

「スクールカウンセリングの現場から」

大島典子(福島学院大学)

スクールカウンセリングの現場では未診断の発達障害児と出会うことがある。中高生となってから、それまであまりクローズアップされなかった障害特有の行動が人間関係や自己評価の面で彼らの社会適応にブレーキをかける。しかし、それまで障害だと思われていなかった、もしくは個性であると捉えられてきたことを、本人もしくは保護者に“障害”だと認知してもらうことはナイーブな問題であり、簡単なことではない。治療場面には現れない発達障害児の現状について、対応の問題点、可能な環境づくりに向けての課題などを検討したい。

「二次障害を予防する新しい取り組み」

桃井真帆(福島学院大学)

軽度発達障害児の二次障害を予防するためには、医療的な支援だけでは十分とはいえない。社会に適応し、対人関係を円滑に持てるためのソーシャルスキルが必要である。また、障害を持った子どもたちが、獲得したソーシャルスキルを発揮するためには、彼ら特有の振る舞いを理解し受け入れる環境が合わせて必要である。こうした問題を解決するための一助として様々な試みが行われている。代表的なものが、SSTやペアレントトレーニングなどである。このセッションでは、これらの取り組みを概観し、二次障害を予防的な観点から考えたい。

ワークショップⅡ

9月4日(日) 10:00 ~ 11:30

(図書館情報センター 大視聴覚室)

『日英ソーシャルワーク教育カリキュラムについて

— 子ども家庭福祉・虐待・家族支援・愛着理論をキーワードとして—』

司会者

福島学院大学

藤原 正子

「1980年前後の日英のソーシャルワーク教育から
～ソーシャルワークにおける家族支援と愛着理論～」 藤原 正子(福島学院大学)

日本の社会福祉士の誕生は1987年、精神保健福祉士が1997年である。一方、英国では1968年バークレー報告後、地方自治体の社会福祉局に有資格ソーシャルワーカーが配置されるようになった。その国家資格CQSWの養成カリキュラムは中央ソーシャルワーク教育研修協議会CCETSWで定められた。1983年当時CQSWと日本の某四年制大学社会福祉学専攻の読み替えValidationを申請し、「発達心理学」と「実習」時間及び有資格者スーパービジョンの不足を理由に却下された例がある。これにより英国ソーシャルワーク教育における発達心理学の重要性が伺える。当時のシラバスから愛着理論、家族支援、Non Accidental Injuriesなどの重要項目を紹介する。また、本年4月に名称独占の英国ソーシャルワーカーの認証登録がGSCCで始まった。その実務規約にみる社会福祉サービス利用者の関心・信頼・自立・安全・権利擁護とソーシャルワーカーの説明責任、および研修の継続基準について紹介し、日本での今後の課題を探る。

「2000年前後の日英のソーシャルワーク教育から
～ソーシャルワークにおける子ども家庭福祉と虐待支援～」

伊藤嘉余子(福島学院大学)

子ども虐待支援において、心理職が子どもや親の心理状態の把握と回復を主たる目標とするのに対して、ソーシャルワーカーは、孤立しやすい親子の社会化、本人と環境との相互作用の円滑化を支援する役割を果たす。子ども虐待ケースへのソーシャルワーク過程において、心理的アプローチが必要となる場面も多く、社会福祉と心理との有効な連携・協働が、効果的な援助を展開する上での重要な条件となる。しかし、日本においては、ソーシャルワークの理論的・実践的専門性に対する社会的認知が不十分と言わざるを得ない。その背景にはワーカー自身のアイデンティティ、ひいては、ワーカー養成における教育内容にも要因があると考えられる。

そこで本ワークショップでは、ソーシャルワークに対する社会的コンセンサスが確立しているイギリスにおけるソーシャルワーカー教育内容を参照しながら、子ども虐待対応におけるソーシャルワーカーの役割と心理職との連携について検討したいと考える。

自主シンポジウム

9月3日(土) 9:30 ~ 11:00

図書館情報センター 大視聴覚室

臨床心理学とコミュニティーサービス

大学と地域の小・中学校との相互援助・協力体制の研究

企画者： 近藤俊明 東京福祉大学教授
司会者： 手島茂樹 東京福祉大学教授
話題提供者： 山極和佳 同大学院講師
新井雅人 同大学院助手
田中朋子、岡田恵理子、深澤大地 同大学院学生
今泉紀嘉 群馬県スクールカウンセラー、東京福祉大学教授
湯浅とも子 群馬県スクールカウンセラー、元伊勢崎市学校教育相談員
石川清子 東京福祉大学教授
指定討論者： 萩原元昭 埼玉学園大学人間学部 幼児発達学科 学科長
キーワード： 臨床心理学、コミュニティーサービス、大学と地域小・中学校の相互援助

* 上記発表者以外の研究分担者： 原千恵子 東京福祉大学教授、馬場史津 同助教授
大澤靖彦 同助教授、三井真紀 同講師、柳澤利之 同講師

シンポジウム企画概要： 東京福祉大学大学院では、伊勢崎市教育委員会の協力の下、プロジェクト「大学院附属心理相談室と地域スクールカウンセラーの相互援助・協力体制の研究」を進めてきた。本シンポジウムにおいては、当プロジェクトの概要と目的（近藤が担当）、これまでの経過、成果と問題点を報告し（山極、新井、田中、岡田、深澤が担当）、今後の計画と展望を参加者とともに議論したい。今泉はスクールカウンセラーの立場から、湯浅は、元伊勢崎市学校教育相談員（市のカウンセラー）の立場から、石川は、スクールソーシャルワークや学生のボランティア活動の視点から話題提供を行う。萩原はより広く大学のコミュニティーサービスのあり方に関して討論する。**プロジェクトの目的：** 当プロジェクトは、文部科学省の科学研究費を得て、2004年度から2006年度までの3年計画で始められたものである。プロジェクトの目的は、大学、大学院および大学院附属相談室の人的リソースがコミュニティーの役に立つためにはどのような方法があるかを、実践的に探索することである。その方法のひとつとして、地域の小・中学校およびそのスクールカウンセラーとの協力体制を探ってゆくことに焦点を当てた。

地域小・中学校と大学の協力の内容： 2004年度中に、伊勢崎市教育委員会、地域小学校（4校）、中学校（3校）と話し合いを持ち、2005年1月より実際の協力関係を開始した。具体的には、本大学院の学生を、伊勢崎市学校教育相談員およ

び小・中学校のカウンセリングなどの担当者のアシスタントとして活用してもらうこと、また、これら大学院生が、授業についてゆくのに困難な児童・生徒の学習上の援助を行う、ニーズがあれば本大学院の教員が、学校教育相談員やカウンセリング担当者のスーパーヴィジョンを行う、学校内で対応しきれないケースは大学院附属心理相談室にて無料でサービスを行う、その他学校でニーズのあるたびにお互いが協力して何ができるか話し合いを持つ、などを協力の中心に置いた。2005年度からはさらに、学部生が中心になって、知的障害児や、発達障害児に対する授業の支援、外国人の子弟や遊びの出来ない児童たちに対する遊び・交流に於ける支援などを行っている。

協力の効果の測定・評価： 2005年度からは、各小・中学校において行われる活動に関し、学校の関係者（スクールカウンセラー、学校教育相談員を含む）及び、大学院生、学部生による評価を実施する。それは、学期末に、主に面接法及び質問紙表によって行う。

今後の計画： 2005年度（現在9校に増加）、2006年度と無理のない範囲で協力校を増やしてゆく計画である。3年間のプロジェクト期間中のみならず、この3年間の成果をその後も継続して行ければと考えている。そのためにも、本シンポジウムにおいて、大学、地域小中・学校、および教育委員会が互いにそれぞれのリソースを提供しあえる、互いのメリットになる関係を探り、興味をもたれる参加者の方々と共有したいと願っている。

**学会研修委員会企画
第 4 回 研 修 会**

研修会 A

9月3日(土) 10:00 ~ 11:30

(しらゆり館 5研)

講師：福原 真知子 (常磐大学教授)

講義題目：『マイクロカウンセリング』

【講義要旨】

マイクロカウンセリングは1960年代の終りに、カウンセリング心理学者のアイビイ博士とその共同研究者により創始され、そのコンセプトは‘微少’、‘細密’、‘小単位’、‘体系的’、‘認知的’、‘ステップ・バイ・ステップ’を包含しており、これらは技法トレーニングにも反映されている。

1. マイクロカウンセリングの姿勢および特徴

(1) カウンセリングのメタモデル。 技法を折衷的に用いるが、むしろそれはカウンセリングの統合的モデル(基本モデル)とみなす方がふさわしい。

(2) 意図性。 カウンセリング関係におけるカウンセラーおよびクライアントの意図性を尊重する。

(3) 肯定的資質の尊重。 クライアントの肯定的資質のアセットを励ます。これは傾聴技法の使用やナラティブストーリーの作成を通して促される。

(4) 人間性について。 i) 成長・発達する人間。 個人(あるいは集団)の問題解決は変化・変換のプロセスであり、ここにいわゆるタテの発達(年齢の変化に伴う心身の変化)とヨコの発達(個人が直面する状況における精神の変化)がある。 ii) 関係性の中の人間。 個人は多(重)文化を背負っており、人はそれらとの関係の中で存在する。

2. マイクロカウンセリング技法(マイクロ技法)

(1) マイクロ技法は‘基本的傾聴技法’と‘積極技法’、‘技法の統合’に大別される。 傾聴技法、傾聴技法と積極技法の連鎖を用いて技法の統合/5段階の面接の構造化(ラポール、問題の定義づけ、目標の設定、選択肢の決定、一般化)を行う。

(2) トレーニングは5段階(説明、ライブのデモンストレーション、文献、ロールプレイ、一般化)で行う。またフィードバックを重視する。現場で役立つ技法を身につけるために、これらは必須である。

3. 現場への適用

(1) 個人およびグループに。 各種現場(教育、産業、福祉・医療など)において個人、組織、組織における成員の連携などに各々有効とされる。

(2) サイコエデュケーション(心理教育)。 マイクロカウンセリングの基本的姿勢および技法は、多くの人々のウェルネスに貢献できるとされている。

【講師略歴】

米国スプリングフィールド大学大学院終了(カウンセリング心理学)、実践女子大学、常磐大学、佛光大学教授を歴任、日本マイクロカウンセリング研究会代表、NPO心理教育実践センター代表

【主な著書】

2004年 『マイクロカウンセリングの理論と実践』 風間書房

1986年 『来談行動の規定因』 風間書房

研修会 B

9月3日(土) 13:00 ~ 14:30

(しらゆり館 5研)

講師：大久保 康彦 (國學院大學栃木短期大學名譽教授)

講義題目：『応用心理学の道程を歩んで

—医療、企業、教育、文化の面に跨って—』

【講義要旨】

この講義は、これまで本学会大会が企画し実施してきた研修内容とはいささか趣きを異にしている。すなわち演者が過去50年間に涉猟してきた応用心理学の道を振り返って、「応用心理学各分野において遭遇した経験」を自伝的に取り上げ、紹介しようとするものである。

一応、演者が辿ってきた道順に従い話題を進めて行く。昭和29年大学院修士課程1年当時、師のグループの研究テーマとして作成中であったSCT開発作業に加わり、本学会に入会して初めての大会報告を行った。同グループは引き続いてTATの開発研究にも取り組み、これに参加した。

昭和32年、慶應義塾大学医学部(現精神神経科学教室)助手、翌33年桜ヶ丘保養院(現桜ヶ丘記念病院)精神科の臨床心理勤務となる。同院においての約10年間は精神科入院患者に対する集団療法を担当。この時期模索中であった病院精神医学における生活療法の手段である作業・レクリエーション活動の開発発展に尽す。傍ら東京電力株式会社の委嘱を受けて安全管理部門における調査や検査を実施。また東京電力研修施設において研修生の教育指導やカウンセリングに携わる。昭和43年、國學院大學栃木短期大学教授として幼稚園・小学校教員養成に従事。この頃、新たな心理検査の作成を目論み、同学の土、玉井寛福島学院大学教授らと集団式TAT試作のための共同研究に着手。続いて演者は多年愛好してきた日本伝統芸能、歌舞伎に対する今日の学生ら若者の関心の低さを憂えて、18年間連続して歌舞伎関心のありようを調査し、玉井教授らの助力を得て鋭意実態把握につとめた。その結果、次世代に向けての伝統芸能継承をはかる方略について種々考える機会を得た。

【講師略歴】

慶應義塾大学大学院社会学研究科心理学専攻修士課程修了、慶應義塾大学医学部神経科助手、桜ヶ丘保養院心理技術員、國學院大學栃木短期大学教授、同初等教育学科長を歴任。2002年より國學院大學栃木短期大學名譽教授

【主な著書】

『若者の歌舞伎観』そうよう(2000)、『精神保健』八千代出版(1990)、『新臨床心理学入門』建帛社(1983)、『教育心理学』サイエンス社(1972)

研究発表（ポスター発表）

4・5歳児の「物の代用」に対する理解の発達的变化

- 意図理解・自他関係の視点からの分析 -

井上 洋平

(立命館大学大学院社会学研究科)

キーワード：物の代用、シンボル、意図理解、自他関係

【研究の目的】ふり遊びに関わる研究、とりわけ認知発達における「4歳の節」との関連において、Flavell, J. H. らの一連の研究などから4歳頃に「ふり」と「実在」を区別されるようになっていわれている。一方でこれまでの研究は、シンボルの理解が土台となるふり遊び・ゴッコ遊びが併せ持つ対人関係の枠組を十分には踏まえてはこなかったといえる。そこで本研究は、パイロット的であるが対人関係の枠組、特に他者の意図理解や自他関係の視点から「物の代用」の理解にアプローチし、分析を試みることを目的とする。

【方法】T市所在の幼稚園の年中・年少組に在籍する幼児を対象に、2005年2月から2005年3月にかけて、Tomasello et al (1999) の課題に修正を加えた「物の代用(object substitution)」課題を実施し、28名から得た結果を分析する (Table1 参照)。

実験者は、①バナナで電話のふりをする等の「物の代用」を行う、②被験児の前に4つの選択肢を提示する、③実験者の行為が象徴しているものを質問する、④必要に応じて選択した理由の説明を求める、という手順に従って課題を実施した。また、4つの選択肢には実験者が「物の代用」で用いる対象物と同じ種類の対象物 (バナナに対してのファンシーグッズのバナナ)、実験者の行う「物の代用」が象徴的に示す対象物 (バナナに対しての電話)、とを必ず用意した。なお、各被験児には「物の代用」課題を7題ずつ実施した。

Table 1 被験児

年齢群	人数(男/女)	平均月齢(SD)
I 群(5歳未満)	12 (7/5)	56.42(1.73)
II 群(5歳半未満)	9 (5/4)	63.56(1.59)
III 群(6歳未満)	7 (2/5)	68.43(1.397)
合計	28(14/14)	

【結果】まず、どの年齢群に属する被験児であってもほぼ全ての課題に正答するという結果が示された。(Table2 参照)。筆者自身の

これまでの研究から、2歳半から4歳半にかけて課題に正答する割合が上昇していくこと

が示されていたが、4歳半をすぎた頃にはほぼ全員が正答するようになることが今回の結果から示された。

次に、本研究の目的である自他関係や意図理解の視点からの分析を試みるため、実験者が「物の代用」を行いながら被験児に以下のような質問 (例：「これはそれと同じでバナナなのに、どうしてこうすると電話なのかな?」) を行った。すると、①対象物の形状・性質 (「ココガホソナガイカラ」「サキッポコンナンヤカラ」) に関する言及、②実験者の対象物に対する行為 (「ダッテ、シャベッテルカラ」) への言及、といった2つの特徴的な説明がどの年齢群にも共通して見受けられた。

【考察】本研究では、他者のふり行動 (「物の代用」) に対する理由づけを尋ねることで意図理解や自他関係の視点を含む分析を試みたが、他者の心的な内容に関する説明 (「ダッテ、マネシテルダケ」等) はほとんど見られなかった。他者のふり行動を即座に理解しつつも、理由の説明が困難なのは、他者のふり行動 (ふり・まね) を虚構・想像 (ふりしてる・まねてるだけ) として意識する必要があるからだと思われる。

したがって、ふり行動の理解と他者の意図理解のレベルの双方がより正確に把握できるような研究方法の考案・開発が今後の研究には求められる。

(いのうえ ようへい)

造形遊びにおける幼児親子のコミュニケーション

—美術的手法による遊びと発達への支援—

片岡杏子

(台東区社会福祉事業団児童厚生員、京都造形芸術大学通信教育部非常勤講師)

キーワード：美術教育、造形遊び、幼児期の発達、親子のコミュニケーション

【問題と目的】近年、我が国では依然として幼児教育産業が盛んであり、その中で造形美術もまた、特定の能力を発達させる教育手法として成果を期待される傾向にある。しかし本来幼児の行う造形活動が、様々な素材と触れ合いながら環境世界を獲得し、より内発的に自らを発達させていく「遊び」の作業であることから、経済状況に関わらず、全ての幼児親子に対して活動の場が設定されることが望ましいと考える。公立児童館は、おもに児童期～18歳の子どもの集う場としてその発達と成長を支援するコミュニティ施設であるが、同時に、地域における乳幼児の育児支援機能を担う拠点でもある。そこで本稿では、公立児童館の諸活動の中から、幼児の造形遊びの場面に焦点をあてて親子間のコミュニケーションの実態を捉え、美術的手法を用いた発達支援の効果について考察する。

【研究方法】東京都台東区は過去十数年にわたり区内7つの児童館運営を台東区社会福祉事業団に委託しており、活動指針の一つとして「工作・造形活動」を掲げている。その具体的な方策として、各館に美術専門の児童厚生員を配置していること、施設内に図工室を設けていることなどがあり、また全ての館で、小学生児童の利用が少ない平日の午前中に幼児（およそ1～5歳）親子を対象とした造形遊びクラスを設定している。本研究では2005年4～6月の期間、同区K児童館において隔週月曜の10:30～12:00に行なわれた造形遊びクラス（全5回）の実践活動について考察する。

1) 実践活動における人員構成と留意事項：参加者数は一回につき3～8組、全回にわたり12組の親子が参加し、うち複数回参加した親子は4組であった。参加幼児の生活年齢（歳：月）は4月25日時点で1:7・1:9・1:10・2:1・2:2・2:3・2:4・2:7・2:9がそれぞれ1名、1:8が3名、平均2:0であった。保護者は全て地域居住の母親で、任意による無料参加である。活動中、実践者2名（うち1名は筆者）は親子に対し積極的な参加を促すものの、作業を強要しない姿勢を終始とり続けた。また活動の目的を作品形成に向けず、あくまで遊びの展開を中心とし、参加者が自発的な行動を広げられるよう心がけた。

2) 活動日程は以下の通りである。

	実施日	テーマ及び使用素材・機材等
①	4/25	「粘土と絵具であそぼう」 粘土・水彩絵具一式
②	5/9	「大きいガラガラを作ろう」 物干し装置（幼児の背丈に合わせて制作）、木片、竹片、空き容器（ペットボトル、紙箱、空き缶など）、スズランテープ
③	5/23	「土で遊ぼう」 土（園芸用）、水、プラスチックトレイ
④	6/6	「色であそぼう」 水彩絵具一式
⑤	6/20	「光と影であそぼう」 OHP機器、水、ガラス容器、アクリル容器、はさみ、色セロハンなど

【結果と考察】

1) 幼児のとった行動：①粘土をつかむ、粘土の塊を運ぶ、手を粘土や絵具に浸してどろどろにする、絵具と粘土を混ぜ合わせる、壁面の用紙に手や筆を使って絵具を塗りつける②空き容器にマジックで落書きをする、容器を運び手渡す、吊

るされた素材（物干し装置にスズランテープで各素材を括りつけた）を触る・揺らす・叩く、吊るされた素材の間をくぐり抜ける③土の山を踏みしめる、土を水と混ぜ合わせて手足を浸す、壁面の紙に筆で泥を塗りつけて描く④絵具を混ぜ合わせる、筆で壁面の紙に絵具を叩きつける・大きな○や線を描く、掌で紙に絵具を塗りつける⑤スクリーンに映し出された影（水滴・ガラス容器・手・はさみなどのシルエット）を見て驚く、影に向かっていく、影の映った壁を叩いてみる、自分の体の影を映して見る、色セロハンを水に浸す、など。

2) 全体的な傾向：遊びの集中時間には個人差があるが一つの行動について約10～30分程度で、月齢が低い1歳代の子どものほど長く集中する傾向にあった。素材に対しては空き容器やOHP機器の投影よりも、①③④の土・粘土・水に溶かした絵具など手足の触覚を刺激する素材に強い興味を示し、とくに1:7～1:9が感覚的に快いと思われる動作を自発的に繰り返したが、いずれの回においても1:9以上は集中時間を超えると室内の他の事物に目を向け（水場や廊下の遊びスペースなど）別の遊びに移った。また男児よりも女児の方が素材との関わりについて積極的な傾向にあり、一方①で絵具と粘土に初めて触れた男児（1:7）は、参加することに当初強い抵抗を示した。さらに③で準備した土の山を見て泣きだす幼児（1:9）が複数いたことは都市における生活と土との関わりの薄さを象徴しており、このような傾向の幼児は現代に少なくないと推察される（素材に対する免疫のない幼児にとって1回の造形遊びは未経験事項の克服の機会として充分ではないが、前述の①の男児には見立て遊びなどを取り入れることで参加への誘導に成功した）。

3) 母親とのコミュニケーション：活動中は幼児同士の積極的な関わりは少なく、作業を行う中で母親を「ママ！」と呼び支援を求めたり（1:9）、素材を運び歩き手渡す姿が幾度も見られた（2:7～2:10）。活動終了後に行った母親へのヒアリングからは、素材に対し積極的な態度をとる幼児の母親は子どもの衣服が汚れることや奔放な行動に対し寛容であることが読み取れた。とくに積極的で母親の支援のもと造形遊びを充実させていた女児（4/25時点で1:8）は、家庭でも同様の作業を自発的に行い、成長に合わせて次第に大きくしっかりした○を描くなど表現の幅を豊かに増やしていることがわかった。逆に、保護者が子どもの汚れに抵抗を示す場合は幼児の造形遊びへの積極度が低くなる傾向にあった。こうした事象から、母親と幼児との関係は造形遊びにおける幼児の行動と連関し、遊びの展開を決定する要因になると捉えられる。

4) 美術的手法による効果：美術的手法による遊びへの支援は、幼児が素材と戯れる行動そのものを一つの「遊び」として改めて位置づけると同時に、日常的に扱われる様々な素材の側面を捉え直す機会を設定する。たとえば土と戯れることに楽しさを見出すのは幼児のみならず母親も同様であり、造形対象による様々な刺激（色・形状・質感・温度・匂い・音など）を受けて生じる「素材に触れることへの欲求」は、幼児の内発的な行動へと繋がりつつ、母親との新たなコミュニケーションを生み出していた。こうした遊びの繰り返しは、幼児の健全な発達を促し、さらなる表現への欲求を呼び起こす土台になる行為と考えられる。（かたおかきょうこ）

非選抜型大学の入学動機と生活意識との分析

○三宅 義和¹⁾ 遠藤 竜馬²⁾

(¹⁾ 神戸国際大学経済学部 (²⁾ 神戸国際大学経済学部)

キーワード：非選抜型大学、大学機能の空転、数量化Ⅲ類

【研究の目的】

1980年代、大学（短大を含む）進学率が40%弱であったのが、1999年には49.1%に達し、2人に1人が大学へ進学するという時代を迎え、進学率4割から5割への増大は「かつてなら大学に進学していなかった」学生たちが、新たにかつ大量に大学へ流入してきたことを意味する。この流入を可能にしたのが選抜機能を喪失した大学、いわば非選抜型大学の存在である。非選抜型大学に入学してくる学生の多くは、受験勉強の体験をもたず、高等教育を受けるためのレディネスを欠いており、その欠如・不足といった様態は、基礎学力のみならず、知的関心や好奇心、意欲やモチベーション、感情面やメンタルヘルス的問題にまで及んでいる。非選抜型大学では、このような学生を多く抱えているため、従来の高等教育プログラムが機能不全の状態であることはいうまでもない。ただ、学生個々に注目するならば、学力水準や勉学へのモチベーション、仕事への感受性など一人一人異なっているため、単一のプログラムが効果的ではないと十分に予想できる。そこで、個々のニーズに対応するような教育を現実的な制約条件の中で実践するためには、学生のセグメンテーション化とセグメント化された個々のグループに対応する複数のプログラムが必要となる。

本研究は、上述のような大学機能の空転に関する問題を考えるにあたり、非選抜型大学の学生の生活意識とはいかなるものなのか、また入学動機を基にセグメント化された各グループのプロファイリングとそれらに対する施策に関する提言を行うことを目的とする。

【方法】

調査は質問紙法によって行われ、2001年11月～12月と2003年1月の2回に分けて実施された。調査対象者は、非選抜型大学に相当するA大学に在籍する延べ5学年1404名であった。

【質問紙の構成】

質問紙は、被験者の属性をきくフェイスシート（学科、学年、コース、性別、入学時の試験の形態、自宅生あるいは下宿生、クラブ所属の有無など）に続いて、授業や入学動機に関する意識などを問う項目群、それに学生の大学生活における意識を問う67の質問項目群（以下、67questionsとする）から成り立っている。67questionsは、「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で回答を求め、それぞれを5点～1点として得点化した。

【結果】

【67questionsの因子分析】

学生の意識がどのような側面から成り立っているのかを探るために、各項目の通過率による検討を行った後に、因子分析を施した。各項目の分布状況を見て24項目を削除、残りの43項目について因子分析を行った。初期解では、累積固有値の値が40%を超えたところの因子数が8であった。因子数を8から順に一つずつ減らしながら、それぞれの因子数で、主因子法によって解を求めた。また、その際、因子の解釈を行いやすいようにバリマックス回転を施した。結局、5因子のところで適当な解釈が可能であったため、因子数を5とし

た結果を採用した。以下に、因子名を示す。

因子名

- 第1因子 Self Esteem
- 第2因子 実存的空虚感
- 第3因子 勉学疎遠性
- 第4因子 仕事志向性
- 第5因子 大学疎遠性

【入学動機の数量化Ⅲ類】

この大学に入学した理由と学生生活で得たいことについて複数回答可で回答を求めた。両項目の計16のカテゴリーについて得られたデータを基に数量化Ⅲ類を行い、2軸を抽出した。第1軸を勤勉性－非勤勉性、第2軸を自立性－同調性と命名した（寄与率はそれぞれ11.25%、9.75%）。そして、第1軸の各カテゴリーデータ（1か0）に対応するウエイトの積の総和を1軸得点とし、第2軸も同様の処理を行い2軸得点とした。次に、両得点それぞれの正負の値を組み合わせよることで、以下の4つの群を得ることができた。4つの群と全体に占める割合は以下の通りである（1軸得点、2軸得点ともに絶対値が0.1未満となったデータは除いている）。

A群	勤勉群	かつ	自立群	15.1%
B群	勤勉群	かつ	同調群	20.0%
C群	非勤勉群	かつ	自立群	24.1%
D群	非勤勉群	かつ	同調群	40.9%

【4群と5因子との関係】

因子分析で得られた5つの因子を得点化し、その5つの変数に対して、数量化Ⅲ類で得られた2軸（勤勉性－非勤勉性、自立性－同調性）を2要因とする分散分析を行った。平均値の順位と各要因の主効果、交互作用の有無を以下の表に記す。

生活意識	平均値の順位	勤勉性	自立性	交互作用
Self Esteem	A>C>B>D	p<.01	p<.001	n.s.
実存的空虚感	C>D>A>B	p<.001	p<.01	p<.10
勉学疎遠性	C>D>A>B	p<.001	p<.01	n.s.
仕事志向性	B>A>C>D	p<.001	n.s.	n.s.
大学疎遠性	C>A>D>B	p<.001	p<.001	p<.001

【考察】

各群の大学疎遠性や大学の満足度をみると、既存の教学体制やカリキュラムは、もっぱらB群に対してしか十分に機能していない。非勤勉性群に属するC群、D群はもとより、勤勉性群に属するA群においても大学疎遠性や不満度は高い。彼らが求めているのは、アップ・トゥ・デートな実学的教育であると考えられ、彼らの意欲や独立心を満足させるようなプログラムの開発が必要であろう。また、非選抜型大学のマジョリティであるC群やD群の様態こそ深刻である。C群は一言でいうと「努力なくして一発逆転の人生を狙いたい」群であり、根拠なきSelf Esteemの高さが特徴的である。自己像も含め、間違った現実認識の是正こそがまず求められる。D群は「努力なしに安泰な人生を送りたい」群とプロフィールでき、別の意味での正しい現実認識が求められている。今日の非選抜型大学は、極めて多様かつフレキシブルな教学メニューの提供という非常にハードルの高い要求が突きつけられている。

子どもの言語による行動調整機能の発達の研究

前田明日香

(立命館大学大学院社会学研究科)

キーワード：言語、行動調整機能、発達

【はじめに】

人間は遭遇した様々な問題に適切な対応ができるように自己の行動を調整していかなければならない。これは社会生活および対人関係を円滑に行うための基本的な能力である。この能力はいかに形成され、発達していくものなのだろうか。Luria, A. R. (1961) は、「緑」と「赤」のスイッチを押す反応を指標に、言語教示に従って分化信号に対応した行動調整を行う場合には、言語機能が信号と行動の媒介的役割を果たすことを明らかにした。また、行動調整機能が他者からの言語に従う段階から自分自身の「外言」や「内言」の発達に依存する段階へと移行するまでの発達の变化を明らかにした。Luria は、研究を進めるにあたってエラーパターンをアナログデータから取り出し、分析するという方法をとった。そして、刺激が提示されてから反応をおこすまでの反応時間は分析対象とはしてこなかった。しかし、近年の行動調整機能研究では、反応時間および反応時間と誤答数の関係を分析の対象とした研究が積極的に進められるようになってきている (Ozonoff, S. & Strayer, D. L., 1994, 1997; Logan, G., 1994; Jones, L. B., 2003)。

【研究の目的】

Luria (1961) の追試研究を行い、他者からの言語命令、「外言」、「内言」に関わるいくつかの条件変化を加えることにより、反応時間と誤答数の関係がどのように変化するのかを分析指標にして研究をすすめる。これによって行動調整機能の発達のメカニズムの解明を進めようとするのが本研究の目的である。

【方法】

年齢群Ⅰ (3:6 未満) 13 名、年齢群Ⅱ (3:6 以上 4:6 未満) 20 名、年齢群Ⅲ (4:6 以上 5:6 未満) 20 名、年齢群Ⅳ (5:6 以上) 16 名の計 69 名を対象にした。Luria (1961) を参考にして、go/no-go 課題をプログラム化したものを用いて、押しはだめな信号 (no-go 信号) と押さなければならない信号 (go 信号) に従って、スイッチを押し分ける課題を行った。課題は、①ベースライン (条件なし)、②外的言語命令条件 (外からの直接的な言語命令に従って試行する)、③外的自己言語命令条件 (信号に従って被験児自身の言語で「オス」「オサナイ」と言いながら試行する)、④内的自己言語命令条件 (被験児自身が心の中で「オス」「オサナイ」と言いながら試行する) の 4 条件で構成された。ただし、③、④は条件に従って遂行できたとみなされた 4 歳 6 ヶ月以上の被験児 23 名を対象として分析を行った。

【結果】

1. 外的言語命令条件

反応時間をベースラインと比較するため、年齢群 4×条件 2 の 2 要因混合計画の分散分析を行ったところ、条件の主効果が有意であった ($F(1, 65) = 6.62, p < .05$)。多重比較を行った結果、どの年齢群でもベースラインに比べて外的言語命令条件の反応時間が有意に遅くなることが分かった。年齢の主効果も有意であり、両条件において加齢とともに反応時間が有意に速くなることが分かった ($p < .05$)。誤答数では、年齢群 4×条件 2×エラータイプ 2 の 3 要因混合計画の分散

分析を行ったところ、年齢群と条件の交互作用に有意傾向があった ($F(3, 65) = 2.35, p < .10$)。単純主効果を検討したところ、年齢群Ⅰ、Ⅱでは外的言語命令条件の方が有意に少なくなるが ($p < .01, p < .05$)、年齢群Ⅲ、Ⅳでは条件間に差がないことが分かった。次に、ベースラインと比較した反応時間 (速くなる、変化なし、遅くなる) と誤答数 (減少する、変化なし、増加する) のそれぞれの組み合わせから外的言語命令が効果を及ぼす (グループ 1)、反応時間が遅くなることにより誤答数が減少する (グループ 2)、変化なし (グループ 3)、外的言語命令が逆効果を及ぼす (グループ 4) の 4 パターンに分類した (Table 1)。その結果、グループ 1 は年齢群Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの順に次第に多くなり、年齢群Ⅲで最も多くなった。しかし、年齢群Ⅳでは最も少ない結果となった。反対に、グループ 2 は年齢群Ⅰで最も多くなり、徐々に減少していくが、年齢群Ⅳで再び増加する傾向にあった。また、グループ 3 は年齢群Ⅳの割合が最も多くなった。

Table 1 各年齢群におけるグループ別人数 (%)

	グループ1	グループ2	グループ3	グループ4	合計
I	3	6	1	3	13
群	23.1%	46.2%	7.7%	15.4%	100%
II	7	5	2	5	20
群	35.0%	25.0%	10.0%	25.0%	100%
III	12	1	2	5	20
群	60.0%	5.0%	10.0%	25.0%	100%
IV	2	2	8	4	16
群	12.5%	12.5%	50.0%	25.0%	100%
合	24	14	13	17	69
計	34.8%	20.3%	18.8%	24.6%	100%

2. 外的自己言語命令条件、内的自己言語命令条件

反応時間は、年齢群 2×条件 3 の 2 要因混合計画の分散分析を行ったところ、条件の主効果が有意であった ($F(2, 42) = 4.11, p < .05$)。多重比較の結果、ベースラインに比べて外的自己言語命令条件と内的自己言語命令条件の反応時間が有意に遅くなることが分かった ($p < .05$)。誤答数では、年齢群 2×条件 3×エラータイプ 2 の 3 要因混合計画の分散分析を行ったところ、条件とエラータイプの交互作用が有意であった ($F(2, 42) = 4.03, p < .05$)。単純主効果を検討したところ、ベースラインや内的自己言語命令条件に比べて外的自己言語命令条件における no-go 信号に対する誤答数が有意に高くなることが分かった ($p < .05$)。次に、外的言語命令条件と同様に反応時間と誤答数の組み合わせからなる反応パターンから、外的自己言語および内的自己言語が及ぼす作用を検討したところ、年齢群間に特徴的な反応パターンを見出すことはできなかった。

【考察】

本研究から、反応時間と誤答数の関係を分析指標にすることで反応時間と誤答数を別個に分析したときには確認できなかった反応特徴を見出すことができた。このことから、行動調整機能を発達の捉える際には、反応時間と誤答数の関係からの質的な分析が有効であることが示唆された。今後、検討対象年齢を学童期まで延ばし、さらに反応パターンの分析を進める予定である。 (まえだ あすか)

日米の児童の自己統制とその規定要因の検討

日米の児童の異文化適応過程の行動分析を中心に

中田 栄

(愛知学院大学)

Key words: 自己統制, 異文化適応過程, 日米の児童の行動分析

〔目的〕

本研究の目的は異文化におかれた子どものストレスを明らかにし、異文化ストレスに対してどのような支援が必要であるのかを検討することを目的とする。そこで、本研究は、児童の異文化適応過程におけるストレスへの対処を検討する。

児童の異文化適応とストレスへの対処についての検討をふまえて、さらに、行動評定と合わせて児童期の異文化適応過程について、ビデオ記録を行った。そこで、日本および米国出身の児童とその家族を対象として、インタビューと面接およびビデオ撮影による行動分析を行い、児童のストレス対処と異文化適応過程について明らかにする。

〔方法〕

調査時期: 第1回目 2005年2月上旬

対象: オーストラリアに家族でホームステイ中の米国出身の7歳から11歳までの児童22名(男子11名, 女子11名)とその家族(22組)。なお、米国出身の留学生22名(男子11名, 女子11名)および日本出身の留学生22名(男子11名, 女子11名)に行動評定の協力を得た。

第2回目: 2005年2月下旬

対象: 測定はオーストラリアにホームステイしている親子88組(ホームステイ直後1週間以内の親子22組, 3ヶ月目の親子22組, 6ヶ月目の親子22組, 1年以上滞在の親子22組)に対して行われた。

手続き: 児童の異文化適応についての観察と面接を踏まえ、補足的に自由記述用紙への記入を求め、どのようなトラブルが生じたのかを把握し、児童がどのように自己と他者との相互作用を経験していくのかを分析した。

最終的に、上記したビデオ撮影の記録に基づき、自己統制を4件法で評定し、得点が高い群20名(男子10名, 女子10名)と低得点の群20名(男子10名, 女子10名)とに分類し、ビデオによる行動分析と合わせて課題場面での行動評定との関係を検討した。

さらに、調査的面接法の実施をもとに補足的に50項目の評定項目を作成した。評定は1から4までの4件法である。

〔結果と考察〕

尺度の構成

異文化適応過程におけるストレスの構造を明らかにし、尺度の妥当性を確認することを目的として、異文化ストレスの50の評定項目について因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。

その結果、固有値1.0以上、因子負荷量の絶対値0.35以上の項目をとりあげた。Cronbachの α 係数による内の一貫性を求めた結果、.70～.85の間にあった。

まず、第1因子は、No.23「困ったときに相談に乗ってくれる友達の有無」(.79), No.20「元気がないとき、すぐに気づいてくれる友達の有無」(.76), No.17「友達の多

さ」(.60)などの友達関係に関する項目の因子負荷量が高いため、「友達からの心理的サポート」の因子と命名した。第2因子は、No.31「新しい学校生活になじめない」(.77), No.43「学校生活への抵抗感」(.56)などの学校不適応に関する項目の因子負荷量が高かったため、「学校回避感情」の因子と命名した。第3因子は、No.16「授業についていけない」(.72), No.25「周囲との比較による不安感」(.51)などの項目の因子負荷量が高いため「異文化での学習不安からくるストレス」の因子と命名した。

次に、異文化生活における圧力によるストレス認知についての因子分析の結果では、第1因子は、「異文化生活における圧力によるストレス認知」因子と命名した。第2因子は、No.6「生活習慣の相違」(.66), No.3「睡眠時間に目が覚める」(.56)などの生活習慣の違いがストレスになる項目の因子負荷量が高かったため「生活習慣の相違による疲れ」の因子と命名した。

さらに、あらかじめ想定した「心理的支え」に関して、因子分析を行った。第1因子は、No.35「自己の未確立」(.51), No.7「自意識過剰によるストレス」(.51)などの自律に関する項目の負荷量が高いため、「自己の未確立」の因子と命名した。第2因子は、No.39「緊張したとき気分転換をして緊張を和らげることができる」(.67), No.36「落ち着かないときには深呼吸をして気持ちを落ち着けようとする」(.54)などの項目の負荷量が高いため、想定していた名前を用いて「異文化ストレスマネジメント」因子と命名した。第3因子は、No.48「友達に日本の遊びを教えて遊ぶ」(.70), No.47「悩みを聞いてもらいところを探す」(.63)などの異文化ストレスに対処するための項目の因子負荷量が高かったため、「異文化ストレスへの対処」因子と命名した。第4因子は、No.44「自分が理想とする自分であると思える」(.62), No.38「自分は必要とされていて自分にしかできないことがある」(.51)など、自己受容の項目の負荷量が高いため「自己受容」の因子と命名した。

異文化適応過程の文化的特徴

異文化適応過程の下位尺度ごとの文化(日本と米国)、性別ごとの特徴を検討するため、評定値の平均値について、2(文化)×2(性)の2要因分散分析を行った。まず、「友達からの心理的サポート」については、性の主効果($F(1,285)=47.82, p<.001$)が有意であった。文化と性の交互作用は有意ではなかった。

次に、「異文化生活における圧力によるストレス認知」については、文化の主効果($F(1,285)=5.47, p<.05$)に有意な傾向がみられた。文化と性の交互作用は有意ではなかった。さらに、「自己の未確立」にも、文化の主効果($F(1,285)=6.68, p<.05$)の有意な傾向が示された。文化と性の交互作用は有意ではなかった。ビデオによる行動評定では、友達との心理的サポートの得点が高い児童は、他者との表情によるコミュニケーションが円滑に行われる特徴がみられ、笑顔や接近などの行動が多いことが示唆された。(NAKATA Sakae)

青年期女子の性役割観および性役割行動

神谷有里子

(文京学院大学)

Key Word: 青年期女子 性役割観 性役割行動

[序論]

女性は青年期になると、社会一般が男女へ期待する役割と、自己が期待する役割との間にズレが生じ、葛藤を抱えるようになる。一般には男性に期待される特性も、積極的に望むようになる。この背景には近年の社会変動があげられる(柏木,2003)。高学歴化、産業構造の変化に伴って労働スタイルや生活スタイルが変化したことによって、女性が社会で活躍できる状況となり、女性は多様な役割を望むようになった。また、女性は青年期に自身の「性役割分業意識」が形成され、それをもとに職経歴選択がなされていく(伊藤,1997)。従って、女性にとって青年期に抱える役割葛藤は、後の進路決定へつながる課題であり、伝統的な性役割観ではなく、時代に即した新しい価値観を取り入れる必要がある。よって、青年期女子の性役割観の検討が必要である。

また青年期には、恋愛関係にある男女は相手と一緒にいる時、一般に男女にふさわしいと考えられている性役割行動を分担している。しかもこの傾向は、“男性的”あるいは“女性的”という、性別化するための枠組みであるジェンダースキーマとは関係がない(土肥,1995)。以上から、性役割観とともに性役割行動についても検討を行う。

[目的]

- ①青年期女子の持つ「性役割観」②青年期女子が異性と一对一の場面でとる「性役割行動」を明らかにする。
 (1)性役割観は革新的であるが、育児は女性の役割であると捉えているだろう。
 (2)青年期女子は恋人など親しい異性という場合に、女性的と見なされている行動をとるだろう、という仮説を設け検討した。

[方法]

調査対象者:関東地域4年制女子大学、短期大学および4年制大学の女子学生計421名
 調査時期:2004年6月下旬から7月上旬
 質問紙:以下の尺度を4件法で回答を求めた。
 (1)性役割観
 ①若松・小口・柏木(1991)の社会的性役割観尺度21項目
 ②柏木・若松(1994)を参考に6項目作成
 (2)性役割行動の分担実行度
 土肥(1995)を参考に20項目を作成
 (3)フェイスシート
 年齢、学年、大学卒業後に希望する進路
 調査方法:授業時に調査用紙を配布し、その場で回収した。

[結果]

1.調査対象者の特徴
 平均年齢:20.2歳(SD;0.9)、うち大学2年生307名(73.3%)、大学3年生96名(22.9%)、大学4年生16名(3.8%)
 大学卒業後に希望する進路:1 出産する時に退職し、子どもが大きくなったら再び働く「M字就業型」、2 継続して就業を希望する「継続就業型」、3 就職した後、出産時に退職する「出産退職型」、4 結婚時に退職する「結婚退職型」、5 働かずに結婚する「専業主婦型」の順となった。

2.青年期女子の性役割観

<1>因子分析結果

手続き:最尤推定法にて有意な3因子を抽出し、バリマックス回転を行った。①伝統的性役割観②家族一体感③近代的母親

像の3因子を抽出した。しかし、「近代的母親像」については α 係数が低かったため、分析の対象から外した。

<2>性役割観の下位尺度得点

性役割観の2因子の尺度得点は、「伝統的性役割観」が低く、「家族一体感」が強いことが示された。

<3>大学卒業後に希望する進路別の性役割観

「専業主婦型」は、「M字就業型」と「継続就業型」よりも「伝統的性役割観」が強く、さらに「M字就業型」は、「継続就業型」より「伝統的性役割観」が強い($F(2,414)=23.12, p<.001$)。「専業主婦型」と「M字就業型」は「継続就業型」より「家族一体感」が強い($F(2,417)=19.50, p<.001$)という結果が示された。

3.青年期女子の性役割行動

<1>因子分析結果

手続き:最尤推定法にて有意な3因子を抽出し、バリマックス回転を行った。①伝統的性役割行動②相手とのコミュニケーション③中性的行動の3因子を抽出した。なお、「中性的行動」については α 係数が低かったため、分析の対象から外した。

<2>性役割行動の下位尺度得点

性役割行動の2因子の尺度得点は、「伝統的性役割行動」、「相手とのコミュニケーション」が多く見られることが示された。

<3>性役割行動の想定した対象ごとの因子得点

現在または過去の恋人を想定した場合は、親しい友人を想定した場合より「伝統的性役割行動」をとることが示され($F(2,386)=66.91, p<.001$)、また恋人を想定した場合は、友人を想定した場合より「相手とのコミュニケーション」も多いことが示された($F(2,392)=5.36, p<.01$)。

<4>大学卒業後に希望する進路別の性役割行動

性役割行動の2因子において、有意差は得られなかった。

[考察]

(1)青年期女子の性役割観

価値観と希望する進路は密接に関連し、女性の場合は青年期の時点でどのような考えを持つかが、後の進路決定に関わることが分かった。これは、女子青年はそれまでに形成された性役割態度が、希望する職経歴の予測指標となるという、伊藤(1997)の結果と一致している。

(2)青年期女子の性役割行動

恋愛関係や男女一对一の場面になると、一般的にふさわしいとされる性別役割が、多く見られることが分かり、土肥(1995)の結果と一致した。

さらに、実際に恋人を想定した場合は、より相手に対して伝統的な性別役割行動をとり、また相手も自分に対して伝統的な行動をとることが示唆された。異性と二人でいる場合には、どのようなジェンダースキーマを持つ場合でも性役割行動をとる(土肥,1995)という結果と合わせると、青年期の女性は恋人がいると性役割行動が促進されるが、それは各自の持つジェンダースキーマとは関係がないものといえる。恋愛関係にあることが、社会的に男性と女性にふさわしいとされる性役割行動をとることを強化し、恋愛の段階で男女の性役割分担が実行されていくことが分かった。

また、女性自身の大学卒業後に希望する進路と、性役割行動との関連はなく、恋愛関係にあると男女の性役割行動が強化されるという実態は、希望する進路にかかわらず生じることが明らかとなった。

幼児期初期における対象操作活動と認知・言語機能 及び社会的交流活動の発達連関

田中真介

(京都大学高等教育研究開発推進センター)

キーワード：1歳児の発達と保育、積木つみ、円板回転、配分行動、自己認識、社会的交流活動

【問題提起】人間の乳幼児は、1歳前後に、積木を積んだり器に入れるといった対象操作活動を展開し始める。同時期に、直立二足歩行を用いた移動、目的に応じた道具の利用、音声言語による会話などの諸機能が形成され充実するとともに、自己鏡映像を認知し始めるなど自己認識を新たにす。

1歳代で、対象操作活動として積木を3個積めるようになる時期に、認知・言語機能として、円板回転課題（はめ板の円孔の位置が左右逆になっても円孔を認知して円板をその中へ入れる課題）などができ始めると報告されている（生澤ら1980）。一方、田中昌人（1965）はその発達機構を精査し、知的発達障害をもつ子どもたちの場合、発達段階が通常の1歳児と共通の特徴を示すとしても、積木つみ課題は達成できる一方で円板回転に示されるような認知操作が特異的に制約されていることを示した。Tanakaら（2005）は、霊長類幼児の比較発達研究から、人間では積木つみなどの対象操作活動が自我・自己認識の表現、また主体-客体間の相互交流活動の表現となっている場合に、積木操作のみならず発達の全局面にわたって新たな諸機能の形成が実現され、そうでないと逆に制約されやすいことを示した。

本研究では、対象操作活動（積木つみ）と認知・言語機能（円板回転課題）及び社会的交流活動（積木配分課題）の発達連関過程を実験課題と日常生活行動において観察し、それぞれの微細な発達経過を確かめて各機能間にどのような連関があるのかを明らかにする。それに基づいて、例えば「積木を積む」といった対象操作行動の獲得のためには、それらの行動の直接経験とは別にどのような保育・教育・療育カリキュラムが必要かを考察する。

【研究の対象と方法】研究対象：京都市内の保育所に在籍する幼児、M児（1990年10月生れ、女児）、A児（1993年4月生れ、女児）、及びR児（1996年10月生れ、男児）の3名を、生後10か月から24か月にかけて縦断観察した。

実験・観察の手順：次の実験課題及び新版K式発達検査を毎月1回実施した。また、日常の生活行動を毎週1～2回、午前と午後各2～3時間観察した。対象児の応答をノートに記録するとともにビデオカメラで撮影し解析した。

1) 積木つみ：8～10個の積木（木製、赤色、一辺2.5センチ）を1つずつ机の上に提示し、積み上げるよう促した。対象児が自発的に積まない場合には実験者が積み上げて見せた。

2) 円板回転課題：右側から円と三角と四角の図形がくりぬいてある長方形の木製の基板（はめ板）を提示し、まず円板を円孔に入れさせた。そのあと、実験者が基板を左右逆にし、円板を再度どこかに入れるよう口頭で指示した。

3) 積木配分課題：8～10個の積木と、プラスチック製の器（直径14センチ、深さ4センチ）2枚を机の上に提示し、実験者は、両方の器を指さしながら、2枚の器に積木を入れるよう促した。どちらの器にも積木を入れない場合には、実験者が1個を入れて見せた（田中昌人・田中杉恵、1984）。

【結果と考察】対象児は3名とも1歳0か月（1:0）前後に直立二足歩行を開始した（M児0:11、A児1:0、R児1:1）。

1. 積木つみ課題：対象児らは、12～15か月に2～3個、15～21か月にかけて4～6個の積木を積み始めた。確実に5

～6個以上の積木を積み上げる対象操作機能を示したのは、M児15か月、A児17～18か月、R児20か月だった。3名の発達水準は新版K式発達検査の通過月齢とほぼ一致したが、M児とA児は早い月齢で積木を多く積む傾向があった。

3名に共通して、積まれる積木の個数は直線的に漸増していくのではなく、変化の小さい停滞期のあと変化の大きい急増期が観察された。特に、積木つみ3～4個で2～3か月間停滞する期間を経験したのちに、6～8個の積み上げへ急増する傾向にあった（M児で14→15か月、A児で16→17か月、R児では19→20か月の各時期）。1歳前半での積木つみの個数の増加とともに積木配分課題で器に入れ込む個数も増加し、また日常生活場面でだだこねをする頻度も高まった。

2. 円板回転課題：3名とも、1歳初期には、基板が左右逆になっても元の円孔の位置にきた四角孔に円板を入れ込もうとした。そのような位置反応（おてつき反応）を示しながら、M児14か月、A児15～16か月、R児18～19か月には逆側の円孔を発見して円板を入れ始めた。位置反応なく確実に円板を円孔に入れることができたのは、それぞれ15か月、18～20か月、19か月だった。

対象児3名に共通して、積木を3～4個積み上げた月齢時点で円板回転課題を通過し始めた。しかし、A児とR児では積木を3個積み上げることができ始めて3～4か月以上を経たのちにこの課題が達成された。課題通過1～2か月後には積木つみの個数が急増し、3名とも6～8個以上を積み上げることができ始めた。

3. 積木配分課題：積木配分の発達過程を次の5つの段階に区分し、対象児が各月齢でどの段階にあるのかを判定した：1) 1つの器に1～2個のみ積木を入れる。2つの器に積木を入れることがあっても、器2つを区別した上での配分ではない。2) 1つの器に入れる積木の個数を増やしていく。しかしすべての積木を入れきることはできない。3) 1つの器に8～10個の積木を全部入れきる。4) 2つの器に積木を配分し始める。5) 2つの器に交互にほぼ均等に配分する。一方の器に入れ込みをしても他方の器へ移し換えをする。

対象児らは、10～12か月で1つの積木を2枚の器のどちらか一方の器に入れ始め、1歳半ばにかけて一方の器のみ積木を入れ続ける傾向が続いた。全部の積木を1つの器に入れ込む段階3に達したのは、M児14か月、A児16か月、R児17か月の時点だった。次いで積木を2つの器に配分する段階5に達したのは、M児18か月、A児とR児では21～22か月の時点であった。また段階5では自他の器を区別して命名し、自分の器にたくさんの積木を入れ始めた。

対象児はいずれも段階3で2～3か月間を経過したのちに次の段階4へ移行した。月齢にかかわらず段階3の展開のうちに他の課題応答に大きな変化が見られたことから、1歳児は、一方の器に主体的に積木を入れ込む活動、及び経験を生かして位置反応をしつつも操作を切り換えて円孔を発見するといった活動の充実期間を経て、その後の新たな発達段階への飛躍を準備するといえよう。それらの活動の基盤にある共通の経験内容の特質とそれを実現する社会環境のあり方を解明する必要がある。（たなか しんすけ）

恋愛類型と性格特性の関連について

— 認知的傾向との関係性を含めて —

佐藤 祐基

(浅井学園大学大学院 人間福祉学研究科)

キーワード：恋愛類型、性格特性、大学生活不安、自己効力感、不合理な信念

【目的】

Lee(1973)によると恋愛関係は、6つの類型に分類することができる。「類型」と聞くと、性格類型のように不変性のものと考えられるかもしれない。だが Hendrick and Hendrick (1986)は、Lee による恋愛類型が、持続性のある性格特性であるか、もしくは、一時的な態度にすぎないものなのかについて、明確に答えることができないという。おそらくその両方の特徴をもつだろうと推測している。

性格特性との関連を支持する研究としては、自尊感情との関連において、Mania タイプの人は自尊感情が低く、逆に Eros タイプの人は自尊感情が高いことが報告されている (Hendrick and Hendrick, 1986)。本研究では、Lee による恋愛類型と性格特性の関連を、認知的な傾向との関係を含めて検討することを目的とする。

(調査 1)

【方法】

調査には5種の質問紙を使用した。項目数が多くなったため、回答者への負担を考えて2回に分けて実施した。

調査時期：2005年5月中旬。

調査対象：心理学の講義を受講する私立大学生134名に調査を行なった。次回の調査とデータを照らし合わせるために、イニシャルと記号を記入してもらった。記入漏れがあった8名と“（当てはまる親しい異性が）いない”と回答した18名を除く、108名（男性74名、女性34名、 $M=18.6$ 歳、 $SD=1.04$ 歳）が有効回答者となった。

質問紙：①LET-2(Lee's Love Type Scale 2nd version)：松井ら(1990)、53項目を使用。LET-2に因子分析を行い、6因子を抽出し44項目を採用。Cronbackの α 係数は.67～.94。

②エゴグラム：杉田(1987)、50項目を使用。

【結果】

LET-2とエゴグラムについてPearsonの相関係数を求めたところ、StorgeはNP($r=.20, p<.05$)とAC($r=-.21, p<.05$)との間に有意な相関を示した。ErosはAC($r=-.32, p<.01$)と有意な負の相関。PragmaはAC($r=.20, p<.05$)と有意な正の相関を示した。LudusはCP($r=-.21, p<.05$)と有意な負の相関を示した。

(調査 2)

【方法】

調査時期：2005年6月上旬。

調査対象：調査1と同様の授業において150名に調査を行った。記入漏れのあった7名を除外した143名（男性113名、女性30名、 $M=18.9$ 歳、 $SD=1.45$ 歳）を有効回答者とした。

質問紙：①大学生不安尺度(CLAS)：藤井(1998)、30項目を使用。CLASに因子分析を行い、4因子を抽出し13項目を採用。藤井(1998)を参考に、各因子を「大学不適応」「評価不安」「留年への不安」「対人不安」と命名した。Cronbackの α 係数は.71～.78。

②特性的自己効力感尺度(GSE)：成田ら(1995)、23項目を使用。GSEに因子分析を行い、1因子を抽出し22項目を採用。

因子名は「自己効力感」。Cronbackの α 係数は.90。

③不合理な信念測定尺度(JIBT-20)：森ら(1994)、20項目を使用。JIBT-20に因子分析を行い、5因子を抽出し19項目を採用。各因子名は「自己期待」「依存」「倫理的非難」「問題回避」「無力感」。Cronbackの α 係数は.71～.83。

分析対象：前回調査したLET-2のイニシャルと記号を照合して、83名（男性58名、女性25名、 $M=18.5$ 歳、 $SD=0.80$ 歳）を分析の対象とした。

【結果】

LET-2の6類型とCLAS、GSE、JIBT-20の下位尺度得点および全体得点の間でPearsonの相関係数を求めた。

その結果、Pragmaは「大学不適応」($r=.26, p<.05$)、「評価不安」($r=.23, p<.05$)、「大学生活不安の全体得点」($r=.31, p<.01$)、「自己期待」($r=.27, p<.05$)、「倫理的非難」($r=.30, p<.01$)、「不合理な信念の全体得点」($r=.31, p<.01$)と有意な正の相関を示した。Maniaは「自己期待」($r=.23, p<.05$)、「問題回避」($r=.25, p<.05$)、「不合理な信念の全体得点」($r=.30, p<.01$)と有意な正の相関を示した。Eros($r=.36, p<.01$)とStorge($r=.44, p<.01$)は、「自己効力感」と有意な正の相関を示した。AgapeとLudusは、どの尺度においても有意な相関はみられなかった。

【考察】

Storgeは、穏やかで友情的な恋愛が特徴であるが、NPと正の相関があったことから、やさしさや思いやりといった特性との関連が示唆される。「自己効力感」とは正の相関があることから、自分の意志で何に対しても努力しようという傾向との関連が示唆される。

Erosは、恋愛を至上のものと考え、強い恋愛感情を伴うことに特徴がある。ACと負の相関があり、周囲に遠慮をしない、他者からの評価を気にしないといった傾向があると考えられる。「自己効力感」とは正の相関があり、自分の意志で何に対しても努力しようという傾向との関連が考えられる。

Pragmaは、焦点が相手の経済力や地位に向いている実利的な恋愛である。ACと正の相関であることから、消極的で周りの評価を気にする傾向があることが示唆される。「大学不適応」「評価不安」「自己期待」「倫理的非難」との関連から、所属する学部や大学に居心地の悪さを感じ、成績評価等に不安を覚える傾向があること、有能さへの自己評価が厳しく、他者の不正に対しても厳しいという傾向が示唆される。

Maniaは、強烈的な嫉妬や独占欲などで悩み苦しむ恋愛である。「自己期待」「問題回避」との関連から、自己が有能でなければならないという認知的な傾向をもち、問題には正面から向き合わない傾向があることが示唆される。

Ludusは、恋愛を遊びと捉え、様々な相手と恋愛できるといった特徴がある。CPと負の相関であったことから責任感に欠け、不真面目な傾向があることが示唆される。

Agapeは、相手に尽くす愛他的な恋愛であるが、本研究の結果からはどの尺度とも関連がみられなかった。

(さとう ゆうき)

人格の偉大性要因について X

—— 中高年者による「親孝行」への回想 ——

○ 藤 田 主 一

高 嶋 正 士

(日本体育大学体育学部)

(共立女子大学名誉教授)

<キーワード> 人格の偉大性, 偉大性のBASIC構造, 親孝行への回想, 中高年者

【目的】

本研究は、人格の「偉大性」(greatness)を構成する要因や背景を明らかにすることを目標としている。「偉大性」の概念は、通常「偉い人」や「立派な人」などといわれる個人を指すものであるが、必ずしも明確な定義が存在するわけではない。「偉大性」の心理学的な構造がどのような要因の枠組みとして捉えられるかについては、今日まで主として欧米の研究者たちが独創的な研究を進めてきた。それは「偉人」として取り上げられる人を、いくつかの観点から精査分類する試みである。例えば素質の高い能力から稀にみる業績を成し遂げる(知性や業績の傑出)、人間的に素晴らしい特性から人びとに尊敬される(性格や活動の高揚)、世のためになるような仕事を残す(社会的名声や貢献の拡大)などの事実に基づいて、「偉大」な個人を生み出す背景を明らかにしようとしてきた。即ち「偉人」に対する評価の基準である。

我々は、今日まで「偉大な人格」の特性や発達などを研究する過程(小学生、中学生、大学生、社会人を対象)において、「偉大性」の5因子(BASIC)構造仮説を提案してきた(応心大会)。それは、以下に示すとおりである。

- ①「行動の基準と努力」因子 Behavior
- ②「仕事や業績」因子 Achievement
- ③「社会や家族への貢献」因子 Social contribution
- ④「知的能力の高さ」因子 Intelligence
- ⑤「性格や人柄」因子 Character

我々は応心第71回大会(2004)において、中高年者162名を対象に「偉大性」の中の「C」因子に含まれる項目「やさしさ」を取り上げた。それは、彼らが意図する「やさしい男性/女性」の具体像を明らかにしようとするものであった。その結果、「やさしい男性」は「穏やかな人/思いやりのある人/らしさを発揮する人」などの類型、「やさしい女性」は「穏やかな人/理解する人/思いやりのある人」などの類型が浮かび上がった。

今回は、同じく中高年者を対象に「やさしさ」の具体像として「親孝行」を取り上げ、彼らが過去/現在に実行した親孝行の内容分析を試みた。現象的側面からの接近であるが、想定した仮説(男性:物質的な親孝行,女性:精神的な親孝行)が検証可能であるかも検討したいと考える。

【方法】

(1)調査対象者:埼玉県内に在住する中高年者152名(男性92名/平均年齢65.7歳/50~86歳,女性60名/平均年齢60.5歳/46~79歳)である。

(2)調査材料:フェイスシートに続き、「親孝行」に関して大きく3種類の設問が続くB4判の調査用紙を作成した。設問は以下のとおりである。①「あなたは過去に「親孝行したなあ」と思う経験がありましたか?」〔はい/いいえ/どちらともいえない〕に○印をつける。〔はい〕と答えた方にお聞きします。「それはいつごろのことでしたか?」「それは具体的にどのようなことでしたか?(父親に/母親に)」回答は自由記述である。②「あなたは現在「親孝行しているなあ」と思う経験がありますか?」〔はい/いいえ/どちらともいえない〕に○印をつける。〔はい〕と答えた方にお聞きします。「それは具体的にどのようなことですか?(父親に

/母親に)」回答は自由記述である。③「親孝行/親不孝」についてそれぞれ6個連続して自由記述できる空欄(TST形式)を用意した。「あなたは、親孝行/親不孝」という言葉からどのような事実をイメージしますか?思いつくことをなるべく多くお書きください」という教示を与えた。

(3)手続き:調査は平成16年11月に、2ヵ所の中高年者対象の講演会会場において集団で実施/回収した。

【結果と考察】

本報告では、得られた調査材料の中から①②の「親孝行」への回想結果を中心に検討することにした。

(1)《過去の親孝行への回想》:過去に何らかの親孝行の経験を回想するかについて、男性92名中で「はい」(52.2%)、「いいえ」(15.2%)、「どちらともいえない」(30.4%)、「不明(無回答)」(2.2%)であった。一方、女性60名中では「はい」(68.3%)、「いいえ」(1.7%)、「どちらともいえない」(28.3%)、「不明(無回答)」(1.7%)という結果が得られた。平均年齢が男女ともに60代であることを考えると、自身のいつの頃の経験が想起されたのか、またどのようなテーマが親孝行につながるのかが重要である。具体的な記述数(解釈可能な内容)は以下のとおりであった。

- ・男性(48名):父親に30回想,母親に41回想の有効記述数。
- ・女性(41名):父親に27回想,母親に30回想の有効記述数。
- 男女とも母親への回想が多いことがわかる。ここで父親/母親への親孝行の具体例を示してみよう。(父・印/母・印)
- ・30歳から45歳ごろまで金銭的な援助をした(男性,65歳)
- ・昭和50年に病気の父親のために家を建てた(男性,66歳)
- ・昭和32年に初めて温泉旅行に招待した(男性,70歳)
- ・比較的難易の高い大学受験に成功した(男性,72歳)
- 20代後半で家を建て母親と一緒に生活した(男性,60歳)
- 母親が亡くなるまで病氣看護をした(男性,65歳)
- 40代のころ国内,海外旅行に連れて行った(男性,67歳)
- 20代の初ボーナスで着物の生地を送った(男性,74歳)
- ・結婚後,時々家に招いて一緒に過ごした(女性,55歳)
- ・20年前に10年間寝たきりの介護をした(女性,60歳)
- ・40代のころ好きなお酒をよく買ってあげた(女性,66歳)
- ・父は病弱だったのでずいぶん看病した(女性,71歳)
- 生まれ故郷の関東に嫁いで母と暮らした(女性,51歳)
- 結婚して自分の幸せな姿を母に精一杯みせた(女性,56歳)
- 昭和42年ごろ母親の看病をした(女性,66歳)
- 好きなものをたくさん買ってあげた(女性,79歳)

父親/母親への物質的な親孝行は男性64.8%,女性56.1%,精神的な親孝行は男性35.2%,女性43.9%であった。ただ、男性は母親に対して、物質的な親孝行(70.7%)が高いのが特徴的である。

(2)《現在の親孝行への回想》:現在の親孝行への比率は、男性が22.8%,女性が30.0%となり、過去に比べると相対的に低い。これは調査時点で両親がすでに他界しているため、回答に戸惑ったものと考えられた。親孝行の内容は「介護や介助」「墓参」「定期的な訪問」など、物質的なもの以上に精神的/献身的な比重が大きい。調査対象の中高年者は、改めて親孝行の実像を認識する機会が多い。③のデータ解析を今後の課題としたい。(ふじたしゅいち/たかしまさし)

ユーモア測定尺度の作成 (3)

— ユーモア志向尺度との関連 —

宇恵 弘

(関西福祉科学大学 社会福祉学部臨床心理学科)

キーワード：ユーモア, 妥当性, 性差

【研究の目的】 先行研究(宇恵, 2004)では, Humor Orientation Scale (HOS), Humour Initiation (HI), Coping Humor Scale (CHS), Sense of Humor Questionnaire (SHQ) の各尺度の日本語版の妥当性検証として, 性格検査との関連を検討した。

本研究では, 上記4尺度の日本語版の妥当性検証の第2報として, ユーモア志向尺度(上野, 2003)との関連を検討した。また, 宇恵(2003a)により日本語版の作成がすすめられている Multidimensional Sense of Humor Scale (MSHS) の妥当性についてもあわせて検証をした。

【方法】 調査対象者：大阪府下私立大学学部生, 奈良県下私立大学学部生, 合計216名(男子学生91名, 女子学生122名, 性別年齢未記入3名, 平均年齢20.2歳, SD=3.6歳)。調査時期：2004年6月から7月
尺度の概要：宇恵(2003b)と同様に, HOS, HI, CHS, SHQを使用した。さらに, ユーモア志向尺度(上野, 2003)とMSHS日本語版(宇恵, 2003a)を施行した。ユーモア志向尺度は, 「攻撃的ユーモア」「遊戯的ユーモア」「支援的ユーモア」の3因子(各8項目)で構成されている。回答は, 「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法で求めた。MSHS日本語版は29項目からなり, 「ユーモアの表現(MSHSf1)」「ユーモアや, ユーモラスな人への態度(MSHSf2)」「ユーモアによるコーピング(MSHSf3)」の3因子で構成されている。回答は「そう思う」から「そう思わない」の5件法で求めた。

【結果】 尺度間の相関(Pearsonの積率相関係数)を算出した(Table1)。統計的に有意な値が多くみられるが, HOSからMSHSf3までの8尺度と「攻撃的ユーモア」との相関係数は, 「遊戯的ユーモア」や「支援的ユーモア」との相関係数にくらべて低い値を示していた。また, 上野の3尺度と, SHQf1やSHQf2との相関係数は他の値とくらべて低いことがわかる。さらに, 上野の3尺度間の相関係数をみると, 「遊戯的ユーモア」と「支援的ユーモア」の値にくらべて, 「攻撃的ユーモア」と「遊戯的ユーモア」や「支援的ユーモア」の値は低いことがわかる。

宇恵(2004)では, CHSやSHQf2に性別による差が報告された。本研究の資料からも, 攻撃的ユーモアとSHQf1に有意水準5%で性別による差がみられた(攻撃的ユーモア: $t(206)=5.26$, 男子学生 $M=25.28 >$ 女子学生 $M=20.99$; SHQf1: $t(205)=2.21$, 男子学生 $M=13.71 >$ 女子学生 $M=12.88$)。そこで, 性別による差を考慮して, 尺度間の相関係数を求めた。結果は, 男子学生, 女子学生ともに, Table1とおおむね同様であったが, Table2やTable3に示した尺度間については, 男女間で異なった結果が得られた。

【考察】 HOS, HI, CHS, SHQ, MSHSの各日本語版は上野の3尺度と関連がみられたことから, 上記5種類の日本語版尺度について, 妥当性の一側面が確認できたと考えられる。上記5種類の日本語版尺度は, その内容から考えて, 遊戯的ユーモアや支援的ユーモアと同様のユーモア感覚を測定

している項目が多く, ユーモアの攻撃的側面を測定している項目は少ないことから, 遊戯的ユーモアや支援的ユーモアにくらべて攻撃的ユーモアとの関連が低くなったと考えられる。

しかし, 男子学生と女子学生を分けて検討した結果から, 同じユーモアの内容を提示しても, 性別によってユーモアの捉え方が異なる可能性のあることが明らかとなった。

Table1 尺度間の相関

	攻撃的 ユーモア	遊戯的 ユーモア	支援的 ユーモア
HOS	.241**	.508**	.491**
CHS	.295**	.453**	.613**
HI	.204**	.505**	.498**
SHQf1	.212**	.274**	.269**
SHQf2	.075	.290**	.183**
MSHSf1	.225**	.432**	.483**
MSHSf2	.219**	.512**	.414**
MSHSf3	.241**	.553**	.605**
攻撃的ユーモア	1.000	.232**	.189**
遊戯的ユーモア	—	1.000	.675**

** : 1%水準で有意

Table2 性別により相違がみられる尺度間の相関

	攻撃的ユーモア		支援的ユーモア	
	男子学生	女子学生	男子学生	女子学生
HOS	.297**	.168	.377**	.579**
CHS	.205	.381**	.632**	.597**
HI	.075	.261**	.457**	.545**
SHQf1	.240*	.119	.172	.357**
SHQf2	.236*	-.005	.118	.236*

** : 1%水準で有意, * : 5%水準で有意

Table3 性別によるユーモア志向尺度下位尺度間の相関

	男子学生		女子学生	
	遊戯的	支援的	遊戯的	支援的
攻撃的	.149	.172	.254**	.230*
遊戯的	—	.657**	—	.693**

** : 1%水準で有意, * : 5%水準で有意

【引用文献】 宇恵弘 2003a 多次元ユーモア測定尺度(Multidimensional Sense of Humor Scale: MSHS)日本語版の作成(1) 日本心理学会第67回大会発表論文集。

宇恵弘 2003b ユーモア測定尺度の作成(1) 日本応用心理学会第70回発表論文集。

宇恵弘 2004 ユーモア測定尺度の作成(2) 日本応用心理学会第71回発表論文集。

上野行良 2003 ユーモアの心理学 サイエンス社。

(うえ ひろし)

インターネットと自己に関する研究（2）

— 情報社会の中での大学生像 —

田中 道弘

(常磐大学大学院人間科学研究科)

キーワード：インターネット・モラル、自己肯定感、時間的展望、病的自己愛

【研究の目的】 インターネットの普及に伴い、我々の利便性は向上したが、その一方でインターネット依存症と言われるインターネットの過剰使用に伴う社会的不適応に陥る若者も現れはじめた。適切な対人関係を築くためには、現実の生活空間だけではなく、インターネット上のモラルも重要であると思われるが、インターネット上では匿名性も伴い、倫理的な側面が軽視される傾向がある。そこで本研究では、インターネット・モラルと、自己肯定感、時間的展望、病的自己愛の視点から検討を行い、インターネット上のモラルに問題のある学生群の傾向を明らかにすることを目的とした。

【方法】 対象：茨城県と埼玉県内の大学生 405 名に調査協力を依頼し、有効回答 397 票を得た(男性 240 名、女性 157 名)。年齢範囲は 18 歳から 28 歳までであり、平均年齢は、20.1 歳(男性 20.3 歳、女性 19.9 歳)であった。

【調査内容】 (1) 自己肯定感尺度 ver.2 (田中, 2005) の 8 項目 (4 段階評定)。(2) 時間的展望体験尺度 (白井, 1994) の 18 項目 (5 段階評定)。「目標指向」「希望」「現在の充実感」「過去受容」の 4 つの下位尺度から構成されている。(3) 病的特徴に基づく自己愛に関する尺度 (岡田, 1998) の 18 項目 (6 段階評定、以下“病的自己愛”)。(4) インターネット・モラル尺度 Ver.1 (田中, 2005) の 10 項目 (5 段階評定)。

【結果】 本研究では、まず新たに作成したインターネット・モラル尺度について検討を行った。主成分分析の結果、すべての項目が第 1 主成分の中に、.496 以上の因子負荷量でまとめられ、単因子構造が確認された。インターネット・モラル尺度の信頼性は、 $\alpha = .825$ であり、高い信頼性が確認されたため本研究に採用した。そこでインターネット・モラル尺度得点の上位下位それぞれ 25% の数値を求め、その基準をもとに低群 (10-39 点)、中群 (40-47 点)、高群 (48 点-50 点) に分類した。この分類によって、インターネット・モラル尺度の各群と、自己肯定感、時間的展望、病的自己愛の各平均得点との間に有意な差があるかどうかについて一元配置の分散分析を行った (表 1)。

その結果、インターネット・モラル得点の各群間での、自己肯定感尺度の各平均得点の間には有意差があることが示された ($F(2, 394) = 3.44, p < .05$)。そこで多重比較 (tukey) を試みたところ、モラル低群と高群の平均得点の間に有意な差が示された ($MSe = 19.1, p < .05$)。

次に、インターネット・モラル得点の各群間での、時間的

展望体験尺度の 4 つの下位尺度について一元配置の分散分析を行った。以下は、その結果である。

インターネット・モラル得点の各群間での、「目標指向」下位尺度の各平均得点の間には、有意差があることが示された ($F(2, 394) = 3.73, p < .05$)。そこで多重比較 (tukey) を試みたところ、モラル低群と高群との平均得点の間に有意な差が示された ($MSe = 26.9, p < .05$)。インターネット・モラル得点の各群間と、「希望」下位尺度の各平均得点の間には有意差があり ($F(2, 394) = 6.45, p < .01$)、多重比較 (tukey) を試みたところ、モラル低群と中群・高群の平均得点の間に有意な差が示された ($MSe = 10.8, p < .05$)。インターネット・モラル得点の各群間での、「現在の充実感」下位尺度の各平均得点の間には有意差があり ($F(2, 394) = 7.73, p < .001$)、そこで多重比較 (tukey) を試みたところ、モラル低群と中群・高群の平均得点の間に有意な差が示された ($MSe = 21.4, p < .05$)。インターネット・モラル得点の各群間での、「過去受容」下位尺度の各平均得点の間には有意差があり ($F(2, 394) = 6.92, p < .001$)、多重比較 (tukey) を試みたところ、モラル低群と中群・高群に、平均得点の間に有意な差が示された ($MSe = 8.65, p < .05$)。

最後に、インターネット・モラル得点の各群間と、病的自己愛尺度について一元配置の分散分析を行った結果、インターネット・モラル得点の各群間での、病的自己愛尺度の各平均得点の間には有意差が示された ($F(2, 394) = 23.3, p < .001$)。多重比較 (tukey) を試みたところ、モラル高群 < 中群 < 低群の順に、平均得点の間に有意な差が示された ($MSe = 83.0, p < .05$)。

【考察】 インターネット・モラル得点の高群と低群との群間での自己肯定感尺度の平均得点は、モラル高群が低群よりも自己肯定感得点が高かった。その結果、自己に対して好ましく思うことと、モラル的な側面は無関係ではない可能性が示されたことは興味深い。また、インターネット・モラル尺度の各群と、時間的展望体験尺度の各下位尺度との平均得点の間には、概ねモラル得点の高群ほど、「目標指向」「希望」「現在の充実感」「過去受容」の各得点が高い傾向が示された。病的自己愛については、インターネット・モラル得点の高群 < 中群 < 低群の順に得点が高くなる傾向が示された。

以上の結果から、インターネット・モラルの低い学生は、自己に対して好ましく思えず、将来の目標や希望などが持てず、病的自己愛が高い傾向にあることが示された。

表 1 インターネット・モラルの 3 群別の各平均得点、標準偏差

内容	モラル低群	モラル中群	モラル高群	F	Tukey
	n=78	n=197	n=122		
自己肯定感	22.3 (4.92)	23.3 (4.17)	24.0 (4.33)	3.44 *	低群 < 高群
目標指向	15.0 (5.17)	15.9 (5.14)	17.0 (5.28)	3.73 *	低群 < 高群
希望	11.8 (3.64)	13.0 (2.98)	13.5 (3.52)	6.45 **	低群 < 中群・高群
現在の充実感	14.1 (4.70)	16.3 (4.46)	16.5 (4.85)	7.73 ***	低群 < 中群・高群
過去受容	10.1 (3.03)	11.2 (2.89)	11.7 (2.96)	6.92 ***	低群 < 中群・高群
病的自己愛	64.4 (8.53)	60.8 (8.51)	55.7 (10.32)	23.25 ***	低群 > 中群 > 高群

*** $p < .001$ ** $p < .01$, * $p < .05$

(たなか みちひろ)

性能的性格（４）

－性能に関する自己評定値と作業成績との関連－

○川島 大司

久米 稔

(東海女子大学 人間関係学部)

(適合性評価研究所)

性能 自己評定値 作業成績

[目的]

これまでの性能（慎重・緻密性）に関する自己評定尺度値（E P - S, S E C - S）と実際の作業成績（鏡映描写検査のはみ出し数, C E L - Sの見落し率, ワープロ（無意味綴）練習時の誤入力数）との関連性を検討してきたが、本研究では、性能（慎重・緻密性, 遵守, 注意の持続性, 正確性）に関する自己評定尺度値（E P - S, S E C - S）と実際の作業成績（C E L - S, ワープロ練習, 数系列完成, 叩打法, 鏡映描写）との関連を因子分析の手法を用いて検討した。

[方法]

被験者：女子大学生 113名

材 料：性能に関する自己評定尺度（E P - S, S E C - S）と作業検査（C E L - S, ワープロ練習検査, 数系列完成）

手続き：作業検査を実施する前に、性能に関する自己評定尺度（E P - S, S E C - S）で自己評定してもらい、その後、作業検査（C E L - S, ワープロ練習検査, 数系列完成, 叩打法, 鏡映描写）を実施した。

各検査の処理尺度を以下のように示す。

- (1) E P - S 慎重・綿密型 5段階点
 敏捷・てきぱき型 5段階点
 勤勉・こつこつ型 5段階点
- (2) S E C - S 慎重・緻密性 5段階点
 判断・推理力 5段階点
 遵守性 5段階点
 てきぱき・敏捷性 5段階点
 気遣度 5段階点
 根気性 5段階点
 意欲 5段階点
- (3) C E L - S 試行数C得点
 見落とし率C得点
- (4) ワープロ練習 入力時の作業態度
 注意の持続度
- (5) 数系列完成 正解数C得点
- (6) 叩打法 原点からの距離（第1ブロック）
- (7) 鏡映描写 はみ出し数C得点

[結果と考察]

取り扱った変数の数は17個で、5因子を想定して因子分析（バリマックス回転）を行った。

結果は表1に示したように、固有値の値を0.94までとして4因子とした。しかし、4因子までの累積寄与率はおよそ38%と、かなり低い値であった。

因子1の尺度はすべて敏捷性、綿密性、勤勉性にかかわるE P - SとS E C - Sの検査のものであり、また、因子2の尺度も遵守性にかかわるE P - SとS E C - Sの検査のもの

となっており、2因子共に自己評定によるものであった。

因子3の尺度は、注意の持続度を示すC E L - Sとワープロ練習（注意の持続度）、数系列完成の数値によるものであった。

因子4の尺度は、正確さを示すC E L - Sとワープロ練習（入力時の作業態度）の数値によるものである。前者はC得点に換算しとものであり、後者は実測値で、数値が大きいほど間違いが多いので、負の負荷量となった。

叩打法、意欲、鏡映描写、気遣度の4尺度は、4因子のいずれともまとまる形で抽出されず、また、因子5としてのまとまりも認められなかった。

各因子を解釈すると、因子1は敏捷・綿密・勤勉性、因子2は遵守性、因子3は注意の持続性、因子4は正確性といえそうである。

表1. 因子負荷量（バリマックス回転後） n=113

処理尺度	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
敏捷・てきぱき型	0.8404	-0.0895	0.1522	-0.1200	-0.2573
判断・推理力	0.6583	0.1560	-0.0272	-0.0360	-0.0884
てきぱき・敏捷性	0.6551	0.0009	0.1475	0.0923	0.0544
慎重・綿密型	0.5454	0.3914	0.0142	-0.1233	-0.1065
勤勉・こつこつ型	0.4961	0.0846	0.1762	0.0508	0.0283
根気性	0.4510	0.2963	0.2663	0.1834	0.4162
慎重・緻密性	0.3288	0.9351	-0.0406	0.0584	-0.0529
遵守性	-0.0358	0.7079	0.0223	0.1003	-0.0665
試行数	0.1029	0.0011	0.6331	-0.1046	-0.1278
注意の持続度	0.0349	-0.0082	0.5336	-0.0547	0.0819
正解数	0.1592	0.0070	0.4380	-0.0494	-0.2398
見落とし率	0.0469	-0.0429	-0.0962	0.7218	-0.2178
入力時の作業態度	0.0705	-0.1495	0.0636	-0.4062	0.0369
叩打法	0.0013	-0.0420	-0.1364	-0.0689	0.2517
意欲	0.3970	-0.0171	0.3763	0.3386	0.2436
鏡映描写	0.1056	0.0493	-0.0138	0.1017	-0.2256
気遣度	-0.1633	0.0292	0.0317	-0.1471	-0.1386
寄与率(%)	15.68	9.92	7.07	5.55	3.48
累積寄与率(%)	15.68	25.59	32.66	38.21	41.69
固有値	2.66	1.69	1.20	0.94	0.59

扱った処理尺度を測定の方法の面から考察すると、因子1と2の尺度は自己評定法検査によるものであり、因子3と4は作業検査によるものである。自己評定値と作業実績とが別々の因子のもとに抽出されているのである。自己評定と作業検査との関連はあまり認められないということを示唆しているようである。

これまでの著者達の研究では、自己評定と実際の作業実績との間にはあまり関連は認められないという、どちらかと言えば否定的な結果になっていた。今回の因子分析的手法を用いた検討で、この点はかなり明白になったようである。

自己評定と作業実績との間には、高い関連の認められる被験者もいれば、そうでない被験者（10～30%）もいる。実績の裏付けのない自己評定がなされていることを示すものである。

(かわしま だいじ)(くめ みのる)

イップスの研究 (3)
—— 完全主義的思考とEPPS ——

林 深
(白梅学園短期大学心理学科)
(イップス)

八木 孝彦
(中央学院大学商学部)
完全主義的思考 EPPS)

目的

スポーツの世界における、個人的な障害の問題の一つの例がゴルフのイップス (Yips) の問題である。

このイップスの問題に対するアプローチの前段階として、われわれはまず類似症状であるクランプ (cramp), 特に書痙 (writer's cramp) の諸事例について検討を行った。

書痙の症状をもつ人々の発症前性格を理解するために既発表の書痙の症例を通覧した。その結果書痙の患者 (来談者) には、完全欲, 几帳面, 過度にまじめという性格・行動傾向の特徴が見出された。すなわち完全主義的傾向である。そこでわれわれは完全主義的傾向を、イップスについてのアプローチの一つの中心点と見なした。

われわれは運動機能障害を中心としたイップス研究の一環として、先の2回の報告で完全主義者尺度とYG, MMPIの関連性を研究してきた。

今回の第3報告では、大学生を対象に櫻井・大谷 (1997) の自己志向的完全主義尺度を実施し、同時に試行したEPPS性格検査との関連で完全主義的傾向と欲求特性とのかかわりについて検討した。

EPPSはMurrayの性格論をもととしてEdwardsが作成したテストである。パーソナリティを15の特性によって把握するものである。

本研究ではこの自己志向的完全主義者尺度 (完全主義尺度と略) の4つの下位尺度ごとに高得点群, 低得点群を設定し, EPPSへの回答傾向について検討した。

これによって完全主義的傾向と欲求のパターンとの特徴を明らかにすることが目的である。

方法

調査対象は首都圏の大学の心理学受講生120名である。これらの被験者に自己思考的完全主義尺度とEPPSとを実施した。

このうち双方に回答した被験者は、男女104名であった (調査時期: 2005年5-6月)。

自己思考的完全主義尺度 (以降、完全主義者尺度) は、次の4項目から構成されている。

- 完全でありたいという欲求尺度 (DP尺度, 5問)
 - 自分に高い目標を課する傾向 (PS尺度, 5問)
 - ミス (失敗) を過度に気にする傾向 (CM尺度, 5問)
 - 自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向 (D尺度, 5問)
- 評定は6件法であって、1-6の重みづけをして、各尺度得点が算出される。

EPPSは2つの項目がペアになっており、そのいずれかを選択させるものである。この強制選択法によって225項目に回答させる。

EPPSは次の欲求について測定する。

- 1.達成(ach) 2.追従(def) 3.秩序(ord)
- 4.顕示(exh) 5.自律(aut) 6.親和(aff)
- 7.他者認知(int) 8.求護(suc) 9.支配(dom)
- 10.内罰(aba) 11.養護(nur) 12.変化(chg)
- 13.持久(end) 14.異性愛(het) 15.攻撃(agg)

結果と考察

これらのデータについて、次のように検討した。

完全主義の下位尺度ごとに得点分布を勘案しながら、高得点者(High)群と低得点者(Low)群をおよそ上位25%, 下位25%になるように選出した。同スコアの被験者があるので、今回は厳密に25%ずつの上位群、下位群とはしなかった。

下位尺度ごとの上位群と下位群の被験者数と平均値と標準偏差は次のTableのとおりである。

自己志向的完全主義下位尺度ごとの被験者数, 平均, 標準偏差

	Low			High		
	Number	Mean	SD	Number	Mean	SD
DP	29	13.6	3.21	18	26.9	1.64
PS	26	14.6	2.73	27	27.1	1.71
CM	26	9.7	1.68	23	21.0	1.72
D	30	14.6	2.95	29	26.0	1.70

ついで、高得点群と低得点群との間でEPPSの各特性の得点についてt検定を実施した。

しかし、これらのt値はいずれも低く、5%水準でも有意差は認められなかった。

これまでのわれわれの報告から、完全主義的傾向とパーソナリティの傾向との間には、一応の傾向すなわちMMPIの尺度においては有意差が認められたこと、各項目への反応分析が有効なことが見出されている。

したがって今後欲求との関連性を検討する場合には、EPPSの欲求尺度値のみを使用するのではなくて、個々の質問項目への反応の相違について検討することも方法となってくる。また完全主義者尺度の得点間の比較も、下位尺度の上位、下位群を25%抽出するという方法ではなくて、下位尺度を構成する5問すべてに高得点で回答している被験者と、すべてに低得点で回答している被験者を抽出して比較するなどの方法で分析することが必要になってくる。

考察文献

Edwards, A.L. 肥田野・岩原・岩脇・杉村・福原訳 1970 EPPS性格検査手引き 日本文化科学社
井関勝彦, 他 1974 書痙患者の精神生理的知見 廣島医学, 27,1317-1322.
桜井茂男・大谷佳子 1997 "自己に求める完全主義"と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, 68,179-186.
内山喜久雄 1971 書痙の臨床心理学的研究(1) 症状の心的特性 教育相談研究 (東京教育大学), 11,15-28.
(はやしきよし・やぎたかひこ)

青年の自我同一性と主観的ウェルビーイング

角野 善司

(駒澤大学 教職課程 [非常勤])

キーワード：青年，自我同一性，主観的ウェルビーイング

問題と目的

主観的ウェルビーイング (subjective well-being) は、幸福についての心理学的研究の鍵概念であり、“ある程度の時間的安定性・状況一貫性をもった、知覚された幸福 (角野, 1995a,b)” と定義される。

主観的ウェルビーイングの構成要素の1つとして、“人生に対する満足 (life satisfaction)” が挙げられてきたが、従来、専ら過去から現在にかけての人生の評価のみが扱われていた。しかし、現在までの人生に満足していても、未来を否定的にしかとらえられない場合には、必ずしも幸福と知覚されるとは限らない。そこで、角野 (1995a,b,1997) は、過去-現在-未来にわたる人生の主観的評価を“人生に対する肯定的評価”という、主観的ウェルビーイングの新たな下位概念としてとらえ直し、大学生・成人を被験者とした研究を行って尺度構成を図り、この尺度が一因子構造をなし、一定水準の信頼性・妥当性をもつことを示した。

さらに、中学生・高校生・大学生を対象に、この尺度を用いた多面的な研究を行い、一連の報告において、主観的ウェルビーイングの高さの発達的变化の検討 (角野, 2000a) を手始めに、犯罪被害体験、不良行為・犯罪行為 (角野, 2000b,2001a)、効力感 (角野, 2001b)、自尊感情・自己評価 (角野, 2002)、時間的展望 (角野, 2003) と主観的ウェルビーイングとの関連について検討してきた。

今回は、新たに大学生・短期大学生・専門学校生を対象に行なった調査をもとに、青年の自我同一性と主観的ウェルビーイングとの関連について報告する。青年期の人格発達上重要な課題である自我同一性を確立し、過去から現在そして未来という時間の流れの中に自らを位置づけ、これからの人生をいかに生きていくかの指針をもつことは、過去-現在-未来にわたる人生を肯定的に評価することにつながると考えられる。そこで、自我同一性の確立が進んでいる者ほど人生に対する肯定的評価が高い傾向が見られるか検証する。

方法

被験者 大学生・短期大学生・専門学校生 380名

(男性 151名 女性 229名)

年齢 18-24歳 平均 19.28歳 標準偏差 1.19歳)

質問紙

1.自我同一性次元尺度 (加藤, 1986)

自我同一性達成の程度を 6点尺度 14項目で測定するものであり、高得点ほど同一性達成、低得点ほど同一性拡散の傾向を示す。

2.自我同一性地位尺度 (加藤, 1983)

「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入の希求」の3下位尺度 (各 6点尺度 4項目) から構成され、これらの得点の高低に基づき、被験者を、同一性達成地位 (A)、同一性達成-権威受容中間地位 (A-F)、権威受容地位 (F)、積極的モラトリアム地位 (M)、同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位 (D-M)、同一性拡散地位 (D) の6地位に分類する。

3.「人生に対する肯定的評価尺度」7点尺度 12項目

(角野,1995a,b,1997)

結果と考察

まず、自我同一性次元尺度と人生に対する肯定的評価尺度

との相関係数を算出したところ、 $r=0.597$ ($df=378, p<.001$) という中程度の相関が見られた。このことは、自我同一性を達成している度合いの高い青年ほど、人生に対する肯定的評価も高いことを示しており、仮説を支持し、主観的ウェルビーイングが青年の心理を理解するうえで有用な概念であることを示している。

次に、各自我同一性地位間で、人生に対する肯定的評価得点の平均値を比較した (Table 1)。一元配置の分散分析で有意な結果が得られたので ($F=7.10, df=5,374, p<.001$)、Tukeyの多重比較を行なったところ、同一性拡散地位 (D) が他の5地位のいずれと比較しても人生に対する肯定的評価が低く、また、同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位 (D-M) が同一性達成-権威受容中間地位 (A-F) よりも低かった。このように、同一性拡散地位が他の地位よりも人生に対する肯定的評価が低かったことは、自我同一性次元尺度の結果と一致するものである。しかし、同一性達成地位 (A) と他の地位との間に差は認められなかったことから、積極的モラトリアム地位 (M) や同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位 (D-M) の青年の主観的ウェルビーイングを支える要因について、今後さらに検討が必要である。

Table 1 自我同一性地位と人生に対する肯定的評価

	平均 (SD) [n]
同一性達成地位 (A)	53.81(11.33) [32]
同一性達成-権威受容中間地位 (A-F)	56.50(13.13) [44]
権威受容地位 (F)	69.00(2.83) [2]
積極的モラトリアム地位 (M)	51.87(11.67) [38]
同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位 (D-M)	50.35(9.95) [236]
同一性拡散地位 (D)	43.00(12.23) [28]
全体	51.06(11.24) [380]
多重比較	A, A-F, F, M, D-M>D A-F>D-M

文献

- 加藤厚 1983 教育心理学研究, 31, 292-302.
 加藤厚 1986 心理学研究, 56, 357-360.
 角野善司 1995a 教心第 37 回総会発表論文集, 95.
 角野善司 1995b 日心第 59 回大会発表論文集, 23.
 角野善司 1997 日心第 61 回大会発表論文集, 83.
 角野善司 1998 応心第 65 回大会発表論文集, 149.
 角野善司 2000a 日心第 64 回大会発表論文集, 1087.
 角野善司 2000b 応心第 67 回大会発表論文集, 92.
 角野善司 2001a 帝京大学文学部紀要(心理学), 6, 67-81.
 角野善司 2001b 応心第 68 回大会発表論文集, 98.
 角野善司 2002 応心第 69 回大会発表論文集, 130.
 角野善司 2003 応心第 70 回大会発表論文集, 43.
 角野善司 2004 応心第 71 回大会発表論文集, 17.

(すみの ぜんじ)

M S C（創造的構え）テスト改訂の試み（9）

タイプ・グループによる検討そのⅢ－質問項目の識別度

○寺澤美彦 久米 稔 成田猛 高野隆一 伊賀憲子 内藤美智子
 (日本福祉教育専) (適合性評価研究所) (秋田看護福祉大学) (文化女子大学) (松本短期大学)

keywords : 創造性思考、創造的構え、質問項目

[はじめに]

創造性の発揮には、創造的思考能力のほかにパーソナリティ変数である創造的構えが関係しているといわれている。そこで、本研究では創造的構えを測定するためにM S C（創造的構え）テストとよばれる質問紙を作成し、何年かにわたり改訂を試みてきた。今回は2002年改訂の30項目版を用いて、M S Cテストの結果とT C T創造性検査のタイプ・グループとの関連を質問項目ごとに検討することにした。

[方法]

被験者：秋田県内公立高校生男女757名。

検査課題：T C T創造性検査(用途、原因推定、標題づけの言語性下位検査と想像力、四点描画、図案発見の非言語性下位検査からなる)、およびM S Cテスト(性格尺度として自己信頼性、客観性、慎重性の3尺度が、動機づけ尺度として挑戦性、探究性、積極性の3尺度がある)。

手続き：T C T創造性検査は集団で実施し、6つの下位検査におけるタイプ出現傾向に基づき、被験者を5つのタイプ・グループに分類した。M S Cテストも同様集団で実施し、各項目に対し「5・全くその通り」から「0・全くその反対」までの6段階評価で回答を求めた。

[結果と考察]

タイプ・グループは以下の基準で5つに分けられる。

群1：飛躍的閃き型あり、または漸進的閃き型2以上。

群2：漸進的閃き型1、または理詰型2以上。

群3：理詰型1。

群4：群1～3以外で、硬直型3以下。

群5：群1～3以外で、硬直型4以上。

群1が最も課題の枠組みにとらわれない発想ができることになる。

今回は χ 自乗検定を行うにあたりT C T創造性検査は、群1と群2をまとめて創造的思考能力の高い群とし、群4と群5をまとめて創造的思考力の低い群とした。

M S Cテストは5点と4点をまとめたものを創造的構えの高い群とし、2点～0点をまとめたものの創造的構えの低い群とした。これらに基づき2×2の表を作成して、該当する被験者数を度数として χ 自乗検定を行った。

表1は χ 自乗検定の結果、有意差のみられた質問項目である。このうち項目番号4、5、9、11、14、17、19、24、29、30の10項目は正の方向に偏りのあった項目である。これらの項目ではM S C高得点者が創造性が高い群(群1、群2)に偏って分布しており、創造的思考と関係の深い項目のあるということが出来る。一方、項目番号15と26は負の方向に偏りがあった。これはM S Cの高得点者がむしろ創造的思考能力の低い群(群4群5)に偏って分布していたことになり、創造的思考に対しては抑制的に作用している可能性を示唆している。

尺度別にみると客観性と挑戦性が4項目ずつでもっとも多く、この2尺度が創造的思考と関係が深いことを示している。自己信頼性と慎重性は正負が1つずつあり、関連性は明らかではない。また探究性、積極性に有意なものは1つもなかった。

性格尺度は正負の両方があるものの、すべてが関係していたことになり、一方、動機づけ尺度で関係のあったのは挑戦性のひとつのみであった。印象としては性格尺度があらゆる情緒の安定性より動機づけ尺度のあらゆる思考の積極性のほうが創造的思考と関係がありそうに思われるが、結果は反対であった。同じ動機づけ面でも、挑戦性と類似した概念であると思われる探究性に関連がみられないというのも意外であった。また自己信頼性尺度では、自信がありながらも緊張したほうが創造性を発揮できるという矛盾した面もうかがわせている。

有意差のみられた項目文は次の通りである。

[自己信頼性]

9. 自分のものの見方や考え方、判断の仕方には、かなりの自信がある。

15. はじめてのことをする時には、とても緊張する。(逆転項目、負の関連性)

[客観性]

4. 人がいたりしたりすることについては、かなり公平に判断できると思う。

14. いつも、色々な角度からものごとをみて、判断しようとする。

24. 色々なことについて、自分なりの考えをもとうとする。

29. よく人と意見をかわす。

[慎重性]

17. 色々な考えを、実際に行動して、ためてみるこがある。(逆転項目)

26. なにか思いについても、それが実際にできるかどうかを、まず先に考えてしまうくせがある。(負の関連性)

[挑戦性]

5. 私は、他の人が型やぶりだと思ふことをしたい。

11. なにか思いきったことがしたくて仕方ない。

19. 話し合いの時など、自分の考えを自信をもっていえる。

30. 平凡は嫌いだ。

0.1%水準で有意となった項目文から創造性が高い人物をイメージしてみると「平凡がきらいで、型破りなことをしたいという気持ちが強く、色々な角度から物事を判断するが、実行にうつすのはためらいがちな人物」ということになるであろう。

表1 タイプ・グループ分類結果

N=757

尺度名	χ 自乗値	尺度名	χ 自乗値
9 自己信頼性	6.411*	17 慎重性	31.982***
15 自己信頼性	4.071*	26 慎重性	6.607*
4 客観性	5.045*	5 挑戦性	15.293***
14 客観性	30.678***	11 挑戦性	8.235**
24 客観性	10.883***	19 挑戦性	7.333**
29 客観性	5.382*	30 挑戦性	12.869***

*p<.05 ** p<.01 *** p<.001

(てらさわよしひこ くめみのる なりたたけし たかのりゅういち いがのりこ ないとうみちこ)

看護学生の老年者観と背景との関連

—老人観スケールを用いて—

前田 恵利

内海 滉

東京都立北多摩看護専門学校

千葉大学

キーワード：看護学生 老人観スケール 学生の背景

I. 目的

老年者と直接かかわる職業の人がどのようなイメージをもって老年者と関わっているかを明確にすることは重要であり、将来老年者を看護する看護学生には、老年者に対する見方、イメージに偏った偏見がないことが求められる。

本研究では、「老人観スケール」を用いて看護学生の老年者観の傾向を、学生の背景との関連で探る。

II. 方法

1. 調査対象者及び調査方法

東京都内の看護専門学校4校に在学する看護学校3年課程の3年生で、在学生305名中、調査の協力の得られた240名（回収率78.6%）である。

調査期間：2004年11月30日～12月16日で3年間の授業および臨地実習がすべて終了した時点である。

調査方法は質問紙による横断調査で、各校ごとの集合調査とし、質問紙はその場で記載してもらい回収した。

2. 研究の倫理的配慮

調査対象校には文書で依頼し、許可を得た。調査協力学生に対しては、研究目的を説明し、協力の有無と内容がその後の学生の教員による評価・指導に影響しないこと、調査は無記名で回答はすべてコンピューターで処理し個人が特定されないこと、調査は研究目的以外に使用しないことを文書および口頭で説明し協力を求めた。

3. 質問紙の構成

質問紙は、基本属性（性別、出身地、年齢、看護学校入学前の学歴、職歴、祖父母との同居経験とかかわり、ボランティア経験の有無）と「老人観スケール」で構成した。

「老人観スケール」とは馬場ら(1993)¹⁾によって、「Tuckman-Lorge Old People Questionnaire」の修正版(1981)と「Kogan Attitude Toward Old People Scale」(1961)をもとに作成された。否定的老人観と肯定的老人観を示す質問項目25項目で構成され「はい」「いいえ」の2件法、加点によって肯定的態度を測定できるとされている。

III. 結果

1. 回答者の属性

回答者の性別は、女性224名、男性16名であった。年齢は20歳から43歳まで平均23.5歳であった。出身は都内126名、近県、その他で114名であった。看護学校入学前の学歴は高校卒業者184名、短大以上の学歴を持つもの44名であり、入学前の職歴を有する者は54名、有しない者185名であった。祖父母との同居経験がある者98名、ない者141名であり、ボランティア経験のある者106名、ない者133名であった。

2. 老人観スケールの回答結果

1) 25項目全体の平均点は16.8点最小値1、最大値24、SD=3.55、歪度-9.52で正規分布を示している。 α 係数は.703であった。スケールの平均値は12.5点なので、看護学生の老人観は、肯定的な傾向を示しているといえる。

2) 老人観スケールの各項目と、看護学生の属性を χ^2 検定でみたところ、全体的には肯定的方向に「はい」と答える学生が多かったが、以下の結果が得られた。

(1)出身地との関連では、東京出身の学生と近県その他の出身地の学生を比較すると、「老年者は不幸だと思っている」は、「はい」が、東京>その他、「老年者は孫を甘やかしている」は「はい」がその他>東京であった。

(2)入学前学歴では、短大以上の学歴で入学した学生と高卒で入学した学生を比較すると「政治や社会の出来事に関心が強い」は「はい」が高卒>短大以上、「まわりの人から尊敬されている」は「はい」が高卒>短大以上であった。

(3)祖父母との同居経験の有無では、「周りの人を困らせることが多い」は「はい」が有り>無し、「意見や忠告をしたがる」は「はい」が有り>無しであった。

(4)同別居にかかわらず祖父母からよく世話を受けた経験の有無では、「尊敬されている」は「はい」が有り>無し、「息子や孫の迷惑」は「はい」が無し>有り、「病気で寝ている」は「はい」が無し>有りであった。

(5)老年者へのボランティア経験の有無では、「社会や政治に関心」は「はい」が有り群に多かった。

IV. 考察

老人観スケール各項目と学生の背景をみると、近県その他の出身学生は東京出身学生に比べ、老年者との密着感が推測される。高卒で入学した学生が老年者を政治や社会への関心が強く、周りの人から尊敬されているととらえ、短大以上の学歴を持つ学生との差を生じたことは、自分の持つ政治や社会への知識・関心の度合いとの関連で老年者を評価したと推測できる。祖父母との同別居の有無では、同居群は家庭の内側からの老年者の見方が伺えるが、世話を受けた経験の有無では、老年者の健康状態、家族間の感情の影響が推測される。「老人観スケール」での看護学生の老年者への見方は、全体に肯定的な見方を示し、老年者への肯定的見方に影響しているのは、世話を受けた経験や、学生自らボランティアで老年者との接触を求めた経験など「関わりの質」であると推測される。

引用文献：1)馬場純子・中野いく子他、中学生の老人観-老人観スケールによる測定-、社会老年学、38号、1993年。

(まえだ えり うつみ こう)

「絵本の読み聞かせ」を実施している母親の

読み聞かせの実態と育児意識に与える影響

○中 淑子¹⁾ 林田 りか¹⁾ 草野 美根子²⁾ 内海 滉³⁾

(¹⁾ 県立長崎シーボルト大学 (²⁾ 群馬大学 (³⁾ 千葉大学)

キーワード：絵本の読み聞かせ 母親の意識 育児構造

【研究の目的】イギリスで始まったブックスタートが2001年から日本に導入されて以来、絵本の読み聞かせが幼い子どもをもつ家庭内に急速に普及してきた。ブックスタートがシステム化している市町村の普及率はまだ低い。しかし、絵本の読み聞かせはブックスタートに関係なく、我が国では幼い子どもに多くの家庭で伝統的に行われてきた。一方、育児は幼い命の成長過程をみる喜びも大きい、反面、育児負担感や育児不安感を示す母親が1976年庄司の論文以来急増し、1980年代以降は「育児不安」は母親を示すキーワードとして使われている。現在は不安解消の目的で様々な方策がとられている。本研究では「絵本の読み聞かせ」は育児不安解消法の1つと捉え、絵本の読み聞かせの実態や絵本に対する母親の意識及び育児との関連について調査したので報告する。

【方法】調査対象：N県N市の住宅地域に設置された保育所と幼稚園に通う乳幼児をもつ母親226名 調査時期：平成16年4月 調査方法：保育所と幼稚園に調査を依頼し1週間の留め置き法とした。調査票：1. 絵本の読み聞かせに関する実際、2. 絵本の読み聞かせに対する母親の意識構造、3. 絵本を読み聞かせている母親の育児に対する意識構造の3種である。質問票2. は秋田らの提唱した「読み聞かせの意義」を参考に本研究者らが本研究になじむ内容を加味し21の質問項目を設定した。質問票3. は吉田の(仮)育児不安スケールを用いた。調査票2・3はいずれも4段階の評定尺度を用いた。分析方法：質問票2・3については因子分析をおこない、質問票1と質問票3の関係を因子得点の平均値の差の検定(t検定・分散分析)により比較した。データ解析には統計解析ソフトSPSS11.0Jを使用した。倫理的配慮：調査用紙は無記名とし、対象者には研究目的を文書にて説明。文書には、個人が特定されることはないことと、アンケートへの協力の拒否は施設での子どもの扱いに差別がないこと、また拒否も可能であることを明記した。

【結果】

質問票の有効回収は202名、有効回収率は89.36%であった。解析の対象としたのは、絵本の読み聞かせを行っている198名(87.6%)で、読み聞かせ実施率は98%であった。

1. 母親の背景と属性と絵本の読み聞かせに関する実態

- 1) 施設：保育所 60名(30.3%)、幼稚園 138名(69.7%)
- 2) 母親の年齢層：20歳未満 1人(0.5%)、20～30歳 43名(21.7%)、31～40歳 141名(71.2%)、41歳以上 13名(6.6%)
- 3) 母親の就労の有無と形態：専業主婦 121名(61.6%)、常勤勤務 46名(23.2%)、パート 26名(13.1%) その他(育児休業中) 5名(2.5%)
- 4) 子どもの人数：1人 43名(21.7%)、2人 103名(52%)、3人 45名(22.7%)、4人以上 7名(3.5%)
- 5) 子どもの年齢：0歳 6名(3%)、1歳 11名(5.6%)、2歳 13名(6.6%)、3歳 18名(9.1%)、4歳 53名(26.8%)、5歳 71名(35.9%)、6歳 26名(13.1%)
- 6) ブックスタートの認知の有無：知っている 37名(18.7%)、知らない 157名(79.38%)、無回答 4名(2%)
- 7) 絵本の所有冊数：1～20冊 90名(45.52%)、21～60冊 70名

- (35.3%)、61冊以上 27名(13.6%)、無回答 11名(5.6%)
 - 8) 母親自身は絵本を読むことが好き嫌い：好き 153名(77.3%)、嫌い 43名(21.7%)、無回答 2名(1%)
 - 9) 母親の読み聞かせる頻度：毎日 56名(28.3%)、時々 93名(47.0%)、まれに 43名(21.7%)
 - 10) 主に読み聞かせをする人：母親のみ 119名(60.1%)、両親 70名(35.4%)、祖父母 7名(3.5%) 兄弟 5名(2.5%)
 - 11) 読み聞かせの所要時間：0～20分 158名(79.8%)、21分以上 33名(16.7%)
 - 12) 読み聞かせる時(複数回答)：寝る前 107名(54.0%)、子どもにせがまれたとき 132名(66.7%)、時間があるとき 70名(35.4%)
 - 13) 読み聞かせの開始時期：生後すぐ～3カ月未満 9名(4.7%)、3～7カ月未満 44名(22.4%)、7カ月～1歳未満 79名(39.9%)、1歳以上 60名(30%) 無回答 6名(3%)
 - 14) 今後も読み聞かせを継続するか：する 169名(87%)、しない 3名(1.8%)、わからない 21名(10.78%)、無回答 1名(0.5%)
- その他に読むときの姿勢・読み方などについても調べた。

2. 絵本の読み聞かせに対する母親の意識構造

プロマックス回転による因子分析法にて、累積寄与率 50.41%で5つの因子を抽出した。因子命名は第1因子より順に「早期教育因子」、「親子の愛着因子」、「親の癒しの因子」、「絵本否定因子」とした。質問票の信頼性はクロンバックの α 係数により確認した。第1因子より順に、0.826、0.830、0.769、0.796、0.443を示し第1因子から第4因子までは許容水準を示していた。

3. 育児に対する母親の意識構造

2と同様に因子分析を行った。累積寄与率 54.49%で5因子を抽出した。因子命名は第1因子より順に「夫の協力因子」、「育児負担因子」、「育児楽しい因子」、「育児不安因子」、「育てやすい子ども因子」と仮に銘々した。質問票の α 係数による信頼性は第1因子より順に、0.913、0.860、0.923、0.845、0.694を示し第1因子から第4因子までは許容水準を示し、第5因子は保留水準を示していた。

4. 母親の属性や絵本の読み聞かせの実態と育児構造の関係

母親の背景や絵本の活用法と育児構造

	f 1	f 2	f 3	f 4	f 5
	夫の協力	育児負担	育児楽しい	育児不安	育てやすい
母親の年齢： 30歳未満、30歳以上		30歳↑>30歳↓	*		
夫の年齢： 30歳未満、30歳以上		30歳↑>30歳↓	**		
母親の仕事の有無： ある、無し				ある>無し	*
母親の仕事：常勤、パート 常勤、パート				常勤>パート	*
子供の人数：1人、2人、3人 1人、2人、3人		3人>1人	*		*
いつから読み始めたか： 生後すぐ、7カ月から、1歳か	生後すぐ～	*			
読み聞かせの頻度： 毎日、時々、まれに	毎日読む	*	毎日読む	*	
今後も読み続けるか： はい、いいえ	はい>いいえ	*			

*p<0.05

【考察】絵本の読み聞かせは98%の親が実施していた。読み聞かせに対する親の意識構造は肯定的で、なかでも親子の愛着や親への癒し等、心の豊かさに関連するものが認められた。(なか よしこ、はやしだ りか、くさのみねこ、うつみ こう)

学習効果が上がらない学生のもつ要因

—技術修得のための個別指導を通して—

○白井恵美 高原素子 藤島和子 玉木ミヨ子 頼瀬葉月 蒲生澄美子 関口恵子
(埼玉医科大学短期大学)

キーワード：技術修得・学習方法・個別指導

はじめに

看護技術は知識や技術、態度を統合して表現する技術である。このため看護技術の学習は学生にとって複雑で難しい。

今回、研究対象となった学生は、看護技術（注射器の操作技術）の修得に困難をきたしていた。このような学生に対して、筆者らは注射器の操作技術を修得できるようにするための指導方法を模索していた。学生が技術修得に困難をきたしている要因を分析することによって、学習効果を上げる指導方法が見出せるのではないかと考えた。そこで個別指導を行う中で、学生の学習態度や学習方法を分析した結果、3名には共通した要因があることが明らかになった。これらの要因を踏まえて指導した結果、学習効果も上がったことで、これらの要因が学習効果を阻害している要因であったことが検証されたので報告する。

I. 研究目的

個別指導を通して学習効果の上がらない学生の要因を明らかにする。

II. 研究方法

1. 研究対象 注射器の操作技術修得度が低い(学習効果が上がらない) 学生 3名

2. 研究期間 平成16年10月25日～平成17年1月6日

3. 研究方法

1) 学習内容、学習方法や学習態度について個別に面接し、データを収集する。

(1) 学生1名対教員1名で面接する。

(2) 質問で得られた内容は逐語録に記述する。

2) 逐語録から学習効果の上がらない要因と考えられる内容を抽出し、カード分類法で整理する。

3) 学習効果が上がらない要因として整理された項目について個別指導を行い、この要因に対する指導を行うことによって学習効果が上がるか否かを検証する。

4. 倫理的配慮

3名の学生に対して、本研究に協力しなくても注射器の操作技術修得のための個別指導を受けることができること、研究方法、目的、プライバシーは保護されること、研究の参加は自由意思であり途中での中断は自由であることを口頭で説明した。また研究へ協力した場合は、個別指導のプロセスが全て研究になる旨も口頭で説明し了承を得た。

III. 結果

1. 学習効果が上がらない学生の要因

学習効果の上がらないと考えられた共通要因を図1に示す。

2. 学習効果が上がらない要因に対する指導

要因の①学習（練習）不足②学習（技術）の到達目標が低

い③消極的な学習態度④学習方法が分からない⑤学習計画を立てないに対して、注射器の操作検定を紹介し受検してもらった。

IV. 考察

学習効果が上がらない要因は学習（練習）不足（要因①）であった。その原因としては、第一に学習の到達目標が低く設定されている（要因②）ために、本来達成すべき目標との差があり、技術を修得するまでの練習には至らなかったことがあげられる。第二に消極的な学習態度（要因③）があげられる。これは「なんとなくやるだろう」という学生の言葉からも裏付けられた。第三に学習方法が分からない（要因④）があげられる。これは「漠然としていて何をやったらよいか分からない」という言葉からも裏付けられた。そのことから、具体的な学習計画や目標も立てず（要因⑤）、漠然と学習していたために学習効果が上がらなかつたと考えられる。このように要因がそれぞれ関係し、複雑に重なっていることで学習効果が上がらなかつたと考えられた。

これらの要因を克服し、学習効果を上げるための個別指導として注射器操作の検定を行った。その結果、3名とも注射器の操作技術が修得できた。このことから、この3名にとっての学習効果が上がらなかつた要因が前述した5項目であることが検証された。つまり、到達目標が低い（要因②）、学習方法が分からない（要因④）、学習計画が立てない（要因⑤）に関しては、検定を受けることで段階別の目標と最終的な到達目標が明確になっているために、自己の到達目標の低さに気づくことができ、また段階別に検定を受けることで合格し技術を修得するための具体的な学習計画が立てられる。そして、さらに検定を受けるための自己学習時に、検定用に作成した教材を使用することで、効果的な注射器操作技術の学習方法が理解できた。そのことで、技術修得のための学習を積極的に行うことができたと考えられる。これらは学生の「できるようになると楽しくなってきた」、「具体的な目標と計画を立てることが大切だとわかった」という言葉からも裏付けられた。

V. まとめ

今回の分析を通して、看護技術の修得上では、知識、技術、態度を統合して学習することが必要であり、学習効果の上がらない学生の指導にあたっては、学生のもつ要因を明確にした上で個別指導を行っていくことが大切である。

(うすいえみ たかはらもとこ ふじしまかずこ たまきみよこ こうけつはづき がもうすみこ せきぐちけいこ)

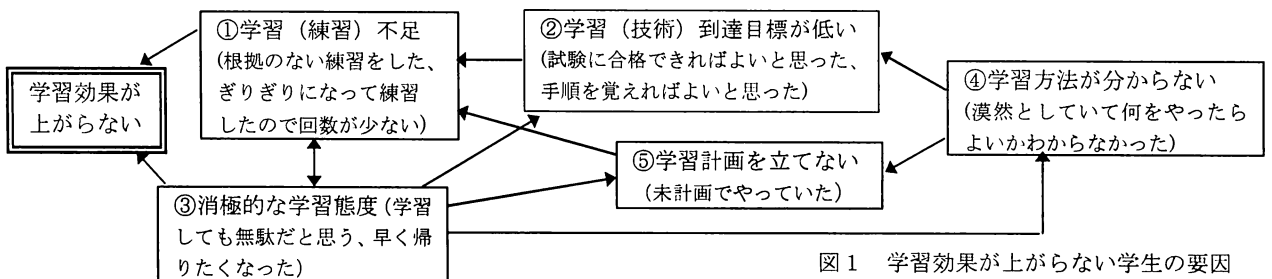


図1 学習効果が上がらない学生の要因

看護学生（二年課程）の基礎看護学実習についてのストレス（その3）

○加藤奈保美

内海 滉

東京都立北多摩看護専門学校 千葉大学

キーワード：看護学生，基礎看護学実習，ストレス

はじめに

学生の実習に対するストレスを理解していくことは、実習目標達成に向けて、効果的な指導をしていく上で、重要なことである。第71回応用心理学会で、二年課程の学生の基礎看護学実習に関するストレスの程度がどのように変化していくかを、学生の准看護学生時の実習に対する気持ちと比較し報告した。

I. 研究目的

二年課程の学生の基礎看護学実習に関するストレスの対象やストレス対処法がどのように変化していくか、学生はストレス時に教員からどのような配慮を受けているかを明らかにする。

II. 研究方法

1) 対象：看護専門学校二年課程1年生34名（平均年齢27.6歳，女子29名・男子5名）

2) 調査日及び内容：第1回—2004年1月（実習3日前），第2回—2004年2月（実習2週間経過後）に，第3回—2004年2月（実習終了後）に，基礎看護学実習（以下，実習と略す）のストレス対象やストレス対処法がどのように変化していくか，学生はストレス時に教員からどのような配慮を受けたか

3) データ収集と分析：(1) ストレス対象は，先行研究から独自に12項目作成，全然感じていない0点～強く感じている3点の4段階評定尺度の質問紙，ストレス対処法は，筆者の先行研究から得られた20項目全然違う0点～全くそうだ4点の5段階評定尺度の質問紙（項目は表参照）を用いて調査に同意の得られた学生を対象に，集合調査を実習前・2週間経過後，実習終了後に実施。ストレス時に教員からどのような配慮を受けたかについては先行研究から12項目作成（1点～4点の4段階評定尺度の質問紙）。(2) 実習前・2週間経過後，実習終了後の実習に関するストレス対象や対処法の比較検討。ストレス時に教員からどのような配慮を受けたかの分析。

III. 結果

実習前・実習2週間経過後，実習終了後の実習に関するストレス対象の比較は，表1。ストレス対処法について表2に示すとおり。学生がストレス時に教員からどのような配慮

表1 基礎看護学実習の経過とストレスの対象比較

	実習前と2週間経過後の比較(t値)	実習前と実習終了後の比較(t値)	2週間経過後と実習終了後の比較(t値)
患者との人間関係	** 3.49	*** 3.63	0.426
指導者との人間関係	*** 6.37	*** 7.27	1.142
スタッフとの人間関係	*** 7.45	*** 7.83	0.553
医師との人間関係	* 2.54	*** 4.25	1.59
婦長との人間関係	*** 6.34	*** 7.01	0.56
担当教員との人間関係	*** 4.46	*** 3.72	-0.609
医学や看護の知識	1.53	1.85	0.257
日常生活の援助技術	1.70	1.75	0.116
診療の補助技術 記録(看護過程の展開)	2.00	** 1.64	-0.571
実習の成績・評価	1.81	*** 3.76	1.834
生活の変化	1.55	*** 4.91	** 2.766

***:p<0.001 ** :p<0.01 * :p<0.05

を受けたかは，図1に示すとおりであった。

IV. 考察

(1) 実習前及び2週間経過後・実習後のいずれにおいてもストレスの対象の平均値が最も高かったのは【記録（看護過程の展開）】であった。実習が2週間経過する時点においては，学生は看護の対象についてアセスメントし，看護問題の抽出，看護計画立案など，記録上の整理に追われ，その学習のプロセスがこの結果につながったと考えられる。【医学や看護の知識】についても12項目中最後まで平均値が2.0点以上であった。ほとんどの項目が実習経過とともに平均値が下がるのに対し，【担当教員との人間関係】【実習の成績・評価】【診療の補助技術】のみ実習前から2週間経過後に一度低下した後，実習後に若干あがっていた。また，実習前と2週間経過後，実習後の，患者・指導者・スタッフ・医師・担当教員の全ての人間関係において，有意差が認められた。これは，初めて接する実習を取り巻く人間関係への不安が，実際に接していく過程で薄れていったためであろうと推察できる。

(2) ストレス対処法については実習前・2週間経過後，実習終了後で有意差が認められたのは，実習前と2週間経過後の【趣味などで時間を過ごす】のみであった。学生はストレス対象である【記録】の整理に追われ，趣味などで時間を過ごすという時間的余裕はなかったものと考えられる。

(3) 学生がストレス時に教員からどのような配慮を受けたかについては【一緒に行動してくれた】【見守ってくれた】が最も高く，【肩に手を置いてくれたなどのタッチング】が最も低かった。学生がストレス時にしてほしい配慮との違いも認められるため，今後の研究課題として追究する必要がある。

(かとうなほみ うつみこう)

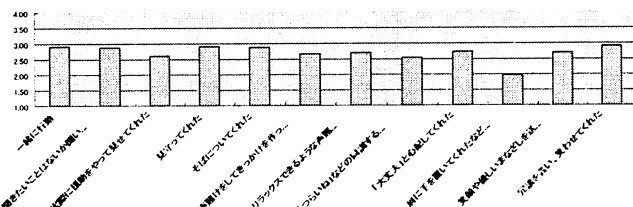


図1 基礎看護学実習中学生在ストレス時に教員から受けた配慮

表2 基礎看護学実習の経過とストレスへの対処の比較

	実習前と2週間経過後の比較(t値)	実習前と実習終了後の比較(t値)	2週間経過後と実習終了後の比較(t値)
現在の状況を覚えようと努力	-0.09	1.59	1.52
先のことあまり考えないようにする	1.38	0.90	-0.36
自分で自分を励ます	-0.89	-1.40	-0.06
なるよになれと思う	-1.43	0.50	0.59
物事の明るい面を思うようにする	-1.42	-0.77	0.61
心の満ちるのに任せる	0.39	0.36	-0.28
人に問題解決に協力してくれるよう頼む	0.15	1.10	0.91
大した問題ではないと思える	-0.24	0.43	0.68
問題の原因を思っつけようとする	-1.38	0.31	1.67
何らかの対応ができるようになるまで待つ	-1.04	-0.22	0.83
自分のおかれた状況を人に聞いてもらい(相談する)	-0.46	-1.28	-0.81
情報を集める	-0.17	0.38	0.54
こんなこともあると思っておかぬ	-0.50	-0.56	0.34
今の経験はためになると思うようにする	0.80	-0.14	-0.00
好きなものを食べる	0.33	-0.24	-0.55
寝る	0.93	0.47	-0.48
お酒を飲む	0.98	0.15	-0.83
タバコをすう	1.03	0.01	-0.78
趣味などで時間を過ごす	* 2.17	2.03	-0.09
仲間とぐちを言い合う	0.48	0.24	-0.24

***:p<0.001 ** :p<0.01 * :p<0.05

精神障害者と交流経験を持った看護系短期大学生の 自由記載に表現された精神障害者観

○小林千世 松永保子

信州大学医学部保健学科

キーワード：精神障害者 交流体験 看護学生 KJ 法

【目的】

精神障害者に対する偏見によって、精神障害者の地域生活には大きな障害があり(大島・山崎・中村 1989; 大島・上田 1990; 大島 1992), 1995年に精神障害者の社会参加支援を目的に精神保健法が改正された。しかし、それ以降も、改善されたとは言いがたく、精神障害者の地域生活を円滑にするには、偏見的態度や無理解を軽減・解消していくことが必要である。そのためにも、障害者との対応を規定する要因である「障害者観」を明らかにすることは重要である。また、知識と接触体験が精神障害者への態度の変容に関する要因として重視されている。接触体験を通じた態度変容を調査した研究では、看護学生の実習前後の変化を調査し態度変容の要因を検討するもの、医学生の態度変容を調査し、接触体験が精神障害者のイメージや偏見的態度の変化を報告した研究などがある(端・谷, 1986; 忠津・真鍋・多田ら, 1996; 東口・森河ら, 1997)。しかし、接触の程度・期間にばらつきがあり、接触体験の効果には疑問も残る。尺度を用いた評価だけでなく接触体験を伴う障害者観を知ることは、障害者に対する偏見的態度や無理解の軽減・解消に対する接触体験の効果を検討する有意義な資料となると考えられる。

そこで本研究では、精神看護実習で2週間の患者との交流体験を持つ看護学生の患者についての気づき・感想の記述から「障害者観」を抽出し、検討した。

【方法】

調査対象：平成15年度S大学医療技術短期大学看護学科3年生70名。**倫理的配慮：**自由記載の記述に当たっては、使用目的、プライバシーへの配慮、実習成績とは無関係であることなどを文書および口頭で説明した。次に、研究協力の同意を文書で求め、自由記載用紙とともに提出してもらった。**実習の概要：**単科の精神病院2施設の閉鎖病棟あるいは開放病棟で実習している。実習期間は2週間。慢性期の統合失調症の患者を受け持つことが多い。1人の受け持ち患者を中心にケアを展開し、病棟の集団レクリエーションの企画・実施も行う。各金曜日には指導者を交えプロセスレコードカンファレンスを行い、全員が事例を提供している。**調査方法：**実習1週目と2週目のカンファレンスおよび実習終了後に、「患者について実習してみて気づいたこと・感想」を記述し、その場で回収した。**分析方法：**調査に同意した学生を分析対象とし、2週間の実習終了後の自由記載を分析した。自由記載から学生の「障害者観」を抽出するのに効果的であると考え、分析には、質的データを記述的に整理する方法として効果的である(川喜多, 1997)KJ法を用いた。以下のようなKJ法のプロセスをとった。①自由記載のうち、「患者についての気づき・感想」が記述されている部分を一義一文になるような文章ラベルを作成した。②ラベルの示す意味の本質の親近性でグループ編成した。③編成されたグループユニットに見出しをつけた。④見出しを次のステップのラベルとして、10個以下のユニットグループになるまで①から③の段階を繰り返した。⑤編成されたユニットグループの空間配置(A型図解化)および文章化(B型文章化)をした。

【結果】

回収率は100%、文章ラベルは177枚。5段階のプロセスで9個のユニットグループに集約し、タイトルをつけた。9個のタイトルと内容は、「ユーモアと夢・希望を持っている」ユーモアがあり、レクリエーションや作業を楽しめる心を持っている「自分や家族を理解し考える力を持つ」理解力があり、病気や自分の調子を理解し自分のことを考えている「一生懸命、素直に伝えたい自分がある」人との関りを嫌がらず、自分を知ってほしいという思いから、関わると素直な気持ちを伝えようとする「周囲をわかり、周囲に合わせてよい人間関係を持つ」やさしく広い心で周囲を理解し合わせる行動を取り、家族を含めたいろいろな人とうまく人間関係を持てる「同じ一人の人間」自分と同じようにいろいろな感情を持つ同じ一人の人間である「つらく、孤独な病気とともにある人生」病気とともに生き、病気や副作用に不安・不信を持ち、施設外との交流も少ないために孤独を感じ、楽しめない「行動するには個々のスタイルやペースを守ることが必要」症状や気分は変動し、価値観やペースが反映した行動であるため、個々のスタイルを守り工夫すると行動する「日常生活や感情表現、人とのコミュニケーションに障害を持っている」自分から行動を起こさず、感情や考えが表れにくく、日常生活やコミュニケーションに障害がある「社会では成立しにくい自立した生活」入院生活は自立していても、冷たい社会では自立した生活が困難である、だった。

【考察】

学生は「ユーモアや夢や希望を持ち、自分や家族、周囲の人々を理解し、周囲とうまく関係を持とうとする同じ一人の人間であり、病気とともに生きているために生じる不安や孤独を感じている。行動するには個々のスタイルやペースを守り工夫することが必要で、日常生活やコミュニケーションに障害を持っているため、現状では社会生活での自立が困難な状況におかれている」という精神障害者観を持っていると示唆された。精神障害者への態度の測定で用いられる「社会的距離」や「感情とイメージ」(北岡, 2001)と比較しても、同じ人間として認め、様々な障害を病気によるものとしてとらえるなど、肯定的で正しい知識が反映した障害者観を持っていると考えられた。学生は「関わらないと怖いと思えたが、実際に関わると明るく優しい人だった」と気づき、患者に受け入れられた実感を経験した(小林・近藤, 2004)ことから、学生の障害者観が肯定的なものであると推察された。精神障害者との2週間の交流経験を持った学生がこのような肯定的障害者観を持っていたことは、交流体験そのものが、正しい知識の習得だけでなく偏見や無理解を軽減する効果や、社会参加を支援する対応の基本である「精神障害者の健康的な部分を十分に理解して、病気や治療から生じている障害を支援する」態度を学ぶ可能性を示していると考えられた。

【引用文献】

小林千世・近藤浩子 2004 実習を通して学生がとらえた精神看護 第35回日本看護学会論文集 看護教育 (こばやし ちせ・まつなが やすこ)

不妊治療における心理カウンセラーの役割

○ 花 沢 成 一 殿 村 由 希 櫻 井 薫
 (聖徳大学臨床心理学研究科) (日大医学部精神医学講座) (さちレディースクリニック)
 不妊治療 不妊カウンセラー 感情評定尺度 対夫感情尺度

【問 題】

妊娠を望まない女性が増えているのが現代の特徴といわれているが、他方不妊に悩んだ末に不妊治療を受けている女性も少なからず存在していることも事実である。現在受療中の人は約 30 万人ともいわれている(文献 1)。主な治療法はタイミング法、人工授精、体外受精、顕微授精などであるが、大学病院や産婦人科病院あるいは個人クリニックなどでおこなわれている。この不妊治療は、女性にとって羞恥心や不安あるいは痛みを伴うものであり、これはパートナーである男性も同様のつらい思いをするものであり、しかもこの体験はかなり長期にわたることもあって高額の治療費を支払うことになり、受療者は身体的、時間的、経済的、心理的などさまざまな負担を背負うことになる。とくに心理的な面での苦悩は過大であり、途中で治療を放棄してしまう例も多い。このことから、不妊治療には不妊カウンセリングが必要であるとされている。現在、約 70%のクリニックで不妊カウンセラーをおいているとしているが(文献 1)、必ずしも専門職として活動しているとは言えないようである。現在、学会などで不妊カウンセラー養成講習会を実施しているが、受講者は看護職が比較的多く、心理学専攻者は少ないのが実態である。

市間(文献 2)は、不妊カウンセラーの役割として、①情報提供、②助言、③心の悩みの解決、の三つを挙げている。このうち①と②は、不妊治療の知識と実際を知らなければならないが、③はまさに心理カウンセラーが担うべき役割である。本研究は、心理学専攻の不妊カウンセラーが、とくに③の役割において、どのようであるべきかに関する基本的理念の基礎になる事実の一端を明らかにすることを目指しておこなったものである。とくに不妊治療患者の感情状態を明らかにすることを目的とする。

なお、不妊治療ならびに不妊カウンセラーの呼称は、患者の立場からしても望ましくないのであるが、本研究では産婦人科領域における従来の呼称に従うことにした。

【方 法】

(1) 対象は千葉県と埼玉県に所在する個人開業クリニックで不妊治療を受けている 52 人である。

(2) このうち 2 人には、不妊治療についての体験談を 1 時間自由に語ってもらい、本人たちの了解を得てテープ録音させてもらった。

(3) クリニック受診時に、つぎの 2 種の感情尺度の記入を依頼した。

① 感情評定尺度：「あなたの今の気持ちについて、おたずねします。下の言葉の右にある 3～0 の四つの答え(非常にそ

のとおり そのとおり 少しそのとおり そんなことはない)のうち、今のあなたの気持ち(感情)に合うところの数字を○でかこんでください」という教示のつぎに、快感情・形容詞 12 と不快感情・形容詞 12 項目を示して記入を求めた。

快感情・形容詞例 たのしい あたたかい うれしい
 不快感情・形容詞例 はずかしい つらい なさけない
 個人結果は、快感情得点(満点 36)、不快感情得点(満点 36)を求めた。

② 対夫感情尺度：「あなたは夫(パートナー)を頭に思い浮かべたときに、どのような感じがしますか。下の言葉でみたときに、どの段階に当てはまるでしょうか」ということで、感情評定尺度と同じように 3～0 のどれかを○で囲んでもらった。肯定的な接近感情・形容詞 14 と否定的な回避感情・形容詞 14 項目の例はつぎのとおり。

接近感情・形容詞例 やさしい りっぱな あたたかい
 回避感情・形容詞例 あじけない おそろしい きたない
 個人結果の求め方は、感情評定尺度と同様である。

【結果と考察】

(1) 不妊治療を受けている 2 人の対談で示された意見は、不妊治療は患者にとって過酷な体験になることが多いということである。職場や家庭の生活を犠牲にしなければならないこと、経済的負担に苦しむこと、性生活で夫に多くの負担をかけること、身体的苦痛に耐えなければならないことがある、など。好感もてる医師や看護師であっても同様とのことである。

(2) 感情評定尺度の結果は、快感情得点の平均が 28.0 で一般妊婦の平均 30.3 (1996 年調査)より有意に低くなり、不快感情得点平均は 20.2 で、一般妊婦の 18.1 よりも高い得点であり、不妊治療患者の快感情の低さが認められた。

(3) 対夫感情尺度の結果は、接近感情得点の平均が 35.0 とかなり高く、回避感情得点平均は 16.5 で、一般妊婦の平均 20.9 より有意に低く、夫(パートナー)に対する感情は好意的であることが分かった。

以上のことから、不妊カウンセラーの役割は「心の悩みの解決」を第一にすべきであり、心理カウンセリングの必要性を確認することができた。

【文 献】

1. 久保春海(編) 2001 不妊カウンセリング マニュアル
メジカルビュー社
2. 週刊朝日 臨時増刊 2005 いい病院 全国ランキング
朝日新聞社
(はなざわせいいち とのむらゆき さくらいかおる)

死別経験が死生観に与える影響

- 大学生・看護学生・看護師との比較 -

○間島英俊・神田和美

(駒澤大学文学部)

Key word 死生観 死別経験 青年期

問題・目的

死に対する不安を測定する尺度として知られているものは、Templer(1970)の死の不安尺度(Death Anxiety Scale;以下 DAS と略称)である。しかし金児(1994)は、DAS で測る死に対する不安は死を取り巻く信念体系の一部に過ぎず、それだけでは全体的な死の態度構造が把握できないと指摘した。我々が死によって呼び起こされる様々な感情を死観(Death Perspective)と呼んで多角的に考察を行ったのが、Spilka ら(1977)である。彼らは8つの因子からなる尺度を構成し、死に対する総合的な態度構造を明らかにした。金児(1994)が邦訳した尺度は、DAS と共に大学生およびその親に対して使用した。結果、親は子供よりも死を苦痛で孤独なものであるが、それは人生の試練だと考えていること、子供よりも死を重く考えず、死の問題からの逃避、逆説的に生の否定といったことも見られることを明らかにした。

同じく、DAS は死を一元的にしか捉えていないという考えは、死を不安や恐怖という否定的な側面からのみでなく、肯定的側面からも捉える方向へと発展した。Gesser ら(1987)は、4つの因子構造からなる死に対する態度を測定する尺度(Death Attitude Profile;以下 DAP と略称)を開発した。河合ら(1996)は邦訳した尺度を 60 歳以上の高齢者に使用した結果、高齢者は死ぬ際の苦しみや死の不安や恐怖を引き起こしていること、死後を肯定的に評価することは少なく、現世からの回避として死を受容する傾向があることを明らかにした。

本研究は、この2つの尺度を使用し「死の恐怖」、「死の受容」の原因について考察を行う。更に、死別経験による違いを見るために、大学生、看護学生、看護師の3グループ間において比較検討を行い、また、死別対象者による違いも見つめるため、2人称の死、その他の死、死別経験なしの3グループ間の比較検討も行う。

方法

調査対象者:大学生(男性 92 名、女性 85 名、平均年齢 19.5 歳)、看護学生(男性 3 名、女性 44 名、平均年齢 19.9 歳)、看護師(男性 1 名、女性 93 名、平均年齢 29.2 歳)の総計 318 名を対象とした。

調査用紙:死に対する態度尺度;DAP(河合ら、1996)と死観尺度(金児、1994)を5件法で使用した。補足質問として、「死別経験の有無」、「誰と死別経験をしたか」、「死について考えたことがあるか、考えたことがある場合どのようなことを考えたか」について、自由記述をした。

手続き:調査対象者に用紙を配布、教示を行った後実施した。

結果・考察

DAP と死観尺度の相関関係を見て、「死の恐怖」、「死の受容」の原因となるものを検討した。「死の恐怖」と「挫折と別離」、「苦しみと孤独」の間に相関が見られた。死は人生における挫折であり、死ぬことによる家族との別れ、家族への心配や孤独感が死の恐怖の原因となることが考えられる。「積極的受容」と「浄福な来世」の間に正の相関、「挫折と別離」の間に負の相関が見られた。輪廻転生や天国を信じること、死を人生の挫折とは捉えないことが死を積極的に受容する原因となることが考えられる。「回避的受容」と「虚無」の間に相関が見られた。死を現世からの回避として受容する時、死に対する無関心や逃避などの無常観が原因となることが考えられる。また、死別経験の違いにおいて DAP、死観尺度の下位項目を分散分析し、違いを検討した。結果は、看護師と大学生、看護学生の間において有意差が見られた。看護師は、死は未知ではなく、人生の挫折や別れ苦しみや孤独と捉えることがなく、来世を信じる傾向があり、人生の試練として向かい合い、虚無感が低く、他のグループよりも死を積極的に受容しようとする傾向があることが考えられる。また、死別対象者の違いにおいて DAP と死観尺度の下位項目について分散分析した結果、死別経験者と未経験者との間で、「虚無」だけに有意差が見られた。死別経験者は、死に対して無関心であったり、客観的に受容したりすることは出来ないのだと考える。更に補足質問では、2人称の死を経験者は、未経験者より死ということをより身近に具体的に感じている回答が多く見られた。今生きていること、周りの人を大切にしたいという回答も見られ、死を安易に考えないことが考えられる。

資料

表1 DAPと死観尺度の相関関係検定結果

	死の恐怖	積極的受容	中立的受容	回避的受容
浄福な来世		**		
挫折と別離	**	***		***
苦しみと孤独	**	***		***
人生の試練	**	**		
未知	**			***
虚無			**	**

全調査対象者
大学生 看護学生 看護師

** p<0.01

* p<0.05

マイナスのついているものは、負の相関関係

(まじま ひでとし・かんだ かずみ)

中小企業の労働安全衛生管理

— 体制と安全衛生推進阻害要因について —

○杉村 正子 正田 亘

(常磐大学大学院人間科学研究科)

キーワード：中小企業、労働安全衛生管理、建設業、製造業

【はじめに】平成16年4月、労働災害による死亡者数および、重大災害発生件数が厚生労働省より発表された。労働災害による死亡者数は、長期的には減少傾向がみられるが、1620人（前年より8人減）であった。しかし、重大災害発生件数は、前年より25件増加し、274件であり、近年は増加傾向にある。重大災害発生件数の増加にともない、同省では、製造業による重大災害発生件数が多いことから、安全管理の指導と促進、労働災害防止対策の推進に取り組むこととしている。

また、平成15年に同省より、「第10次労働災害防止計画」が公示された。この計画は、労働者の安全と健康の実現を目標としており、高い安全衛生水準の確保から、職場内に存在するリスクを低減させることが課題となっている。

すなわち、職場内のリスク要因を把握し、そのリスクから想定される労働災害の対策を行うことが、労働災害防止へ繋がるといえる。

そこで、安全衛生管理と労働者の安全という点に着目し、労働災害による死亡者数が高い、建設業と製造業の2業種に焦点を絞り、大企業と中小企業の安全衛生管理の違い（労働安全衛生管理体制と意識の相違）についての調査研究を行った。

【研究の目的】労働災害の発生割合が高い、建設業と製造業を対象とし、労働安全衛生管理体制ならびに、安全衛生推進活動の阻害要因について、大企業と中小企業を比較した際の、中小企業の問題点を明らかにしていくことである。

【方法】調査対象：企業の抽出は、インターネットや資料から無作為抽出を行った。結果、建設業79社（回収率21.4%）、製造業121社（回収率16.9%）から回答が得られた。

調査方法・時期：郵送法による質問紙の発送と回収を行った。質問紙の郵送先は、各企業の安全衛生管理者とした。

調査実施時期は、平成15年11月初旬から中旬に質問紙を郵送し、12月22日までに回収した質問紙を結果分析の対象とした。

主な質問紙の項目：質問紙作成にあたっては、「中小企業経営者のための労働安全衛生マネジメントシステム」中にある、「中小規模事業場向け OSIMS 実施状況評価用チェックリスト」の質問項目を参考に、選択式と記述式を併用した質問項目を作成した。主な調査項目は次の通りである。

- ①企業の概要（企業名、事業所、所在地、業種、従業員数）
- ②安全衛生管理活動（組織体制、経営者の安全衛生活動、安全衛生管理計画と活動）
- ③労働災害（労働災害、労働災害防止）

【結果】安全衛生管理者の配置基準ならびに、業務内容が建設業と製造業で違うことから、業種別に労働安全衛生管理体制の結果を次に示す。

・労働安全衛生管理体制について

安全衛生管理者の設置基準等は、安全衛生法により、従業員の規模によって違う。

建設業では、従業員数100人以上（製造業は、従業員数300

人以上）の企業では、総括安全衛生管理者、従業員数50人以上の企業では安全管理者、衛生管理者、産業医、従業員数10～49人の企業では、安全衛生推進者の選任義務があるものの、従業員規模が小さくなるにつれて選任していない企業が多く見られる結果となった。また、建設業、製造業ともに従業員数9人以下の企業では、設置基準はないが、事業者が安全衛生管理者等に相当する。建設業では、回答が得られた9社中4社で安全管理者に相当する担当者がいなかった。製造業では、回答が得られた21社のうち、16社で安全管理者に相当する担当者がいないことが分かった。

・安全衛生活動の阻害要因について

安全衛生活動の阻害要因については、大企業と中小企業に共通する内容が多く見られた。阻害要因としては、大きく企業と個人の2つの側面で分類できる。

企業が抱える問題が阻害要因となる内容として、人員やコスト、時間、生産および利益の重視などが挙げられる。

また、個人の問題が推進の阻害要因としては、業務のマンネリや慣れなどから生じる意識や認識の低さ、危険に対する意識の低さ、従業員間の意識の違いなどが多く挙げられた。

【考察】調査の結果、安全衛生管理体制は、法令として選任規定があるにもかかわらず選任していない企業が見られたことは問題であり、その傾向は、従業員規模が小さくなるにつれて高くなっていく。そして、従業員数が9人以下の企業では、回答が得られた企業数が少ないものの、安全衛生管理を担当する者が特に製造業において存在する割合が低いことが問題である。

安全衛生活動の推進阻害要因としては、近年の経済状況も阻害要因として考えられるが、個人の意識や認識の低さが大きな阻害要因と考えられた。

以上のことから、安全衛生管理体制のあり方や個人の持つ意識や認識の低さを改善していくことにより、労働災害を未然に防ぐことは可能であると考えられる。

今後の課題として、中小企業の小規模事業所に焦点を当てた、安全衛生管理体制および、認識や意識等の違いの調査をしていく必要がある。

本調査研究は、平成15年度 中央労働災害防止協会の委託研究「大企業と中小企業の安全衛生管理の違い—労働安全衛生管理体制、意識の相違について—」から一部を抜粋した。

【引用資料・参考文献】

- ・厚生労働省労働基準局安全衛生部 2005 「平成16年における死亡災害・重大災害発生状況」
- ・杉村正子、正田亘 2004 産業・組織心理学会 第20回大会発表論文集「大企業と中小企業の労働安全衛生管理体制の違い—建設業、製造業を中心として—」(p.15-18)
- ・中央労働災害防止協会 2003 『中小企業経営者のための労働安全衛生マネジメントシステム』

(すぎむら まさこ・まさだ わたる)

IT 企業における顧客業務実態把握手法の開発と実践

— 顧客業務知識の理解とコミュニケーションの円滑化を目指して—

○矢島彩子, 指田直毅, 石垣一司

(株式会社富士通研究所ソリューション研究開発室CRM研究部)

キーワード: インタビュー, SEと顧客のコミュニケーション, 業務把握

【概要】 本手法は、顧客現場の業務実態を深く理解するために、複数の質問ワークシートを用いて時間軸・空間軸など多視点から業務員の行動や思考プロセスをその背景を含めて詳細に把握する体系的な手法である。このような手法を確立し、IT企業のSEらに普及させることで、顧客業務知識の蓄積と顧客側とのコミュニケーションが円滑化されるとともに、ITソリューションの上流工程において顧客要望に合致した提案・設計可能となり、結果として仕様変更等の手戻り削減できることが期待される。

【背景】 システム開発プロジェクトにおける失敗要因を分析した事例研究では、“現場の業務を的確に把握する”ことの重要性が指摘されている。現状の顧客業務の把握は業務マニュアルの参照や属人的スキルに基づいた顧客ヒアリングから行われ、この段階で業務上の問題の理解が不完全（顧客が説明している業務内容が理解できないなど）であると下流工程での手戻りが発生する危険性がある。そのため、個人スキルに依存しない業務把握手法が必要であった。

【課題】 これまで顧客業務を把握する手段として、業務員への張付き観察（ビデオ録画も併用）や割込み質問での業務分析手法を適用してきた。しかし観察ベースの方法は、①業務現場に入り込むことへの抵抗感（プライバシーや個人情報の問題）、②観察時間外に発生するタスクや業務員の思考・判断プロセスまで捉えることが難しい、③複雑多岐な業務内容を観察から即座に理解するのが難しい、などの問題があるため、観察にあまり依存しないインタビュー主体での手法を構築する必要があった。

【開発手法】 今回我々は独自の「質問ワークシート(図1)」を用いた業務把握インタビュー手法を開発した。この手法はEthnographic InterviewやCognitive Interviewの知見、独自のWork Context Modelをベースに、時間的視点や人間関係、空間的な視点など、多面的な角度から聞きだせるように設計した質問ワークシートを用いて顧客業務を把握するものである。インタビュー対象者に業務をストーリー的に語らせ、質問ワークシートへインタビューと共に記載しながらインタビューを進行する。この会話内容を書き起し、質問ワークシートを整理し、業務の大局フローと実際の行動シーケンスを理解、表現する。

1) 手法特徴:

- ・シートを提示しながらインタビュー中に双方で視覚的に内容理解しながら進める
- ・発言された行動を理解するため、独自に作成した業務理解チェックシートを常に頭に入れながら質問を行う
- ・短時間で網羅性高く業務内容を聞き出すために、進行表(シートの提示順序や時間配分、質問項目が記載されたもの)を作成した上で進める

2) インタビューの進行ポイント: インタビュー対象者自身が話す内容について構造的でなくても、スムーズに自身の業務を漏れなく語り易くするポイントは以下の4点である。

- ・お客様自身の言葉でストーリー的に語らせる
- ・日常業務について課題や問題ではなく固有の工夫点を中心に語らせる、

- ・業務に対する自身の考えや、それを考えるプロセスを中心に語らせる、
- ・言い忘れ防止のため、一方的な視点ではなく角度を変えて語らせる。

3) 分析アウトプット: インタビューで得られた現場業務知識の理解を深めると共に他者共有促進の為、以下を作成する

- a) インタビューを書き起こした「インタビューログ」
- b) 質問ワークシートを整理した「ワーカ視点ワークモデル」
- c) 現場ワーカが実行すべきタスクを洗い出した「タスクカテゴリ表」、
- d) 各タスクの行動手順やアクセス情報、ワーカ視点での工夫・問題点などをストーリー的に記載した「タスク別インタビューログサマリ」

【実践結果】 本手法を、当社ユーザの業務現場（医療分野）を対象に担当SEらと共同実践したところ、これまでSEらが捉え切れていない実際のワーカレベルの業務の動きを把握することができ、UI設計の工程において開発者が現場業務を具体的にイメージ可能となり、画面設計を決定する際の判断基準がより明確になるとの意見が得られた。さらに、当初は非協力的な傾向が見られた現場ワーカにおいても、インタビュー実施後は協力的になり、顧客とのラポール形成やコミュニケーションパスの促進につながった

【今後の課題】 今後は、さらに他業種分野への展開や、獲得した業務知識を設計工程に直接活用可能となる手法改良を進める。また、手法普及のための教育カリキュラム開発（座学やロールプレイング、模擬実践向け教習メニュー、自己学習可能なWeb教材）を進める予定である。

【引用文献】

- James.P.Spradey 1997 The Ethnographic Interview Wadsworth Publishing
 Miline Rebecca at.el 1999 Investigative Interviewing: Psychology and Practice Wiley

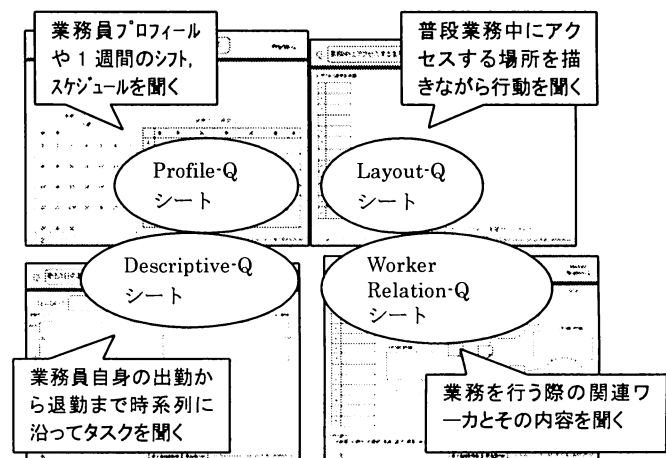


図1. 質問ワークシート (抜粋)
 (やじまあやこ さしだなおき いしがきかずし)

常連客に関する一考察③

— ファミリーレストランで常連客になれるのか —

濱 保久

(北星学園大学文学部心理・応用コミュニケーション学科)

キーワード：常連客、来店回数、店種

飲食店などで「常連」という言葉がしばしば用いられるが、客が常連と見なされるためには、あるいは自分で自分を常連だと見なすためにはどのような条件が必要なのであろうか。一般的には、来店回数が決定要因だと考えられるが、それ以外の要因が存在する可能性も否定できない。さらに、店のタイプによっても常連と見なされるための条件は異なることが予想される。本研究では、1) 個人経営の飲食店はチェーン店の飲食店(以下ファミリーレストランと呼ぶ)より常連客になりやすいであろう。2) ファミリーレストランは来店回数にかかわらず常連客になりやすいであろう。3) 来店回数以外にも有効な常連客規定要因が他に存在する。4) 回数以外の規定要因をうまく用いれば、ファミリーレストランにおいても常連客の創造は可能であろう。という仮説を検証するが、濱(2004, 2005)の知見を踏まえて、本発表では一連の研究発表の締めくくりとして4)について検証する。

【目的】

濱(2005)は、因子分析によって常連客としてみなされるために必要な要素を個人店、ファミリーレストランそれぞれについて6つ抽出した。そこで、両方に共通する要素に注目し、客を常連客とみなすにあたってどれほどの効果をもつのかを明らかにしたい。とりわけ、それらの要素が来店回数に比べて影響力が劣るのかという点、また、ファミリーレストランにおいてもそれらの要素は機能するのかという点について検証したい。

【方法】

北星学園大学大学生120名を対象に質問紙実験を実施した。質問紙では、客と店員とのやりとりを提示し、被験者にはその後、その客がその店の常連であると感じる程度を6段階(1:まったくそう感じない~6:とてもそう感じる)で評定させた。因子分析の結果、両店種に共通する常連イメージ構成要素として「親密さ」「特別待遇」「お決まり」「インパクト」の4要素を抽出したが、「インパクト」要素は両店種において重要な働きを示さなかったため除外し、他の3要素についてそれぞれその効果を検証する実験デザインを構築した。すなわち、客と店員のやりとりや客の振る舞いなどを記述する際に、たとえば「親密さ」を操作し、「親密さ」あり条件となし条件を設定した。その場合、実験デザインは、2(親密さ:あり/なし)×2(来店回数:6回/12回)×2(店種:個人店/ファミリーレストラン)である。「特別待遇」「お決まり」についても同様のデザインで実験を行った。

表1

「親密さ」あり、来店回数6回、ファミレスの場合の提示状況

田中さんは、あるファミリーレストランにこれまで全部で6回行ったことがあります。

店員:「あっ、田中さん。こんばんは。いらっしゃいませ、今夜は遅いですね。残業だったんですか?」

田中さん:「そうなんだよ。ちょっとしたトラブルが発生してしまっただけ。その処理で遅くなったんだよ」

店員:「それは大変でしたね。で、今日は何にしますか?」

田中さん:「うーん。じゃ〇〇定食で」

店員:はい、お待ちくださいね

【結果】

1) 「親密さ」要素について

「親密さ」要素(有/無)、来店回数(6回/12回)を被験者間要因、店種(ファミリーレストラン/個人店)を被験者内要因とする2×2×2の3要因の分散分析を推測常連度に対して行った。その結果、「親密さ」要素の主効果のみ有意であった($F(1,116)=187.45, p<.001$)。

2) 「特別待遇」要素について

同様の3要因の分散分析を行った結果、「特別待遇」要素の主効果のみ有意であった($F(1,116)=169.95, p<.001$)。

3) 「お決まり」要素について

同様の3要因の分散分析を行った結果、「お決まり」要素の主効果と店種の主効果が有意であった($F(1,116)=164.06, p<.001$; $F(1,116)=7.05, p<.01$)。

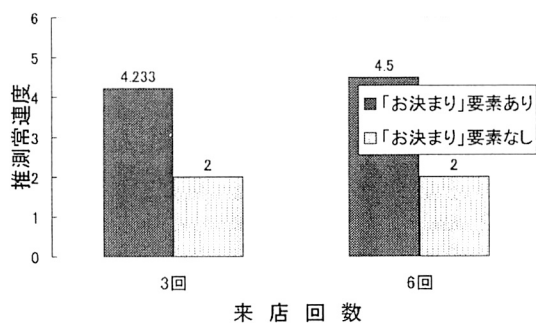


図1. ファミリーレストラン条件における推測常連度

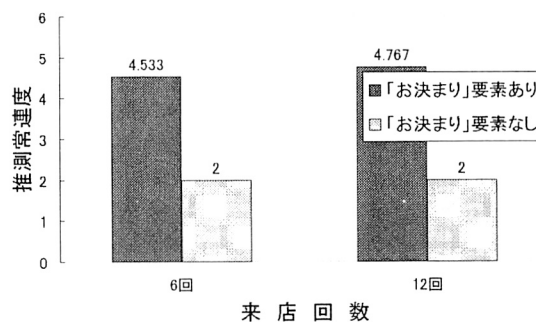


図2. 個人店条件における推測常連度

【考察】

3要素ともに主効果が認められ、推測常連度に及ぼす影響が来店回数よりも強いことが確認された。また、要素と店種の交互作用が認められなかったことから、ファミリーレストランにおいてもこのような要素を付加することで常連客の創出が可能であることも示唆された。客がその店の常連であるかどうかは単なる来店回数でなく、個として認められ、個として扱われているかどうかにかかわっているのである。

本研究の遂行にあたり、青木佳奈氏(現在、㈱アグレックス)と川村智子氏(現在、㈱きりあき)の多大なる協力を得た。ここに記して謝意を表す。

(はま やすひさ)

大学生のパーソナリティと職業志向性Ⅱ

—能力感の項目反応率と因子構造—

○銅直優子¹⁾ 森下高治¹⁾ 三戸秀樹²⁾ 松田浩平³⁾ 片岡大輔⁴⁾ 佐藤恵美⁵⁾

¹⁾ 流通科学大学 ²⁾ 関西福祉科学大学 ³⁾ 文京学院大学

⁴⁾ 日本能率協会マネジメントセンター ⁵⁾ 白百合女子大学大学院文学研究科

キーワード：パーソナリティ、職業志向性、能力感

Ⅰ. はじめに

現代は機械化社会となり、企業や大学ではもちろんのこと、一般家庭にも当たり前のようにコンピュータの使用がみられる。その様ななか、大学生の興味やスキルも変化してきていると考えられる。ホランドは、現実的(R)、研究的(I)、社会的(S)、慣習的(C)、企業的(E)、芸術的(A)領域の6つのパーソナリティ特性と職業環境の一致度が高いほど、職業的満足、安定性や業績を得る度合いが高まるとしている(Holland, 1985)。自分が持っている能力と自分自身が認知している能力感は異なる場合がある。職業に就く時、この社会的・職業的スキルといった能力と認知された能力感が一致している際は職場への適応も早く、業績も高くなると考えられる。しかし、大学生のような職業的スキルが少ないために能力と、「できるであろう」という能力感が隔たっている場合、職場的満足や安定性を得ることが難しい。そこで、本研究では大学生を対象にし、ホランド理論に基づいて作成されたThe Self Direct Search日本語版(武田・森下, 1981)を参考に、仕事に関する様々な活動を問う能力感項目について、項目内容の分かりやすさと6領域の因子構造について検討した。

Ⅱ. 目的

大学生を対象にし、仕事に関する様々な活動を問う能力感項目について、項目内容の分かりやすさと6領域の因子構造について検討した。

Ⅲ. 方法

【実施期間】【被験者】第Ⅰ報の「大学生のパーソナリティと職業志向性Ⅰ—活動性と項目反応率と因子構造—」と同様である。

【質問紙】SDS 職業適性検査を現代の国語傾向と合うように、一般性のある用語へ修正し、さらに各領域3項目ずつ追加し、6領域各11項目(計66項目)であった能力感項目を、6領域14項目(計84項目)としたものを質問紙として使用した。項目の修正基準は第Ⅰ報と同様である。

【結果の処理】

質問紙1. 項目内容の理解度：84項目について、項目内容の理解度を把握するために「わかりやすい」から「わかりにくい」までの4段階で評定をしてもらった。文章の意味の「分かりやすさ」について4段階評定の結果を各項目の反応率として度数分布と割合で算出した。

質問紙2. SDS 職業適性検査：さまざまな活動に関する84項目について「できる」と「できない」の2段階評定をもらった。2段階評定の結果を、SDS 職業適性検査の能力感項目の因子分析から、RIASECの6因子であることを想定し、それぞれの因子内で α 因子分析を行った。

Ⅳ. 結果と考察

結果1. 項目内容の理解度

項目内容の理解度を検討するため、能力感項目の反応率を求めた結果、「わかりにくい」と答えた割合が40%を超えた項目が1項目あった。35)「ウランの半減期について理解している」については「わかりにくい」が60%を超えていた。

結果2. 大学生のSDS 職業適性検査における能力感

各6因子の斉一構造を確認するため、各因子構造を以下のように検討した。

現実的因子(R)：2因子構成であった。因子Ⅰは、72)「電気器具の部品を交換することができる」などの12項目で構成されており、対物的操作の因子であることが確認できた。因子Ⅱは10)「農作物を育てることができる」の1項目であり、この活動は対物的な因子に当てはまらないことが確認された。

研究的因子(I)：2因子構成であった。因子Ⅰは、65)「簡単な化学式を説明することができる」82)「遺伝子の仕組みを説明できる」などの専門的な知識に関する9項目で構成されていた。因子Ⅱは、19)「コンピュータ処理のためのシステム設計ができる」の1項目であり、コンピュータに関する項目は研究的因子に含まれないことが明らかとなった。

芸術的因子(A)：2因子構成であった。因子Ⅰは、70)「絵画や彫刻ができる」76)「ポスターや洋服あるいは家具をデザインすることができる」48)「簡単な曲を作ることができる」などの12項目から構成されており、芸術的な創作活動に関するものであった。因子Ⅱは、33)「2部あるいは4部合唱に参加することができる」の1項目であり、芸術的創作活動には当てはまらないことが明らかとなった。

社会的因子(S)：3因子構成であった。因子Ⅰは、49)「人を招いてもてなすことができる」42)「パーティなどのプログラムを計画することができる」44)「会社や同好会の催しのプランを作ることができる」などの11項目から構成されており、社交的活動に関するものであった。因子Ⅱは、22)「社会福祉活動に参加することがある」の1項目であった。因子Ⅲは22)と74)「病床の人を対象にボランティア活動をすることがある」の2項目であった。因子Ⅱと因子Ⅲは重複している項目があり、いずれも福祉活動に関する項目であり社交的活動には当てはまらないことが明らかとなった。

企業的因子(E)：2因子構成であった。因子Ⅰは、81)「自分のやり方で人を使っていくのがうまい」50)「人を説得したり、リードするのが上手である」14)「グループのリーダーとして目上の人に意見を言うことができる」などの14項目で構成されており、人をまとめていく能力やリーダーとしての原動力に関するものであった。因子Ⅱは、67)「販売のキャンペーンを企画・実施することができる」の1項目であり、企画に関するものであった。

慣習的因子(C)：1因子で構成であった。61)「短時間に多くの書類を作ることができる」64)「データの簡単な作成ができる」41)「表計算ソフトを使うことができる」などの9項目であり、事務的能力に関するものであった。

以上、6領域のうち慣習的因子以外の5因子では2因子以上の構成が確認された。本来は1因子構造のはずであるが、今回2因子以上の構成となったのは、調査対象が文学系大学生に限られていたことが影響したと考えられる。

【引用文献】武田正心 森下高治 1981 SDS 職業適性自己診断テスト 日本文化科学社

(どうべたゆうこ・もりしたたかはる・みとひでき・

まつだこうへい・かたおかだいすけ・さとうえみ)

障害のある従業員の社内キャリア

—「障害者のキャリア形成」調査結果の年代間の比較を通じて—

吉光 清

(九州看護福祉大学社会福祉学科)

キーワード：障害のある従業員、年代間比較、キャリア、職場の条件

はじめに

障害のある従業員の入社以降のさまざまな能力開発・キャリア形成や企業の雇用管理などについては十分に明らかにされてきたとは言えない。

そこで、入社以降の組織内キャリアについて、「訓練・能力開発」「配置転換・昇進」などに焦点を当て、キャリア形成の実態と、これからの支援課題を明らかにするための調査が実施された¹⁾。

【目的】本報告では、「従業員個人調査票（後述）」の結果を整理し、障害のある従業員の職場内キャリアの状況や関連する事項を整理する。障害のある従業員の年代間比較を通じて、これまで辿ってきた障害者雇用の道筋や職業リハビリテーションの特徴を確認して、障害のある従業員の状況やニーズが今後、どのように変化してゆくかを類似調査との間で検討できるような基礎的データを入手することを目的とした。

【方法】全国から無作為に抽出した「障害者職業生活相談員²⁾」1200人に対して、事業所全体の状況について回答してもらった「事業所調査」と、それぞれの事業所ごとに5部の「従業員個人調査票」を同封し、障害者として雇用された従業員5人宛（雇用障害者が多数の場合には、障害種類が広範囲となるように）「従業員個人調査票」への回答を依頼する郵送調査が実施された。なお、調査では、入社後に受障した「中途障害者」は対象としておらず、また、転職（企業間移動）など、組織を越えるキャリアに関しても扱っていなかった。調査時期は平成13年10月中旬～11月初旬であった。回収後の個人調査票をチェックし、記入が不十分なものを除き、1,637人の回答の中から、50歳台の319名、40歳台の372名、30歳台の423名のデータを分析の対象とした。

質問項目の全体は5領域18問であったが、複数回答や自由記述の質問を除いた、年齢、性別、障害種類、障害程度等の属性や転職経験、仕事内容等の12項目、雇用形態、仕事内容、職場の地位（「一般従業員」と「管理者（含む監督者）」、「研修・配置転換」、「職場での支援環境」等の14項目について χ^2 検定を援用して比較対照した。

注

¹⁾ 調査は、厚生労働省職業安定局高齢・障害者雇用対策課におかれた「障害者のキャリア形成等に関する研究会」（平成13年8月～平成15年3月）と「障害者職業総合センター」の共同で実施された。

²⁾ 事業主は厚生労働省令で定める5人以上の障害者を雇用する事業所において、障害者職業生活相談員を選任して、障害者の職業生活全般の相談、指導を行なわせなければならないとされている。

【結果】

1. 属性、学歴等の項目について

性別構成については、3つの年代において男子が7割弱を占めて極めて近い状況が見られた。障害の種類と障害程度に関しては、50歳台代から40歳台、30歳台と徐々に肢体障害者の割合が減じており、また、重度障害者の割合は逆に27%、36%、38%と割合が高くなっている様子が見られた。

養護学校等でない、一般高校等の卒業者が50歳台で40%と最も多く、ただし、短大・大学卒業者は最も少なく11%で

あった。対照的に、30歳台では一般高校等の卒業者が21%であり、短大・大学卒業者は20%となっていた。

障害年金等の受給については50歳台が45%と最も少なく、若い方の年代で58%、60%と高い割合が見られた。

2. 雇用形態、職場での地位等について

雇用契約期間の定めがとくにない正社員の割合は30歳台で最も高く73%であり、次いで40歳台で69%、50歳台で55%であった。50歳台においては正社員からパートなどに切り替わった人々が含まれた可能性もある。

在社年数が「16～20年」の割合を見ると、50歳台で9%、40歳台で16%、30歳台で10%であった。50歳台では21年以上が24%おり、逆に、30歳台では20年未満が89%となったことは当然のことであろう。

転職経験者の割合は、高い年代ほど高い数字を示し、50歳台で79%、転職非経験者は20%であった。転職経験が1回のみ割合は50歳台で23%であった。

職場の地位では、当然ながら「管理者（含む監督者）」の割合が50歳台で25%と高く、「管理的な職務内容」の割合も11%と最も高くなっていた。

3. キャリア形成、職場条件等について

「入社1年目の研修」「2年目以降の社内研修」「社外研修」については明確な方向性は認めにくかったが、「技術革新に対応した研修」の受講は30歳台が66%と抜き出していた。

「事業所間異動」「社内異動」については年代間でほとんど差は見られなかった。

「職場における外部者からの支援」の割合は、いずれの年代でも10%以下であり、「職場内からの支援」は30歳台で39%と他の年代よりも高いことが見られた。

【考察】障害のある従業員がキャリアを積み、「管理者（含む監督者）」となっている実態が確かめられたが、回答者が比較的規模の大きな事業所であったこと、50歳台、40歳台においては肢体障害者の割合が高く、職場からの支援の必要がないとした割合も高かったことを合わせて考えなければならないであろう。研修機会については「キャリア形成支援」の観点から充実が必要であろう。

年代間の比較を行うことは、時間的な要因の関与が異なるグループ同士を比べることになり、各年代がそれぞれ、入職した時代の障害者雇用の状況や雇用促進のための諸制度もそれぞれ、異なっていたことから、そうした背景や事情を考慮する必要もあると考えられる。

また、今回の若い年代の群が、この先、より高い年代の群と同じ年代になった時点での状況がどうなったかが確認されて、始めて今回の分析結果が十分な意味を獲得することができると考えられる。今後の追跡的研究の必要性を認識していることを記して、まとめに替えたい。

【文献】

障害者のキャリア形成に関する研究会／障害者職業総合センター：『障害者のキャリア形成に関する調査集計結果報告書～集計結果資料編～』、2002

障害者職業総合センター：『障害者のキャリア形成』、調査研究報告書 No. 62, 2004

(よしみつきよし)

日藝版「癒し評価スケール」の作成に向けて

松 本 洸

(日本大学芸術学部)

キーワード：癒し、芸術、心理尺度、スケーリング

【研究の目的】「癒し」の心理尺度化については、これまでに尺度化の基礎研究を終えた。また、その基礎研究についての学会報告もおこなってきた。これらの基礎的研究を踏まえて、芸術作品に対する「癒し」の心理尺度の完成版に向けて信頼性と妥当性の検討に向けて研究することとした。この「癒し」の心理尺度完成版を『日藝版「癒し評価スケール」』と仮に名称した。

【方法】これまでの心理尺度構成の研究経過より、「癒し」の心理反応を30項目に絞った。これら30項目の評価は、「そう思う」、「少しそう思う」、「そう思わない」の3段階評定で評価するようになっていく。特定の芸術作品に対して、「作品を見ながら(聞きながら)、自分がどんな気持ちになるのかを、素直に評価してください」と教示し、30項目それぞれについて、その対象から得た気持ちを評価するようになっていく。

(1) 刺激

標準化を行った時のデータは、尺度構成を行った時と同様の刺激で、聴覚刺激での作品6点と視覚刺激での作品6点である。作品の選定には、一般に普及していない、見慣れていない(聞き慣れていない)作品であることを条件にしながら、「癒し」に結びつくと思われる ①自然、②子供(童謡・子供向け絵)、③昔(なつかしさ)、④抽象(これは統制群としての刺激)、⑤宗教、⑥のんびり をキーワードにして選んだものである。選んだ作品は次のとおりである。

[聴覚作品] 各作品とも約3分間の音楽や音の呈示

音1 スロー音楽「Gagufju Life Force」 のんびり
音2 森の集音録音「小川のせせらぎと鳥」 自然
音3 グレゴリオ聖歌「処女、王をば生みぬ」 宗教
音4 沖繩のわらべ唄「ていんさくぬ花」 子供
音5 アポリジニ楽器音楽「Guardians of the Ree」 抽象
音6 軽快な音楽「カフェハウスで」 昔・なつかしさ

[視覚作品] 各作品ともA4版の大きさの写真印刷

図A 写真 「美ら海を」 自然
図B 写真 「帰郷」 昔・なつかしさ
図C 銅版画 「Floating Balls 16」 抽象
図D 写真 「祈り/大日如来像(園城寺)」 宗教
図E 写真 「ALONE/LONDON」 のんびり
図F 水彩画 「雪野原の散歩」 子供

[建物空間]

群馬県立館林美術館(群馬県)、ハラ・ミュージアム・アーク(群馬県)、法師温泉長寿館(群馬県)、妙義山神社(群馬県)、星野石の教会(長野県)、小山敬三美術館(長野県)、長野県信濃美術館東山魁夷館(長野県) 他5ヶ所

(2) 評価の方法

被験者は、視聴覚作品においては10歳代63名(男30名、女33名)、20歳代21名(男15名、女6名)、30歳代29名(男9名、女20名)、40歳代12名(男3名、女9名)、50歳代12名(男6名、女6名)、60歳代以上3名(男2名、女1名)の計140名(男65名、女75名)であり、建物空間での評価は30歳代から60歳代の6名(男4名、女2名)であった。

【結果】評価の数値化は、「そう思う」を2点、「少しそう思う」を1点、「そう思わない」を0点を粗点として、その得点集計をすることから始めた。

30項目の粗点から総合点を算出して、「癒し総合点」とする。評価対象の作品や建物空間に対して評価者がどのくらい癒されているのかの得点である。スケールを作成するために、芸術評価作品12刺激(音6作品、図6作品)に建物空間12ヶ所に評価者10歳代から60歳代までの被験者で、延べ1748票の評価データで標準化することにした。1748枚の粗点総合点の平均値は23.07点で、SDは16.92点であった。この統計値より、平均値を挟んで1SDの範囲を<平均的癒し領域>とした。評価対象に選んだ視聴覚作品や建物空間は、ある程度「癒し」をもたらすであろうことを前提に選んだ作品であるため、平均値付近の得点は、ある程度の「癒し」を感じている領域と考えてよい。得点で示すと、この<平均的癒し領域>は、15点~31点となる。14点以下は、癒される範囲からは除外した方がよいと考えられ、<癒されない領域>とした。32点以上については、32点から1SDの範囲、すなわち32点~48点の範囲を<かなり癒された領域>とし、それ以上(49点以上)を<すぐ癒された領域>とした。

6尺度のそれぞれは該当する項目が5項目ずつであり、0点~10点の間をとる。その平均得点とSDは下記のとおりであった。

	平均得点	SD
和(なごみ)	4.51	3.59
極(きわみ)	2.84	3.31
浄(きよらか)	4.21	3.45
潤(うるおい)	4.10	3.60
弾(はずみ)	3.28	3.26
空(むしん)	4.14	3.26

これら6尺度の得点については、平均得点とSDとで標準化データにして表示する方法はあるが、今の段階では標準化しないでダイヤグラムにして表示することにした。

【考察】<音2 森の集音録音>は小川のせせらぎと鳥の鳴き声を集音マイクで録音した自然環境の音刺激であるが、6尺度のダイヤグラムでこのパターンに近いのが視覚刺激の<図A 美ら海を>であった。自然を対象にした作品の共通性とも言え、これら尺度の意味的妥当性の証拠とも言える。同様に<音3 グレゴリオ聖歌>と<図D 祈り/大日如来像>も「浄」尺度だけが極めて高い類似したパターンを示しており、宗教性の高い対象の癒しパターンとも解釈され、これも意味的妥当性がある証しといえる。統制群的刺激として用意した<音5 アポリジニ楽器音楽>と<図C Floating Balls>はどちらも「癒し総合点」も著しく低く、6尺度とも尺度得点が大変低く、グラフ表示ができない程、特徴をもっていない。「癒し」スケールとして、癒し対象外には反応しない評価項目から成り立っていると考えるとよい。以上のことより、「癒し」評価スケールとして実用可能な見通しができたが、今後は一般に「癒し曲」といわれるような音楽などでの評価データを収集し、実際の妥当性を得るようにしていきたい。

【引用文献】

松本 洸、外島 裕、山崎晴美、佐藤清公 2004 『「癒し」の心理尺度作成の試み—とくに芸術作品に対する癒し—』日本応用心理学会第71回大会発表論文集 P.91

(まつもとう)

ヒューマンエラーを防止するための安全教育とその効果

○施 桂榮¹⁾ 奥村隆志¹⁾ 余村朋樹¹⁾ 細田 聡^{1,2)} 井上枝一郎^{1,3)}

¹⁾財団法人労働科学研究所 ²⁾関東学院大学文学部 ³⁾関東学院大学人間環境学部

キーワード： ヒューマンエラー、安全教育、効果

【研究の目的】 近年、ヒューマンエラーによる産業事故が多発している。経済産業省が2002年以降発生した産業事故について、その直接的な原因を調査したところ、誤操作・誤判断などの人的要因が76%を占めたとされている。これを受けて、原子力をはじめ、航空、鉄道、鋼鉄、化学プラントなどの産業組織では、ヒューマンエラーを低減するためのいろいろな取り組みを模索している。その中で、「人間特性の理解」を中心に据えた、いわゆるヒューマンファクター教育研修(以下、HF 研修と呼ぶ)が一つの重要な項目として位置付けられている。しかしながら、従来行われてきた、知識や技能を詰め込むことに重点を置いた知識・技能教育の方法は「HF教育」には明らかに当てはまらないと考えられる。したがって、組織内でHF教育研修を有効に実施する方法が見当たらないというのが現状ではなからうか。

このような状況を踏まえて、本研究では、ヒューマンエラーとは何か、どういった条件や要因が揃うならば、ヒューマンエラーが発生するのか、どうすればヒューマンエラーを有効に防止できるのか、あるいは、ヒューマンエラーが発生してしまった場合、どうすれば適切に事態を解決することが可能になるのか、等々の問題について、受講者に自ら考えさせることを促進するHF教育プログラムを開発した、また、この「考える」HF教育プログラムを用いた研修を実際に行うことによって、その教育効果を把握することも試みた。

【方法】 ある発電プラントに所属している運転員・係保員など16名がHF研修に参加した。実施時期は2004年12月中の3日間。研修はTable1.に示しているHF研修プログラムによって実施した。

Table1. HF教育プログラムの構成

日時	内容	目的
1日目	・「ヒューマンエラーとは何か」 グループ・全体討議	概念の理解
	・事例分析(第1回目) 結果発表・全体討議	同一の事故事例を異なる視点から分析することによって、ヒューマンエラーに関する理解を深める。
2日目	・事例分析のやり直し(第2回目) 結果発表・全体討議	
	・シミュレーション課題(パターン1) 振り返り・全体討議	受講者らがシミュレーション課題の遂行により、「ヒューマンエラー」を冒す当事者になって、再度ヒューマンエラーを理解し、防止対策を考える。
3日目	・シミュレーション課題(パターン2) 振り返り・全体討議	
	・「ヒューマンエラーとは何か」 グループ・全体再討議	

【結果】 上記HF教育プログラムによる研修の効果を図るために、研修の最初から最後までプロセスにおいて、受講者のヒューマンエラーに関する考え方の変化に注目した。研修の初期段階では、「ヒューマンエラーの定義が難しい」、「色々な意見が出てくるので、頭の中が混乱した」「受講メンバーによって、いろいろな側面の考え方がある」「ヒューマンエラーについて、普段じっくり考えたことがない」というような感想をもつ受講者が多かった。2日目の研修から、受講者に同じ事例の分析をやり直しさせること、さらに、2回の体験学

習を通して、受講者のヒューマンエラーに関する考え方の変化が以下のように現れてきた。

「気づくこと」:本教育研修のねらいは、単なる知識伝授という教育に留まらず、実際の現場でこの教育で扱っている問題の重要性について少しでも早く「気づき」、一日も早くその問題解決の歩を踏み出すことにある。そして、受講後から何事かを「考え始める人」となって欲しいことである。今回の研修が終了した時、「自分の知らないこと、気がついていないことが沢山あった」、「ヒューマンエラー防止、考え、気づき、見て行動することが必要である」、「今の業務で本当に良いのか、常に見直す必要があるのではということに気づいた」「気持ちが悪くなった」というような感想をもつ人が多かった。

「意識の変化」:事例分析の1回目のディスカッション時には、エラーの原因について「当事者が悪かった」という「結果論」をもつ人が多数であった。これに対して、本教育では、責任の所在を明らかにすることではなく、あくまでもトラブルに至った必然性(人間行動の内部過程、場の環境、風土など)を究明することが重要であることを伝えたい訳である。そこで、受講者に分析の視点を変えさせ、同じ事例について再分析を行わせた。さらに、作業状況をモデル化したシミュレーション課題を2回遂行することにより、受講者らが当事者になってヒューマンエラーを冒すことを体験させた。その結果、「今まで自分の中で考えていたヒューマンファクターというものがあったく違っていたことに気づいた」、「事例にあるヒューマンエラーの有無、誰が事象を止められたかの答を求めても、すっかりしなかったが、2回目の事例分析および2回目の作業シミュレーションを終え、ようやく自分の意識、組織の意志を正しい方向に統一することが、不具合事象を止める最大の要因であるということが分かった」、「HFに対する認識が変わった。個人の責任を追及することより個人の考え方を変えることが重要である」、「事例研修の中で、組織の不備、システムの不備によって、不適合が発生していると考えていたが、研修後は、自分の考え方の中に、改善していく所が多くあると思った。組織の不備を自分が変えるという気持ちを持って仕事に臨みたい」というようなエラー防止に関する考え方の変化が顕著に現れてきた。

「意識から行動への意欲」:ヒューマンエラー防止に関する考え方が変わったからといって、教育研修の効果が挙げたということにはならない。研修で学んだものを職場で活用し具体的に行動しなければ、研修の意味は何もない。したがって、その第一歩として、教育研修の中で問題認識の変容から問題を解決するための具体的な行動に移る意欲を育まなければならない。結果としては、「この研修で得た考えを職場に帰って忘れないよう努めたい」、「今後、職場に戻っても役に立ててゆきたい」、「自分に何ができるか考え、実際に行動に移していきたい」、「職場内の一人一人の認識を高めるよう行動をとりたい」というような考えが多くの受講者からひょうめいされた。

今後、職場風土の変革をもたらす波及効果を高めるために、フォローアップ教育を実施することが必要となる。

(し けい えい・お く む ら た か し・よ む ら と も き・
ほ そ だ さ と し・い の う え し い ち ろ う)

大学生のパーソナリティと職業志向性Ⅲ

－ SDS 職業適性検査の職業志向性－

○松田浩平¹⁾ 森下高治²⁾ 三戸秀樹³⁾ 銅直優子²⁾ 片岡大輔¹⁾ 佐藤恵美⁵⁾

¹⁾文京学院大学 ²⁾流通科学大学 ³⁾関西福祉科学大学

⁴⁾日本能率協会マネジメントセンター ⁵⁾白百合女子大学大学院文学研究科

キーワード: パーソナリティ, 職業志向性, SDS 職業適性検査

I. はじめに

現在, 学歴・就業年齢の変化や, 事務機器等の機械化導入によって社会から需要のある職業に変化が見られるようになった。1980年代の主な職業は販売・事務などの仕事が主流であったが, 現在ではコンピュータの発展により IT 産業やサービス業といった職業が主流となっている。これに伴い, 企業側から要求される社会的スキルが変化している。さらに, 職種によって雇用形態にも変化が現れ, 非正規型雇用形態の分化などの傾向がみられている(McLean, Kidder & Gallager, 1998)。これに伴い, 大学生の職業や職種に対する興味や関心も変化していると考えられる。

ホランドは, 現実的(R), 研究的(I), 社会的(S), 慣習的(C), 企業的(E), 芸術的(A)領域の6つのパーソナリティ特性と職業環境の一致度が高いほど, 職業的な満足, 安定性や業績を得る度合いが高まるとしている(Holland, 1985)。職種に対する興味や関心が増加したとしても, RIASECの6因子は安定した構造を示すものなのか検討する必要があると考えた。

そこで, 本研究では, 大学生を対象に, SDS 職業適性検査の職業名を参考に大学生の職業名の認知度と, 項目のわかりやすさの反応率の偏りを検討した。さらに, 興味のある職業の関心度から, 大学生の職業志向性について検討した。

II. 目的

SDS 職業適性検査の項目への反応率から, 職業名の認知度と職業への関心度を明らかにし, 大学生の職業志向性を検討した。併せて RIASEC の6因子の安定性についても検討する。

III. 方法

【実施期間】【被験者】「大学生のパーソナリティと職業志向性Ⅰ－活動性の項目反応率と因子構造－」と同様であった。

【質問紙と結果の処理】

質問紙1. 項目内容の理解度: 108項目の職業名について「知っている」「知らない」を2段階で評定, この結果を各項目の反応率として度数分布と割合で算出した。

質問紙2. SDS 職業適性検査: 108項目の職業名に「関心がある」「関心がない」を2段階で評定してもらった。

IV. 結果と考察

結果1. 職業名の認知度

職業名108項目の認知度を検討するため, 職業項目の反応率を求めた。この結果, 50%以上の大学生が「知らない」と答えた職業名は, 11)システム・エンジニア, 20)在庫整理係, 29)文書整理係員, 31)給料係員, 48)キャリア・カウンセラー, 49)簿記係員, 68)原価計算係, 69)商業科教員, 72)キーパンチャー, 81)銀行出納係員, 83)株投機家, 97)無線技師, 98)金融貸付調査員, 105)校正係の14項目であった。この14項目中, 10項目がC領域に該当するものであった。

結果2. 職業への関心度

大学生の職業への関心度を検討するため, 項目の反応率を求めた。80%以上が「関心がない」と答えた職業名は 15)工場長, 16)物理学者, 33)植物学者, 77)ガソリンスタンド従業員, 41)速記者など12項目であった。80%以上「関心がない」と答えた職業の傾向として, 「学者」関係の項目が6項目あったが, もともと就く職業としては絶対数が少ないために関心ある人も少ないことが示唆さ

れた。また, 77)ガソリンスタンド従業員, 91)パワーシャベル機械操作員も対象が大学生であったため, 現在ではアルバイトに近い仕事は職業として関心がないことが示唆された。

結果2. SDS 職業適性検査における因子的齏一構造

SDS 職業適性検査の職業名の因子分析から, RIASEC の6因子であることを想定し, それぞれの因子内で α 因子分析を行った。RIASEC の6領域に含まれる項目が齏一構造を持っているかを確認するため, 6領域ごとに各因子数と因子構造から検討した。表1によれば, 6領域の第I因子は固有値が10以上で, 第II, III因子以下は無視できる値であった。さらに, 因子II以下は負荷量400以上の負荷を持つ項目は1項目のみであった。このため, RIASEC の6因子はすべて因子Iで解釈可能であると判断した。現実的因子(R): 22)大工, 66)測量技師, 103)電気工など17項目で構成され, 機械や器具などを使用した現実的な職業であることが示唆された。

研究的因子(I): 5)考古学者, 54)研究員所員, 100)科学詳論家など18項目で構成され, 科学的なことに興味を持つ研究的な要素の多い職業であることが示唆された。

芸術的因子(A): 18)小説家, 40)声楽家, 75)脚本家, など18項目で構成され, 文章や楽曲を創造する職業であると示唆された。

社会的因子(S): 43)言語治療士, 62)カウンセラー, 80)看護師, 106)小学校教員など17項目で構成され, 人を援助するようなサービスの職業であることが示唆された。

企業的因子(E): 23)販売部長, 38)レストラン支配人, 57)テレビのプロデューサー, 101)広告業者など18項目で構成され, 販売や宣伝に携わり, 人を指導する立場である管理業務的な職業であることが示唆された。

慣習的因子(C): 14)税理士, 69)商業科教員, 73)公認会計士, 105)校正係など15項目で構成され, 会計などの定常的業務を正確にこなす能力を持つ職業であることが示唆された。

表1. 6因子の α 係数と重み付けされた固有値

因子	R	I	A	S	E	C
α 係数	.985	.979	.987	.977	.984	.977
固有値	14.28	13.32	14.82	12.86	14.26	13.01

表2. RIASECの因子間相関

	R	I	A	S	E
I	.695				
A	.505	.563			
S	.481	.634	.472		
E	.672	.537	.575	.455	
C	.572	.562	.385	.471	.558

【引用文献】武田正信 森下高治 1981 SDS 職業適性自己診断テスト 日本文化科学社

(まつだこうへい・もりしたたかはる・みとひでき・

どうべたゆうこ・かたおかだいすけ・さとうえみ)

心理会計

—旅行、家具、スーツが前払い・後払いされる割合の比較（1）—

蜂屋 真

（流通科学大学 サービス産業学部）

キーワード：心理会計 前払い・後払い 大学生

研究の目的

心理会計(mental accounting)とは、心の中の口座、すなわち心理的口座(mental account)の違いが、商品の支払いの意思決定に影響を及ぼすという現象を指す。

Tversky & Kahneman (1981)は、ある被験者に「あなたは10ドルの芝居を見に行くことを決めたと想像して下さい。劇場に入った時あなたは10ドル紙幣を無くしたことに気付きました。あなたは芝居のチケット代10ドルを払うだろうか。」、別の被験者に「あなたは10ドルの芝居を見に行くこと決め、10ドルのチケットを前もって購入したと想像して下さい。劇場に入った時あなたはこのチケットを無くしたことに気付きました。座席は指定されておらず、チケットの再発行はされません。あなたは再度チケット代として10ドルを払うだろうか。」、と尋ねた。

両状況は、劇場に着いた時10ドル相当を失い、芝居を見る為にお金を払うか、あるいは家に帰るかという選択を迫られているという点で同一である。しかし、10ドル紙幣を失った場合88%の被験者はお金を支払うと答えたが、10ドルのチケットを失った場合46%の被験者しかお金を支払うと答えなかった。Tversky & Kahnemanは、チケットを失った場合チケットを前もって購入した時点でチケット口座が開設され、この口座からみると新たにチケットを購入することは芝居代を20ドルにする、一方、紙幣を失った場合その時点ではチケット口座が開設されておらず紙幣の紛失はチケットの購入に影響を与えない、それ故上述の結果がもたらされたと考えた。

心理会計には、このようなチケット課題の他にも、サンク・コスト課題や前払い・後払い課題がある。Prelec & Loewenstein (1998)は、ある被験者に家電の代金を前払いするかそれとも後払いするかを、また別の被験者に旅行の代金を前払いするかそれとも後払いするかを選択させた。その結果、両場面でお金の支払い条件が同一であるにもかかわらず、16%の被験者が家電の前払いを、60%の被験者が旅行の前払いを選択した。この結果は、耐久消費財に比べて非耐久消費財は前払いが好まれること、また家電と旅行の心理的口座が異なることを示唆する。

本研究は、同一被験者に、旅行、家具、スーツの前払い・後払いを選択させ、商品の耐久性が前払い・後払いにどのような効果を及ぼすのかを検討した。

方法

日時：2005年6月

被験者：平均年齢19.5歳の大学生355名（男子211名、女子144名）、

実験手続：心理学の授業中に、旅行、家具、スーツの前払い・後払いを尋ねる質問紙を配布し回答を求めた。旅行課題は、「あなたは6ヶ月後に1週間の東南アジア旅行を予定している。旅行には12万円かかるが、あなたはどちらの支払い方法をとるだろうか。A.毎月2万ずつ6ヶ月間支払う。支払い終了後、旅行に行く。B.6ヶ月後、まず旅行に行く。その後毎月2万ずつ6ヶ月間支払う。」であり、被験者に前払い・後払いの選択を求めた。また、家具課題及びスーツ課題では、旅行課題の「1週間の東南アジア旅行」を、それぞれ家具の購入及びスーツの購入に置き換えた。質問紙は商品提示の順序効果を相殺するため6種類の質問紙が作成され、各質問紙にほぼ同比率の男女学生が回答した。

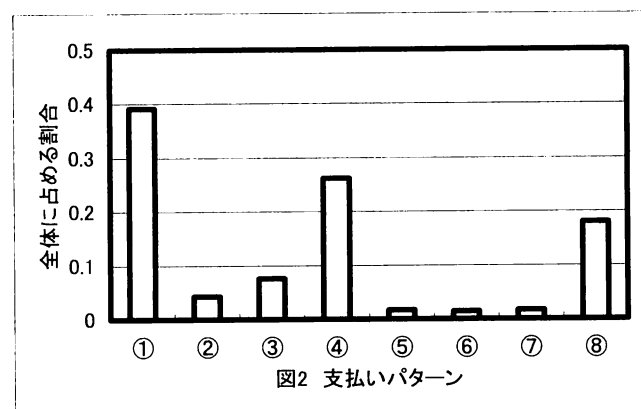
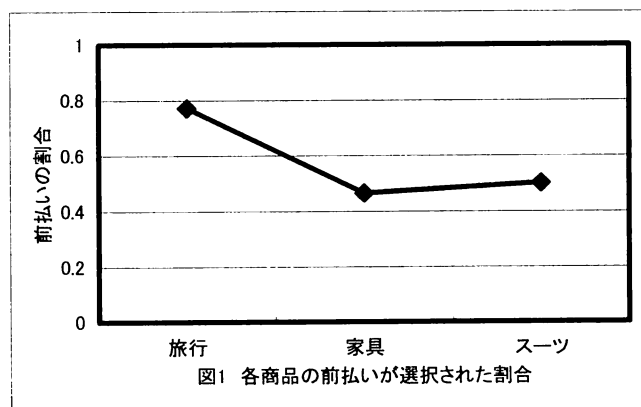
結果

図1は、旅行、家具、スーツに対する前払いの選択比率を示す。77%の被験者は旅行の代金の前払いを選択したが、家具とスーツではそれぞれ46%、50%の被験者が前払いを選択した。

図2は、被験者の旅行、家具、スーツに対する支払いパターンを示す。主要な支払いパターンは、すべての商品を前払いする、旅行だけを前払いにし他を後払いにする、すべての商品を後払いするであり、それぞれ39%、26%、18%の被験者がこれらの支払いパターンを選択した。

考察

本研究は、家具とスーツと比べて、旅行は前払いが好まれるという結果を得た。この結果は、商品の耐久性によって前払い・後払いの意思決定が異なること、及び旅行の心理的口座は家具とスーツの心理的口座とは異なることを示唆する。しかし、被験者ごとの支払いパターンの分析では、旅行だけを前払いする被験者は26%にすぎず、旅行と家具及びスーツの心理的口座が異なると考えられる被験者は被験者全体のごく一部であることが明らかになった。



- ①すべて前払い
- ②旅行・家具の前払い
- ③旅行・スーツの前払い
- ④旅行の前払い
- ⑤家具・スーツの前払い
- ⑥家具の前払い
- ⑦スーツの前払い
- ⑧すべて後払い

(はちや しん)

大学生のパーソナリティと職業志向性 I

—活動性の項目反応率と因子構造—

○佐藤恵美¹⁾ 森下高治²⁾ 三戸秀樹³⁾ 松田浩平⁴⁾ 銅直優子²⁾ 片岡大輔⁵⁾
¹⁾白百合女子大学大学院文学研究科 ²⁾流通科学大学 ³⁾関西福祉科学大学
⁴⁾文京学院大学 ⁵⁾日本能率協会マネジメントセンター
 キーワード: パーソナリティ, 職業志向性, 活動性

I. はじめに

青年期の職業選択や決定は、社会的環境の多様化や複雑化に影響される傾向がある。最近では、雇用形態の変化から正規の就業形態だけではない進路選択をする人も増加している。

職業選択はパーソナリティ表現の1つであるとして、職業はパーソナリティを示す指標である(Holland, 1965)。さらに、同じ職業に就いている人は似たパーソナリティ特性を持っているとし、その類似性によってパーソナリティを6つの領域に分類している。これは、現実的(R), 研究的(I), 社会的(S), 慣習的(C), 企業的(E), 芸術的(A)領域であり、このパーソナリティ特性と職業環境の一致度が高いほど、職業的な満足、安定性や業績を得る度合いが高まる(Holland, 1985)。

この理論に基づいた職業検査をパーソナリティ検査とし、The Self Direct Search(Holland, 1972)(以下 SDS)を作成した。日本でも、SDS 職業適性検査日本語版が作成された(武田, 森下, 1981)。この日本語版が作成されてから20年以上が経過し、学歴・就業年齢の変化や、事務機器等の機械化導入によって社会から需要のある職業に変化が見られるようになった。

そこで、SDS 職業適性検査の項目を現在最終学歴となりやすい大学生を対象に、職業に関する仕事への活動性や能力感、現在要求される社会的スキルや職業の項目を検討する。本研究では、大学生の仕事への活動性と、SDS 職業適性検査の項目のわかりやすさ、職業認知度の反応率の偏りを検討した。

II. 目的

大学生を対象に、SDS 職業適性検査活動性の項目内容のわかりやすさを反応率の偏りから検討した。さらに、職業適性における仕事への活動性に関する傾向を検討した。

III. 方法

【実施期間】2005年1月～2月

【被験者】関東圏と関西圏の中堅文系大学各3校の大学生を対象とした(男性178名, 女性364名)。

【質問紙】The Self Direct Search 日本語版(武田, 森下, 1981)を現代の国語傾向と合うように、一般性のある用語に修正・増加した項目を質問紙として使用した。項目の修正基準は、①学生特有の行動だけでなく、社会人にも共通性のある行動を取り入れた②「タイプライター」「単車」などを、現在日常的に使われている名称に修正した。この結果、6領域11項目(計66項目)だった活動性項目を、6領域13項目(計84項目)とした。この活動性84項目を、質問紙1)項目内容のわかりやすさ、質問紙2)項目の仕事内容の好悪についての質問紙を作成し、関東圏、関西圏のそれぞれ異なる被験者に配布した。

【結果の処理】質問紙1. 項目内容の理解度: 文章の意味について「わかりやすい」「わかりにくい」を4段階で評定、この結果を各項目の反応率として度数分布と割合で算出した。質問紙2. SDS 職業適性検査: 仕事に関する84項目の仕事内容について「好き」「きらい」を2段階で評定してもらった。この結果を、SDS 職業適性検査の活動性項目の因子分析から、RIASECの6因子であることを想定し、それぞれの因子内で α 因子分析を行った。もし、RIASECの6因子に含まれる項目が斉一構造を持っているのなら、 α 因子分析の結果は基本

的に1因子構造になるはずである。そこで2因子以上の解が得られた場合、第1因子以外の負荷の高い項目を検討した。

IV. 結果と考察

結果1. 項目内容の理解度

項目内容の理解度を検討するため、活動性項目の反応率を求めた結果、83項目を50%以上が「わかりやすい」と答えた。しかし、項目70)「絵画や彫刻ができる」については、「分かりにくい」が40%を越えていた(詳細は当日掲示する)。

結果2. 大学生のSDS 職業適性検査における活動性

各6因子の斉一構造を確認するため、各因子構造を以下のように検討した(各因子の詳細は当日掲示する)。

現実的因子(R): 2因子で構成された。因子Iは、33)「機械の組み立て、調整、修理などをする事」など10項目で構成されており、対物的操作の因子であることが確認できた。因子IIは「草木や野菜を育てること」「田や畑で作物を作ること」の2項目で構成されていたが、この活動は対物的な活動に当てはまらないことが示唆された。

研究的因子(I): 2因子で構成された。因子Iは、11)「科学的な本や雑誌を読むこと」など12項目で構成されており、研究や物事を探索することを焦点とした因子であることが確認された。因子IIは1項目のみであり、26)「数学を勉強すること」は、研究的因子に該当しないことが示唆された。

芸術的因子(A): 3因子で構成された。因子Iは、16)「花を生けること」など11項目で構成され、芸術的・創作的なことが好きな因子であることが確認された。因子IIは「デザインをすること」に関する3項目で構成された。因子IIIは楽器に関する2項目で構成された。この結果、因子Iの演劇や詩の創作活動と、因子II、IIIのデザインや楽器を演奏する活動は、異なる芸術性を持つことが示唆された。

社会的因子(S): 2因子で構成された。因子Iは、10)「ボランティア活動に参加すること」など11項目で構成されており、積極的に他者や社会と関わる因子であることが確認された。因子IIは1項目であり、69)「ハンディキャップのある人を助けること」であったが、この活動は社会性の高い人ではなくても行う活動であることが示唆された。

企業的因子(E): 1因子で構成された。この因子は、23)「仕事の指示をすること」など12項目で構成されており、行動を指示したり、議論したりする因子であることが確認された。

慣習的因子(C): 2因子で構成された。因子Iは、41)「いろいろな事務機器を使うこと」など10項目で構成されており、事務系の仕事の因子であることが確認された。因子IIは、28)「プログラミングの勉強をすること」79)「パソコンの操作をすること」など3項目で構成された。この結果、パソコン技能は特別な仕事ではなく、一般的活動であることが示唆された。また、プログラミングは専門的な知識を有する仕事であると判断されていることが示唆された。

【引用文献】武田正信 森下高治 1981 SDS 職業適性自己診断テスト 日本文化科学社

(さとうえみ・もりしたたかはる・みとひでき・

まつだこうへい・どうべたゆうこ・かたおかだいすけ)

騒音感受性と人格特性および感受性の関係の検討

宮原 道子

(京都大学大学院教育学研究科)

キーワード：騒音感受性、他者意識尺度、プライベート空間

【問題・目的】 騒音感受性とは安定した人格特性の一部であり、様々な環境騒音に対する態度である (Stansfeld, 1992)。しかし、理論的に関連が予測される性格特性とは、安定した関係が得られていない (Staples, 1996 など)。一方、Langdon(1976) や Meijer ら(1985)は、騒音感受性と環境に対する一般的な不満感の関連を示唆した。さらに、Iwata(1993)は、騒音感受性と環境や社会への評価、情動感受性の間に関連を見出した。本研究では、以下の二つの仮説を検討する。1) 騒音感受性は、環境や他者に対する評価や、重要と感じるプライベート空間の機能への志向性と関連する 2) 1) で得られた関連性の背後には、社会や環境のみならず、人や聴覚以外の刺激に対する感受性に影響を及ぼす全般的な感受性が存在する。

【方法】 被験者 大学生、専門学校生の男女 348 名 質問紙の構成 いずれの尺度も、高得点ほどその傾向が強いことを示す。①騒音感受性尺度 (岩田, 1981): 21 項目 ②他者意識尺度 (辻, 1993): 内的他者意識 7 項目と外的他者意識 4 項目 ③外的没入尺度 (坂本, 1997): 8 項目 ④環境感受性 (Iwata(1992)を参考に独自に作成): 聴覚刺激以外 (光や匂い) の物理的刺激に対する感受性を測定する 12 項目 ⑤プライベート空間機能尺度 (泊・吉田, 1998): 31 項目 手続き 大学及び専門学校での心理学の授業を利用して、調査を実施した。所要時間は約 20 分であった。

【結果】 内的他者意識尺度、外的他者意識尺度、外的没入尺度、プライベート空間機能尺度は、尺度得点を算出した。

騒音感受性尺度の因子分析から 1 因子(因子負荷量 0.35 以上の 16 項目)を抽出し、“騒音感受性因子”とした ($\alpha=0.88$)。16 項目への評定値合計を騒音感受性の尺度得点とした。また、環境感受性の因子分析から 1 因子(因子負荷量 0.35 以上の 10 項目)を抽出し、環境感受性因子とした ($\alpha=0.71$)。この 10 項目への評定値合計を環境感受性の尺度得点とした。

次に、各尺度得点間の相関係数を算出した。騒音感受性尺度と環境感受性尺度、内的他者意識尺度、外的他者意識尺度、外的没入尺度との相関係数は、 $r = .18$ から $r = .40$ と有意であった。また、騒音感受性と、プライベート空間機能尺度のうち緊張解消、自己内省、課題への集中、情緒的開放との間の相関係数はそれぞれ $r = .12$ から $r = .23$ であった。

最後に、尺度得点間の相関係数を参照しながら、全般的な感受性と各尺度との関連を構造方程式モデルで検討した。最終的に得たモデルを Fig. 1 に示した。GFI = .993, AGFI = .977, RMSEA = .007 であり、モデルの適合度は大変良好といえる。

潜在変数である感受性から、騒音感受性と非聴覚的刺激感受性、内的他者意識と外的他者意識に有意なパスが得られた。また、内的他者意識、外的没入、外的他者意識、騒音感受性から、プライベート空間機能の中の占有できる空間である自己内省と課題への集中への有意なパスが得られた。また、本来相関がある同尺度の下位尺度の誤差変数間にも有意なパスが得られた (e2 と e4, e7 と e8)。

【考察】 相関係数と Fig.1 から、仮説 1), 2) とともに支持されたといえる。騒音感受性尺度と他の尺度との相関係数はあまり高くなかった。しかし、全般的な感受性を想定することによって、騒音感受性と、他の尺度との関連はより強いものとなった。従って、騒音感受性とは、環境から受けとる様々な刺激への全般的な感受性の中で、騒音に対する感受性を抽出したものであると示唆された。そして、この全般的な感受性は、人に対して、あるいは光や音といった物理的刺激に対しても同様に影響力を持つことが示された。更に、全般的な感受性が高い人は、一度何かに注意をひきつけられると、そこから注意をそらすことが難しいことも示された。また、騒音感受性は、課題に集中する空間のみに影響することが示された。この結果は、騒音によって課題への集中は妨げられるが、自己内省は妨げられないと評価されていると解釈できる。

【引用文献】

- 岩田 紀 1981 騒音感受性と性及び音響関連反応の関係. 徳島大学学芸紀要 教育科学, 30, 41-45.
- Iwata, O. 1992 The relationship of social evaluation and subjective sensitivity of environmental evaluation. *Psychologia*, 33, 69-79.
- Langdon, F. J. 1976 Noise nuisance caused by road traffic in residential areas: part III, " *Journal of Sound and Vibration*. 49, 241-256.
- Meijer, H., Knipschild, P., and Salle, H. 1985 Road traffic noise annoyance in Amsterdam. *International Arch. Occup. Environ. Health*, 56, 285-297.
- 坂本 真士 1997 自己注目と抑うつ の社会心理学 東京大学出版会
- Stansfeld, S. A. 1992 Noise, noise sensitivity and psychological studies. *Psychol. Med. Monograph Suppl.* 22, Cambridge U.P., Cambridge.
- Staples, S. L. 1996 Human response to environmental noise. Psychological Research and public policy. *American Psychologist*, 51, 143-150.
- 泊真児・吉田富二郎 1998 プライベート空間機能尺度の作成および信頼性,妥当性の検討. 日本社会心理学会第 39 回大会発表論文集, 90-91.
- 辻 平治郎 1983 自己意識と他者意識 北大路書房 (みやはら みちこ)

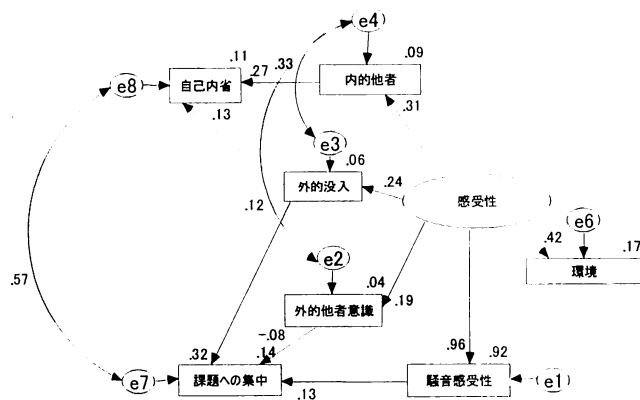


Fig.1 感受性とプライベート空間志向のモデル

「白紙に世界地図を描け！」でどんなことが分かるか

— 当世の学生はどの位描けるか。そして、この結果からどんなことが分かるか。 —

大澤 光

(首都大学東京・システムデザイン学部)

キーワード：世界地図、関心・知識の深さ、意欲・能力の評価テスト、発信型の訓練

【目的】 海外に対する関心・経験・知識があれば、「世界地図」はうまく描けるであろう！という想定の下で、授業の中で「白紙に世界地図を描け！」という課題を与え、当世の学生が海外にどの位の関心・経験・知識を持っており、通常の授業では取り組むことがない課題にどう取り組み、どう反応するかを観察し、(多少大胆な仮説を設けてでも)これを手がかりに、この課題でどんなことが分かるかを検討するのがこの研究の目的である。

【方法】 筆者の所属する経営システムデザイン・コース1年次の学生(出席者数47名)を対象にコースの教員と内容を紹介する目的でオムニバス形式で行われる『経営システムデザイン概論』の授業の中で、「白紙に世界地図を描け！」という課題を、3分間の時間を与えてやらせ、回答を回収した。

なお、学生には事前に何のアナウンスも与えておらず、この課題に取り組むためのガイダンスとして、『鉛筆』でできるだけ「濃く」「丁寧に」そして「まじめに」描く！および「成績は、「できのよい順序」で評価する！」を与えた。

授業では、この課題の他、①電車での迷惑行為、②「情報システム」のシステムとしての条件、③「授業支援システム」への期待、④自分自身の「やらない」行動¹⁾とその理由の課題を「考える！」を与えた。

【結果】 (1) 結果は《できがよい》《普通》から《話にならない》まで幅広い回答が得られた。図1はその一部である。

《できがよい》は、日本、樺太、カムチャッカ半島、アラスカ、朝鮮半島、台湾、フィリピン、インドシナ、マレー半島、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランド、インド大陸、スリランカ、アラビア半島、アフリカ大陸、マダガスカル、トルコ半島、イタリア半島、イベリア半島、英国、グリーンランド、デンマーク半島、スカンジナビア半島、南アメリカ大陸、フロリダ半島、カリフォルニア半島、ハワイ

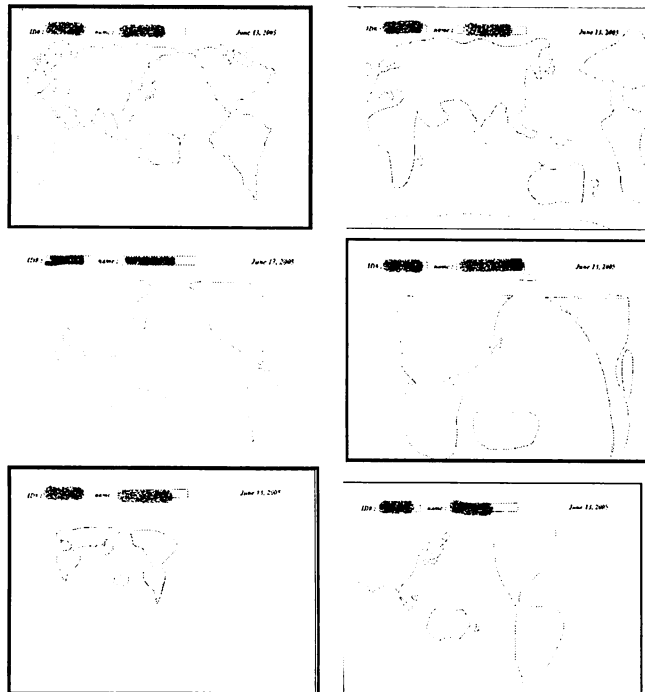


図1 《できがよい》から《話にならない》までの回答例

諸島のうちの主要な「特徴」が意識されていた。

《普通》と《話にならない》には、主要な「特徴」の半分以上が意識されておらず、大きさや位置関係がデタラメに近いもののほか、一部だけしか描かないあるいは極端に小さくして細部をごまかすなど、真面目ではないものもあった。

筆者の主観的な評価では、《できがよい》が20%、《普通》が30%、《話にならない》が50%の割合であった。図1に、筆者が並びの順に《できがよい》1件、《普通》2件、《話にならない》3件と判定した例を示す。

(2) 回答は筆者を含めた3名の評価者が事前に話し合うことなく、それぞれが独立に「できのよい順序」に並べたが、その結果はかなりの程度一致していた。

(3) 他の4つの課題の「でき」もよくはなかったが、この課題の「できのよい順序」と4つの課題のその間には正の相関があった。とくに身近でよく知っている課題の①とは高い相関があった。技術的な説明を与え、学生は「分かる」と「考える」が必要な課題の②、③、④とは、相関は高くはなかったが、《できがよい》《普通》《話にならない》の評価による分類ではかなりの程度一致していた。

【考察】 (1) この課題の回答の「できのよさ」に関する要因として、「海外への関心・経験・知識(含、地理的知識)」「経験・知識を“空間的な”関係に変換して描く図的な能力」のほかに、「経験・知識を“体系的に”取り出す能力」「仕事を“体系的に”こなす能力」「仕事への取り組み姿勢・意欲」などをあげることができよう。

一般的に、《うまく描けた》学生は、海外の国・地域に関する「関心・経験・知識」が高いほか、上述の「能力」や「姿勢・意欲」が高いと推定できる。《描けない》はその反対であろう。このことから、この課題は、海外への関心・経験・知識もさることながら、「空間的な」関係を考える能力」「体系的に”取り組む能力”」「姿勢・意欲」を知るよいテスト方法の1つになるのではないかと筆者は期待している。

(2) 「世界地図」は、高校までの学習で、また、テレビやネットのニュース番組や天気情報などでよく目にする対象である。わが国は、海外からの物品やサービスの輸入も多く、海外のニュースも多く報道され、海外からの訪問者も多く、私たちが海外に行く機会も多い。しかし、その割には、この課題の結果は、《普通》や《話にならない》が多かった。

これは、「遊び」などで海外には行くが、新聞を読まない、ニュース番組を見ない、本を読まない学生が増えていることと深い関係がある、と筆者は考えている。筆者の経験からは、当世の学生は、「知っているか」と問われれば、「知っている」「聞いたことがある」と答えるが、少し深く突っ込まれると「知らない」「分からない」と答えることが多い。

結論を出すのはかなり早いかもしれないが、当世の学生が「世界地図が描けない」のは、海外への関心・経験・知識の「深さ」と「好奇心・意欲」の不足のほかに、「空間的な」関係の考察も含めた「体系的な”取り組みの経験”」が不足しているからで、このためには「広く・深く・考える」「経験と訓練」が必要なのだろう、と筆者は考えている。

【文献】 1) 大澤光：「やらない」症候群，日本応用心理学会第71回大会論文集，2004年9月

2) 日本地理学会・地理教育専門委員会：大学生・高校生の世界認識の調査報告（イラクがわからない大学生が44%もいる！世界認識を高めるための3つの提言）2005年2月 <http://wwwsoc.nii.ac.jp/ajg/organization/committee2003/chirikyoku050222.pdf> (おおさわ みつる)

課題遂行コストとリスク教示が違反行動に及ぼす効果

○和田一成¹⁾ 白井伸之介²⁾ 篠原一光²⁾ 神田幸治³⁾ (非会員) 中村隆宏⁴⁾ 太刀掛俊之²⁾

(¹⁾ 平安女学院大学短期大学部 (²⁾ 大阪大学大学院人間科学研究科 (³⁾ 名古屋工業大学大学院 (⁴⁾ (独) 産業安全研究所)

キーワード：違反行動、課題遂行コスト、リスク教示

【研究目的】日常の様々な場面において、われわれは、決められた作業を省略するなどの違反行動を取ることがある。本研究は、違反行動の発生に、課題遂行にかかるコストとリスクの認知がどのような影響を及ぼすかを検討した。

実験では、課題遂行コストとして作業にかかる時間を、リスク教示では違反行動により生じるかもしれないやり直し作業の回数を操作した。時間的コストの要因は、作業の長短を実際に体験するため頑健に違反行動に影響することが予想される。一方で、違反の結果生じるやり直し作業が多いという情報は、リスクが大きいという情報であり、ある程度違反行動が抑制されることが予想される。さらに、現実場面では、面倒は避けたいが危険も避けたいという競合にさらされることが多く、両者の交互作用についても検討する必要がある。本実験は、以上のような目的と予想を持って実施された。

【方法】

実験参加者 大学生・大学院生 23 名 (男 17 名、女 6 名、平均年齢 25.3 歳) であった。

デザイン コスト (被験者内：小 vs. 大) × リスク (被験者間：小 vs. 大) の 2 要因混合計画であった。群の人数は、リスク小群 12 名、リスク大群 11 名であった。

課題 コンピュータを用いて、二種類の課題を行った。

知覚判断課題では、試行の最初に「*」が提示され、次にその試行の基準が提示された。その 0.5 秒後に課題文字 (アルファベットまたは 1 桁の数字) が提示され、実験参加者は、課題文字が基準とあっているかどうかを判断し、合っていれば「1」、違っていれば「2」のキーを押した。基準は、「偶数」「奇数」ほか、計 6 種類であった。課題遂行中は画面の下部にその試行の試行数が出ていた。

試行数確認課題では、知覚課題が一つ終了するたびに試行数の確認を要求した。半分の試行では、画面に「第〇〇試行終了」というメッセージが提示され、その下に「次へ」というボタンが同時に提示された (同時提示試行)。残りの半分の試行では、「次へ」ボタンが先に提示され、数秒遅れて「第〇〇試行終了」と提示された (遅延提示試行)。いずれの場合も、メッセージの有無にかかわらず、「次へ」をクリックすると次の試行に進むことができた。被験者の課題は、メッセージの試行数を確認してから「次へ」ボタンをクリックして次の試行に進むことであった。「次へ」ボタンが提示されてから「第〇〇試行終了」のメッセージが提示されるまでの時間が操作され、2 秒遅延 (コスト小条件) と 5 秒遅延 (コスト大条件) の 2 種類が設定された。従属変数として、確認段階での確認省略率と「次へ」がクリックされるまでの時間を測定した。手続き まず知覚判断課題を説明し、続いて終了試行数を毎回確認するように教示した (試行数確認課題)。リスクの操作は、教示で行った。半分の参加者には、確認を怠ったときにプログラムの間違いが起こった場合、試行の追加が 1 回単位で増加する (リスク小条件) と教示した。もう半分の参加者には、試行の追加が 10 回単位で増加する (リスク大条件) と教示した。教示後、練習を行い、手続きを理解したことを確認してから本試行を行った。

実験は、48 試行 × 4 ブロックを 2 回行った。半分の被験者には、前半 4 ブロックで 2 秒遅延条件を、後半 4 ブロックで 5 秒遅延条件を行った。残りの半分は逆の順序であった。最

後にデータ使用についての承諾を確認して実験を終了した。

【結果と考察】

違反者のカウント 1 ブロックにつき 5 回以上の確認の省略を行っていた場合、意図的な省略を行ったものとみなして、違反行動者としてカウントした。結果を Table 1 に示す。

確認省略率 違反行動者 (リスク小群 9 名、リスク大群 10 名) のブロック毎の確認省略率を算出し (Figure 1)、その値を逆正弦変換し、リスク (小/大) × コスト (小/大) × ブロック (1-5) の 3 要因分散分析を行った。その結果、コストの主効果のみが有意であり ($F(1,17) = 5.50, p < .05$)、コストが大きいほど確認省略率が高かった。

確認に要した時間 違反行動者を対象に、試行数の確認に要した時間を分析した (Figure 2)。同時提示試行での確認時間を対数変換し、リスク × コスト × ブロックの 3 要因分散分析を行った結果、コストの主効果が有意になる傾向が示された ($F(1,17) = 3.92, p = .06$)。つまり、コスト小条件の方が、大条件よりも、確認時間が長かった。その他の有意な効果は得られなかった。同時提示試行においてコストの効果が示唆されたことから、参加者が、コストの大きいブロックで、メッセージの遅延時だけではなく、確認行動全般についての省略傾向を高めたことが示唆される。

以上の結果から、違反行動の発生には課題遂行コストが影響することが示された。リスク要因の影響については、今後より詳細な検討が必要である。

Table 1 各条件における違反行動者

リスク	コスト小		コスト大		
	%	人	%	人	
小	$n = 12$	75.0	9	66.7	8
大	$n = 11$	72.7	8	90.9	10

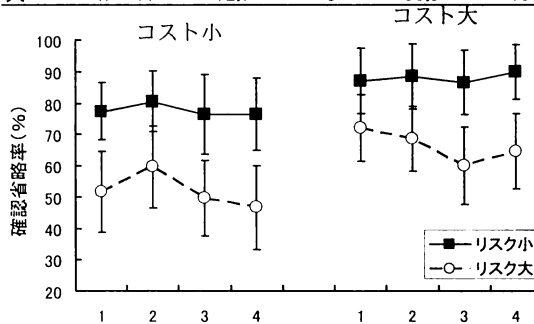


Figure 1 各条件における確認省略率

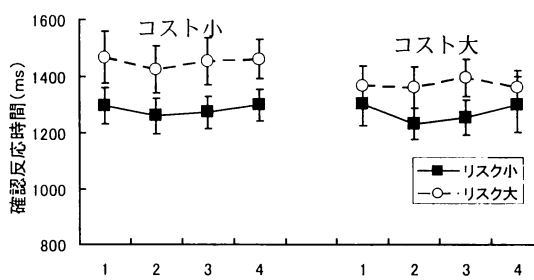


Figure 2 各条件における確認反応時間

* 本研究は平成 16 年度厚生労働科 研費補助金労働安全衛生総合研究事業により実施された一連の研究の一部である。

(わだ かずしげ・うすい しんのすけ・しのはら かずみ
つ・かんだ こうじ・なかむら たかひろ・たちかけ としゆき)

企業選択に見られる大学生の職業観(3)

— 特に、1年生前期の性別による比較 —

和田 美知子

(城西短期大学)

キーワード：企業選択, 職業観, 大学生

【研究の目的】本年度から共学になり、募集活動を通して進路について女子との考え方の違いを実感した。入学時の差異を把握しておくことは今後の進路指導にも役立つと思うが、1期生は人数が少ないので、とりあえず時期もサンプル数もちょうどよい手持ちのデータで、四大文系1年生男子と短大文系1年生女子の2群間の比較をしてみることにした。男子短大生は編入希望者が多いので代替としてこの2群を選んだが、これにより特有の傾向がみられるかどうかを検証する。

【方法】(1)調査対象者：埼玉県内の四大文系1年生男子299名(A群とする)と短大文系1年生女子260名(B群とする)である。(2)調査材料：①就職先の選択基準30項目(表1参照)について、“非常に重視する”から“全く重視しない”までの、6件法で回答を求めた。②企業の採用基準の認識16項目について、“非常に重視する”から“全く重視しない”までの、6件法で回答を求めた。なお、質問項目は「就職に関する意識」(宮沢,1990)を参考に作成した。(3)手続き：1998年7月に各教室において教示を読み上げて実施した。

【結果】どちらも6件法であるので、“非常に重視する”から“全く重視しない”まで、順に1から6までの点数をつけ

てすべての集計と分析を行った。

①就職先の選択基準について

・平均値の低い(重視している)項目は「仕事内容」「給料」「リストラ」「企業の安定性」の順であるが、F-t検定の結果、男子が女子より有意に重視するのは「能力」「昇進」等、女子が男子より有意に重視するのは「勤務時間」「男女格差」等であった。

・主因子法・バリマックス回転により因子分析を行い、5因子を抽出した結果を表1に示す。累積寄与率は40.4%だが、共通性の低い7項目を除いても46.7%にしかならなかった。因子Iは、仕事に対する自分の能力に関する項目から構成されているので『能力志向』の因子と解釈した。この因子は、ハーズバーグ(Herzberg, F.)の二要因理論における動機づけ要因に該当している。因子IIは、企業の社会的評価を主とした項目なので『企業志向』の因子と解釈した。因子IIIは、時間的・金銭的ゆとりに係わる項目なので『余暇志向』の因子と解釈した。この因子は、二要因理論における衛生要因にあてはまる。因子IVは、広く生活の豊かさに関連する項目から構成される『生活志向』の因子、因子Vは、長期間にわたって働き続けるための『安定志向』の因子と解釈した。

②企業の採用基準の認識について

・平均値の低い(重視されると認識している)項目は「面接時の印象」「能力・才能」「就職への熱意」「採用試験の成績」の順、反対にあまり重視されないと思っている項目は「出身地」である。「縁故」以外の15項目は男子より女子の方が重視されると認識しており、F-t検定の結果、その内11項目の差が有意なものであった。

・主因子法・バリマックス回転により因子分析を行い、3因子を抽出した。累積寄与率は43.94%だが、共通性の低い3項目を除いても49.9%にしかならなかった。因子Iは、「就職への熱意」「生活」「能力・才能」「面接時の印象」等の『個人』因子、因子IIは、「出身大学・学部」「学業成績」等の『大学』因子、因子IIIは、「家族構成」「親の職業」「出身地」等の『家族』因子と、それぞれ解釈した。

【考察】因子分析の因子寄与率の低さの原因が、この2群の特徴なのか、分析ソフトを替えたためなのかを確認する必要があるが、本研究の分析によって次の点が明らかになった。①2つの設問とも、四大1・2年の男女間よりも、有意差のある項目が多かったのは、入学時点では短大生の方が就職に向けての意識が高いことを示していると思われる。②就職先の選択基準については、累積寄与率が低かったので抽出する因子の数を増やしたが、妥当な因子が抽出できた。(因子Iと因子IIIは普遍である。)

【引用文献】

宮沢秀次 1990 大学生の就職意識に関する研究
名古屋経済大学・市邨学園短期大学人文科学論集
(わだ みちこ)

表1 就職先の選択基準についての因子分析ならびに平均の差の検定結果

	項目	因子分析		平均値(SD)	F-t 検定
		負荷量	共通性		
因子 I	27. 仕事(職業)への適性	0.663	0.444	2.03(1.013)	
	26. 経営者の手腕・能力	0.628	0.486	2.64(1.094)	<
	29. 業種や事業内容	0.594	0.391	2.26(1.068)	>
	3. 能力や才能の発揮の可能性	0.566	0.390	2.35(1.065)	<<
	8. 技術力・企画力・開発力	0.554	0.412	2.85(1.125)	<<
因子 II	16. 仕事内容	0.422	0.233	1.83(0.957)	
	25. 資格取得の可能性	0.389	0.304	2.91(1.137)	
	22. 企業の知名度	0.666	0.550	2.93(1.155)	
	23. 資本金	0.580	0.506	3.17(1.132)	
	21. 従業員の年齢構成比	0.556	0.428	3.43(1.194)	
因子 III	20. 企業内での縁故(コネ)	0.535	0.409	3.59(1.271)	
	18. 企業の規模	0.531	0.484	2.96(1.180)	
	24. 企業の業績(実績)	0.506	0.621	2.83(1.133)	
	30. 勤務時間	0.694	0.515	2.27(1.126)	>>
因子 IV	19. 残業の多さ	0.670	0.511	2.78(1.192)	
	2. 休日・休暇の多さ	0.552	0.375	2.16(0.996)	
	28. 転勤の可能性	0.462	0.296	2.79(1.288)	
	14. 給料	0.447	0.375	1.87(0.950)	
因子 V	7. 通勤の便利さ	0.434	0.208	2.19(1.008)	
	9. 福利厚生施設(保養所など)	0.698	0.580	3.30(1.093)	
	10. 社会的な貢献度	0.619	0.522	3.06(1.209)	
	15. 労働組合の有無	0.489	0.350	3.25(1.192)	
	13. 知人や先輩の勤務の有無	0.401	0.261	3.60(1.267)	>
因子 V	17. 社宅・寮の有無	0.392	0.201	3.80(1.226)	
	6. 海外出張の可能性	0.284	0.164	3.29(1.486)	
	5. 男女格差の可能性	0.280	0.170	3.20(1.322)	>>
因子 V	11. 失業のおそれ(リストラ)	0.581	0.541	1.94(1.209)	
	4. 企業の安定性	0.569	0.509	1.94(1.016)	
	1. 企業の将来性	0.533	0.486	2.23(1.055)	<
	12. 昇進の可能性	0.407	0.404	2.62(1.156)	<<

平均の差の検定：A群の方が有意に小さい(<< p<0.01, < p<0.05)
：B群の方が有意に小さい(>> p<0.01, > p<0.05)

注意機能尺度の作成の試み (8)

○鈴木 大輔・和田 裕一・岩崎 祥一
(東北大学大学院情報科学研究科)

キーワード: 注意、探索的因子分析、検証的因子分析、共分散構造分析

注意の機能分類の研究は、実験的研究に基づくものが多く、日常生活における注意の働きが先行研究で見出されてきた注意機能の分類とどの程度対応するかについては明らかでない。そこで我々は、Sohlberg & Mateer (1989) による分類を参考に、①内部に向けられる注意、②外部に向けられる注意、③維持、④切り替え、⑤分割の5つの注意機能カテゴリーを仮定し、これらの注意機能と日常生活に関連した行動場面における個人の注意特性や行動特性との対応関係について質問紙法を用いて検討し、2つの注意因子(能動的コントロール因子、多動性因子)からなる注意機能尺度を作成した(鈴木他, 2002, 2003)。しかし、各注意因子の寄与率が低く、因子妥当性が十分とはいえなかったため、質問項目やワーディングに修正を加え、再度注意機能関する因子構造を検討した(鈴木他, 2004)。その結果、鈴木他らが抽出した2つの注意因子の内容を一部含む3つの注意因子(分割、切り替え、多動性)を抽出したものの、各注意因子の寄与率は依然低く、切り替え因子の信頼性係数も0.43と低い値をとり、因子妥当性、内的一貫性ともに十分とはいえなかった。そこで本研究では、一部質問紙のワーディングを変更した上で、被験者数をさらに増やし、再度注意機能に関する因子構造を検討した。

＜方法＞

調査対象者: 426人(男性297人、女性129人)。

質問紙の構成: ①上述の5つの注意機能のカテゴリーを仮定し収集した注意機能に関する項目(43項目、5件法)に加え、構成概念妥当性を検討するために、②失敗行動傾向を測定するCFQ、③向性(E)、④神経症傾向(N)等の人格特性を測定するEPI、④衝動性傾向を測定するBIS-10をあわせて実施した。

＜結果および考察＞

注意機能に関する項目(43項目)について探索的因子分析(主因子法、promax回転)を行ったところ、3因子解による解釈が最適であると判断された。さらに抽出された各因子の因子負荷量が近似している項目、因子負荷量が0.4未満の項目を削除した上で再度因子分析を行い、14項目からなる因子を抽出した(表1参照)。さらに、検証的因子分析を行い、修正指標が他の因子へ高い数値を示した1項目を削除し、再度検証的因子分析を行った結果、満足しうる適合度指標が得られ(GFI=0.95, AGFI=0.92, RMSEA=0.06)、鈴木他(2004)が抽出したモデルとほぼ同様の3因子モデルが再度検証された。

第1因子は、当初仮定した5つの注意カテゴリーの⑤分割に該当する項目から構成されたため、「分割」因子と命名した。CFQ、EPIのE尺度、N尺度、BIS-10のすべての質問紙において、ほとんど相関はみられず、鈴木他(2002, 2003)が抽出した2因子モデルの「能動的コントロール」因子の注意の分割に関する項目がいくつか見られた。したがって、分割因子は、能動的コントロール因子の注意の分割の側面のみを反映した因子であると考えられる。能動的コントロール因子と各質問紙との相関係数を算出したところ、分割因子と同様、ほとんど相関はみられなかった。第2因子は、鈴木他(2002, 2003)が抽出した注意の維持の失敗に関わる2因子モデル多動性因子と類似した項目が抽出されたので「多動性」因子と命名した。BIS-10で中程度の相関がみられたものの(BIS-10: $r=0.44$, $p<.01$)、CFQ、EPIのE尺度、N尺度ではほとんど相関はみら

れなかった。そこで、2因子モデルの多動性因子と各質問紙との相関係数を算出したところ、CFQ、BIS-10で中程度の相関がみられ(CFQ: $r=0.46$, $p<.01$, BIS-10: $r=0.48$, $p<.01$)、これまで鈴木他(2002, 2003)が見いだした、2因子モデルの多動性因子とCFQとの間に中程度の相関があるとする知見と一致する結果となった。したがって、本研究で抽出された多動性因子は、2因子モデルの多動性因子ほど失敗行動傾向を強く反映したものではないといえる。信頼性係数は0.73となり、内的一貫性が認められた。第3因子は、「切り替え」因子と命名した。EPIのE尺度で中程度の相関がみられたが(E: $r=0.54$, $p<.01$)、CFQ、EPIのN尺度、BIS-10ではほとんど相関はみられなかった。特に、鈴木他(2004)の切り替え因子で低かった信頼性係数は0.68となり、内的一貫性に若干の向上がみられた。また、因子間相関は、各因子間ともに弱い相関が見られた(第1因子-第2因子: $r=-0.23$, $p<.01$, 第2因子-第3因子: $r=0.21$, $p<.01$, 第3因子-第1因子: $r=-0.36$, $p<.01$)。

本研究で抽出された3因子モデルは、累積寄与率、適合度指標、信頼性係数ともに上昇し、鈴木他(2004)の結果に比べ因子妥当性、内的一貫性ともに概ね認められる結果となった(鈴木他(2004)の3因子モデル累積寄与率: 32.3%, 適合度指標: GFI=0.88, AGFI=0.82, RMSEA=0.04; 鈴木他, 2004)。今後、2因子モデル、3因子モデル双方について検証し、注意行動指標との対応関係について検討していく必要があると思われる。

表1 注意機能に関する項目の探索的因子分析、検証的因子分析の結果

質問項目	探索的因子分析			検証的因子分析
	F1	F2	F3	
第1因子: 分割 ($\alpha=.74$)				
13. ⑤2つ以上のことを同時並行してできる。	0.74	0.04	-0.01	0.72
34. ⑤作業に集中しながら、同時に他のことも考えられる。	0.67	0.02	0.08	0.65
12. ④複数の本を同時に読み進めることができる。	0.61	-0.07	0.05	0.52
1. ⑤作業の手を休めることなく、人の話を聞ける。	0.56	-0.07	-0.01	0.54
24. ⑤多くのことに注意を払うのは得意だ。	0.53	-0.01	-0.05	0.47
6. ②騒がしい状況でも相手の話を聞ける。	0.50	0.06	-0.14	0.51
第2因子: 多動性 ($\alpha=.73$)				
41. ③長時間じっとしてられない。	0.00	0.90	-0.03	0.83
9. ③講演会や音楽界などで長時間じっと座っているのは苦手だ。	-0.12	0.71	-0.18	0.67
43. ③落ち着きがない。	0.10	0.61	0.20	0.65
38. ①人の話を聞いていないといわれる。	-0.01	0.44	0.18	0.41
第3因子: 切り替え ($\alpha=.68$)				
39. ④済んだことをくよくよ考える。	0.10	0.05	0.67	0.69
16. ④うまく気持ちの切り替えができる。*)	0.05	0.11	-0.65	0.70
40. ①作業中、何をやるのか目的を失う。*)	0.01	0.12	0.50	
26. ④新しい作業を行うとき、うまく頭の切り替えができない。	-0.21	0.03	0.49	0.51
負荷量平方和合計(因子負荷量2乗和)	3.06	1.55	1.15	
負荷量平方和分散(寄与率)(%)	21.87	11.04	8.23	
負荷量平方和累積(累積寄与率)(%)	21.87	32.92	41.14	

注) 項目欄の最初の数字は質問紙の番号、2つ目の数字は仮定した5つの注意機能のカテゴリーに対応する。

*) 検証的因子分析の際、修正指標が高いため削除した項目。

**) 逆転項目。

(すずき だいすけ・わだ ゆういち・いわさき しょういち)

評価状況が反応時間課題に与える影響

○田中 翔子¹⁾ 長野 祐一郎²⁾ 松田 浩平²⁾

(¹⁾ 文京学院大学大学院人間学研究科 ²⁾ 文京学院大学人間学部)

キーワード：評価状況、反応時間、視線

はじめに

課題成績は、動機づけのレベルによっても決定される。人間の能力は学習や課題の違いによって異なるばかりでなく、動機づけの文脈的意味づけによっても変化する(Fitts & Posner, 1967)。このことから、課題の種別と同様に、課題成績の量的決定要因とし、動機づけも考慮しなければならない。Friesen & Kingstone(1998)は、Posner の空間手がかり課題を用いて他者の視線方向の変化が観察者の注意に影響を及ぼすことを実験的に示した。画面中央に線画で呈示された顔の視線を左右方向に変化させ、顔の左右どちらかに呈示されるターゲットに対する反応時間を計測した。その結果、視線方向とターゲットの出現位置が一致する場合には、一致しない場合に比べて、ターゲットに対する反応に促進効果を見出した。一般的に反応時間課題を用いた研究では、実験参加者の課題への動機づけに関しては考慮されることが少ない。本研究では課題遂行時における動機づけの文脈的意味も検討する必要があると考えた。

目的

選択反応時間課題を行う際に、他者からの評価という動機づけ要因が実験参加者の課題遂行にどのような影響を与えるのかを、反応時間を指標として検討する。

方法

【実験参加者】心理学を専攻している大学生 20 名 (平均 20.7 歳) であった。全員右利きで、矯正を含み正常視力であった。

【装置】ノート型 PC(東芝 PSJ3115LXG115; Microsoft Windows XP Professional ver.2002 SP1) + 外付けテンキー (LOAS TNK-SU211SL)。頭部まで背もたれのある椅子で、深く寄りかかるように座るよう指示し、観察距離を約 57 cm に保つようにした。刺激呈示と計測は E-Prime (Psychology Software Tools E-prime ver.1.1 SP3) を用いた。

【実験計画】2(評価状況/被験者間) × 2(反応時間課題; 呈示位置/被験者内) × 4(反応時間課題; 潜時/被験者内) の混合計画。

【刺激と課題】眼と鼻による顔の線画とした。瞳は右左のいずれかを向き、ターゲットは眼の左右いずれかに呈示された。課題はターゲットの定位に対する選択反応であった。先行刺激からターゲットまでの潜時は、100, 300, 600, 1000ms とした。視線方向とターゲットの出現位置が一致しているものを一致条件、一致しないものを不一致条件とした。

【手続き】実験は、雑音の少ない静かな環境で行われた。参加者は、呈示されたターゲットに対して「できるだけ早く、かつ、正確に反応する」こと、「実験中は画面に集中する」ことを教示された。練習試行によって、反応の仕方を十分に理解した後、本試行を行った。課題の間には最長 5 分間の休憩時間を設けた。実験群では、参加者の右後方に評価者を置き、評価状況を作った。試行では、瞳のない眼と鼻の画像(1000ms 呈示)、瞳を含む眼と鼻の画像、同様の画面にターゲット刺激を含む画像が連続呈示された。ターゲット刺激を含む画像は、参加者が指示されたキーを押すか、呈示されてから 3000ms 経過した時点でブランク画面(500ms 呈示)に切り替わった。なお、誤った反応をした場合のみ、そのことを伝える画面が表示された(680ms 呈示)。

結果

本試行では、同一の課題を2回実施したが、1回目の課題は参加者が反応を熟達させるためのものとし、分析対象は2回目の課

題のみとした。尚早反応・エラー反応を除いた上で、外れ値を除き、平均と標準偏差を求めた。個人内での標準偏差があまりにも大きい参加者のデータは削除した。実験計画に基づき、評価状況、呈示位置、潜時を独立変数として三元配置分散分析を行った。この結果、潜時の主効果のみが認められた ($F(3,51)=54.85, p<.01$)。単純主効果検定より、潜時=100ms の反応時間は、他の潜時と比べて長くなった。呈示位置と評価状況の主効果、交互作用は認められなかった。しかし、評価の有無によって統計的な差は見られないものの、評価あり条件では一致条件が常に短い反応時間を示しているのに対し、評価なし条件では比較的長い潜時の場合に、入れ替わりが生じている。

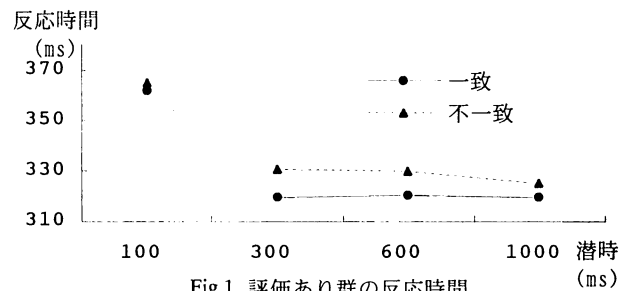


Fig.1 評価あり群の反応時間

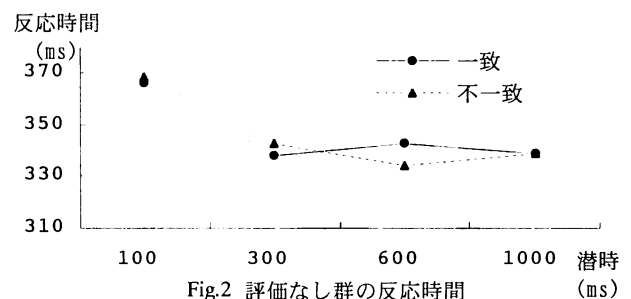


Fig.2 評価なし群の反応時間

考察

潜時=100ms のときに反応時間が長くなることから、先行刺激とターゲット刺激の間隔が短い場合は、先行刺激が入力・処理される前にターゲット刺激が呈示されてしまい、ターゲット刺激に対する反応が遅くなると考えた。また、これまでの研究では潜時が比較的短い場合に、一致条件で反応に促進効果が示されている。しかしながら、先行研究と同様の結果は得られなかった。

今回の実験では、他者からの評価状況が実験参加者の反応時間に影響を与えることは確認できなかった。評価者は参加者にとって強い影響を与えるような立場ではなく、参加者が他者から評価を受けているという認識を持っていなかった可能性がある。反応時間自体に効果を与えることは確認できなかったが、反応時間は様々な処理過程の結果であり、他者からの評価という状況が処理過程に影響しないとは言いきれない。評価状況が処理過程に及ぼす影響は、行動指標と生理指標を組み合わせると総合的に判断する必要があるだろう。

引用文献

Friesen, C.K., & Kingstone, A. 1998 The eyes have it! : Reflexive orienting is triggered by nonpredictive gaze. *Psychonomic Bulletin & Review*, 5, 490-495

(たなか しょうこ・ながの ゆういちろう・まつだ こうへい)

歩き方が点字ブロックの認知に及ぼす影響

— 白杖を利用する歩き方と利用しない歩き方の比較 —

○布川清彦 中野泰志 井手口範男

(東京大学先端科学技術研究センター)

キーワード：視覚障害、点字ブロック、歩き方

【はじめに】

視覚障害者が街を安全で快適に移動するために考案された点字ブロックは、視覚障害者のナビゲーションシステムの一つとして研究・開発が進められており、2001年には突起の形状・寸法とその配列がJIS(T9251)化された。しかしながら、ユーザである視覚障害者からは、歩き方によって、その分かりやすさが変わることが指摘されている。そこで本研究では、歩き方による点字ブロックの分かりやすさの違いを定量的に検討した。

【実験1】点字ブロックを利用した歩き方

目的：日常の歩行場面において、点字ブロックを利用した歩き方にどのような方法があるのか、また、最も活用している歩き方はどれなのかを明らかにする。

方法：日常的に単独歩行を行っている全盲の成人3名(20代後半～30代前半、女性1名、男性2名)に、点字ブロックを利用してどのような歩き方ができるのかを実演してもらい、各歩き方に対して順位づけとマグニチュード推定法による評価を行うと同時に、理由に関するインタビューを行った。

結果と考察：点字ブロックを利用した歩き方には、a)白杖利用の有無、b)点字ブロックを足で踏んで歩くかどうか(両足、片足、なし)の2条件の組み合わせから次の5種類あることが分かった。1)白杖を使って両足でブロックの上を歩く(杖有両足)、2)白杖を使って片足だけブロックを踏んで歩く(杖有片足)、3)白杖を使ってブロックの横を歩く(杖有足横)、4)白杖を使わずに両足でブロックの上を歩く(杖無両足)、5)白杖を使わずに片足だけブロックを踏んで歩く(杖無片足)。このうち、最も利用されているのは「杖有片足」であった(表1)。この理由として、この歩き方には次の2つの重要な利点がある事が分かった。1)白杖により一歩先の情報(障害物だけでなく、進行方向やサイドへの出っ張りの有無)が効果的に入手できる。2)足裏によってブロックと床との間の触覚的コントラストを利用しやすい。この白杖を使いながら片足で点字ブロックを確認しながら歩く方法以外は、順位づけとマグニチュード推定共に個人差が見られた。

【実験2】歩き方による突起形状変化の認知の違い

目的：全盲視覚障害者が点字ブロックを利用した5つの歩き方を用いて歩行する場合に、各歩き方での線状ブロックから点状ブロックへの変化に気づくまでの距離を指標として、歩き方と点字ブロックの分かりやすさの関係を明らかにする。

方法：線状ブロックから点状ブロックへの変化を認知するために必要となる距離を測定するために、24枚の点字ブロックを直線に並べた歩行路(720cm)を作成した(図1)。線状ブロックは、線の方向が続くように並べた。途中で6枚続きの点状ブロックを配置した。点状ブロックまでの線状ブロックの枚数は、5、9、11、15枚の4種類で、ランダムに提示された。1枚目の点状ブロックには左右へ2枚ずつ点状ブロックを張り出しとして配置した。被験者は実験1と同じ3名で、被験者の課題は、実験1で明らかになった5つの歩き方のうち、指定された歩き方によって点字ブロックを利用して歩き、点状ブロックを検出したら、合図をしてその場で停止することであった。線状ブロックと点状ブロックの境から被験者が変化に気づいて停止した位置までの距離を計測した。こま

まを1試行とし、各歩き方につき9試行、全45試行行った。**結果と考察：**全被験者が、全ての試行において線状ブロックから点状ブロックへの変化に気づいた。図2に各歩き方において、変化を検出した位置(平均距離)を示した。杖を使う歩き方は使わない歩き方よりも変化に早く気づき、被験者B,Cでは、ブロックの切り替わりの境界よりも手前で気づいていた。つまり、白杖を利用する歩き方は、利用しない歩き方に比べて、突起の形状変化がより分かりやすいと言える。また、これにより、実験1での、白杖により一歩先の情報が効果的に入手できるという利点が実証された。

【まとめ】

点字ブロックは、JISとして規格が決まっていますが、歩き方によってその分かりやすさが異なることが明らかになった。つまり、歩き方によって、点字ブロックを利用する時の安心感や安全性が異なると言える。従って、本研究の結果を教育やリハビリテーションに応用していく必要があると思われる。

表1. 実験1：歩き方の順位とマグニチュード推定

歩き方	順位			マグニチュード推定		
	被験者A	被験者B	被験者C	被験者A	被験者B	被験者C
杖有両足	2	3	2	70	60	85
杖有片足	1	1	1	80	80	90
杖有足横	5	2	3	30	75	70
杖無両足	4	5	4	40	40	40
杖無片足	3	4	5	50	60	10

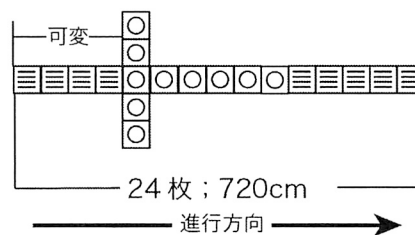


図1. 実験2：歩行路

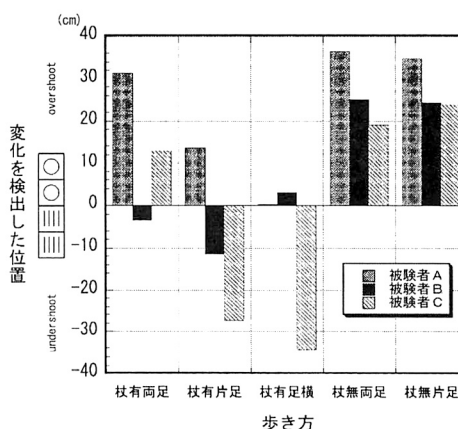


図2. 実験2：線状ブロックと点状ブロックの境界から被験者が変化に気づいて停止した位置までの距離(cm)

(ぬのかわ きよひこ・なかの やすし・いでぐち のりお)

犯罪報道のインパクトとデモグラフィック要因の関係

— 地域住民に対する意識調査より —

○小野寺理江

桐生正幸

(日本学術振興会・名古屋大学大学院環境学研究科)

(山形県警察本部科学捜査研究所・関西国際大学)

Key words: fear of crime, impact, demographics

目的

近年の犯罪情勢は、140万件前後で推移していた昭和期の約2倍の水準で、強盗や住宅対象の侵入盗の増加、少年による凶悪犯の多発、来日外国人等による組織犯罪の深刻化等、依然厳しく(警察庁, 2004)、「安全な日本」とは程遠くなってしまっている。それを反映するように、自分も犯罪被害に遭うかもしれないという不安が社会現象になりつつある。しかし、絶え間なく報道される犯罪に対し、どこか自分とは関係のないものとして他人事のような感覚をもつ場合も少なくないのではないだろうか。

そこで本報告では、どのような犯罪が衝撃性を持ち、どのような要因をもつ人が影響を受けるのか、その影響はどのようなものか、つまり、犯罪報道による犯罪の衝撃性(インパクト)とデモグラフィック要因との関係を明らかにするため、最近の印象に残った犯罪の自由記述を行った。

方法

調査対象地域 愛知県名古屋市中区におけるA学区1718世帯に調査冊子を配布したところ、1266部の回収があり(回収率75%)、そのうち、白紙等を除く1074部の有効回答が得られた(女性857名、男性217名、回収率64%)。20歳代が37名、30歳代140名、40歳代184名、50歳代228名、60歳以上463名、年齢無記入22名であった。

手続き 意識調査の配布は、A区における11町内会の会長に依頼し、全戸配布した。表紙をつけた12ページからなる意識調査冊子と、回答者への依頼文書および謝礼(シャープペンシル)を同封した。

平成17年2月14日からの3日間で町内会長を訪問し、その後、各町内会長は組長に相当部数を渡し、組長から各世帯へ配布された。各町内の組長への持参を3月1日締め切りとし、3月4日からの3日間で町内会長を訪問し、回収された調査用紙を受け取った。

質問紙 調査項目は、①町内に関する質問(町内会の活動性の評価等)、②日頃の犯罪不安感や犯罪に対する行動に関する質問(犯罪不安、犯罪リスク認知、防犯行動)、③地域における犯罪リスク認知場所に関する質問(地図への記入等)、④最近の犯罪に関する質問(犯罪の身近さの評価等)、⑤フェイスシート(年齢、性別、職業、犯罪被害経験等)、⑥特性不安(新版STAI)の大きな6つの問いで構成された。

分析方法 本報告では、これらの項目のうち、④の中の「最近の犯罪で印象に残ったもの(自由筆記)」、⑤の中の「年齢、性別、同居者」に焦点をあてて分析を行った。

最近の印象に残っている犯罪についての自由記述において、出現する単語を変数として、該当する場合は1、該当しない場合は0とコーディングした。抽出したのは52の変数であった。それらの変数を用いて数量化理論Ⅲ類を行い、得られたカテゴリ・スコアによってクラスター分析(ユークリッド平方距離、ウォード法)を行った。

結果と考察

数量化理論Ⅲ類の結果、累積寄与率12.36%で2軸を抽出した(第1軸:固有値=0.53、相関=0.72;第2軸:固有値=0.43、相関=0.65)。得られたカテゴリ・スコアを用いてクラスター

分析を行ったところ、3つのクラスターに分類できた。数量化Ⅲ類とクラスター分析の結果をFigureに図示する。

第1軸は衝撃性(プラス側へ衝撃性が高い、つまり具体性高い)、第2軸は世代性(マイナス側が若い年代)を示す次元であると解釈できる。各クラスターのサンプルから、犯罪インパクトの特徴を検討した。

高衝撃性低世代群:印象に残った犯罪が、幼児や小学生が巻き込まれた最近の事件の具体的記述であった。20・30歳代で、子供が幼児、小学生の男児か女児をもつ若い親といえる。衝撃性が高く、被害者と実子が近似していることから、具体性を持ち、実子も同じような犯罪に巻き込まれるかもしれないという不安が高いと予想される。

中衝撃性中高世代群:印象に残る犯罪が多少具体性をもつものの、子供が中学生、高校大学生、それ以上となり、子供の被害への不安程度は低いことが予測される。小学校が対象となる不可解な事件が続いたことは印象として残っているようである。

低衝撃性高世代群:同居が夫婦のみ、もしくは単身の高齢者で、具体的犯罪名を挙げるのではなく抽象的表現をし、衝撃性の低い群である。男性の記述が多く、また世の中を傍観しているような記述の特徴がある。

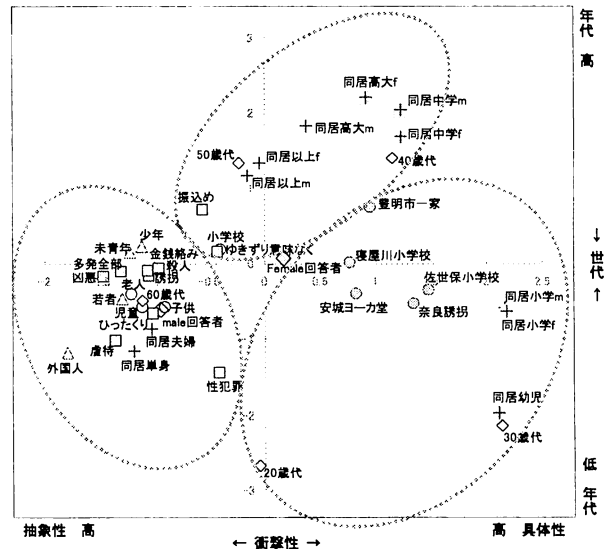


Figure 数量化Ⅲ類およびクラスター分析の結果

他人事になる要因として、家族構成、世代、性別が指摘できる。若い親にとって、小さな子供を守るため、やはり他人事とは思えず、従って実子と同世代に関わる犯罪には敏感であり、衝撃性により具体性を帯びるものと考えられる。今後の調査および分析により、本報告で取り上げていないデモグラフィック要因と衝撃性との関係性について、犯罪不安も含め検討していく予定である。

(おのぞらまさえ、きりうまさゆき)

ERP による虚偽検出

横井 幸久

(愛知県警察本部科学捜査研究所)

キーワード：ERP、虚偽検出、N400

【目的】精神生理学的虚偽検出検査に event related potential (ERP) を用いた研究例は多数みられる(平, 1998)。その大部分は guilty knowledge test (GKT) に関する研究であるが、GKT は犯人のみが知りえる事柄の存在を前提としているため、適用範囲が限定される。ERP を GKT パラダイムに応用するのみでは GKT の短所の改善にはつながらない。

ところで、ERP の 1 つである N400 は、先行文脈から逸脱した語に対し発現することが知られている成分である。Kutas と Hillyard(1980)は、短文を 1 単語ずつ呈示して、先行文脈から意味的に逸脱した語に対して N400 が生起することを報告した。彼らが用いた文は意味記憶的知識ベースの命題であったが、その後 Fischler ら(1985)により、エピソード記憶ベースの逸脱語にも N400 の生起が報告された。さらに、Boaz ら (1991) は GKT パラダイムで、非裁決項目に対し N400 が生起することを示し、エピソード記憶に基づく逸脱語への N400 生起を追試するとともに、虚偽検出検査への応用可能性を示している。

横井(2004)は模擬犯罪実験を行い、犯人でなくとも事件の詳細が知られていて GKT が適用できないという状況を再現して、刺激語に対する N400 を取得した。先行研究の結果に基づく予測に対し、犯人群の波形パターンは合致しなかったが、無実群では合致し、GKT が適用できない状況でも N400 を指標として犯人と無実者の識別が可能であることが示唆された。ただし、参加者の内省報告から、呈示文の意味的処理が促進されなかったことが伺われた。このことが、予測と得られた結果との部分的不一致をもたらしたのかもしれない。

そこで本研究では、横井(2004)で先行研究からの予測と波形パターンが合致しなかった犯人群について、復唱よりも容易かつ意味的処理が促進されるよう、正誤判断課題を用いて、同様の模擬犯罪実験を行った。

【方法】参加者は男性警察職員 5 名 (平均 38.4 歳)。手続きは横井(2004)に準じている。参加者には模擬窃盗犯罪を実行させたのち、「犯人が行ったはずの行動」を記述した文章を読ませ、キーワードを記憶させた。その後、刺激文をディスプレイに呈示して、ERP を取得した。各刺激文は文節毎に継続的に呈示され、文に続いてアスタリスクが呈示された。参加者の課題は文の正誤を判断し、アスタリスクを合図に「ハイ」または「イエエ」と返答することであった。刺激文は、主語-目的語-述語の順に呈示され、主語 2 種類(「犯人は」/「あなたは」)、目的語 2 種類(キーワードに比較して真/偽)の、4 カテゴリー 10 種類ずつとした。ERP は Fz、Pz、Cz から導出し、基準電極は両耳朶結合とした。また、試行中の垂直眼球運動をモニタした。

【結果と考察】各参加者の生データから、 $\pm 100 \mu V$ 以上の眼球運動が混入した試行を取り除いて、参加者毎に加算波形を求めた(加算回数は 20~40 回)。Fig. 1 に Cz 部位から導出した波形のグランドアベレージを示す。

被験者毎の加算波形について、目的語のオンセット後 300~500msec の区間で、陰性波形の頂点電位、陽性波形と陰性波形との頂点電位差、陰性波形の面積($\mu V \times msec$)の値を求

め、呈示文間で比較した。しかしながら、いずれの指標でも、文の種類に有意な主効果は認められなかった。特に、偽である目的語と真である目的語との間に有意差は見られなかった。また、横井(2004)のデータと本実験のデータとを比較したところ、後者の方が全体的に陰性波形の振幅が減少し、呈示文間の差も小さくなっていったが、偽である目的語に対する陰性電位の増大は認められなかった。

横井(2004)で用いた単純復唱課題に比べ、本実験で用いた正誤判断課題の方が文内容の意味的処理は促進されるはずである。にもかかわらず、本実験でも逸脱語に対する N400 の発現は明瞭ではなかった。この点から考えると、横井(2004)で犯人群の波形パターンが予測と合致しなかったことは、参加者による呈示文の意味的処理の不十分さに帰結させることはできない。今後は、参加者の課題以外の変数を操作して、犯人群においても逸脱語への N400 生起が促進されるようなデザインを模索していく必要がある。

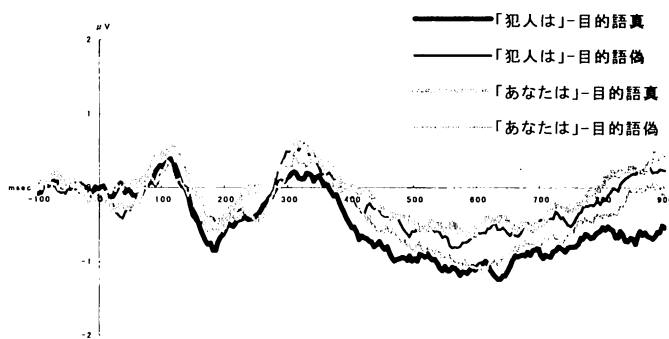


Fig.1 Ground average waveform at Cz.

【引用文献】

Boaz, T.L.・Perry, N.W.・Raney, G.・Fischler, I.S.・Shuman, D. 1991 Detection of Guilty Knowledge With Event-Related Potentials. *Journal of Applied Psychology*, 76(6), 788-795.

Fischler, I.・Childers, D.G.・Achariyapaopan, T.・Perry, N.W., Jr 1985 Brain Potentials During Sentence Verification: Automatic Aspects of Comprehension. *Biological Psychology*, 21, 83-105.

平伸 1998 事象関連電位による虚偽検出 日本鑑識科学技術学会誌 3(2), 21-35.

Kutas, M.・Hillyard, S.A. 1980 Reading Senseless Sentences: Brain Potentials Reflect Semantic Incongruity. *Science*, 207(11), 203-205.

横井幸 2004 ERP による虚偽検出 犯罪心理学研究 42(特別号) 90-91.

(よこい ゆきひさ)

中学生のコンピタンスと心理に関する研究

橋本 泰子

桜美林大学国際研究科大学院

キーワード：中学生・コンピタンス・心理

【研究の目的】

1998年の文部省の「問題行動調査」では、公立の小中高における「暴力行為」が82年度の調査開始以来、最多であると報告された。中学生が大半を占め、目立った非行のなかった子が突発的に暴力をふるう「新しい荒れ」が出現している。1つには、子供達がストレスや不満を溜めていること。もう1つはストレスの爆発を自制する力が弱いことである。その原因として養老孟司氏は、「脳の前頭葉機能が低下し、行動の抑制が効かない」、森昭雄氏は「TVゲームには、前頭前野の脳行動を劇的に低下させるものが多い。放置によりキレやすく、注意散漫で、創造性を養えない大人になる」と警鐘を発している。今回、中学生を対象にコンピタンスと心理特性の関係の調査を実施した。

【方法】

対象は東京近県の公立の中学生で、1～3年までの生徒74名である（男子43名、女子31名）。方法は、集団式で、学年ごとに、熊大式コンピタンス尺度・星と波テスト・ワルテックテストを実施した。

【結果・考察】

1. コンピタンス尺度の結果
学年別の平均点の検定では、1年と2年では有意差なし。第I因子に1年（平均2.5）と3年（平均2.2）で有意差($p<.05$)が認められた。項目内容は、肯定的な自己評価に関するもので、3年生は、自分の能力を客観的に評価したり、受験が関係していると解釈される。第IV因子に2年（平均2.6点）3年（平均2.3点）で有意差($p<.05$)有り。項目内容は、自己統制に関するものである。

第V因子の総合的自己評価も、3年がやや低くなる。項目内容は、自分に満足しない、気持が不安定と、自分を客観視する発達課題の自己同一性と関係すると解釈される。

2. 星と波テスト

(1) コンピタンス尺度の高・低群間の検討

第V因子の平均得点から1/2±して学年別に高・低群に区分し検討をした。

3年の高・低群間で2項目に有意差有り。まず、月あり、高群57.1%、低群0%、さらに月が用紙の右側が75%である。月は、女性性と関係するので、高群は、母親との関係が肯定的で、低群は、母親との関係が稀薄と解釈される。小此木氏は幼児期に母親との信頼関係が形成されないと思春期に問題が再燃するとしている。これに一致すると考えられる。筆圧で、強い、高群57%、低群10%、薄い、高群0%、低群40%で有意差($P<.02$)有り。低群に抑うつや自信のなさが窺える。

(2) 学年別の検討

有意差の認められた項目は、流れ星で、1年0%、2年7.6%、3年24%、3年と1・2年間に認められた($p<.01$)友人関係や勉強での挫折体験が関係するようである。対人関係の距離を表す、海と星の距離を検討すると、3.1cm以上、1年17.2%

2年19% 3年32%で学年ごとに対人関係の距離が離れている、流れ星の多さとも関連するようである。

つぎに、有意差はないが、情緒の不安定さと関係する、大波と三角波を合計すると、1年77.4% 2年76.0% 3年72%から、全学年とも、落ち着きのなさや、焦燥感が認められる。このことが「キレ」やすさと関連するようである。全学年の7割の生徒が、外的刺激が誘因となって問題行動を生ずる可能性が窺われる。

空を黒く塗っている、1年8.6% 2年19% 3年16%出現している、抑うつ傾向を示す生徒を見落さないことも必要であろう。以上の結果から現在、不適応行動を起こしていない生徒でも、中学生は、心理的に不安定な年代であることの理解が必要であろう。

3. ワルテックテスト

(1) CPSの高・低群間の検討

2群間に有意差は無し。主な出現率と内容を解釈すると、高群は動物、遊具、低群は、顔、標識・図から、高群は、活動的でスポーツを好む、低群は対人関係に柔軟性を欠く。

(2) 学年別の検討

1年と3年で、図2の出現数に有意差($P<.01$)有り。顔、3年64% 1年25.8%、3年は、自我が芽ばえる時期で、他人の評価が気になるためであろう。

2年は標識・図、武器、から攻撃性、衝動性の統制が悪い。

【結語】

学年別に、発達課題があり、また個人別の心理的な問題もあり、約7割が、軽度であるが潜在的に情緒不安定の傾向がある。2年生は衝動の統制が困難でキレやすさに関係すると考察される。CPSの高群は母親の関係が肯定的に対し低群は稀薄でうつ傾向が窺われる。

【参考文献】

- 1) 養老 猛司 (2003)「バカの壁」新潮社
- 2) 森 昭雄 (2002)「ゲーム脳の恐怖」生活人新書
- 3) ブルーノ・リー (2000)「星と波テスト入門」川島書店

(はしもとたいこ)

日本語版自覚ストレス調査票の短縮版作成の検討

○木村 友昭¹⁾ 山岡 淳^{1,2)}

(¹⁾財団法人エム・オー・エー健康科学センター ²⁾文京学院大学大学院人間学研究科)

キーワード：ストレス、質問紙、主成分分析

【背景・目的】厚生労働省が進める政策「健康日本 21」では、ストレスを感じる人の低減が盛り込まれている。しかしながら、ストレスの標準的な計測法は定められていない。演者らは、地域保健や産業衛生におけるストレス測定のために、日本語版自覚ストレス調査票 (JPSS) を使用している[1]。これは、14 項目からなる自己記入方式の質問紙であるが、英語のオリジナル版においては、10 項目および 4 項目の 2 種類の短縮版が提案されている[2]。調査対象者の労力と時間の節約のため、JPSS 短縮版作成の可能性を検討する。

【方法】JPSS は、Cohen ら[3]のオリジナル版 (PSS) を岩橋ら[4]が翻訳し信頼性・妥当性を証明した尺度である。回答は 5 つの選択肢からなり、0-4 の得点を与えられる。すなわち、取りうる得点の範囲は、0-56 点である。得点が高いほどストレスが大きいことを示す。演者らは、JPSS をもとに、PC のタッチパネルを利用したアプリケーションを開発し[1]、データを収集した。「健康啓発に関する行事」の参加者に研究趣旨を説明し、同意を得た対象者が JPSS に回答した。2004 年 5 月 (静岡県)、同年 12 月 (青森県)、および 2005 年 3 月 (沖縄県) に調査を行った。これら 3ヶ所のサンプルを用い、性別、年代別、および地域別の比較を行った。得点を偏差値に変換し、ストレス度判定を試みた。次に、先行研究[2]の手順を準用し、日本語版の短縮化を試みた。すなわち、14 項目の回答データを主成分分析し (バリマックス法)、第 1 成分における寄与の小さい 4 項目を除去して 10 項目の短縮版 (JPSS-10) を作成した。さらに 1 項目を除去した短縮版 (JPSS-9) も作成した。また、第 1 成分における寄与の大きい 4 項目を選択し、短縮版 (JPSS-4) を作成した。統計処理は、SPSSv11.0 を使用した。

【結果】研究への参加者は、326 人 (男性 106、女性 220) であった。地域別では、静岡県 222 人、青森県 31 人、沖縄県 73 人であった。平均得点は、22.6 (± 7.0 SD) で、この結果をもとに、各得点を偏差値に換算した。偏差値 45 未満を A ランク (少ない)、45 以上 55 未満を B ランク (ふつう)、55 以上 65 未満を C ランク (多い)、65 以上を D ランク (かなり多い) と判定した。JPSS 得点において、性別による有意な違いは認められなかったが、年代とは負の相関 ($r = -0.303$) があった。地域の比較では、沖縄県が他と比べて有意に低かった。

JPSS の主成分分析により、2 つの成分を抽出した (累積分散寄与率 44.2%)。第 1 成分における寄与の小さい項目 (4, 5, 6, 13) を除去し、JPSS-10 とした。これを主成分分析し、2 つの成分を抽出した (累積分散寄与率 51.6%)。第 1 成分における寄与の小さい項目 (11) を除去し、JPSS-9 とした。これを主成分分析し、2 つの成分を抽出した (累積分散寄与率 54.2%)。一方、JPSS の主成分分析で、第 1 成分における寄与の大きい項目 (1, 2, 3, 14) を選択し、JPSS-4 とした。これを主成分分析し、1 つの成分を抽出した (分散寄与率 56.3%)。JPSS および短縮版の Spearman の相関は、すべて 0.8 を超えた。また、信頼性 (Cronbach's α) は、JPSS が 0.845、JPSS-10 が 0.837、JPSS-9 が 0.836、JPSS-4 が 0.741 であった。JPSS におけるストレス度判定に準じて、短縮版

でも 4 つのカテゴリーに分類した。JPSS および短縮版の判定結果の相関は、すべて 0.7 を超えた。判定の一致率 (κ 係数) は、JPSS に対して、JPSS-10 が 0.723、JPSS-9 が 0.685、JPSS-4 が 0.480 で、他の組み合わせは、すべて 0.6 を超えた。

【考察】JPSS のデータを主成分分析し、短縮版の作成が可能であった。JPSS-10 は、オリジナル版の PSS-10 (4, 5, 12, 13 を除去) と比べて、1 項目が異なった。PSS-10 の累積分散寄与率は、48.9%で信頼性は $\alpha = 0.78$ であった[2]。本サンプルを PSS-10 に当てはめて累積分散寄与率を計算すると、49.6%であった。このことから、PSS-10 を使用することに妥当性があり、さらに日本語版の独自の選択で妥当性を高くすることができることが明らかになった。さらに 1 項目を除去した JPSS-9 は、信頼性、妥当性を損なわず、使用できる可能性が示唆された。一方、JPSS-4 は、オリジナル版の PSS-4 (2, 6, 7, 14) と比べて、2 項目が異なった。PSS-4 の分散寄与率は、45.6%で信頼性は $\alpha = 0.60$ であった[2]。本サンプルを PSS-4 に当てはめて分散寄与率を計算すると、49.2%であった。JPSS-4 は、JPSS-10 と同様の結果を得ることができ、オリジナル版以上の高い信頼性が認められた。以上のことから、地域保健の調査や産業衛生のスクリーニングでは、JPSS-9 の使用が有効であると考えられる。また、大規模な疫学調査では、JPSS-4 が使用できる。国際比較を優先する場合、オリジナル版の PSS-10 や PSS-4 の項目選択を適用しても、それらと同等の信頼性があると考えられる。

本研究は、3ヶ所の調査を併合したサンプルを使用した。性別もアンバランスで、健康づくりに関心のある集団という選択バイアスがかかっているなど、多くの制限がある。今後の課題として、国民標準値作成のために、もっと大規模な調査が必要である。その際、年代、地域、都市・郡部や職業による違いなども考慮すべきである。また、実際に短縮版を使用して、同等の信頼性を得ることができるか、確認する必要がある。

【謝辞】本研究を行うに当たり、財団法人エム・オー・エー健康科学センターおよび「健康啓発に関する行事」のスタッフの方々にデータ収集のご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

【引用文献】

1. Kimura T, et al. 2005 Computer-assisted measurement of perceived stress: An application for a community-based survey. *Hiroshima J Med Sci* 54 (in press).
2. Cohen S, et al. 1988 Perceived stress in a probability sample of the United States. *In Spacapan S, et al. (Eds.) The social psychology of health: the Claremont Symposium on Applied Social Psychology (4th)*. California: SAGE Publications, Inc. 31-67.
3. Cohen S, et al. 1983 A global measure of perceived stress. *J Health Soc Behav* 24: 385-396.
4. 岩橋成寿 他 2002 日本語版自覚ストレス調査票作成の試み *心身医* 42: 459-466.

(きむら ともあき・やまおか きよし)

タイ人の人間関係スキーマ

—日本人日本語教師によるPAC分析—

内藤 哲雄

(信州大学人文学部)

キーワード：タイ人、人間関係スキーマ、PAC分析

【目的】自国の人間関係のあり方については、自明ものとして感じてはいても、特徴の意識化は意外と困難である。対して外国人として居住する者は、母国との違いに気づかされることが多い。しかし、その国の人間関係構造全体の意識化は困難である。そこで本研究では、日本人日本語教師が外国人として滞在した体験を通じて獲得したタイ人の人間関係スキーマを、PAC分析により事例分析することを目的とした。

【方法】<被検者>日本語教師として3年間タイ国に滞在して2年弱のA31歳。女性。現在日本語教育修士1年。
<手続き>「タイ人の人間関係についてどのようなイメージが浮かぶでしょうか？日本人との人間関係の違いについてもイメージしてみてください。」と教示し、連想反応を得た。次に重要順位に並べ換えさせた後、各項目の直感的イメージ上の類似度を7段階で評定させた。ついでウォード法でクラスター分析し、各クラスターのイメージや併合理由、単独の＋0イメージを質問した。

【結果と考察】重要順位、クラスター分析及び単独＋0イメージの結果は Fig.1 のようになった。

<被検者Aによる解釈：抜粋>

《クラスター1》「まわりにあわせる」～「自分勝手」：「場」というのですが、タイで最初に働いていた大学ですごく考えました。「自己主張しすぎない」は、「まわりにあわせる」とすごく関係している。自分がいいからやるのではなくって、あくまで相手とその場と、それを合わせた日本語教育だと思ってました。「あいまい」は、「自己主張しすぎない」とも関係しますが、はっきり言わない、結論を出さない、敵を作らない。自分勝手というのは、自分勝手な行動をしないという部分と、逆にタイ人は自分勝手な面があるという風な感じ方をしていました。表面上と内に秘めた思いが違うような気がします。集団である場ではまわりに合わせるとか、自己主張しすぎないことをしていても、「場」がなかったり、一対一で許してもらえ相手だと分かり切っていれば、自己主張もするし、自分勝手なことも言える。

《クラスター2》「相談する」～「年上への尊敬の念」：先輩の日本人の先生から、何とかして欲しいとか、頼みたい、要求したいときには、まず相談しなさいと言われてました。タイに限ったことではないと思うんですが、変に日本語の勉強をしていたとか知識があると思っていたら、習ってきたものと、現場が違うことに対して反発を覚えてしまって、要求とかに出てくるんだと思います。反対に、タイ人の先生方に対して「相談する」という姿勢を見せたり、「頼って」いくと、とても親身になって下さって、すぐにもお世話して下さいました。相談したり、頼ったりすることで相手から得られるものがあり、それが尊敬の形につながるのかなと思います。

《クラスター3》「べったり」～「やさしい」：タイ人の女性に対するイメージかなと思います。タイ人の女性はよく「手をつなぐ」んですけど、道路を横切るときなんか、まるでこちらが子どものように手をつないでくれます。心配したりとか、気をつけて渡るように教えてくれる意味もあったかな、と思います。「やさしい」なあ、と思いました。「べったり」というのは、人と人のかかわり方が、私が日本でしていたよりも密にしようとするのがあるのかな、と思いま

す。そこが「やさしく」もあるんですけど、ちょっと too much などところもあって、べったりというイメージでした。やたら電話をかけて来たりとか。休日に何をしてお過ごしかを心配してくれたりとか。手をつないだり、べったりした関係は、最初はやはり拒否感とかがあったんですけど、ああ「やさしい」という言葉とつながるのかなあー、と今思っています。

《クラスター1と2の比較》自分を主張するんじゃないかと、相手と一緒に何かをするとか考えるとかは似ているのかなと思います。違うところは、1は、集団、たとえば学校であったり、2の場合は一対一なのかなという気がします。

《クラスター1と3の比較》1は、タイ社会のイメージで、3は、タイ女性のイメージ。1は、男性も含めたタイ社会、タイ人とタイ人もそうだし、タイ人女性が日本人に、たぶん女性に関わりを持つときの態度なのかなと思います。

《クラスター2と3の比較》2は、今も私は大切にしている。でも3は、日本でやってしまって「ああやばい」と思ったことがあるものです。3では、相手への親近感とか、そういうものを抱かせようと思って、相手が日本人なのに、身体のだこかを触りながら話すことが、日本に帰ってすぐの頃はありました。同じところは、相手への配慮とか、距離の取り方とかで、人間関係のタイでの基本かな、と思います。2は、年上になると気をつけなければならないことかも知れない。3は、年上、年齢はまったく関係なかったと思います。

【結論】クラスター1は、「集団」「場」「自分勝手」が0イメージで距離を置いて眺める感覚があるが、クラスター2も3も＋のみで、全体としてはかなり好感情を抱いている。

クラスター1は、自己主張を内に秘め、自分で結論を出さず、集団に合わせる<集団や場への埋没>、クラスター2は<相談し頼る年長者への尊敬>、クラスター3は<女性同士身体接触を伴う濃密な関係>と命名できよう。

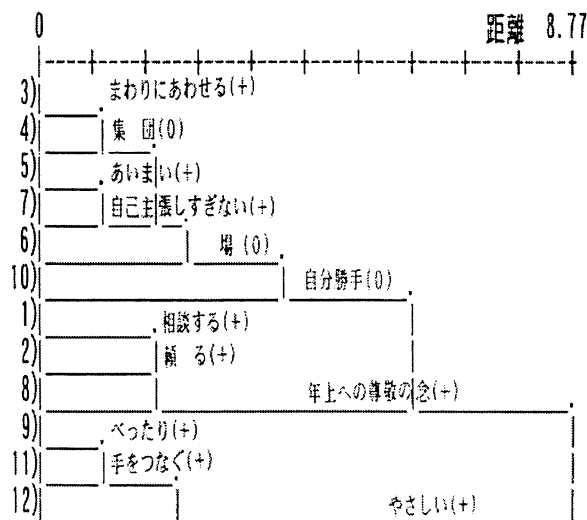


Fig.1 被検者Aのデンドログラム

左の数値は重要順位

(ないとう てつお)

対人状況とコミュニケーション形態による話題カテゴリの変化

— 大学生のコミュニケーションについて —

○田原理恵¹⁾ 松田浩平²⁾

(¹⁾文京学院大学人間学研究科 (²⁾文京学院大学人間学部)

キーワード: コミュニケーションモード, 話題カテゴリ, 対人状況

【序論】

「コミュニケーション」という概念は物質系、機械系、人間以外の生物系など、幅広い分野に適用され、広義的には「伝達」という意味をもつ(林, 1988)。対人コミュニケーションは、言語や非言語といった記号もしくは記号の集合体を情報として第三者に伝達し、交換を行う社会的な相互作用である。対人コミュニケーションは送り手・受け手の「個人要因」とその場面で使える「メディア要因」、対人関係・目標を含めた「状況要因」とに大別される(大坊, 2002)。メディア要因には、対面(Face To Face)コミュニケーションのような直接的情報伝達以外に、手紙・電話・電子メールといった、相手との間になんらかのメディアを通じた間接的情報伝達がある。総務省(2004)の調べによると、人との連絡手段を1年前と比較した場合、携帯電話・PHSのような移動電話での通話が増えたという回答が48.0%、メールでは46.2%と、移動電話を連絡手段として活用する傾向が強くなっている。このことから、電話(特に移動電話)や電子メールといったメディアが近年のコミュニケーションに多大な影響を与えていることが伺える。対面・電話・電子メールでのコミュニケーションは空間共有性・同期性・双方向性という点でそれぞれが異なる特色を持っている(岡本, 1998)。ここでのコミュニケーションは言葉を媒介にしたものであるが、電子メールなどのネットワーク・コミュニケーションは言葉が文字として媒介される点で対面・電話とは大きく異なっている。このような特色の違いがコミュニケーション上の会話選択に影響を及ぼしていると考えられる。

【目的】

伝達手段の違いによって日常会話で選択される話題に違いが生じられるかを質問紙調査によって検討する。また、コミュニケーション対象者が、インフォーマルかフォーマルな関係かで差異があるかどうか同時に検討する。

【方法】

予備調査: B大学の人間学を専攻している学部生・大学院生の男女21名(平均年齢=20.0歳, SD=1.12)を対象に、日常会話に関するインタビューを行った。その際、コミュニケーションモード3条件×個人要因4条件で日常の会話場面でどのような話題を選択しているかを尋ねた。インタビューから得られた平均項目数は17.6項目(SD=2.82)で、内容は学校、趣味、テレビ、自分を含めた周囲の人間のこと、最近の出来事、連絡事項などであった。その中から回答数の多かった35項目を抽出し、本調査に用いた。

本調査: 予備調査から得られた項目に、インターネットの電子掲示板に設置されたジャンルからポピュラーな44項目を追加し、3カテゴリ79項目で構成した。電子メール場面に限り、1カテゴリを加えた4カテゴリ82項目で行った。対話状況はコミュニケーションモード3条件×個人要因2条件を設置した。質問紙はB大学、N大学、K大学の学部生男女に配布し、分析は177名(平均年齢19.8歳, SD=1.47)を対象に行った。

【結果】

分析1: 相手・コミュニケーションモード別に会話上に出てくる項目をチェックしてもらい、カウントした。インフォーマルグループのコミュニケーションでは、どのモードでも「学校・その他」のカテゴリに関する項目が多く選択され、そのうちの「授業」が出現率83.05%と最も高く、次いで「試験」「友人」が70%を超えた。「学校・その他」カテゴリ以外の項目で出現率が高かったものは、「音楽」「TV」と

いったエンターテインメントカテゴリのもの、「アルバイト」の項目だった。いずれのカテゴリでも対面状況下では出現項目の種類が最も多く確認された。フォーマルグループに関しては、「プライベートな付き合いがない人がいない・連絡をとらない」という回答が26.44%にのぼり、出現率が30%を超える項目が「アルバイト」の1項目のみであった。

分析2: 個人要因(2条件)×メディア(3条件)で選択率を従属変数に分散分析を行ったところ、全話題カテゴリで対面-メディア間に有意差が現れた(カテゴリ1:F(5, 1055)=84.83, p<.01, カテゴリ2:F(5, 1055)=113.85, p<.01, カテゴリ3:F(5, 1055)=108.78, p<.01)。

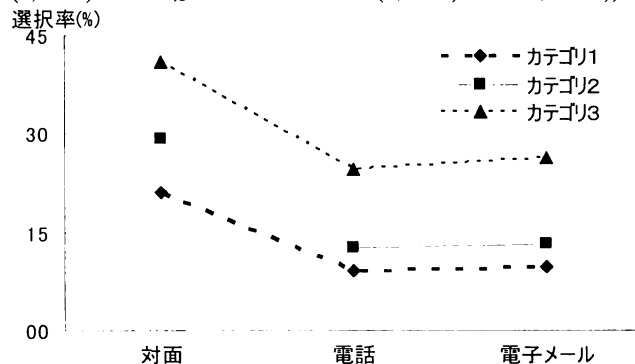


Figure.1 モード別項目選択率(インフォーマルグループ)

【考察】

対面コミュニケーションでの会話は多岐にわたるが、非対面コミュニケーションでは話題の範囲が限定的で、とくに電話での会話は連絡事項のみの伝達が増えるなど、その傾向が顕著になった。コミュニケーションモードから対面条件をはずし、モード(2条件)×話題(3条件)の分散分析を行ったところ、有意差は出なかったため(p>.05, N.S)、メディアによって話題が使い分けられていることと、電話と電子メールがほぼ同様の用途で使用されていることがわかった。更に、メール特有の項目のうち、「顔文字だけのやりとり」と「絵文字だけのやりとり」の出現頻度が30%を超えていた。このことから、電子メールが電話に取って代わるコミュニケーションツールとなったことが示唆された。話題に関しては、選択項目が「学校」「テレビ」「音楽」の順に高頻度で出現した。このことから、話題は自分にとって身近で即物的な事柄であることがわかった。また、個人要因においては、フォーマルグループの話題選択率が全カテゴリでも10%以下だったことと、個人要因間に有意差があったことから、親近者以外とは話をしたがる傾向が示唆された。

以上のことから、大学生の日常会話は、親近者とのコミュニケーションが目的であり、そのために自分や対象者に関する話題を選択し、メディアによって使い分けをしていることがわかった。

【引用文献】

- 林進 1988 コミュニケーション論 有斐閣
- 大坊郁夫 2002 ネットワーク・コミュニケーションにおける対人関係の特徴 対人社会心理学研究 2, 1-14
- 総務省 2004 平成16年版情報通信白書 <http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/whitepaper/ja/h16/index.html>
- 岡本能里子 1998 しゃべる—チャットコミュニケーション空間—現代のエスプリ 370・インターネット社会 至文堂 127-136 (たばらりえ・まつだ こうへい)

福祉施設における転職者の QWL に関する研究

○木村 たき子
(東京富士大学学生相談室)

岡村 一成
(東京富士大学)

福祉施設・転職者・QWL・余暇時間

1.はじめに

福祉サービスの充実とは、ハードを増やすことのみならず、ソフトの面からのアプローチも重要である。そのカギとなるのが、スタッフの質の充実であり、それが利用者のサービスへの満足度とつながるのである。しかし、福祉職の在職期間は短く、転職者・退職者の数は一般企業勤務者に比べると多いと言われている。そこで、福祉施設スタッフ転職者のインタビュー調査(日本福祉文化学会兵庫県大会発表 2004 年)をふまえ、今回 LEE による「QWLSCL」を用い転職前の職場と現在の職場の QWL (Quality of Working Life) の調査をすることにした。さらに、QWL と余暇利用時間・さらに転職の希望との関係性についても調査をすることにした。利用者のサービス満足がスタッフの質に大きく依存するのであれば、人事考課について遅れている福祉の職場でも考慮する必要性があると考えられる。

2.方法

埼玉県・東京都の特別養護老人施設(1ヶ所)、老人保健施設(1ヶ所)、在宅介護支援センター(2ヶ所)に勤務の人にアンケート用紙を依頼し、結果を個々人に封筒に入れ回収をお願いした。

期間：平成 17 年 6 月 5 日～25 日

対象者：20 歳代(4 人) 30 歳代(13 人) 40 歳代(5 人)
50 歳代(9 人) 60 歳代(2 人)

男女比：男性(3 人) 女性(26 人)

婚姻：未婚(8 人) 既婚(25 人)

職種：ヘルパー(12 人) ケアマネージャー(6 人)

コーディネーター(5 人) 相談員(4 人)

事務職(4 人)

その他(2 人)理学療法士・看護師)

3.結果・考察

QWL は通常「職場環境においてどの程度すべての欲求資源が満たされているかに対する認識である」と定義されている。(Cascio1998)

職務満足に関する先行研究はいろいろあるが、今回 LEE の高齢者福祉施設の QWL 尺度は従来のものより簡潔にまとめられ、回答者も自己点検するうえで使用しやすいようにまとめられている。その QWL 尺度は 15 項目の質問からなり、1.待遇に対する満足度。2.上司との関係満足度。3.同僚との関係満足度。4.成長満足度の 4 つから構成されている。この 15 項目に(16)現在の職場に継続して働きたいと思うか。

(17)仕事以外のプライベートの時間については満足しているか。の 2 つの項目を付け加え、全くあてはまらない。ほとんどあてはまらない。あまり当てはまらない。当てはまる。かなり当てはまる。非常に当てはまる。の 6 件法で答えてもらった。以前の職場に関しても、福祉職か、福祉職以外だったのかについての記入をしてもらった。その結果、LEE の

理論では、総合点が 49 点以下の 79%は転職をするという結論があるが、今回の調査では 49 点以下の人が 5 人だけだった。つまり、49 点以上でも転職をしていたことになる。また、現在の職場に継続して勤務するかどうかの質問に対し、49 点以下であった 5 人全員が、継続して勤務する考えがないという結果がでた。特に、20 歳代未婚女性の場合にみられた。

表 1 に見られるように、4 つの満足度に対してもっとも低い数値のものは、現在の職場でも以前の職場においても、待遇に対する満足度であった。これは、福祉職から福祉職への転職者へのインタビュー調査においても、人間関係より待遇に対する不満感が退職・転職に結びついているという結果と一致している。

表 1・現在の職場と以前の職場における満足度

	現在の職場	以前の職場
1.待遇に対する満足	18 人	13 人
2.上司との関係満足	8 人	9 人
3.同僚との関係満足	3 人	3 人
4.成長満足	4 人	8 人

福祉職場における事務職の人の満足度は非常に低く、現在の職場への継続も考えていない。これらの人達はプライベートタイムの満足度も低く、能力も認められない、給料も低いという意識は 2004 年のインタビュー調査と同じ結果である。福祉職場においては、ヘルパー・ケアマネージャーなどの有資格者は優遇され、また利用者との関わりから癒されることもあると思われるが、事務職となると利用者との関係性も薄く、利用者から感謝され癒されるということが少なくなることも満足度が低くなる要因と思われる。

福祉職から福祉職への転職者は、QWL は低い状態から高い状態に変化しているのは介護職の有資格者であり、福祉職以外の職場から福祉職への転職者は満足度の差は少ない。

ケアマネージャーや理学療法士などは QWL が高いが、それは職場において特別な資格ということに関係しているものと考えられる。しかし、看護師は、有資格者であるにもかかわらず QWL が低かった。それは、看護業務より介護業務が多いためではないかと思われる。

プライベート時間の満足度は事務職以外の人は満足度が高く、未婚の人より既婚者の満足度が高かった。

今回の調査は転職者のみの調査であったため、総数が少なく職種の人に片寄りがあった。今後、男女差、年代差を含め、プライベート時間の影響要因も質問項目を増やし、調査の継続の必要性を感じている。それが、スタッフの質の向上となり利用者へのサービスの向上になればと考えている。

(きむらたき子 おかむらかずなり)

自由な行為の心理学的範囲について(1)

— 解釈枠組みの探索的検討 —

久保田 健市

(名古屋市立大学大学院人間文化研究科)

キーワード：自由な行為, 社会的迷惑, 自律性, 多次元尺度構成法, 主成分への回帰

【問題】農村型社会から都市型社会への移行は"プライベート-パブリック"という領域の明確な区別を生み出した。ところが,他者の面前での携帯電話利用や化粧行動に象徴されるように,今日の日本社会では再び公私の境界があいまいとなり,プライベートがパブリックを侵蝕しているかのような現象がみられる。従来の研究では,上で挙げたような行為を「社会的迷惑」行為として,不快感情の喚起や規範意識との関連を検討してきた(石田他,2000;高木・村田,2005;吉田他,1999など)。一方で,少なくとも近代市民社会では「個人の自由意志による自律的行為は尊重されなくてはならない」という社会通念も強く作用している。従って,社会的迷惑状況においても複数のベクトルの異なる行動原理(規範)が同時に存在するコンフリクト状態であると認識されなくてはならないだろう(安香,1996)。むしろ個人の自由を認めるのか否かという逆の視点に立つ方が,環境倫理や生命倫理などの他の重要な問題も統一的に扱える点で優れていると考えられる。

本研究は,個人の自由な行為がどのような観点から理解され,寛容/不寛容などの判断がなされるのか,判断の枠組みを探索的に検討する。

【方法】被調査者 大学生 16人(女性 11人,男性 5人)。

行為アイテム 吉田他(1999)が作成した社会的迷惑認知尺度の尺度項目を参考に,個人の自由が問題となる環境倫理・生命倫理にかかわる行為,危険行為などを新たに追加し,計30個の行為アイテムを設定した(1.複数座席の占有/2.ファミレスで会話/3.公園で花火/4.無断撮影/5.空き缶ポイ捨て/6.P2Pファイル交換/7.自動車の近距離利用/8.臓器売買/9.フンの放置/10.政情不安な国へ渡航/11.人前で化粧/12.路上で歩きタバコ/13.喫茶店の座席で電話/14.図書館の本に書き込み/15.台風接近時にサーフィン/16.長時間のアイドリング/17.店先にたむろ/18.売春/19.出生前診断/20.オトナ買い/21.喫茶店で勉強/22.横一列で歩道を歩く/23.公園でゴルフ練習/24.自転車の路上駐車/25.冬山登山/26.リュックを背負って乗車/27.代理母出産/28.冷房のかけすぎ/29.電車内で携帯メール/30.ゴミの不分別)。

質問項目 1.寛容度: 行為アイテムを提示し自発的な意志に従いそのような行為をしてもよいかどうかを8段階で評定した。2.判断の理由: 寛容度判断の理由や考慮すべき条件などについて,自由に回答させた。

手続き 調査は,「現代の若者の人間観・社会観に関する調査」という名目で,個別面接形式で実施された。質問文は口頭で教

示した。被調査者は行為アイテムの書かれたカードを手渡され,各質問項目の指示に従い分類する形式で回答した。所要時間はおよそ90分~120分であった。

【結果および考察】寛容性の構造 寛容度評定値をもとに多次元尺度構成法による分析を行い,解釈可能な2次元を得た($S\text{-Stress}=.085, RQS=.956$, Figure 1)。30個の行為アイテムは4つのクラスターに分類された。次元1の-側(+)に位置するクラスターは比較的寛容度の高い行為が,+,側のクラスターは全般的に不寛容な行為が該当すると言える。また,次元2の-側(+)クラスターには,主に生命倫理にかかわる行為と危険な行為が含まれ,統制が容易な行為が+側に位置しているように思われる。

寛容/不寛容の理由の分析 寛容度判断の理由や考慮すべき条件に関する自由回答は,KJ法により内容的に11のカテゴリーに集約できると考えられた(Table 1)。行為アイテムごとに理由カテゴリーに該当する回答を行ったと考えられる被験者の数を集計し,得られたデータに対し主成分分析を行った。固有値1.0以上を基準とし4成分を得た(累積寄与率64.4%)。理由の分布と寛容度の関係を分析するために,寛容度の多次元尺度構成法で得た2次元を基準変数とする主成分の回帰を行った。次元1では成分1~3の,次元2では成分1の標準偏回帰係数が有意だった(それぞれ, $R^2=.71, .32$)。RPC ウェイトより,次元1では行為者の統制がきく行為や実行能力や熟慮が認められる場合に寛容となる傾向と当事者の損失が知覚されたり代替行為の存在や否定的な社会的規範が意識されるとき不寛容になる傾向を示していると思われる。次元2では,生殖倫理にかかわる行為や危険行為が特に行為者にとって損失が大きいのものの熟慮の元では否定しきれないなどのアンビバレントな判断がなされやすいことをあらわしていると考えられる。

以上より,当事者(特に受け手の)損失や否定的な社会規範だけでなく,行為の統制可能性や代替行為の存在,熟慮なども行為の寛容性判断に強い影響を及ぼすことが明らかにされた。本研究では質的な分析を試みたが,インタビューの内容から損失の程度など量的な観点から判断されている可能性が示唆されており,今後の検討課題となった。(くぼた けんいち)

Table 1 理由カテゴリーごとの主成分負荷量とRPCウェイト

理由カテゴリー	主成分負荷量					RPCウェイト	
	F1	F2	F3	F4	h ²	Dim1	Dim2
肯定的自己参照	-.38	-.26	-.01	-.17	.24	-.04	.02
否定的自己参照	.07	.24	-.04	.31	.16	.02	.00
能力・熟慮	.80	-.32	.33	-.10	.86	-.23	-.21
能力・熟慮のなさ	.33	.40	.38	.16	.44	.01	-.02
行動調整	-.85	-.46	.09	.00	.95	-.42	.25
代替行為	-.39	.64	-.23	.04	.62	.16	.04
当事者利得	.60	-.08	.68	.11	.84	-.17	-.08
当事者損失	.56	-.26	-.78	.02	.98	.34	-.15
社会的悪影響	-.01	.65	.00	-.74	.96	.19	.00
社会的是認	-.27	.02	.29	.02	.15	-.02	.01
社会的拒否	.03	.77	.01	.55	.88	.20	-.01
因子寄与	2.52	2.09	1.46	1.01			
寄与率(%)	22.89	19.00	13.30	9.17			

N=30

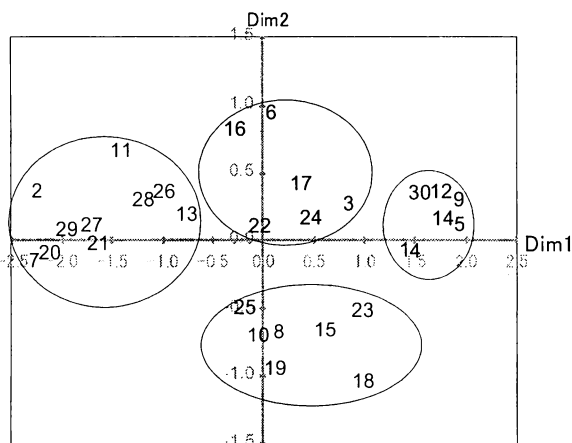


Figure 1 行為アイテムへの寛容性の構造

ポジティブな自己評価とネガティブな自己呈示

—日本人は本当に自己評価が低いのか—

○荻野 七重 齊藤 勇
 白梅学園短期大学 立正大学心理学部
 自己評価 自己呈示 言語心理 自己卑下

自己についての研究は従来から多くみられるが、さらに近年、自己評価や自己意識について文化相対論からの議論が盛んである。自己評価に関していえば、日本人含む東洋人は欧米人に比べ自己評価が低いという研究がある(Heine,etal 1999)が、一方で、東洋には“謙譲をもって美徳とする”という文化規範があるので表向きは、自己評価を低く控え目に自己呈示をするが、実際には自己評価の程度は欧米人と大差なく、高い自己評価をしているという研究もある(Kurman, 2003)。

本研究では、日本人は本当に自己評価が低いのか、という論点を自己呈示の関連においてみていくことを目的としている。そのために、本研究では、内心と発言という2層心理測定法によって、日本人の特徴といわれている自己評価の低さが、内心からもっている特性なのか、日本文化の規範に基づく謙譲的自己呈示によるものなのかを実証的に明らかにしていく。本研究は、日本人も内心では自らを高く評価しているが、対人的には、控え目に自己呈示する傾向にあるという立場から研究を進めていく。さらに、自己評価の高い人と低い人の自己評価の呈示おける違いについても検討していく。

仮説 日本人は、自らの自己評価を公言するときは内心よりも控え目に自己呈示する。

方 法

被調査者 首都圏にある大学の大学生 293名

調査表 独自の自己評価調査表を用いた。Rosenberg(1965)の自己評価尺度に基づく10項目を内心と発言の2層心理測定法に改訂し、10項目20回答式で作成した。

回答方法は、内心についてはあてはまるかあてはまらないかを、発言については、良く話すか話さないかを内心、発言とも+3〜-3までの7段階で評定させる方法をとった。

手続き 大学の授業において配布、時間内に回収した。

分析方法 内心・発言別に主因子法(バリマックス回転)により因子分析を行い、内心・発言ともに肯定的(ポジティブ)自己評価と否定的(ネガティブ)自己評価の2因子が抽出された。この2因子について、内心と発言に共通する6項目(ポジティブ4項目、

ネガティブ2項目)を選び、ポジティブ4項目の平均評定値をポジティブな自己評価面得点、ネガティブ2項目の平均値をネガティブな自己評価面得点とした。さらに、内心の自己評価を基準に4分法により、高ポジティブ自己評価群と低ポジティブ自己評価群、高ネガティブ自己評価群と低ネガティブ評価群を特定し、高群・低群について、内心と発言の得点を比較し、高自己評価者と低自己評価者の自己呈示の仕方について検討した。

結果と考察

1 自己評価の内心と発言の比較

因子分析の結果、内心、発言ともポジティブな自己評価面とネガティブな自己評価面の2因子構造であることが示されたので、両者の内心と発言の自己評価を比較した。分散分析結果は、内心・発言および内心・発言×ポジティブ・ネガティブ面に有意な差が認められた。従って、全体として、発言よりも内心の自己評価が高く、また、ポジティブな自己評価面においては内心は発言よりも自己評価が高いことが示された(表1)。このことは、日本人は、内心では自分をポジティブに評価しているが、発言では、自己を控え目に発言していることを実証しており、仮説は支持されたといえよう。他方、ネガティブな自己評価面については、卑下的呈示は控えられる傾向にあることが示されているといえよう。この両者を考慮に入ると、日本人は総じて、自己呈示を抑制して、“控える”方向にあると推察できる。人前で自分のことをあまり言わない“寡黙な日本人”の傾向が示されているといえよう。

2 高自己評価者と低自己評価者の内心と発言の比較

高自己評価者と低自己評価者を比較すると、ポジティブな自己評価面の呈示についての分散分析の結果、交互作用がみられた。つまり、高自己評価者は元来高いポジティブな面の呈示を控え目にするが、低自己評価者は元来低いポジティブな面をさらに低くすることは無いという傾向が示された。そして、ネガティブな面でも、同様の交互作用が見られた。ちなみに、因子分析で抽出されなかったので言及されていないが、調査項目中での劣等感の低さ(全体平均1.45)が目についた。

表1 自己評価の高低とポジティブ自己評価面ネガティブ自己評価面の平均得点

自己評価		高群		低群		全体(N=293)	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD
ポジティブ	内心	1.80	0.59	-1.36	0.73	0.31	1.25
	発言	0.06	1.29	-1.14	1.20	-0.56	1.19
ネガティブ	内心	1.68	0.63	-2.18	0.62	-0.23	1.54
	発言	0.54	1.41	-1.44	1.22	-0.43	1.44

ポジティブ自己評価のN:高群78 低群69 ネガティブ自己評価のN:高群79 低群80

(おぎのななえ さいとういさむ)

日本人と中国人の人間関係スキーマの差異

○ 岡 喜

(信州大学人文科学研究科)

内藤 哲雄

(信州大学人文学部)

キーワード：人間関係スキーマ・日本人・中国人

【目的】出身国の異なるもの同士が交流する際は互いに相手国の人間関係のあり方(スキーマ)について知ることが必要である。他方で、ステレオタイプ化されたスキーマは現実の人間関係を歪めてみることでなりやすいであろう。そこで、日本人学生と中国人留学生が、互いの国の人間関係を実際にどのようにイメージをしているのかを明らかにすることが必要であろう。本研究では、一連の調査のうち、日本人学生同士、中国人学生同士の交友関係について報告する。

【方法】

<被調査者>信州大学他の、日本人大学生 199 名(男性 102 名、女性 97 名)、中国人留学生 164 名(男性 78 名、女性 86 名)。

<手続き>中国人留学生には、「日本人の人間関係」に関して(日本人学生には「中国人の人間関係」)どのようなイメージをお持ちですかと設問し、それぞれの質問項目について、1「全くそう思わない」～9「非常にそう思う」の9段階で回答させた。

<質問紙の内容>交友関係の在り方、交友関係での対人的な配慮、交友関係における面子への配慮についての12項目を用意した(Table 1参照)。

【結果】それぞれの質問項目ごとに、国籍2(日本人、中国人)×性別2(男性、女性)の2要因分散分析を行った。各群の平均値、標準偏差、F値は、Table 1のようになった。

12項目のすべてにおいて国籍の主効果がみられ、そのうち11項目は中国人留学生が推測した得点の方が高い。すなわち、日本人学生同士の交友関係の方が得点が高い。逆に、中国人の交友関係の方が相対的に高いと見なされている項目は、6の「友達のために犠牲を払う」のみであった。また、全般的に日本人学生の評定は、「ややそう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」の中間的であった。項目9の「自分の面子を重んじる」については、日中いずれの群も「どちらかといえばそう思う」の6.0点を超えている。項目11の「他人を介しないで相手に頼む」については、いずれの群も「どちらともいえない」と「どちらかといえばそう思う」

の中間的であった。

【考察】「自分の面子を重んじる」傾向は中国人同士の方が、「相手の面子を重んじる」は日本人同士の方が高いと推測されている。また「相手の立場を考えて行動する」は日本人の方が強いとみられている。これらの結果は他者への配慮を重視する集団主義の日本人と自分の面子(己[自分])を重視する自我主義(園田, 2001)の中国人との差異を示すと考えられる。ところが、「友達のために犠牲を払う」では、中国人同士の方が相対的に高いと判断されている。上記の両者を併せて考えると、日本人同士は浅い交友関係にとどまり、中国人同士はより深い関係にあることを推論させる。ところで、中国人は第三者を介して物事を頼む託人制度を利用するが、本調査の中国人留学生では、利用しているとみなされていない(項目11参照)。これは、彼らが在住する日本では託人となる有力人物をもたないことから、行動として出現しなかったためではないかと思われる。さて、中国人留学生から「距離をおいた付き合い方をする」と見なされている日本人は、相手への配慮をするという集団主義傾向に加えて、プライバシーへの配慮といった西欧的個人主義傾向を反映したものとみなすことができるのではあるまいか。また「相手によって付き合い方を変える」「上下関係が厳しい(はっきりしている)」については、日本人が周囲の人々との関係に応じて付き合い方を変えると中国人留学生から見られており、日本人の集団主義は「場」に応じた相対的なものであると推測される。「へりくだった言い方をする」が相対的に、日本人の方が高いと見なされているのは、日本人の自己卑下傾向を示すであり、他者への配慮様式の一形式であるといえよう。

以上の結果から、両国の人間関係スキーマの特徴を次のように推論しまとめることができよう。すなわち、日本人は「場」や相対的立場を考えて、自分の面子よりも、相手の面子に配慮するが、他人のために犠牲を払うことの少ない、距離をおいた付き合い方をする傾向がある。他方、相対的にみると、中国人は、上下関係の意識が薄く、対人的な配慮があまりなく、自分を中心に考える自我主義的傾向がある。

Table 1 相手国の人間関係に関するイメージ

質問項目	日本人				中国人				F		
	男性N=102		女性N=97		男性N=78		女性N=86		国	性	交
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
1. 上下関係がはっきりしている	5.7	(2.01)	5.8	(1.64)	7.4	(1.73)	8.0	(1.15)	55.92****	2.25	0.92
2. 上下関係が厳しい	5.3	(2.03)	5.5	(1.58)	7.5	(1.49)	7.8	(1.15)	169.22****	1.78	0.05
3. 距離をおいた付き合い方をする	4.3	(1.58)	4.4	(1.72)	7.0	(1.63)	7.7	(1.05)	341.59****	6.76**	4.7*
4. 立場を考えて行動をする	5.4	(1.70)	5.1	(1.37)	6.7	(1.46)	7.2	(1.42)	112.03****	0.65	5.32
5. 相手によって付き合い方を変える	5.2	(1.79)	5.1	(1.54)	6.8	(1.65)	7.3	(1.50)	121.78****	0.96	3.27†
7. へりくだった言い方をする	4.5	(1.62)	4.5	(1.51)	5.8	(1.49)	6.0	(1.62)	68.29****	0.22	0.73
8. 贈り物をする人が多い	5.2	(1.75)	5.2	(1.55)	5.9	(1.69)	6.0	(1.54)	18.82****	0.13	0.09
10. 相手の面子を重んじる	5.1	(1.67)	5.5	(1.41)	6.0	(1.92)	6.2	(1.69)	21.24****	1.89	0.22
12. 第三者を介して相手に頼む	4.4	(1.74)	4.1	(1.52)	4.9	(1.54)	5.1	(1.71)	19.15****	0.07	1.94
6. 友達のために犠牲を払う	5.5	(1.53)	5.3	(1.54)	3.7	(1.96)	3.9	(1.88)	76.18****	0.02	1.07
9. 自分の面子を重んじる	6.5	(1.66)	6.1	(1.47)	6.0	(1.78)	6.0	(1.79)	3.12†	1.05	1.32
11. 他人を介しないで相手に頼む	5.6	(1.89)	6.0	(1.71)	5.7	(1.64)	5.0	(1.87)	6.67*	0.44	9.60***

1) 項目の番号は質問紙での番号

2) F値の下欄の国は国籍の違い、性は性差、交は交互作用を意味する

3) † : p<.10 * : p<.05 ** : p<.01 *** : p<.005 **** : p<.001

(えんき・ないとう てつお)

Family System Test による家族関係認知の 社会・文化的研究

—日本・ベトナムの大学生女子の比較から—

河野 望

(立命館大学大学院 社会学研究科)

キーワード：青年女子、家族関係認知、日越比較、Family System Test

【問題の所在】

子どもが家族関係をどのように認知しているのかを明らかにすることは青年の行動や心理を把握する上で重要なことであると考えられる。

河野(2002,2003,2005)は、家族関係を質的・量的に測定することが可能な Family System Test(FAST) (Gehring,1993) を日本の小学生・中学生・大学生に実施し、家族関係認知の発達の变化を明らかにした。その結果、大学生の時期でも母子間の親密さの高さと力関係の平等により世代間境界があいまいな家族が多く女子に顕著であること、またそれらはアメリカでの研究結果とは異なる文化的差異であることが示唆された。

そこで本研究では、日本とベトナム（日越）の大学生女子に FAST を実施し、青年女子の家族関係認知の比較検討を行い特徴を把握することを目的とする。

【方法】

1. 被験者 日本の大学生女子 25 名(20-22 歳)、ベトナムの大学生女子 25 名(18-23 歳)の計 50 名。家族形態は、核家族が 42 名(84.0%)(日本：21 名、ベトナム 21 名)、三世代家族が 8 名(16.0%)(日本：4 名、ベトナム 4 名)。
 2. 時期 2002 年 6 月～2005 年 3 月。
 3. 方法 Belts Test 社製の FAST を用いた。
 4. 手続きと評価方法 検査はマニュアル(Gehring, 1993)に従って行われた。現実・理想場面の家族関係について表現するよう求め、親密さ(cohesion)と力関係(hierarchy)について測定を行った。
- 親密さは、人形間の距離によって表現され、人形間の距離が短いほど親密さが高いことを示す。2 者間(父子間、母子間、父母間)の距離をピタゴラスの定理によって計量的に算出した。
- 力関係は、ブロックで人形の高さに差をつけることによって表現され、人形間の高さに差があるほど力関係が大きいことを示す。3 者(父親・母親・被験者)の高さをブロックの大きさにより計量的に算出した。
5. 分析方法 日越の家族関係認知の差を検討するために、国(日越)を独立変数、2 者間の距離と 3 者の高さを従属変数とする t 検定を行った。

【結果】

1. 親密さ

現実・理想場面の父子間、母子間、父母間の距離については、表 1 に検定結果を示す通り、現実場面の父子間、理想場面の父子間と母子間において有意差が認められ、いずれもベトナムの方が日本に比べ距離が短いことが明らかになった。父母間においては両場面ともに有意差は認められなかった。

表 1 日越における 2 者間の距離の差異

	国	平均	SD	df	t 値	有意差	
現実場面	父子間	日	2.31	1.14	48	2.33	p<.05
		越	1.65	0.85			
	母子間	日	1.80	1.07	48	0.34	n.s.
		越	1.71	0.91			
父母間	日	1.98	1.57	48	-0.16	n.s.	
	越	2.05	1.59				
理想場面	父子間	日	1.84	0.87	32	2.77	p<.01
		越	1.31	0.37			
	母子間	日	1.80	0.79	34	2.67	p<.01
		越	1.33	0.37			
	父母間	日	1.20	0.41	48	0.51	n.s.
		越	1.14	0.30			

2. 力関係

現実・理想場面の父親、母親、被験者の高さについては、表 2 に検定結果を示す通り、現実場面の父親と母親、理想場面の父親と母親と被験者において有意差が認められ、いずれもベトナムの方が日本に比べ高さが大きいことが明らかになった。

表 2 日越における 3 者の高さの差異

	国	平均	SD	df	t 値	有意差	
現実場面	父親	日	1.76	1.01	48	-3.56	p<.001
		越	2.68	0.80			
	母親	日	1.24	0.97	48	-4.29	p<.001
		越	2.32	0.80			
被験者	日	0.52	0.71	48	-1.64	n.s.	
	越	0.88	0.83				
理想場面	父親	日	1.48	1.08	45	-5.12	p<.001
		越	2.88	0.83			
	母親	日	1.24	1.01	48	-4.22	p<.001
		越	2.36	0.86			
	被験者	日	0.20	0.41	33	-4.24	p<.001
		越	1.08	0.95			

【考察】

本研究では、日越の青年女子の家族関係認知を比較検討した結果、日米比較で浮かび上がってきた日本の母子間の親密さの高さはベトナムでも見られた。ただベトナムの場合は、父子間、母子間ともに親密さが高いことが明らかになった。ベトナムの父子間の親密さの高さは桂(2003)が指摘している社会・文化的背景が考えられる。父子間の親密さが低いこと、父親と母親の力関係が小さいことが日本の家族関係認知の特徴ではないかと示唆される。今後さらに被験者の数および幅を広げ、日越の家族関係認知の特徴を性別・発達の变化からも明らかにしていきたいと考えている。(かわの のぞみ)

仰臥姿勢のパーソナルスペース(2)

○石橋里美

内藤哲雄

(信州大学人文学部)

キーワード: パーソナルスペース・仰臥姿勢・ストップ・ディスタンス法

【目的】石橋・内藤(2003・2004)の研究から、仰臥姿勢におけるパーソナルスペースへの他者侵入に対する情動的反応と対人感情を規定する要因として、接近者と被接近者の相対的な目線の高さによる影響と、被験者の絶対的な位置による影響が推測された。本研究では、両者の影響の強さを検証するため、被験者が床に仰臥した条件のみを扱い、接近者の目線の高さを操作し、以下の実験仮説を検討することを目的とした。

実験仮説: 情動的反応と対人感情が、被験者の絶対的な位置により規定されるならば、接近者の目線の高さ(高・低)の効果は有意ではない。相対的な相手との目線の高さの影響を強く受けるのであれば、接近者の目線の高さ(高・低)の効果は有意になる。

【方法】被験者は、信州大学の学生 24 名(男性 12 名、女性 12 名)であった。被験者と実験協力者の組み合わせは、お互いに面識の無い同性同士とした。接近者の目線2(高・低)×接近の方向4(頭部・足元・右・左)の2要因計画、いずれも被験者内要因であった。

質問紙の内容: ※石橋(2004)の実験的研究で抽出された接近行為への情動的反応についての4尺度「圧迫・警戒感」、「怯え」、「羞恥心」、「苛立ち」と対人感情についての3尺度「抵抗・反発」、「非人格化」、「自己委託感」に、「公的自覚」、「被軽視感」を加えた9尺度を用意した。いずれも7段階(1: そう感じなかった～7: そう感じた)で評定させた。

実験協力者は3m離れたところから開始し、被験者の仰臥するマットサイドまでの接近をおこなった。接近者の目線高条件と目線低条件で、それぞれ足元・頭部・右側・左側、4方向からの接近-停止を行った¹⁾。各条件において、各方向からの接近終了直後、その場で質問紙に回答させた。なお、接近者の目線の高さとの接近の方向の順序効果は相殺した。

【結果】「被軽視感」、「公的自覚」についての信頼性分析を行った。「被軽視感」は $\alpha = .89$ 、「公的自覚」は $\alpha = .87$ であり、いずれも高い信頼性が得られた。

各条件別の尺度得点とSDを表1に示した。それぞれについて接近者の目線の高さ2×方向4の2要因分散分析を行った。

目線の高さの主効果が有意であったのは「自己委託感」($F(1, 23)=8.34, p<.01$)、「被軽視感」($F(1, 23)=8.40, p<.01$)、「非人格化」($F(1, 23)=8.50, p<.01$)であった。目線の高さとの交互作用が有意であったのは「苛立ち」であった($F(3, 69)=2.94, p<.05$)。下位検定の結果、左側からの接近において、目線高条

件は低条件よりも苛立ちを感じる傾向にあることが示された($F(1, 92)=2.99, p<.10$)。

方向の主効果が有意、有意傾向であったのは、「被軽視感」($F(3, 69)=8.32, p<.001$)、「抵抗・反発」($F(3, 69)=4.70, p<.005$)、「圧迫・警戒感」($F(3, 69)=3.10, p<.05$)、「怯え」($F(3, 6)=6.59, p<.001$)であった。下位検定の結果から、頭部からの接近は他のどの方向からよりも「怯え」を抱き、頭部・左側からの接近は足元からよりも「抵抗・反発感」、「圧迫・警戒感」を感じ、左からの接近は足元からよりも「苛立ち」を喚起することが明らかになった。

「公的自覚」については、接近者の目線の高さ・方向ともに有意差はなかったが、平均値の結果から、全ての条件において「公的自覚」の状態になることが示された。

【考察】実験仮説から、接近者と被接近者の目線の高さの違いが、「被軽視感」、「自己委託感」、「非人格化」、「苛立ち」に影響を及ぼすことが明らかになった。すなわち、目線の高低差が、接近者との相対的な地位の上下差、落差感をも喚起し、「見下ろされる」状況であるほどネガティブな反応が強まったと考えられる。これらの結果と先行研究から、被験者の絶対的な位置(寝台・床仰臥)ではなく、二者間の相対的な目線の高低差が、仰臥姿勢のパーソナルスペースにおける情動的反応や対人感情等の主観的反応の決定因の一つであることが示唆されたといえよう。本研究の対人接近状況下における知見は、実際の医療、介護等の場面にも応用できよう。

表1・各条件下における尺度得点とSD

		目線高条件				目線低条件			
		頭部	足元	右	左	頭部	足元	右	左
圧迫・警戒	M	4.9	4.3	4.3	4.8	4.7	3.7	4.6	4.5
②*	SD	1.5	1.3	1.5	1.5	1.6	1.4	1.6	1.5
怯え	M	4.1	3.1	3.4	3.5	4.2	2.9	3.4	3.6
①**	SD	1.1	1.1	1.4	1.4	1.2	1.1	1.6	1.5
羞恥心	M	3.7	3.7	3.5	3.9	3.5	3.2	3.6	3.8
	SD	1.5	1.5	1.5	1.4	1.5	1.5	1.3	1.6
苛立ち	M	2.6	2.3	2.5	3.0	2.6	2.2	2.7	2.6
①*	SD	1.6	1.2	1.3	1.5	1.6	1.1	1.5	1.3
公的自覚	M	5.5	5.3	5.2	5.6	5.4	4.9	5.5	5.3
	SD	1.1	1.1	1.3	1.3	1.2	1.1	1.2	1.5
抵抗・反発	M	4.7	4.0	4.3	4.6	4.9	3.7	4.3	4.3
②**	SD	1.2	1.3	1.0	1.2	1.1	1.4	1.3	1.3
非人格化	M	4.4	3.9	4.0	4.1	4.1	3.3	3.6	3.5
①*	SD	0.9	1.0	1.0	1.1	1.1	1.3	1.6	1.4
自己委託感	M	1.9	2.0	2.1	2.2	2.5	2.3	2.4	2.9
①*	SD	1.1	1.0	1.0	1.1	1.2	1.4	1.3	1.6
被軽視感	M	5.3	4.1	4.5	4.9	4.8	3.4	4.2	4.0
①* ②*	SD	1.5	1.3	1.4	1.3	1.6	1.2	1.8	1.5

①: 目線②: 方向 **<.01 *<.05

※石橋里美 2004 仰臥姿勢におけるパーソナルスペース 信州大学人文学部研究科 修士論文 未公開

(いしばしさとみ・ないとうてつお)

日常ストレス状況での友人への自己開示とソーシャル・サポート(2) —開示に対する友人からのサポートとその影響—

福岡 欣治
(静岡文化芸術大学文化政策学部)

キーワード：ソーシャル・サポート、ストレス、自己開示、友人関係、大学生

従来のソーシャル・サポート研究では、実際のサポート授受の前段階として、サポートを必要とする状況にあることに気づく過程については十分に検討されていない。日常の対人関係の中では、一方が自分のストレス体験について話し、それを受けて他方が何らかのサポート行為をおこなうことがある。これは実質的に、ストレス経験の自己開示と関連する過程であり、また開示後のサポート授受の過程であるといえる。

福岡(2005、健康心理学会発表)では、日常ストレス状況を体験した場合、大学生は親しい友人に対して自己開示を行う場合もあればそうでない場合もあること、サポートの入手可能性と自己開示には関連性があること、これらが気分状態と関連することが示された。

本研究では、これに続くものとして、大学生の親しい友人との関係における自己開示とそれに応じたソーシャル・サポートに焦点を当て、ストレス場面での自己開示とその結果として友人から提供されるサポートが心理的適応の指標である気分状態に及ぼす影響について検討した。

調査 1

目的

日常のストレス状況体験とそれに伴う親しい友人への自己開示が気分状態に及ぼす影響を検討する。

方法

対象者 大学生148名(男12、女136;社会人入学等を除く)。年齢は18-24歳(M=18.6、SD=1.09)。自宅通学者71.6%。

調査内容 ①日常ストレス状況での自己開示と相手の反応：福岡(2002)と同じく、生活ストレス状況8つについて最近1週間に自分自身が各状況を体験したかどうかを3段階(大いにあった、少しあった、全然なかった)でたずねた。そして体験があった場合、その出来事やそれに関する自分自身の気持ちについて親しい友だちに話したかどうか、を「大いに」「少し」「全然」の3段階でたずねた。なお補足質問として、全然話さなかった場合には、その理由についても4つの選択肢を設けてたずねた。

②心理的適応(気分状態)：福岡(2005)の研究3と同様、20項目(ポジティブ・ネガティブ各10項目)・3件法の尺度を用い、最近1週間での気分状態をたずねた。

手続き 心理学関連の複数の科目において授業中に調査票を配布し、その場で回収した。なお、筆記用具を謝礼とした。

結果の概要と考察

ストレス体験と自己開示 ストレス状況の体験率は45.9~75.0%の範囲であった。状況体験時の自己開示の実行率は、57.7~84.8%であった。体験したストレス度が高いほど自己開示が有意に多くおこなわれていたのは8状況のうち2状況であった。自己開示しなかった理由については、ストレス度が低い場合には「話す理由がなかった」が多いのに対して、ストレス度が高い場合には「話すのは悪いと思った」も一部ながら挙げられる傾向にあった。

心理的適応(気分状態)との関連 相関分析の結果、ストレス体験および単純加算による自己開示度はポジティブ気分と

負、ネガティブ気分と正の相関があった。しかし、状況あたりの自己開示(体験したストレス状況の個数で除した値)はポジティブ気分と正、ネガティブ気分と負の有意な相関があった。さらに、開示場面あたりの受容的反応(開示場面数で除した値)もポジティブ気分と正の相関があった。

調査 2

目的

日常のストレス状況体験に伴う親しい友人への自己開示に関して調査1の結果を再確認し、さらに自己開示に対する友人のサポートと気分状態との関連性について検討する。

方法

対象者 大学生110名(男10、女100;社会人入学等を除く)。年齢は18-24歳(M=18.5、SD=0.97)。自宅通学者78.2%。

調査内容 ①日常ストレス状況での自己開示と相手の反応：8つの日常ストレス状況の体験と自己開示については調査1と同様とし、さらに自己開示があった場合に、福岡(2002、2004)と同様の「ストレス状況-支持的な働きかけ」の組み合わせにより、友人からサポートを受けた程度を、「大いに」「少しは」「あまり(または全然)」の3段階でたずねた。

②心理的適応(気分状態)：調査1と同内容で測定した。

手続き 調査1と同様とした。

結果の概要と考察

ストレス体験と自己開示 ストレス状況の体験率は47.3~65.5%、状況体験時の自己開示の実行率は、59.3~73.1%の範囲であった。8状況のうち4状況では、体験したストレス度が高いほど自己開示が有意に多くおこなわれていた。

自己開示に対するサポート 自己開示が多いほど友人のサポートは多く、「大いに話した」とときにはほとんどの場合、サポートも「大いに」おこなわれていた。「少し話した」場合のサポートの程度にはばらつきがあった。

心理的適応(気分状態)との関連 相関分析の結果、状況あたりの自己開示およびサポート(いずれもストレス体験で除した値)はポジティブ気分と正、ネガティブ気分と負の有意な相関があった。開示場面あたりのサポート(開示度で除した値)と気分状態との関係は有意ではなかった。しかし、ストレス状況あたりの開示度でサポートを除した値、つまりストレス体験に応じた開示度に対するサポートの程度を意味する指標は、ポジティブ気分と正、ネガティブ気分と負の有意な相関があった。

総括と今後の展望

日常ストレス状況の体験は気分状態に悪影響を及ぼすが、友人に自己開示ができること、さらにはストレス体験に応じた自己開示に対して多くのサポートが得られることは、ネガティブな気分を軽減しポジティブな気分を高めることが示唆された。ただし開示自体への抵抗感があり、ストレス体験が常に開示やサポートと直結するわけではない。この点についてさらに検討する必要がある。(ふくおかよしはる)

補：本研究の実施にあたり、平成15-17年度科学研究費補助金(若手研究B(課題番号15730285))による補助を受けました。

幼児に関わる犯罪－犯罪被害と犯罪不安－

桐生 正幸*1

小野 寺 理 江

(山形県警察本部科学捜査研究所・関西国際大学) (日本学術振興会・名古屋大学大学院)

key words: 幼児, 犯罪不安, 防犯, 犯罪被害

幼児や児童を取り巻く犯罪の様相は、極めて複雑化、深刻化している。これまでは、被害者と成りうる弱者（幼児、児童）を親や大人が守る、といった社会的な倫理感、防犯意識を根底に、家庭、コミュニティ、関連機関が犯罪抑止の機能を有していた。しかしながら、守るべき親や大人が、幼児や児童を対象とする加害者と変容し始めると、その社会的常識は形骸化する。親による心理的・身体的虐待やネグレクトが激増し、身近な大人による性的目的の誘拐、傷害や殺人といった事件が絶えず発生している（例えば、昨年11月に奈良市内で発生した女子誘拐殺人事件）。加えて、児童が幼児を殺害する（例えば、一昨年7月1日に発生した長崎事件）といった加害者としての様相を児童らが持ち始めてもいる。このような変化に対し、個々の領域における研究や対策が進められている。特に、防犯のための具体的なチェックリスト作成といった行政的対応、都市工学や環境犯罪学から「安心・安全まちづくり」の具体的な提案といった対策であり、それらの成果が表れ始めている。

目 的

本研究の目的は、近年増加している幼児や児童を対象とする犯罪を抑止するために、実際の被害状況や親などに対する犯罪不安感と防犯意識を調査し、実際の犯罪現場の分析結果と照合しながら、具体的な対策を講ずるための基礎資料を検討するものである。すなわち、①未成年者の中でも、より暗数が多いと考えられる幼児の被害実態を調査し、②親が感じる子どもの犯罪遭遇不安を分析し、③実際の犯罪現場、不安喚起場面を詳細に検討しながら、今後、望まれる具体的な被害者対策や防犯対策を提案する。

方 法

被調査者：関西地方の私立〇保育園に協力依頼し、回答を承諾した父兄148名（母親140名、父親6名、祖母1名。平均年齢33.2歳）である。**質問票：**表書き1枚と質問が記載された5枚によって構成したオリジナルの調査票。調査項目は、①「子どもが実際に遭遇した犯罪や危険な経験について」、②「子どもが犯罪や危険な目に遭うかもしれない不安感について」、③「子どもの生活環境で犯罪が起こりそうな場所について」、④「子どもの防犯について」などである。

結果と考察

被害経験では、声かけ事案が多かった。声かけ事案はそれ自身が犯罪行為に当たる場合があり、加えて略奪・誘拐や性犯罪等の重大な犯罪の前兆事案ともみることができる。親が感じる幼児の犯罪不安感の評価では、漠然とした不安、誘拐に対する不安が高く評価された。また、不安な場所としては公園、路地と回答した親が多かった。以上より、親は、公園、

路地などで、子どもが誘拐などの犯罪に遭うかもしれないと感じていることがうかがわれた。その理由として、誘拐殺人事件などのマスコミ報道、生活エリア内の不審者情報などの影響が大きいことも回答内容から明らかとなった。この結果をふまえ、物理的環境要因も加えながら具体的な防犯対策を考察したい。

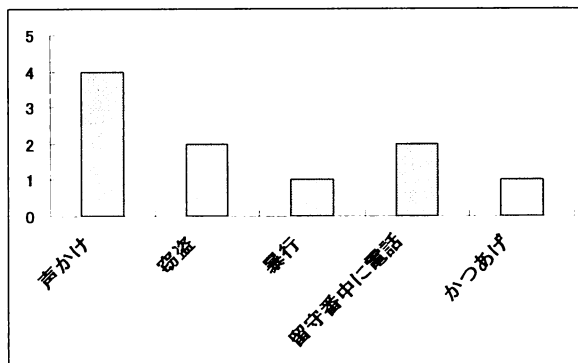


図1 幼児の実被害の内容と件数 (件)

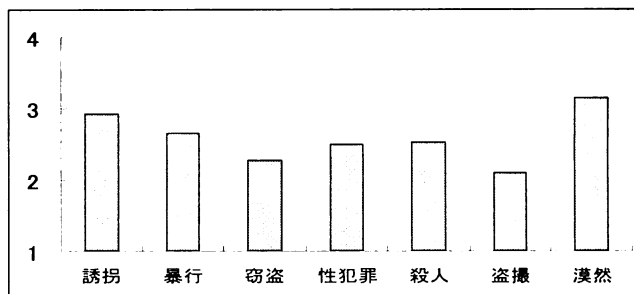


図2 親が感じる幼児の犯罪不安感の評価 (得点)

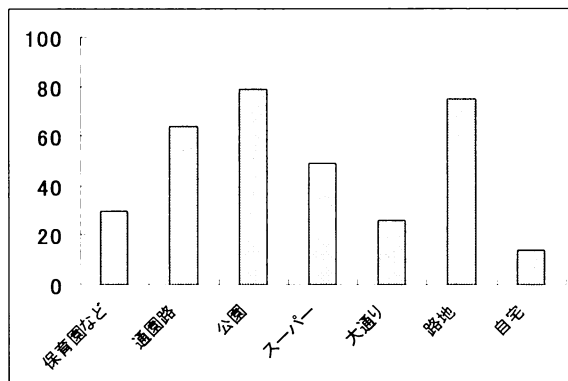


図3 幼児が犯罪に遭遇しそうだとの感じる場所 (人)

*1 本研究は、岡本 弘子先生（高崎健康福祉大学）、馬場 耕一郎先生（おおわだ保育園）、岡本 依子先生（湘北短期大学）との共同研究であり、また研究の一部は科学研究費補助金（奨励研究：課題番号17905011）によるものである。（きりうまさゆき・おのぞらまさえ）

重心動揺計を用いた偽薬効果の検討

○森 昇子

坂本正裕

(文京学院大学大学院人間学研究科) (文京学院大学人間学部)

キーワード：重心動揺 偽薬 暗示

目的

偽薬及び暗示による効果を見逃すことは事実としてよく知られている。最近になって、ようやくそれらの生理的変化や行動的效果に関与する中枢メカニズムについての研究が散見されるようになってきた。しかし、偽薬や暗示効果を測定するための簡便な行動的指標は極めて少ないのが現状である。最近になって、個人の状態不安の変動が重心動揺の変化となって現れることが示された (Ohno et al., 2004; Wada et al., 2001)。これらの報告は、様々な心的状態が重心動揺という行動的指標に反映される可能性を提起している。

そこで本実験では、過剰なカフェイン摂取が重心動揺に影響を与えるという暗示が、実際に参加者の重心動揺に影響を及ぼすかどうかを検討した。

方法

【参加者】17歳から33歳までの男女22名(平均年齢22.5歳, 男性12名, 女性10名)。

【装置】暗示効果の有無を検討するために、参加者にとって拘束や負荷が比較的少ないと考えられる重心動揺計(日本GEアルケットメディカルシステムズ社製EB1101)を用い、教示前後の重心動揺を測定した。また、カフェインの過剰摂取を参加者に印象づけるためコーヒー豆入りチョコレートを用いた。

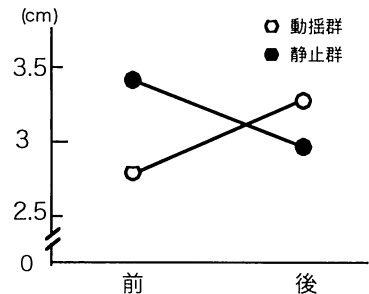
【手続き】実験の開始に際して、状態不安を測定するために参加者にSTAIへの記入を実施してもらった。その後、最初の重心動揺の測定を行った。重心動揺測定の際には、被験者の正面に注視点を用意し、なるべくそれを見ているように教示した。測定は60秒間、すべて開眼状態で行った。次に、休憩を数分間とった。この休憩時間に偽薬としてコーヒー豆入りチョコレートを食べてもらい、教示を与えた。教示はカフェインの過剰摂取の影響により動揺が「増加する」(動揺群)と「減少する」(静止群)の2種類であった。参加者の2群への割り当てはランダムとした。

結果

状態不安と1回目の測定で得られた重心動揺の各パラメータとの相関関係を最初に検討した。その結果、状態不安の高さと総軌跡長、単位軌跡長、単面軌跡長、矩形面積、前後径、左右径の大きさとの間には相関が見いだせなかった。しかしながら、状態不安の高さと外周面積($r=-.447, p<.05$)および実効値面積($r=-.471, p<.05$)の大きさの間に正の相関が見られた。

次に、教示の重心動揺に与える影響について分散分析を行ったところ、総軌跡長、単位軌跡長、単面軌跡長、外周面積、実効値面積、矩形面積、左右径に関しては主効果及び交互作用に有意差は見られなかった。しかしながら、群と前後径の大きさの間には交互作用が見出された($F(1,20)=4.76, p<.05$)。すなわち、教示で身体動揺が増加すると暗示した群は、安静

時に比べて身体動揺の前後径が増加する方向に、減少すると暗示した群は前後径が減少する方向に変化した。



教示前後の重心動揺の前後径の変化

そこで、教示前後における重心動揺の前後径の変化率を算出し、教示による効果と状態不安との関係を見たが、相関関係は見出せなかった。

考察

本実験結果から、偽薬効果が重心動揺に反映する可能性が十分にあることが示唆された。本実験で行った教示は「動揺が増加(減少)する」という暗示のみであり、動揺の方向性については一切触れていなかったが、暗示の影響が表れた重心動揺のパラメータは前後径のみであった。従来の状態不安と重心動揺の関係を調べた研究では、いずれも状態不安の高さは前後方向の揺れの大きさに反映されていた (Ohno et al., 2004; Wada et al., 2001)。本研究で参加者が受けた暗示による心的状態は不安と同一とは言い難い。それにもかかわらず、影響を受けた重心動揺の方向性は一致していた。したがって、本研究結果から、何らかの心的変化が生じた場合、それは身体の前後方向の動揺となって表れる可能性があることが示唆された。

本研究においては、状態不安の高低と重心の前後方向の変化には何ら関係が見いだせなかった。しかし、カフェインの過剰摂取という教示が、動揺群の状態不安の上昇を招き、その不安を介して前後方向の重心動揺が増大したという可能性は無視できない。

以上のことから、暗示と状態不安との関連をより明確にすること、教示内容を動揺の増加・減少ではなく動揺の方向について行うこと等が今後の検討課題となった。

参考文献

- Wada M, Sunaga N, Nagai M. (2001). Anxiety affects the postural sway of the antero-posterior axis in college students. *Neuroscience Letters*, **302**,157-9.
- Ohno H., Wada, M., Saitoh J., Sunaga N., Nagai M. (2004). The effect of anxiety on postural control in humans depends on visual information processing. *Neuroscience Letters*, **364**,37-39.

(もり のりこ, さかもと まさひろ)

看護実務経験を持つ看護学生の課題分割プラン

○星 薫¹⁾ ハツ橋のぞみ²⁾

(放送大学教養学部・県立よこはま看護専門学校)

キーワード：課題分割、清拭手続き、准看護師

【研究の目的】例えばオムレツを作って食べようとしたら、私たちは「オムレツを作る」という課題に取り組むことになる。このとき、オムレツ作りには、少なくとも3つぐらいのサブ課題が考えられる。つまり、「卵を割って、かき混ぜ、味付けをする」といった課題、「フライパンを暖めて、油を敷く」という課題、そして「熱いフライパンに卵を流し込んで一気に焼く」という課題である。これの課題が全部正しく行えて初めて、私たちはオムレツを食べることが出来るわけである。鈴木ら(1998)は、コピー機操作の学習場面を使って、課題分割プランと名づけて、この概念を提案している。私たちが目的を達成するために行うさまざまな行為(課題)は、複数のサブ課題に分割可能であり、それらのサブ課題を総て達成することで、初期の目標は達成されるとする考え方である。またこの課題分割は、何も機械操作だけのことではなく、私たちの日常的な作業、行為に関しても、それを正しく行うためには、やはり正確な手順と、適切な操作が必要となる。

例えば、看護学生が看護技術の一つとして学校で習い、また現場の看護師たちが日常的作業の一つとして行うことが少なくない、全身清拭という課題に関しても、これを正しく適切に行うためには、やはりそれなりの課題分割プランがあり、それに従って、実際の作業を行っているものと考えられる。

さて、看護学校の進学課程には、准看護師として臨床の現場で看護の実務を何年間か経験した後に、正看護師資格を得るために、進学過程に再入学した学生たちがいる。彼らは、看護実務の一環として、清拭作業も経験している者が少なくないと思われるが、こうした一定の看護実務経験を有しながら看護学生としての再教育を受けている者たちと、現場での長い看護師としての経験を積んだベテランナースとは、課題分割プランにどのような相違があるのだろうか。

今回、こうした実務経験を有する看護学生たちに対して、清拭作業について、課題分割プランの作成を課してみた。また、2名のベテランナースにも、清拭作業の手順を書き出してもらい、これを看護学生の書いた手順と比較し、看護学生の課題分割プランの特徴を調べることにした。

【方法】被験者として参加した看護学生は17名であった。全員20歳代から30歳代の女性であり、看護師としての経験年数は、もっとも短い者で2.8年、もっとも長い者では13.4年であった。一方、2名のベテランナースは、看護師経験がそれぞれ10年、19年の者であった。彼らに与えられた課題は、以下のようなものであった。

「次の条件の患者さんへ、お湯を使った全身清拭の援助を行うことになりました。あなたはどんな手順で行おうと思えますか。実際に行くと想定して、その手順を準備・実施・片付けという3つの流れに沿って、できるだけ具体的に記載してください。

条件

70歳代の男性患者。肺炎で入院し、ベッド上安静がこの1ヶ月ほど現在まで続いています。肺炎は良くなってきている状態です。麻痺はなく、手足は自力で動かせますが、まだ起き上がることが出来ません。入浴は入院後ずっとしていませんが、清拭は定期的に行っています。4人部屋の窓側のベ

ッドです。掛け布団を1枚掛けています。前開きボタンのパジャマを着ており、靴下は履いていません。下着はオムツのみです(バルンは入っていません)。季節は冬です。」

【結果】看護学生たちは、授業時間中に授業課題の一環として、課題分割プランの記述を求められた。記述に要した時間には、個人差が大きく、早い学生では、20分ほどで完成したのであるが、中には1時間を要した者もあった。一方、ベテランナースたちには、仕事の休憩時間に書いてもらったが、2名とも、20~30分の所要時間で、書き上げていた。記述は、数字を打って箇条書きにするよう求めたが、実際には、複数の行動が1文の中に混在している例も多かった。そこで、記述を、1つの動詞からなる単文に分解して表記することとした。

記述に際しては、手順を準備、実施、片付けの3段階に分割するよう教示したのだが、2名のベテランナースの記述では、その内容から、これらの3つの段階が更に細分化された。すなわち、1)準備の段階は、「清拭が可能かどうかの確認」などといった、①確認作業の段階と、「物品の準備」などの②準備作業との2つの下位段階に分割されていた。2)実施の段階では、①上半身の清拭、②下半身の清拭、および③清拭終了後という3つの下位段階が区分できた。3)片付けに関しては、①ベッドサイドでの片付け作業と、②退室後の片付け作業とに区分された。さらにそれぞれの下位段階について、3~17個の動作が記されていた。

一方、学生の記述では、ベテランナースの記述から得られた7つの下位段階が総て認められた学生は、17名のうち3名のみであり、他は6つの下位段階が認められた者11名、5つの者2名、4つの者1名であった。さらに、それぞれの下位段階で記述された項目数については、どの段階でもベテランナースの記述数に比べて、格段に数が少なかった。例えば、1) - ①(清拭準備段階-確認)で、2名のベテランナースは共に、「カルテやバイタルサインから清拭可能かどうかの確認」、「患者と相談して、スケジュール、方法を決定」、「尿意便意の確認」を挙げているが、これらを3つとも記述した学生はなかった。3項目中、2項目記述した学生は4名であり、彼らは総て、「体調の確認」「尿意、便意の確認」を挙げているが、「患者と相談してスケジュールや清拭の方法を決める」を挙げた者はなかった。一方、「確認」に該当する下位段階が全く認められなかった学生も、4名あった。このように、全体に学生の記述は、記述項目数が少なく、同時に記述内容に具体性が乏しいことが特徴として挙げられた。

【考察】看護学生の課題分割プランは、ベテランナースに比べて、内容が乏しく、具体性に欠ける傾向がうかがわれた。これが、清拭作業の経験に乏しいためか、あるいは自発的にこれを行った経験を持たないためなのかは不明である。

【引用文献】

鈴木宏昭・植田一博・堤江美子 1998-日常的機器の操作の理解と学習における課題分割プラン Cognitive Studies, 5, 14-24

(ほし かおる・やつはし のぞみ)

大学生における「気まずさ」対処法

○小松 桂子¹⁾ 内藤 哲雄^{1,2)}

(¹⁾信州大学大学院人文科学研究科 (²⁾信州大学人文学部)

キーワード：気まずさ、対処法、対人関係

【研究の目的】我々が対人関係の中で感じる「気まずさ」は、日常生活の中で重要な意味を持つものである。しかしこれまで「気まずさ」は対人不安の中の一部として取り上げられたり、羞恥と同様のものとみなされてきたにすぎなかった。そこで、本研究では、「気まずさ」を本格的に取り上げ、「気まずさ」対処法の構造を検討するための調査を試みた。

【方法】

被調査者 信州大学生 261 名 (男性 147 名 女性 114 名)
手続き 信州大学生 62 名 (男性 28 名 女性 34 名) に「気まずさ」を感じた時にどのような対応をするかについて自由記述させ、対処法に該当する 170 個の記述を抜き出した。このうち内容が重複・類似したものをまとめたところ、151 個となり、これらは 19 のカテゴリーに分類された。次いで各カテゴリーを代表すると判断されたものを取り上げ、62 項目からなる「気まずさ対処法尺度」を作成した。このようにして作成した質問紙を信州大学生 261 名に教室で配布し、「気まずさ対処法」の使用頻度を単極の 11 段階で評定させた。

【結果】回答に欠損のあった 12 名を除いた 249 名の因子分析を行った (主因子法・プロマックス回転)。さらに因子負荷量が .20 以上の項目を残し、再度因子分析を行ったところ 10 個の因子が抽出された (表 1)。

【考察】

因子命名について

第 1 因子は、その場で起こっている「気まずい」事態の認知を拒否するために視線をそらすという内容の因子であるとし、『視線をそらす』と命名した。次に第 2 因子は、意識的に明るく振る舞うことで自分が「気まずい」と感じていることを相手に悟られないようにする、という内容の因子であるとし、『わざと明るく振る舞う』と命名した。続いて第 3 因子は、直面している「気まずい」事態を何とか変えて、自分自身が「気まずい」と感じている事実を解消しようとする、という内容の因子であるとし、『気にしないようにする』と命名した。次に第 4 因子は、意識的にいつもと変わらぬ自分を演じて、自分が「気まずい」と感じていることを相手に悟ら

れないようにする、という内容の因子であるとし、『平常心を装う』と命名した。次に第 5 因子は、「気まずい」出来事の意味付けをネタやギャグと言ったユーモアに積極的に変えて解消しよう、という内容の因子であるとし、『ユーモアに変える』と命名した。次に第 6 因子は、自分の非を認め謝る、という内容の因子であるとし、『謝罪する』と命名した。次に第 7 因子は、話題を変えるなどして「気まずい」その場の雰囲気気を解消しようとする、また「気まずさ」におかれた自分や他者の興味を別のところへ惹こうとする、という内容の因子であるとし、『その話題に触れないようにする』と命名した。次に第 8 因子は、現在の「気まずさ」を教訓にして、未来に起こるであろう「気まずい」状況を少しでも軽く乗り切ろうという前向きな内容であるとし、『未来への教訓にする』と命名した。次に第 9 因子は、立ち去ることで「気まずい」雰囲気になっっている場を変えよう、という内容の因子であるとし、『その場から逃避する』と命名した。最後に、第 10 因子は「気まずい」状況を表に出さないようにしながら、相手の非難や追求から逃れる、という内容の因子であるとし、『追迫を回避する』と命名した。

因子の特徴について

本研究で抽出された 10 個の「気まずさ」対処法は、その性質上 3 つに分類することが出来よう。一つ目は、第 1, 5, 6, 9, 10 因子にみられる、「気まずさ」を作り出している状況そのものを問題とし、それを巧みに解決していこうとする問題中心の対処法である。二つ目は、第 2, 3, 4, 7 因子に見られる「気まずい」事態において生じるイライラや怒りなどの情動的反応を低減したり、調整しようとする情動中心の対処法である。そして三つ目は、第 8 因子に見られる、「気まずい」状況が起こる前にそれを防ごう、あるいは「気まずい」状況が起きてても不快感が最小限留まるように心の準備をしておこうとする回避法であると解釈できよう。

以上のことから、日常生活において重要な意味をもつ「気まずさ」に対する 2 つの対処法と、1 つの回避法についてその詳細が明らかになったと言える。

表 1 回転後の因子分析結果

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	第7因子	第8因子	第9因子	第10因子
うつむく	0.81	0.03	-0.08	-0.09	0.06	0.07	-0.05	0.06	0.01	-0.13
相手を見ないようにする	0.79	-0.05	0.03	0.19	0.03	-0.02	0.04	-0.02	0.03	-0.01
別の方向へ名を向くようにする	0.78	-0.09	0.17	0.04	-0.02	0.01	0.18	-0.08	-0.11	0.11
視線をぼかし続ける	0.63	-0.05	-0.09	-0.11	-0.03	0.02	-0.01	-0.07	-0.01	-0.06
視線を合点なげないようにする	0.56	0.08	0.13	0.03	0.08	-0.07	-0.09	-0.02	0.20	0.10
目をそらす	0.51	-0.01	-0.10	0.12	0.02	-0.08	0.02	0.12	0.08	0.05
見て見ぬふりをする	0.47	0.04	0.00	0.33	-0.05	0.01	-0.03	0.02	0.09	0.02
そこにいないようにする	0.30	-0.07	-0.20	0.30	0.11	0.01	0.16	0.22	0.00	0.05
わざと明るく振る舞う	-0.05	0.88	-0.13	-0.03	0.12	-0.09	0.09	-0.08	0.02	0.01
明るく振る舞う	-0.02	0.84	-0.05	0.02	0.00	0.05	0.02	-0.11	-0.05	0.01
わざと笑う	0.16	0.71	0.10	0.06	-0.19	0.01	-0.04	0.13	-0.24	-0.10
口数をもくする	-0.15	0.59	-0.03	0.10	0.10	-0.05	0.05	-0.12	0.15	0.11
わざと笑かす	0.10	0.48	0.20	-0.08	0.14	-0.01	0.03	-0.11	-0.09	0.12
笑ってごまかす	0.02	0.44	0.00	0.10	0.11	0.00	0.00	0.12	0.08	0.04
他人に流されてもらう	-0.12	0.23	0.09	-0.05	-0.12	0.15	-0.04	-0.01	0.14	0.18
誰にでもあることだと思うようにする	-0.10	0.01	0.80	0.12	-0.03	0.04	-0.21	0.01	-0.02	0.10
大したことでないと思うようにする	-0.18	-0.20	0.67	0.33	0.16	-0.05	0.03	0.07	-0.06	-0.11
笑顔を向ける	0.04	-0.12	0.66	-0.24	0.00	0.00	0.27	0.00	0.03	0.17
大丈夫だと自分に言い聞かせる	0.14	0.06	0.55	-0.05	0.10	-0.01	-0.06	0.02	-0.03	-0.07
気まずいのは自分だけだと思うようにする	0.11	0.08	0.54	0.10	-0.02	-0.10	-0.31	0.12	0.03	0.07
何か他の事で気持ちを離す	-0.02	0.09	0.53	-0.10	-0.06	0.05	0.13	-0.07	0.03	0.07
他の事を考えるようにする	0.24	0.12	0.46	-0.17	-0.12	-0.07	0.03	0.02	0.03	-0.10
忘れるようにする	-0.12	0.07	0.36	0.08	-0.04	-0.04	0.06	-0.01	0.15	-0.04
気にしないようにする	0.11	-0.10	0.33	0.25	0.07	0.05	0.28	-0.06	-0.07	-0.20
時の経つのを待つ	-0.01	-0.03	0.28	0.15	0.03	0.06	0.14	-0.09	0.15	-0.09
気にしていないりする	0.07	0.08	0.04	0.71	0.01	0.06	-0.03	-0.11	0.13	0.00
知らないうちに忘る	0.05	-0.10	-0.02	0.62	-0.09	0.05	0.11	-0.04	0.09	0.10
平常心を装う	0.05	0.01	0.01	0.56	0.04	-0.08	0.10	-0.02	-0.12	0.07
何事もなくかたかたのように振る舞う	0.02	0.04	0.22	0.49	-0.08	-0.07	0.00	0.06	-0.05	-0.09
動きを隠す	0.01	0.15	0.03	0.43	-0.19	0.05	0.10	0.02	-0.01	0.04
それをネタにする	0.02	0.02	0.06	-0.07	0.85	0.04	-0.03	-0.02	0.07	0.07
ギャグを入れる	0.06	0.10	0.06	-0.04	0.84	0.02	0.04	-0.04	-0.10	0.02
それを笑みかけのように装う	0.03	0.25	-0.06	-0.04	0.64	-0.13	0.06	0.09	0.01	0.09
謝罪する	-0.04	-0.07	0.07	0.00	-0.01	0.84	0.04	-0.03	0.04	0.07
謝る	0.06	0.00	-0.10	0.02	0.01	0.79	0.15	0.08	-0.04	0.07
謝罪を繰り返す	-0.10	0.15	-0.06	-0.08	-0.05	0.28	0.09	0.22	0.03	0.25
当該場面の話題を変える	0.00	0.15	-0.12	0.14	0.00	0.09	0.65	-0.13	-0.01	-0.09
関係のない話題にする	0.08	0.04	-0.05	0.12	-0.10	-0.12	0.64	0.04	0.12	0.02
その場を退くようにする	-0.06	0.31	0.16	-0.13	0.01	0.06	0.56	0.12	0.10	-0.16
その場を取り繕う	0.05	0.04	0.00	0.04	0.10	0.16	0.54	-0.07	-0.19	0.05
話をそらす	-0.02	0.04	-0.10	0.16	-0.11	-0.15	0.37	-0.06	-0.06	0.32
気まずい雰囲気を一掃しようとする	-0.12	0.29	0.03	-0.01	0.11	-0.04	0.32	0.30	0.02	-0.04
同じことを繰り返さないように注意する	0.10	-0.08	-0.04	-0.02	0.03	0.03	-0.12	0.96	-0.01	-0.02
次回からの教訓にする	-0.07	-0.12	0.22	-0.07	-0.05	0.04	-0.03	0.68	0.02	0.03
その場から立ち去る	0.22	-0.06	0.01	0.05	-0.02	-0.05	0.01	0.01	0.76	0.00
その場を離れる	0.17	-0.07	-0.02	-0.04	-0.03	-0.05	-0.06	0.03	0.72	0.18
逃げる	0.22	0.16	-0.04	0.06	0.07	0.17	-0.14	-0.02	0.57	-0.18
言い訳をする	0.01	0.03	0.03	0.05	0.13	0.12	-0.03	-0.01	0.06	0.67
謝罪を促さぬようにする	0.00	0.19	0.05	0.16	0.03	0.03	-0.11	0.03	-0.04	0.36
謝罪率 (%)	24.09	10.66	4.48	3.47	2.81	2.25	2.09	1.65	1.52	1.47
謝罪回数 (%)	24.09	34.75	39.23	42.7	45.51	47.76	49.85	51.5	53.02	54.48

(こまつ けいこ・ないとう てつお)

職業ラベルと顔のマッチング

○福本 純一 福田 廣

山口県警科学捜査研究所 山口大学教育学部

キーワード：偶発記憶、顔の示差性、職業ラベル

目 的

日常的な人物記憶では、個人の顔だけではなく、個人に関する様々な情報が結びつけられて記憶されている。福田・福本(2004)は、未知顔の記憶における個人識別情報との関係について検討を行い、顔は名前や出身地よりも職業名との連合が優位であることを確認し、従来の先行研究の結果と一致する部分もみられた。また、顔の示差性と個人属性の交互作用がみられることも示唆された。

ところで、木原ら(2002)によると、顔とアルバイトや趣味についての個人情報を含めた記憶は、符号化時に判断した適合度の高低に影響を受けることが考えられるという。

そこで、本研究では、記憶処理の時点で活用される各職業と顔の適合度(顔からのイメージの合致度)と顔の示差性の高低を組合せ、職業ラベルの適合度判断が再認成績に及ぼす影響について検討した。

方 法

実験計画 顔の示差性が主要因であるが、適合度判断の結果を受けて、最終的には2(顔の示差性：高示差性H, 低示差性L)×4(適合度：1合っていない, 2やや合っていない, 3やや合っている, 4合っている)の2要因計画で分析を行った。なお、いずれも被験者内要因であった。

被験者 大学生76名(18~20歳の男性47名, 女性29名)

刺激材料 筆者らの過去の研究で使用した顔の示差性判定を行った男性(18~29歳)の正面真顔写真リストの中から高示差性群、低示差性群に分類された顔写真を各7枚計14枚を任意に選択し標的刺激とした。標的刺激は、B5判用紙の中央にモノクロ写真(8.5×10cm)に印刷して使用した。

職業カテゴリーとして、白澤ら(1999)の職業ラベルと印象変化の予備実験における、職業カテゴリーとふさわしい顔の反応頻度による因子分析の結果を参考に、抽出された7因子の各カテゴリーごとに高負荷量を示した職業ラベルより2職業ずつ計14種の職業ラベル(医師・教師)、(公務員・銀行員)、(ウエイター・理容師)、(農業・魚屋)、(犯罪者・無職)、(土木作業員・暴力団員)、(大学講師・研究員)を設定した。職業カテゴリーは、顔写真下に記載されており、試行を通じて組合せをカウンターバランスした。

手続き 実験は集団法により、方向付け課題と再認課題を実施した。「方向付け課題」は、顔写真と職業が印刷された14枚の標的刺激をランダムに配列した冊子を配布し、『顔と付記された職業のイメージとの合いやすさ』について4段階評定(1:合わない~4:合う)による判断を求める偶発記憶事象とした。1刺激の提示時間は10秒とした。

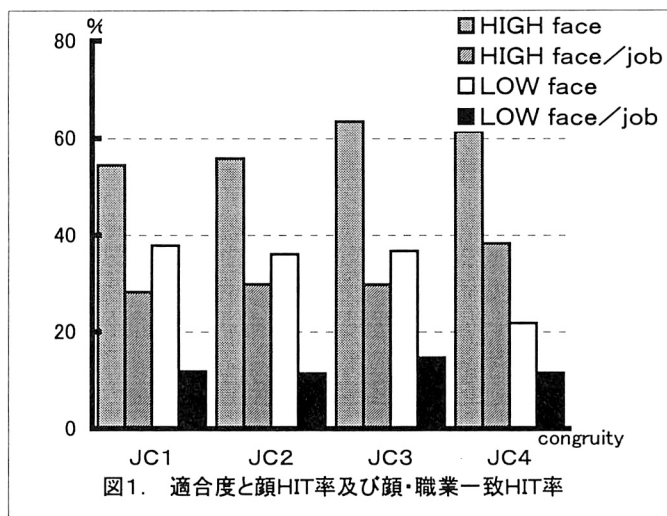
「再認課題」は、学習終了約1時間の妨害フェーズののち、顔写真リストから標的刺激以外の26枚の顔写真を妨害刺激に加えた計40枚のモノクロ顔写真(3×4.5cm)を印刷した再認用シートを配布し、方向付け課題で提示した顔があるか否かを判断を求めた。さらに、提示された顔と判断された刺激に対しては、その人物の職業ラベルについて30種類の職業カテゴリーが書かれた職業欄から強制多肢選択を求めた。

結果と考察

結果は、正再認数(HIT率)を求めた。HIT率は、適合度ごとに処理し、正再認数を判断された適合度の反応数で除した値とした。さらに、被験者ごとに得られた数値は、角変換処理を行ったのちに、HIT率に及ぼす効果を検討するため分散分析を行った。

顔の示差性と職業カテゴリーの適合度別の顔のみの平均再認率及び職業・顔が一致した平均再認率を図1に示した。顔のみの平均再認率の分析は、示差性の主効果($F(1,75)=59.07, P<.001$)は有意であったが、適合度の主効果はみられなかった。また、示差性と適合度の交互作用($F(1,75)=3.16, P<.05$)が有意であった。交互作用について多重比較を行った結果、低示差性条件では適合度が高い判断基準のHIT率他の3つの判断基準よりも有意($P<.05$)に低減することが示された($t(450)=2.54, t(450)=2.54, t(450)=2.46$)また、職業・顔が一致したHIT率の分散分析の結果、示差性の主効果のみ有意であった($F(1,75)=50.91, P<.001$)。

実験結果は、顔と個人情報の組合せの再認に関して適合度のみが記憶に影響した木原ら(2002)の結果と一致しなかった。高示差性の顔では職業ラベルと適合度の関連はみられなかったが、低示差性の顔では適合度が高い(イメージが合致)条件において記憶に抑制的に作用した。すなわち、被験者が低示差性の顔とある職業が適合したと判断していても、顔再認は、より困難になっていた。連合的な記憶でも、視覚的特性と意味解釈的な特性は、相互関連的に影響を及ぼしている可能性が示唆された。さらに、職業ラベルと適合度の関連性の高い顔の視覚特性の関連について、検討を進める必要がある。



【引用文献】

福田廣・福本純一 2004 個人識別属性とマッピング 山口大学教育学部論叢 54,11-16.

木原香代・伊藤美加・吉川左紀子 2002 日心第66回大会発表論文集,788.

白澤早苗・箱田裕司・原口雅浩・山田奈津子 1999 顔の認知に及ぼす職業的カテゴリー化の影響 基礎心理学研究 18,1-8.

(ふくもと じゅんいち・ふくだ ひろし)

研究発表（口頭発表）

T字型交差点におけるドライバーの リスクテイキングに関する研究

○中井 宏¹⁾ 白井 伸之介¹⁾

(1) 大阪大学大学院人間科学研究科)

キーワード：ドライバー、リスクテイキング、一時停止

【目的】心理学では、事故につながる個人特性としてのリスクテイキングに関する研究が盛んに行われてきた。例えば、喫煙や飲酒・株式等におけるリスクテイキングの個人差が調査されたり、適性検査の一項目として取り上げられたりしている。交通心理学でも、ドライバーのリスクテイキング行動について質問紙調査や観察調査が行われてきた。芳賀(1994)は、質問紙調査の結果、ある場面でリスクテイキング傾向が強いひとは他の行動場面でもリスクに振る舞うことを示し、リスクテイキング傾向には個人内一貫性が見られると主張した。これに対して吉田(1995)は、観察調査によってシートベルト着用者と非着用者の交差点での安全確認実施率に差異が見られないことを示した。吉田は、前者の立場を「安全意識中心モデル」、後者を「次元独立モデル」と名付けた。さらに、運転行動の多くは各場面に依拠して活性化されるスキーマであるとした「場面对応スキーマモデル」を提唱している。本研究では、これら両モデルの妥当性検証を目的とした。

【方法】2003年11月と2004年7月に、一時停止が義務づけられている無信号T字型交差点において、非優先道路から優先道路に右折するドライバーを観察し(それぞれ $n=855, 1115$)、車両特性・ドライバー特性・行動を記録した。記録指標は、車体色、ナンバー、車種、ドライバーの性別、年代(30:若年, 30-60:中年, 60+:高年)、シートベルト着用の有無、携帯電話使用の有無、同乗者の有無、合図の有無(30m 前の地点、交差点直前)、一時停止(2秒以上だけの場合、2秒未満も含む場合)の有無、安全確認回数、優先道路接近車の有無、横断歩道付近歩行者の有無、approach time(停止線手前30mから停止線までの所要時間; 以下AT)、checking time(停止線通過から交差点進入までの所要時間; 以下CT)、turning time(交差点進入から右折完了までの所要時間; 以下TT)である。これらは、観察者の目視とデジタルビデオカメラ4台を用いて記録された。さらに、車体色やナンバーから複数回観察できた同一車両のデータだけを抜き出し、接近車や歩行者の有無を個人内の要因として詳細に検討した。分析に際しては、普通車及び軽自動車のみを対象とした(調査1: $n=549$, 調査2: $n=816$)。

【結果】ロジスティック回帰分析ならびに重回帰分析を行った結果、多くの運転行動が相互に関連することが明らかとなった。確認回数を従属変数とした重回帰分析結果($F=67.635$, $R^2=.369$)を一例としてTable 1にあげる。

Table 1 確認回数に対する重回帰分析結果(調査2)

	非標準化係数	標準化係数	t値	
CT	***	0.710	0.293	9.191
TT	***	0.488	0.234	7.457
瞬間停止	**	0.801	0.118	2.813
接近車	***	0.474	0.162	5.350
ベルト	***	0.314	0.099	3.504
一時停止	*	0.925	0.103	2.457
携帯電話	*	-0.956	-0.067	-2.384

* $<.05$, ** $<.01$, *** $<.001$

Table 1は、標準化偏回帰係数が小さいものもあるが、シートベルトを着用しているドライバーほど、停止線前で停止するドライバーほど、さらにCT, TTが長いドライバーほど確認回数が多くなり、逆に携帯電話を使用するドライバーほど確認回数が少ないことを示している。その他にも、シートベルトを着用しているドライバーほど合図実施率が高く、AT, CT, TTが長いことが明らかとなった。また、30m前の合図と瞬間停止との間にも有意な関連が見られた。

次に、複数回観察したドライバーについて、観察時の外部状況(接近車や歩行者)が同じ2回のデータを抜き出し($n=93$)、相関分析及びマクネマー検定を行った。1回目データと2回目データの相関分析の結果、AT, CT, TTについてそれぞれ $r=.54(p<.001)$, $r=.39(p<.001)$, $r=.29(p=.004)$ となり、速度選択において個人内一貫性が認められた。また、確認回数についても $r=.77(p<.001)$ となり、速度と同様に一貫性があった。シートベルト、30m前地点での合図に関してマクネマー検定を行ったが、それぞれ $p=.302$, $p=.229$ となり、1回目と2回目に統計的有意差があるとは言えなかった。つまり、個人内一貫性が認められた。これにより、運転行動の多くはスキーマ化された行動であるということもできる。

さらに、複数回観察した同一ドライバーのデータから、歩行者・接近車がない場合を統制条件、歩行者のみがある場合を歩行者条件、接近車のみがある場合を接近車条件として各条件間で行動指標の差異を分析した。CT, TT, 確認回数について、統制条件と接近車条件の平均値について対応のあるt検定を行ったところ、3変数ともに有意差が見られ、接近車条件では行動が安全な方向にシフトすることが明らかとなった。次に、AT, CT, TT, 確認回数について統制条件と歩行者条件の比較を行った。対応のあるt検定の結果、AT及び確認回数に有意差が見られ(それぞれ $p=.022$, $p=.039$)、歩行者条件でより安全な行動をとることが示された。

【考察】多くの行動指標間に関連が見られることから安全意識中心モデルの考え方が支持されたが、接近車や歩行者等の外的要因によって運転行動が変化することから、ドライバーの行動は場面や状況に依存するという次元独立モデルの考え方も否定できない。つまり、ドライバーの運転行動は外的要因に作用されるものの、外的要因と意識との関連をなくして行動に言及することはできず、両モデルのどちらか一方だけで行動の説明がつくものではない。今後は、スキーマ形成段階や、外的要因に影響されてスキーマを修正する際の個人差にまで言及した新しいモデルを構築する必要がある。

【引用文献】

- 芳賀繁・赤塚肇・楠神健・金野祥子 1994 質問紙調査によるリスクテイキング行動の個人差と要因の分析 鉄道総研報告 Vol.8, No.12, 19-24.
吉田信彌 1995 シートベルト着用者と非着用者の交差点行動の比較 IATSS review Vol.21, No.1, 38-46.

(なかい ひろし・うすい しんのすけ)

面接調査による高齢運転者の補償的運転行動

松浦 常夫

(実践女子大学人間社会学部)

キーワード：高齢運転者、補償的運転行動、面接調査

【研究の目的】 昨年から日本交通心理学会では、高齢運転者への交通安全教育プログラムの作成に関する研究を実施している。本研究は、その柱の1つである高齢運転者向けワークブックの作成のために行った予備的研究である。

ワークブックの内容には、老いの自覚とそれへの対処が含まれる。運転者は高齢者に限らず、ある複雑な行為をする場合には、心身機能低下を補う適応戦略として、選択と補償を採用していると言われる。車の運転の場合にも、高齢者は加齢に伴う事故危険性の増加を補う行動として、夜間の運転を控えるといった補償的運転行動を取っていることが知られている。しかし、これを組織的に調べた研究は少ないため、本研究でこれを調べた。

高齢者がどのような補償的運転行動をしているかが明らかとなれば、これをチェックリストとしてワークブックの中に入れる予定である。ワークブックをおこなう高齢運転者は、自らが行っている補償的運転行動が十分なものを自らが気づき、リスト上の補償的運転行動のいくつかを取り入れて運転するようになるかもしれない。

【方法】

対象者 自動車教習所で実施している高齢運転者講習受講者を対象とした。対象とした教習所は、日本交通心理学会と交通心理士会の会員が所属している全国の10校の教習所であった。対象者は296人で、年齢は69歳から87歳(平均は73.0歳)であった。

調査方法 高齢運転者講習実施後に教習所内の個室で面接調査をおこなった。面接時間は約1時間とし、高齢運転者には謝礼を支払った。また、その際には被験者の了承を得て、事前に配布したアンケート調査結果および今回の運転行動、適性検査、および視力検査の結果を参考資料とした。面接調査は日本交通心理学会員である教習所職員が、マニュアルに基づいて実施した。

調査項目 面接では13項目について質問したが、運転上の問題点を克服するためにどう対処しているか、運転で工夫し

している点や安全運転のコツは何か(補償的運転)を聞いた結果と講習前に実施した質問紙調査の結果(このうち年齢、運転頻度、主観的健康度、運転への自信)について述べる。

【結果】

1 報告された補償的運転行動の分類 表1の分類の中で、夜間は運転しないとかが長距離は運転しないといた「運転の制限」は選択に当たり、その他が補償に相当する。どう補償するかといえば、運転課題の水準を低くしたり、安全余裕(safety margin)を多くとったりするのである。補償行動の中で一番多かったのは、「スピードを出さない」運転であり、回答者283人中の約4割がそれを報告していた。次いで「しっかり見る・確認する」、「安全への心がけ」、「車や歩行者に近づかない」という防衛運轉的な安全余裕の多い運転方法が挙げられていた。なお、運転前の準備は27人(延べ)と1割以下であったが、3番目の適応戦略と考えられる。

2 年齢、適性検査、運転頻度、主観的健康度、運転自信と補償的運転行動 高齢運転者の中でも年齢が高い人、適性検査の成績不良者、運転頻度が少ない人、健康状態が良くない人、運転に自信を持っていない人は、補償の数が少なかったり、補償の種類が異なったりするか否かを調べたが、そのような傾向は見られなかった(表1)。

【考察】

一般的に高齢者の適応戦略として選択と補償があるが、高齢運転者の場合にもそれが運転の制限と運転パフォーマンスの水準低下という形で対応していた。運転前の準備は選択に相当するか、第3の戦略として考えることができる。

高齢運転者の適応戦略は、高齢者の中でもより年齢が高い人や運転への自信が比較的低い人などでは、一層多く用いられ、またその種類も他の人々とは異なると予想された。しかし、本調査ではアクティブな高齢者を対象としていたためか、面接では本当の補償的運転行動が採取しにくかった等の理由で、年齢差等が見られなかった。今後は比較群として中年運転者の適応戦略について面接調査をしたい。

表1 高齢運転者の補償的運転行動とその年齢差、適性検査

差、運転頻度差、運転自信差

補償的運転行動の分類	N	年齢		適性検査		運転頻度		主観的健康度		運転自信	
		69-72歳	73-87歳	やや注意	注意	週3、4日以上	週に1、2日以下	非常に良い	普通	自信あり	自信なし
1 運転の制限	102	20.4	20.5	17.2	21.8	20.8	20.0	19.0	22.5	21.1	18.0
2 運転前の準備	29	5.83	5.79	8.3	4.5	6.2	3.6	6.0	5.7	6.7	0.0
3 スピードを出さない	131	26.7	25.9	28.9	24.4	27.2	21.8	27.8	25.4	25.9	32.0
4 車間距離を十分にとる	18	3.8	3.1	3.9	3.2	2.7	7.3	4.0	2.5	3.5	2.0
5 一時停止をしっかりとる	16	3.8	2.7	4.4	2.6	3.4	0.0	2.0	4.1	3.2	2.0
6 車や歩行者に近づかない	39	10.0	5.8	7.8	8.0	7.3	9.1	6.5	8.6	7.2	8.0
7 しっかり見る	61	9.2	13.9	8.3	13.8	11.9	9.1	12.9	10.2	11.1	14.0
8 安全への心がけ	44	6.7	10.0	7.2	9.3	8.5	9.1	8.9	8.2	8.6	10.0
9 その他安全のための運転	47	11.3	7.7	11.1	8.3	8.2	16.4	10.1	8.2	9.5	6.0
10 危険補償なし	19	2.5	4.6	2.8	4.2	3.7	3.6	2.8	4.5	3.2	8.0
合計(%)	506	100	100	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
延べ人数		n = 240	n = 259	n=180	n=312	n=437	n=55	n=248	n=244	n=432	n=50
実人数		n = 141	n = 139	n=98	n=179	n=250	n=30	n=133	n=147	n=244	n=30

(まつうら つねお)

高速道路走行におけるクルーズコントロール使用の心理学的意義

— 運転は楽になるか (1) —

○畑山 俊輝¹⁾ 北村 康宏²⁾

(¹⁾ 八戸大学人間健康学部 (²⁾ 東北大学文学研究科)

キーワード：高速運転、クルーズコントロール、精神負担

【目的】最近では一般ユーザー向けの乗用車にもさまざまな面に情報技術が取り入れられている。カーナビシステムに見るように、これらは運転を支援する目的で構想されたものである。運転支援のシステムの中には、高速道路での使用を念頭に置いたクルーズコントロールシステムがある。これはドライバーからアクセル調節を開放し、コンピュータ制御により一定の速度を維持して車を走らせるシステムである。ドライバーにとってはアクセル調節がいらなくなるだけでも運転が楽になると考えられる。しかし、実際にドライバーにとって長距離を長時間運転する場合に、どの程度疲労感や心的負担の程度が軽減されるのか、自動車メーカーの資料にさえ、こうした心理学的な情報はほとんど述べられていない。ユーザーが手にする車のマニュアルではごく簡単に利用法が記載されているに過ぎない。これではユーザーは、そのようなシステムを積極的に活用する意義を見出しがたく、利用の動機づけを持ちにくいことにもなる。

本研究ではこうした状況を踏まえ、実際に高速路での長時間の運転下で資料を収集し、クルーズコントロールシステムがドライバーの心的負担の軽減にどの程度寄与するのかを検討しようとした。

【方法】被験者：実験的走行は本報告の発表者1名が行った。37年の運転歴を有する。

実験車：トヨタプリウスS（型式 ZA-NHW11）2001年製。

走行路：八戸自動車道と東北自動車道に設置されている福地PAと鶴巣PAとの約280kmの区間を使用した。その中間点である紫波SA（休憩地点）までと、その後の残り部分との2区間で比較を行った。実施期間は平成17年5月中旬から7月初旬までであった。

測定尺度：主観的覚醒感と心的負担度を測定するため、一般覚醒度評定尺度(GACL)と、心的負担度を測定するための尺度(NASA-TLX)とを用いた。前者は主観的に感じられる気分やアラウザルの程度を20個の形容詞語をもとに長さ10cmの尺度上にチェックを求めて評定するものである。これは活力アラウザルと緊張アラウザルとの二つの次元からなっている。測定は、出発点と終着点で各一回、休憩点で到着時と出発時に各一回記録した。後者は、各種の作業課題で主観的に感じられる負担の程度を評価するための尺度で、本研究では8尺度を用いた。記録は、休憩点到着時と終着点到着時との各一回行った。これらの他、アクセル動作の程度を評価するために、Mini Mitter社製Actiwatch64を右足の横足弓上にベルトで固定して活動量を記録した。サンプリング周波数は32Hzで、積分時間を2secとし、その間の動作加速度の和を求めた。

手続き：走行は八戸から仙台への上り方向と仙台から八戸への下り方向とで行った。これをクルーズコントロール(cc)条件か通常運転(nd)条件かで行うようにした。上り方向の場合、福地から紫波まで走行した後、約40分の休憩を取り、その後鶴巣まで休憩なしに走行した。下りの場合も同様に、鶴巣を起点として、紫波で休憩を取り、その後福地まで走行した。cc条件では、走行速度を95km/hに設定した。ただし、交通量や追い越し車両などのため走行上危険と判断される場合は、設定を中止した。通常運転条件でもできるだけ95km/hで走行するようにした。

【結果と考察】八戸-仙台間5往復行い、そのうち悪天候や夜間運転の場合を除いて2往復分の資料を用いた。また、交通量と景観の違いを考慮して分析は上りと下り別々に行った。

GACL：2つの次元は、それぞれ5語からなる2因子で構成されている。活力アラウザル因子は全般的覚醒と脱活性-睡眠であり、緊張アラウザルは高活性と全般的脱活性である。4因子別々に2つの区間それぞれに出発地点での得点からの差異得点を求めた。ccの有無と各地点での得点のANOVAの結果は有意でなかった。これは得点の変化のパターンが両条件で同様であることを示した。ただし、後半の走行の結果は、cc条件では眠気や緊張感が少なくなることを示唆した。

NASA-TLX：8つの尺度の単純平均を求め、上り・下りともに走行の前半と後半とで負担度がどのようであるかを検討した。結果から、前半はcc条件の有無の違いは見られないこと、違いは後半で生じることがわかった。すなわち、cc条件の後半で上り・下りとも負担度が有意に小さくなった(いずれも $p < .001$)。また、図1に見るように、下りではnd条件でも負担度は前半に比べて有意に低下した($t = 3.7$, $df = 7$, $p < .01$)。

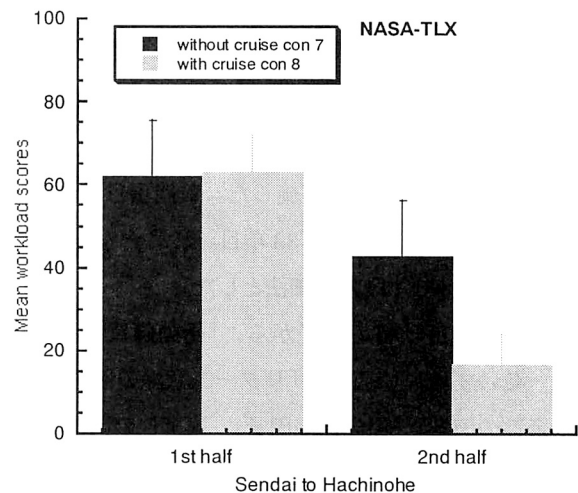


図1. 下り方向での心的負担度の変化

アクセルペダル動作量：下り方向で得た資料を、ccの有無と走行の前半と後半とで比較した。cc条件での全般的活動量はほぼ車両の振動に等しかった。nd条件ではcc条件より有意に大きかった。特に、前半はcc条件の2区間およびnd条件の後半に比べて有意に大きかった。

得られた結果は、眠気や緊張感は走行の前半で強く生じ、それが心的負担の大きさと関係していることを示唆する。これはペダル動作の程度とは直接関係しない。ところが、ccは後半の走行に有効であることも分かった。ただしこれには休憩の効果も相乗的に働いた可能性がある。また、下りではnd条件でさえ負担度が低下することは、交通量の程度もこの結果に影響したと思われる。

【参考文献】

芳賀 繁・水上直樹 1996 日本語版 NASA-TLX によるメンタルロード測定 人間工学, 32(2), 71-80.

トヨタ自動車(株)編 2000 プリウス新型車解説書.

(はたやま としむら・きたむら やすひろ)

家電購入イメージに関する研究

— 日中家電製品の両国におけるイメージの差異について、その 1 —

○ 家本 修¹⁾ 劉 莉²⁾

(¹⁾ 大阪経済大学大学院経営情報研究科 (²⁾ 大阪経済大学大学院経営情報研究科修士課程)

キーワード：ブランドイメージ、憧れ、自尊、国外イメージ

【研究の目的】近年中国製家電が日本企業との技術提携、業務提携、OEM として日本市場に進出を始めた。一方、韓国をはじめとするアジア製品も、徐々に品質も上がり若者たちの抵抗がなくなってきた。このような中で、今後のアジア地域におけるブランド戦略は、基本的な見直しを迫られるであろう。そこで、本研究は、特に日中の若者のブランドイメージの形成要因を明らかにすることを目的に設定した。本稿では、日中の第一回目の基本調査を実施中であるので、その中の日本の若者のブランド（家電ブランド）のイメージについて分析を行ったので報告する。

【方法】○105 名の文科系学生 (Ave:20.36,男子 63%、有効数 96 名) に 6 月中旬に質問紙法・集合調査法による調査を実施した。質問項目は、フェース 4 項目、行動態度 33 項目。家電イメージ・購買 23 項目で 4 段階評価法とした。

○行動態度項目の因子から、「衝動購買の因子」、「負けず嫌いの因子」「リターン意識の因子」「熟考性の因子」「保守性の因子」「同調性の因子」「持続性の因子」「忍耐の因子」(累積寄与率:44.0%)。○購入経歴:40%以上は白物家電の購入・同行しているが、興味関心は薄い (あり 25%) が、CM への関心はある ($\chi:144.25, p<0.01$)。購入では迷えば CM のものを、性能がよいと感じている ($p<0.01$)。○家電イメージ項目からは、5 因子が求められる。「CM 影響の因子」「品質イメージ因子」「日本製品愛好因子」「価格因子」「CM 信頼因子」と見られる。「衝動購買の因子」を従属変数に、説明変数をイ

メージ因子とすると「CM 信頼因子」の関係が見られる ($R=0.4061, F:13.4766, p<0.01$)。同様に、「同調性の因子」と「CM 信頼性因子」 ($R=0.4066, F:8.2567, p<0.01$)、「日本製品愛好因子」 ($F:5.6396, p<0.05$)。「日本製品愛好因子」を従属側では、「同調性の因子」 ($R=0.4057, F:5.6597, p<0.05$)。「CM 信頼因子」からは「衝動購買の因子」 ($R=0.4130, F:12.9282, p<0.01$) の関係が認められる。

【結果】CM の信頼性は衝動購買傾向と関係があり、同調性は、CM 信頼性との関係が認められる。

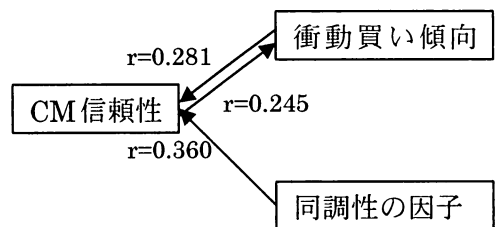


図 1 CM の信頼を基準とした場合

【考察】大学生の家電製品のイメージは、CM との関係が認められ同調性と衝動購買傾向の行動を示すほど、CM に頼るものと考えられる。価格重視はそれほど高くなく、迷えば、CM で見たものが品質のよいものと意識している。これらから、日本での販売戦略は、CM 重視でかなりのマーケット・ブランド形成が可能であることを示唆しており、中国製品のイメージの低さ (43%:67%, $p<0.05$) は、「性能が同じなら」より 10% も低いことから明らかである。

(いえもと おさむ)

高齢運転者の運転断念に及ぼす各種要因の分析（1）

垣本 由紀子

実践女子大学生活科学部人間工学研究室

キーワード： 高齢運転者、事故防止、安全教育

はじめに：本研究は、日本交通心理学会が、平成16-17年度の2年間日本損保協会から受託した高齢運転者プロジェクト研究の一環として行ったものである。最近の自動車運転中の事故をみると、他の年齢層が横ばい状態であるのに対し、65歳以上の高齢運転者の事故が増加傾向にあるのが特徴である。加齢による生理的・心理的諸機能の低下が認められている一方、生活上、移動に車が必要という矛盾を内蔵することになる。本研究では、何歳ぐらいまで運転を希望するのか、また、運転を断念するきっかけは何かなどについて調査し、事故防止のために何をすべきかなど方策をさぐるための資料を得る。

方法：高齢運転者講習のため教習所を訪れる70歳以上の高齢運転者を対象にアンケート及び面接調査を実施した。前述プロジェクトに参画している9カ所の指定自動車教習所の協力を得て行われた。

結果及び考察：(1) 運転継続希望年齢について；175名を対象に運転継続希望年齢を尋ねた結果が表1のクロス集計表である。80歳を運転継続希望とする割合が最も高く(34.3%)、次いで「予定なし・死ぬまでずうっと」(32%)であった。85歳以上90歳も7.4%存在した。実年齢別に運転継続年齢を見ると(図1)、74歳以下では、どの年齢群も76-80歳まで運転したいというのが最も多かった。運転継続年齢80-85歳とするのは、実年齢73-74歳群からほぼコンスタントに存在し、運転希望年齢85歳以上は、実年齢77歳以上から存在していた。実年齢が増えると、運転継続希望年齢も増えることが従来の研究から知られていたが、本研究が対象とした70歳以上においても同様の結果が得られた。

(2) 運転断念のきっかけについて；運転を断念する理由について尋ねた結果を示すと図2のようになる。最も多かった理由は、「健康上の理由」(67.2%)であった。約7割がこの理由であり、健康である限り、運転は断念したくないというのが高齢運転者の本意であると推測された。1位と非常にかけ離れているが、2位は「事故・ヒヤリハット」であり、3位は、「運転がおっくうに」という心理的理由が挙げられ、「年齢」を断念の理由とするのは、わずか2.2%であった。

(3) 運転断念を阻害する要因 ① 路線バスについて；対象275例中、バスを利用しない割合は、42.5%、利用する割合は、7.6%であり、よく利用する人は4名(1.5%)であった。図3にバスの利用度とバス停までの距離を示した。図で明らかなように、バス停から近くてもバスを利用しない割合が極めて高いことである。バス停までの距離の問題ではなく利用しにくい理由が存在することが推測される。

② 電車の利用について；241例中、「利用しない」が

42.3%、「利用する」が8.3%であり、よく利用するのは24.5%であった。自宅から駅まで10分以上かかる遠い場合に「利用しない」割合が非常に高くなった。まとめ：公共の乗り物が利用されにくいという実態が、益々運転継続希望年齢を引き上げ、「年齢」を理由に断念することは極めてまれであり、「高齢者の運転ぶりを気づかせる」ことによる安全教育プログラムが求められる。

(かきもとゆきこ)

表1 運転継続希望年齢と被験者の実年齢のクロス集計

	69歳	70歳	71歳	72歳	73歳	74歳	75歳	76歳	77歳	79歳	80歳	81歳	82歳	83歳	計
予定無	4	7	7	6	6	9	4	0	1	2	2	0	0	0	48
いつか	0	0	2	0	0	1	2	0	0	0	1	0	0	0	8
74歳	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
75歳	5	5	4	2	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	18
75-7	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
76歳	1	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
76-7	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
77歳	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4
77-7	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3
79歳	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	3
80歳	8	8	7	12	5	12	5	2	1	0	0	0	0	0	60
82歳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
82-8	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
83歳	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
84歳	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
85歳	1	0	0	2	0	1	2	1	0	0	2	1	0	1	11
86歳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
90歳	0	0	0	0	0	0	0	5	1	0	0	0	0	0	1
総計	23	22	24	23	16	31	14	5	4	2	6	1	0	4	175

(縦軸が希望年齢、横軸が被験者年齢)

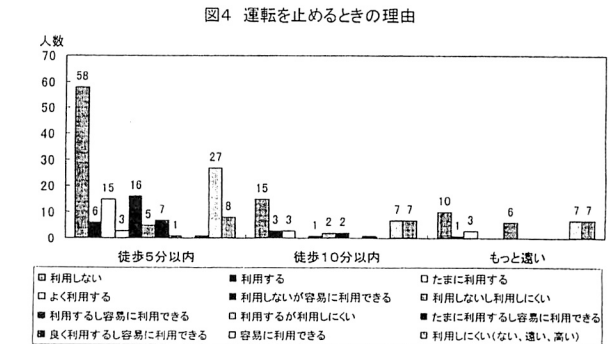
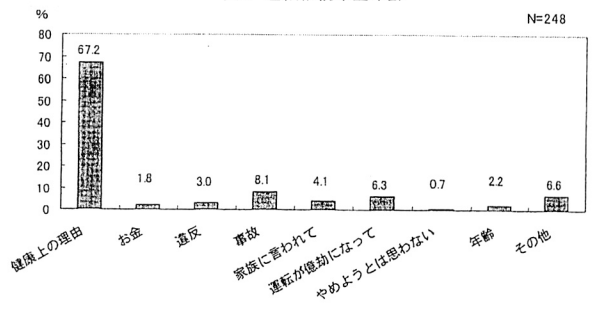
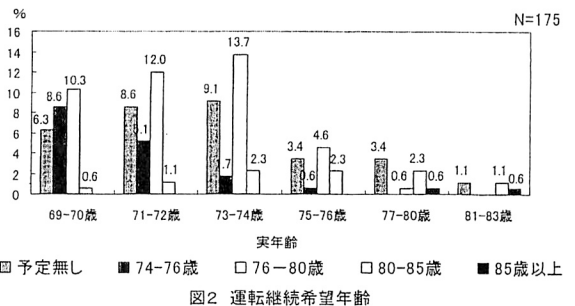


図5 バスの利用度とバス停までの距離

模倣筆跡からの書き癖固定化の機構解析

— 書き癖固定化を利用した筆者識別 —

○三井 利幸¹⁾ 若原 克文²⁾ 菅原 博嗣²⁾ 関 陽子³⁾

(¹⁾ 愛知工業大学応用化学科 (²⁾ 愛知県警察本部科学捜査研究所 (³⁾ 科学警察研究所)

キーワード：筆者識別、書き癖の固定化、多変量解析

【はじめに】筆者の書き癖は中学生の頃に無意識に習得し、終生大きく変化することはないと言われており、筆者識別はこのことを基本として字画形態、字画構成、筆順、誤字、誤用、運筆状態、運筆方向などの字態を検査することによりおこなわれている。しかし、同一筆者が記載した筆字からでも、字態が異なっている筆字が含まれている場合が多い。そのため、経験的におこなわれている筆者識別は、筆字の各画の配置バランス（字体）を観察した時点で、筆者識別はほぼ終了し、ついで字態の細部を観察しているのが実態である。

本研究では、提示筆字を模倣した筆字（模倣筆字）と、筆者自身の字体で記載した筆字（自己筆字）から、書き癖が固定化され字体が大きく変化しない理由を検証することを目的とした。そのための方法として、Figure 1 に示した文字を、主に文字を書くことを職業とし書き癖が固定されている 21～58 歳までの 95 名（男性 60 名、女性 35 名）を調査対象者（筆者）に 30 秒間提示後、筆者が提示筆字を模倣した字態（模倣筆字）を 7 字、筆者自身の字体（自己筆字）を 1 字記載させたものを使用した。

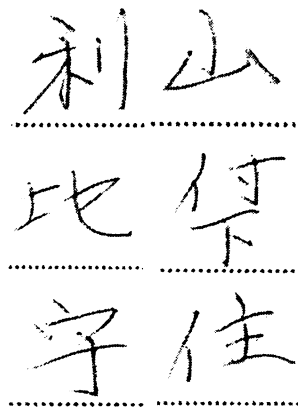


Figure 1 提示筆字

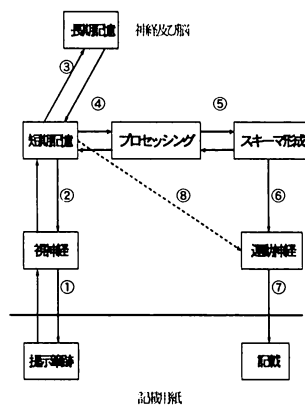


Figure 2 記載プロセス

模倣筆字を記載するには Figure 2 に示した①～⑦、自己筆字を記載するには①～④⑧⑦のような流れで提示筆字の確認から記載までの作業を行っているものと仮定し、Figure 2 の①②間、③、④⑤間、⑥⑦間の 4 項目を用いて、提示筆字の字態の特徴を筆者がどの程度把握しているかを調査した。長期記憶に保管されているが部分的に異なっている誤字については、長期記憶からどのような文字を呼戻しているかも、主として自己筆字から調査した。Figure 1 に示した提示筆字の字態特徴の把握程度調査は、提示筆字が意図的に誇張して記載している部位を選択し、1、4、7 番目に記載された模倣筆字及び自己筆字を用いておこなった。字体の調査は、Figure 1 に示した 5 筆字を二次元平面上に書かれた図形として捉え、筆字の特定の 2 点間距離を y 軸とし、y 軸に直交する x 軸を引いて残りの測定点を二次元座標上の座標点として読取る従来からの方法で筆字を数値に変換しておこなった。

【感覚器（視覚）からの入力】Figure 2 の①②間の調査を、最初に記載された模倣筆字を用いておこなった。その結果、長期記憶に保管されている文字については、提示筆字の細部にまで比較的正確に視覚で把握し短期記憶に入力されている

ことが明らかとなった。誤字については、短期記憶に入力された情報と極めて類似している文字を長期記憶から呼戻し、①②間の作業で得られた提示筆字の字態の特徴を組み込んで行く可能性が高いものと推定された。記号については、提示筆字の字体（記号）を確認することに重点が置かれ、提示筆字の字体を把握し短期記憶に保存維持する作業が中心となり、提示筆字の字態の特徴を把握する努力が低下するものと推定された。

【スキーマの形成と運動神経への伝達】Figure 2 の④⑤⑥間の作業については、正字体の場合は、筆者は余裕をもって提示筆字の字態の特徴を把握し記載すべき字態（スキーマ形成）を 30 秒の間におこなっているものと推定された。誤字の場合は、ほとんどの筆者が長期記憶から呼び戻された類似文字に提示筆字の字態の特徴を組み込みスキーマ形成しているものと考えられた。記号の場合は、大半の筆者が視覚から字体を把握し短期記憶に保存するのに注意が向けられ、スキーマ形成の主力は字体の形成に費やされているものと推定された。

全体的な傾向として、①②④⑤⑥間の作業は提示筆字の字体ではなく字態に注意が集中している傾向が高い。従って、特定の部首や偏や旁が極端に誇張や縮小されていない限り、提示筆字の個々の画の配置にはほとんど注意が向けられていない。そのため、提示筆字と同じような字体と字態で記載するように指示しても、提示筆字の字態に注意力が集中し、字体は筆者本人が持つ配置バランスで記載しているものと考えられた。

【運動神経と筋肉との関係】通常は、Figure 2 の⑦に示したように、形成されたスキーマに従って脳から運動神経に命令が伝達され、筋肉が動いて目的の字体（文字）が記載されていると考えられている。しかしながら、ほとんどの筆者の模倣筆字は、後半になるに従って筆者自分の字態に収束してきている。このことは、形成されたスキーマが不完全であるか、形成されたスキーマどおりに筋肉が動いていないことを示唆している。Figure 1 に示した 6 筆字全てを用いて同一筆者内での異同識別をおこなった結果からは、提示筆字とそれ以外の 8 筆字の 2 グループに分離した筆者が 63 名、提示筆字、模倣筆字、自己筆字の 3 グループに分離した筆者が 30 名、全ての筆字が混合した（非分離）筆者が 2 名であった。このことから、筆者は連続して同一文字を記載している間に Figure 2 の⑧に示した流れで勝手に筋肉が動き、スキーマ形成の結果を無視して記載してしまうものと考えられ、これが筆字に筆者各人の字体の特徴（書き癖）が現れ固定化される現象であり、筆者識別が可能となる基本的な部分である。

《多変量解析法による異なった筆者間の筆者識別》95 名（男性 60 名、女性 35 名）の筆者が記載した 6 筆字を組み合わせた 8 組の筆跡を 90 個の数値（カテゴリー）に置き換え、4465 通りの各筆者間の筆者識別をおこなった。その結果、筆者識別が困難であった二筆者間の組み合わせは、主として非分離（個人内変動大）の筆者が関係する 85 通りだけであった。このことから、極めて高い信頼性で多変量解析法による筆者識別が可能であることが明らかとなった。

（みつい としゆき・わかはら かつふみ・すがわら ひろし・せき ようこ）

書字中の手首の回転運動の測定

関 陽子

(科学警察研究所)

キーワード：書字運動、手首、回転、デジタルタイザ

[目的]

書字技能の獲得には、文字の形態をペン先の軌跡で実現するための、指や手の諸器官の関節どうしの連携を習得することが必要である。このため、ペン保持の姿勢やペンの角度、手首の回転角度などは書字運動の結果である筆跡に影響を及ぼすと考えられる。本報告では、タブレットとグローブ型センサを用いて書字中のペン先の位置と手首回転運動について検討した。

[方法]

6名の成人男性（すべての被験者は通常の筆記を右手で行っている）に、デジタルタイザ（WACOM、Intuos）と付属のインクペンを用いて、タブレット上に線分や文字の筆記を行わせた。また、書字中の指や手首の回転角度を測定するため、被験者は右手にグローブ型のセンサ（Immersion、Cyberglove）を装着して書字を行わせた（データ取得装置を図1に示す）。

線分の記載は、被験者の肘、肩、手首を固定した状態で、縦40mm×横35mmの書字スペースに、縦、横、斜めの直線（左上から右下へ、右上から左下への2種類）、円弧の描画を行った。描画スペースは、5mm間隔の罫線で縦8×横7のブロックに区切られており、線分描画は1ブロックに1線分がおさまるように記載された。円弧は、同じ書字スペースの右上隅から左下隅に向かって円弧を描くタスクを行った。

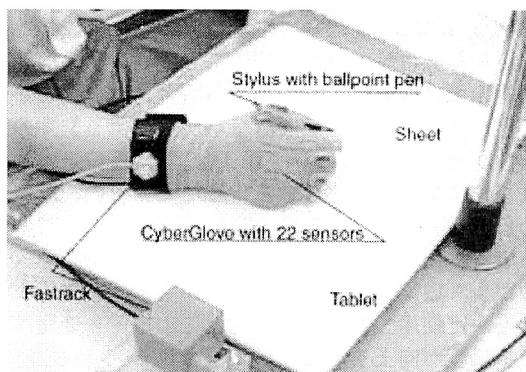


図1 データ取得装置

文字の記載では、手首と肘を自由に動かせる条件で、高さ10mm、横8mmの記載枠にひらがな文字列、漢字仮名まじり住所、漢字文字列、アルファベット筆記体文字列の続け書き、高さ10mm、横20mmの記載枠に日本語文、英語文を記載させた。インクペンは、サンプリング周波数100Hz、空間解像度0.1mmで、タブレット上のペン先の位置（x,y座標）を測定できる。グローブ型センサには、各指、手首の関節に計22個のセンサがついており、これらにより関節角度がサンプリング周波数30Hz、空間解像度5mmで測定できる。本報告では、インクペンによりタブレット上のペン先位置を、グローブ型センサにより手首位置とその回転角度を測定した。

[結果および考察]

ペン先の位置をx,y座標で、手首中心と回転角度を極座標系で表現した（結果の一例を図2に示す）。肘と手首が自由な状態では、手首を回転の中心とし、手首からペン軸までを半径とする回転運動で書字を行っていることがわかった。被験者の中には、2種類の回転半径を示したものも見られた。これらの被験者の回転半径と筆跡の関係を見ると、アルファベットの続け書きで小さい回転半径を示していた。回転角度は被験者間のばらつきが大きく（約40度から60度）手首の自由度と筆跡に関係があることが示唆された。

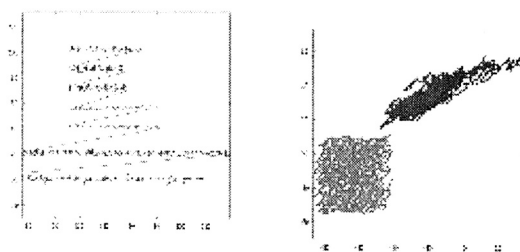


図2 ペン先位置（左）と手首回転運動（右）

（せき ようこ）

筆跡の個人間変動について

○ 若原 克文 菅原 博嗣 三井 利幸
 (愛知県警察本部) (愛知県警察本部) (愛知工業大学)
 キーワード：筆者識別 個人間変動 測定部位

1. はじめに

筆跡を客観的に分析する手法として筆跡を座標化し数量化後、多変量解析法を用い筆者識別が有効である事を報告してきた。その識別精度を向上させるために種々の検討を重ね、座標化、標準化のための数量化手法、多変量解析法による分析手法、実務資料による解析など一定の成果が認められ、数量化による筆者識別が実務レベルで実施可能な段階に達していると判断している。

実務レベルの筆跡は、筆跡を記載する状況下に諸々の要因が含まれ、同一紙面上で同一筆者の筆跡にも変動が認められその程度も個々に異なる。

筆者識別が可能な理由の一つの根拠は、筆跡には恒常性があるとの共通認識で実務が行われている。しかし、恒常性について目視的な手法による検討は成されているが客観的に検討した事例は少なく、恒常性の個人間変動と個人内変動、筆跡の数量化法の妥当性など検討した。

2. 分析手続

(1) 検査試料

第1回目：本人の氏名を5回書かせた後、「近部英代」の文字を5回 第2回目：1週間後再度同様の手続で試料を作成
 教示：「あなたが正式な書面に署名するような気持ちで書いて下さい」と教示 記載紙面：A5判横長の用紙、半面に約2.3cm 間隔で約5.5cm 幅の5本の罫線上に氏名を5回、他の片面に「近部英代」の文字を5回記載 被験者：15名

分析対照文字：「近」字 第1測定部位：第7画始筆部と第3画終筆部を結ぶ直線上の第7画始筆部との直交座標点を原点とし各字画の始筆部、終筆部10点の各座標値、分析要素数は各座標のX、Y座標値20と基線値Y座標値の計21

第2測定部位：第5画始筆部と第7画終筆部を結ぶ直線上の第7画始筆部との直交座標点を原点とし各字画の始筆部、終筆部10点の各座標値、分析要素数は各座標のX、Y座標値20と基線値Y座標値の計21

(2) 分析方法

1：第1回目、第2回目及び第1、2回目を合わせた3通り分を両測定部位の要素ごとに個人内の標準偏差と各個人間の平均 2：第1回目、第2回目及び第1、2回目を合わせた各要素のクラスタ分析（使用ソフト ジーエルサイエンス社製「ピロエット」）

3. 結果及び考察

(1) 時間経過に伴う個人内変動について

第1回目と第2回目の偏差値間が3.0以上差のある要素間を個人ごとに集計して検討すると、第1、2測定部位の違いに関係なく変動が小さい筆者と変動の大きい筆者が分離し共通する。このことは記載文字及び測定部位などの条件の違いに関係なく個人間で記載変動の大きさの違いが存在すると考えられる。

(2) 要素間の変動について

15名の第1、2回目における各要素間偏差の平均を求め最大変動要素と最小変動要素を抽出すると、第1測定部位では第7画終筆部のY値に最大変動が認められ、第4画始筆部のX値に最小変動、第2測定部位では基線である第7画終筆部

Y値に最大変動、第6画始筆部Y値に最小変動が抽出された。第1測定部位は基線Y軸位置が第3画終筆部と第7画始筆部を結ぶ直線で、従来から最適な基線位置の条件は、字画の始筆位置、止める運筆が一般的な終筆部を結ぶ直線は記載変動が少ない基線と考えており第1測定部位はこの条件を満たし、第2測定部位は第7画終筆部の運筆が主に抜くもしくは跳ねる運筆が一般的な部位で基線としては条件が悪いと考えられ通常基線として使用しない部位である。今回の結果は、我々の主張を裏付けるもので第1、2測定部位のいずれも第7画終筆部に変動幅が最大であることが認められた。

(3) 個人間変動について

15名の第1、2回目における各要素偏差の変動をみると個人間で各要素間偏差に変動が認められた。一般に巧みな文字は安定し恒常性が高く、稚拙な文字は安定性に欠け恒常性が低いと考えられている。今回、個人間変動幅の違いと文字の巧拙の程度との関連性について検討するため、新たな6名の被験者により15名分の「近部英代」の第1回目の試料を提示し目視により文字の巧い順に順位付けを実施した。その結果、15名の順位を3群に分け、巧み群3点 普通群2点 稚拙群1点で得点化した5名ずつのグループ化を試み個人の要素間変動幅と比較すると、目視で分けた3群には変動幅の大小差がある筆者が混在し、文字の巧拙度の違いによる個人内変動の大小は関係がないと認められる。

(4) クラスタ分析について

15名の第1測定部位要素数計21、第2測定部位要素数計21、第1、2測定部位を合わせた要素数計42の3通りについてクラスタ分析を行った。第1測定部位では9名が10文字分離、3名が9文字分離、3名が混合 第2測定部位は3名が10文字分離 2名が9文字分離 10名が混合 第1、2測定部位を合わせた結果は11名が10文字分離、4名が9文字分離、混合0名の結果が得られた。この結果から第1測定部位と第2測定部位の間には検出精度に大きな違いが認められる。これは、前述した基線位置の違いによると判断でき、適正な基線位置の選定は検出精度が高いことが認められ、変動幅の大きい部位を基線とする数量化は識別力が極端に低いことが認められた。最適な基線決定による文字の数量化の重要性が指摘できる。一方、第1、2測定部位を合わせた分析では基線精度の不適切な数量化を加えても検出精度の向上が認められる。これは従来から指摘していたように要素数が増えるほど検出精度が高くなるとの主張に一致する。また、文字数が少ない場合の筆者識別において、同一文字より複数の基線を決定使用し数量化することによって多変量解析法による分析精度が向上することが認められる。

実務鑑定の一つの根拠は、筆跡に恒常性があるとの前提に基づいて行われており、その個人間、個人内の変動出現に明確な回答が得られていない。今回の検討中、文字の巧拙と恒常性の変動要因との間に何ら関係を見出すことができなかった。今後は恒常性変動に影響を与える要因として考えることができる書字運動、性格などの心的要因、外部的な記載時の環境条件の違いを含め検討する。

(わかほらかつふみ、すがはらひろし、みついとしゆき)

筆跡からの筆圧の指標化に関する研究（Ⅲ）

○菅原博嗣 若原克文 三井利幸
 (愛知県警察本部) (愛知県警察本部) (愛知工業大学)
 キーワード：筆跡、筆圧、濃度分布

1. はじめに

筆跡の形状から筆者識別を行う方法については、これまでに多くの報告がなされており、我々は多変量解析法を用いた研究において、筆者識別が十分に可能であることを報告してきた。しかし、実務上の筆者識別においては、筆跡の概形に加え、運筆の状態の検討も重要な要素である。

昨年までの報告で、運筆の状態を示す要素である筆圧に注目し、①書かれた文字から判断される筆圧レベルの指標化、②その指標を筆者識別の要素とすることの可否の検討を行った。その結果、筆圧に関する筆者の記載時の意識レベル、その筆跡から感覚的に評価して得られたレベル、ESDA (Electro Static Detective Apparatus, Foster&Freeman社製) による筆圧痕文字の検出レベル間で整合性が認められ、書かれた文字から筆圧を指標化し、筆圧の強弱の程度を筆者識別の要素することが可能であることを示した。

さらに、試料から得られる筆圧痕文字検出については、一般的な保管状態において筆圧痕文字の経時変化(約1年)が少ないことも確認できた。

そこで、今回は、カーボン複写により書かれた筆跡を、記載時の筆圧の強弱が画像の濃淡情報として反映しているものと捉え、画像の濃度分布から筆者の意識を運筆の情報とすることができるか検討した。

また、筆者が記載した筆跡(直書き)についても、濃度分布から意識や運筆の状態を情報とすることができるか検討した。

2. 実験方法及び結果

2.1 検査試料

成人男性5名が領収証(小切手判サイズ、カーボン複写タイプ)に、想定署名「神家健悟」の筆跡を横書きに5回記載し、得られたカーボン複写筆跡を試料とした。

記載時には、通常の筆圧と弱い筆圧で記載することを教示した。

筆具はパーカー製黒色ボールペンを使用し、記載台や椅子についても共通した条件とした。

2.2 実験機材

- ・フラットベットスキャナ Epson社製 GT-9500
読み取り条件：解像度 300dpi
イメージタイプ 256階調、グレー
- ・画像解析ソフト Adobe社製 Photoshop6.0
試料の読み取り後の画像処理は施さない。

2.3 カーボン複写による記載の濃度分布の検討

試料のカーボン複写筆跡について、フラットベットスキャナにより読み取り、画像の濃度分布を検討した。

各筆跡の濃度分布については、連続量としての淡い方の端点(淡点)とピーク域の両端を測定した。

各試料について検討したところ、各筆者の筆跡では、通常の筆圧と弱い筆圧で、ピーク域が同程度の範囲(約190~243階調)にあり、筆圧の強弱に伴う差は指摘されない。

だが、各筆跡の濃度分布の淡点の位置において、通常の筆圧と弱い筆圧間で差があり、弱い筆圧の淡点の位置が通常の筆圧より高濃度側にシフトしている。

表1. 筆圧の強弱における各筆跡の淡点の位置

筆者No.	連続量の淡点(階調)	
	通常の筆圧	弱い筆圧
No.1	102	133
No.2	102.4	132.8
No.3	92.5	114.8
No.4	99.4	139
No.5	105.8	127.8

一般的には、弱い筆圧での記載(濃淡の変化が少ない)では、濃度分布が広範囲に存在すると考えられるが、試料がカーボン複写による複写文字であることから、運筆の過程で十分に複写されなかった部位が生じ、複写される際にある閾値を越えた領域のみが再現されたことによるものと判断される。

従って、記載時の筆圧の強弱の程度の差については、画像の濃度分布の淡点を計測することで数値化することが可能と判断される。

2.4 直書きの記載の濃度分布の検討

これまで、ESDAによる筆圧痕文字検出やカーボン複写による複写文字を利用して、筆圧の強弱の程度を数値化することを試みてきたが、元の筆跡の情報を削ぎ落とした表現であることは否めない。

そこで、通常の筆圧と弱い筆圧による直書きの筆跡について、前述と同様に画像の濃度分布を検討した。

各試料について検討したところ、各筆者の筆跡では、通常の筆圧と弱い筆圧間で、ピーク域が同程度の範囲(約210~240階調)にあり、筆圧の強弱の差は指摘されない。

また、各筆跡の淡点の位置においても、通常の筆圧と弱い筆圧間で差が明確ではない。

しかし、通常の筆圧で書かれた筆跡においては、いずれの筆者も80階調付近にピークが指摘される。

これは、各文字の滑らかな記載(多階調として表現)を反映しているものと判断される。

このことから、直書きの筆跡の濃度分布を検討することも運筆の状態を示す要素となると考えられる。

2.5 結果

- (1) カーボン複写筆跡の濃度分布を検討することにより、筆圧の強弱の程度を確認することが可能となる。
- (2) 直書きの記載の濃度分布については、ピークの位置から運筆に伴う画線の濃淡、筆圧の強弱の程度を表現し、滑らかでメリハリのある運筆の状態を確認することが可能となる。

(すがはらひろし、わかはらかつふみ、みついとしゆき)

情報量の差異を最小化する等化係数の推定

—一般化部分採点モデルの場合—

服部 環

(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

キーワード：一般化部分採点モデル, 等化, 情報量

一般化部分採点モデル (Muraki,1992) は Masters (1982) の部分採点モデルを拡張したモデルであり, 特性値 θ_i の受検者が項目 j のカテゴリ k ($k = 0, 1, \dots, m_j$) に反応する確率, もしくは k 点を取る確率, つまりカテゴリ特性関数を式(1)により定義する。 a_j は項目 j の識別力, b_{jv} は項目 j でカテゴリ v を取る難しさを示す項目母数であり, $a_j(\theta_i - b_{j0}) \equiv 0$ とする。また, D は尺度係数であり, 本稿では $D = 1.0$ とした。

$$P_{jk}(\theta_i) = \frac{\exp \left[\sum_{v=1}^k D a_j (\theta_i - b_{jv}) \right]}{1 + \sum_{h=1}^{m_j} \exp \left[\sum_{v=1}^h D a_j (\theta_i - b_{jv}) \right]} \quad (1)$$

服部 (2004) は共通項目法を用いて, 最小 χ^2 法, 単純最小自乗法, カテゴリ特性曲線, 項目期待値, テスト期待値に着目する等化係数の推定方法を提案し, その推定精度を検討した。それに続き, 本稿ではカテゴリ情報量, 項目情報量, テスト情報量に着目する等化係数の推定方法を提案する。

方法

・等化係数とその対称性

2つの定数 A_{21} ($A_{21} > 0$) と K_{21} を用いて式(1)のモデル母数を式(2), 式(3)のように変換しても, カテゴリ特性関数値は変わらない。そこで, 共通項目法はこの関係を利用して, テスト冊子1の尺度値をテスト冊子2の尺度へ等化するための係数 A_{21} と K_{21} を求める。

$$\theta_i^* = A_{21}\theta_i + K_{21} \quad (2)$$

$$a_j^* = a_j/A_{21}, \quad b_{jv}^* = A_{21}b_{jv} + K_{21} \quad (3)$$

一方, テスト冊子2の尺度値をテスト冊子1の尺度へ等化するための係数 A_{12} , K_{12} は, A_{21} , K_{21} との間に式(4)の関係がある。推定値がこの関係を満たすとき, 推定値は対称性を持つ。

$$A_{12} = 1/A_{21}, \quad K_{12} = -K_{21}/A_{21} \quad (4)$$

本稿で提案する誤差関数は以下の通りである。

・カテゴリ情報量

$$Q_C = \sum_{i=1}^s \sum_{j=1}^n \sum_{k=0}^{m_j} \left[\left[P_{jk}(\theta_i)^{(2)} I_j(\theta_i)^{(2)} - P_{jk}(\theta_i)^{(21)} I_j(\theta_i)^{(21)} \right]^2 + \left[P_{jk}(\theta_i)^{(1)} I_j(\theta_i)^{(1)} - P_{jk}(\theta_i)^{(12)} I_j(\theta_i)^{(12)} \right]^2 \right] \quad (5)$$

$P_{jk}(\theta_i)^{(t)}$ と $I_j(\theta_i)^{(t)}$ はテスト冊子 t で推定された項目母数値を用いて計算したカテゴリ特性関数値と項目情報量, $P_{jk}(\theta_i)^{(21)}$ と $I_j(\theta_i)^{(21)}$ はテスト冊子1で推定された項目母数値を式(3)を用いてテスト冊子2の尺度へ等化した上で計算したカテゴリ特性関数値と項目情報量, $P_{jk}(\theta_i)^{(12)}$ と $I_j(\theta_i)^{(12)}$ は式(4)の A_{12} と K_{12} を用いてテスト冊子2で推定された項目母数値をテスト冊子1の尺度へ等化した上で計算したカテゴリ特性関数値と項目情報量である。 n は項目数, s は求積点の数である。

項目情報量 $I_j(\theta_i)$ は式(6)によって定義される (Muraki & Bock,1996)。ここで T_k は得点関数であり, $T_k = k + 1$ とする。

$$I_j(\theta_i) = D^2 a_j^2 \left[\sum_{k=0}^{m_j} T_k^2 P_{jk}(\theta_i) - \left[\sum_{k=0}^{m_j} T_k P_{jk}(\theta_i) \right]^2 \right] \quad (6)$$

・項目情報量

$$Q_I = \sum_{i=1}^s \sum_{j=1}^n \left[\left[I_j(\theta_i)^{(2)} - I_j(\theta_i)^{(21)} \right]^2 + \left[I_j(\theta_i)^{(1)} - I_j(\theta_i)^{(12)} \right]^2 \right] \quad (7)$$

・テスト情報量

$$Q_T = \sum_{i=1}^s \left[\left[\sum_{j=1}^n \left[I_j(\theta_i)^{(2)} - I_j(\theta_i)^{(21)} \right] \right]^2 + \left[\sum_{j=1}^n \left[I_j(\theta_i)^{(1)} - I_j(\theta_i)^{(12)} \right] \right]^2 \right] \quad (8)$$

次の2条件について100回の数値実験を行った。

・水平等化 4カテゴリとする30項目(10項目は共通項目)のテスト冊子 T_1 と T_2 を想定した。そして, 母集団分布が等しい受検者群 S_1 と S_2 を用意して(各500名), $S_1 \sim T_1$, $S_2 \sim T_2$ を実施し, T_1 の項目母数を T_2 の尺度へ等化した。真値 θ_i と b_{jv} として標準正規乱数, a_j として0.5~1.5の一樣乱数を用いて人工データを生成し, PARSCALE (Muraki & Bock,2003) を用いて母数を推定した。 $A_{21} = 1$, $K_{21} = 0$ が期待される。

・垂直等化 被験者群 S_1 の能力値として正規分布 $N(0.7, 1.2^2)$ に従う乱数を用いた。 $A_{21} = 1.2$, $K_{21} = 0.7$ が期待される。

結果と考察

等化係数の推定値の平均と標準偏差を表1と表2に示す。

すべての方法の間で平均値と標準偏差に大きな相違はないが, 水平等化条件では, K_{21} の標準偏差は特性曲線を用いた方がわずかに小さい。また, 対称性の有無の効果は推定値の大きな違いとしては現れていない。

表1 等化係数の推定値の平均と標準偏差 (水平等化実験)

等化法	対称性	A_{21}		K_{21}	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
カテゴリ情報量法	非対称	1.016	0.072	0.041	0.051
カテゴリ情報量法	対称	1.002	0.067	0.042	0.051
項目情報量法	非対称	1.013	0.072	0.042	0.051
項目情報量法	対称	1.001	0.067	0.043	0.051
テスト情報量法	非対称	1.004	0.065	0.056	0.057
テスト情報量法	対称	1.004	0.065	0.056	0.057
カテゴリ特性関数法	非対称	1.011	0.063	0.048	0.041
カテゴリ特性関数法	対称	1.013	0.064	0.048	0.042
項目期待値法	非対称	1.010	0.068	0.047	0.042
項目期待値法	対称	1.010	0.068	0.047	0.042
テスト期待値法	非対称	1.010	0.065	0.049	0.042
テスト期待値法	対称	1.010	0.065	0.049	0.041

表2 等化係数の推定値の平均と標準偏差 (垂直等化実験)

等化法	対称性	A_{21}		K_{21}	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
カテゴリ情報量法	非対称	1.238	0.109	0.698	0.057
カテゴリ情報量法	対称	1.207	0.090	0.685	0.057
項目情報量法	非対称	1.232	0.104	0.697	0.059
項目情報量法	対称	1.209	0.094	0.685	0.057
テスト情報量法	非対称	1.219	0.096	0.696	0.074
テスト情報量法	対称	1.218	0.095	0.696	0.074
カテゴリ特性関数法	非対称	1.216	0.093	0.691	0.072
カテゴリ特性関数法	対称	1.221	0.093	0.694	0.070
項目期待値法	非対称	1.223	0.092	0.693	0.061
項目期待値法	対称	1.226	0.093	0.694	0.061
テスト期待値法	非対称	1.222	0.088	0.694	0.066
テスト期待値法	対称	1.222	0.088	0.694	0.066

(はっとり たまき)

自己認知からの適応力の把握

— SCT（文章完成法テスト）の応用 —

○三浦 公一¹⁾ 玉井 寛²⁾

(¹⁾ キャリア ダイミックス研究所 (²⁾ 福島学院大学)

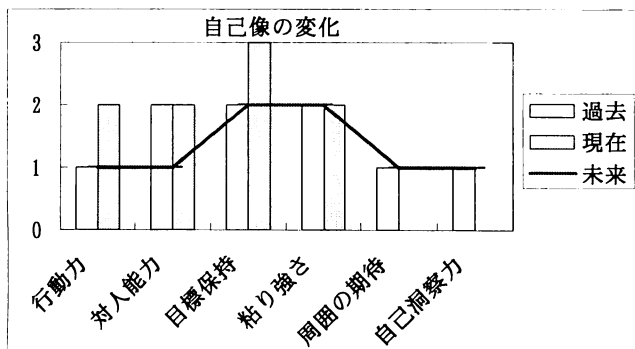
キーワード：適応、自己認知、SCT（文章完成法テスト）

【研究の目的】 この研究には前提となる複数の組織からの要求がある。それは企業においては標準尺度法のテストに換わるツールとして、大学においては推薦入試時の論文に換わるツールとして、文章完成法テスト（以下SCTと略）の手法を使う心理テストを開発してほしいというものである。年々早期退職、中退が増加し、学力試験による知識の多寡・質問紙法による性格テストだけで選考してはそれが防げないことが経験的に分かってきたためである。精研式SCTによって年に数千の診断依頼を受けている我々にとっても、トータルパーソナリティを把握するほどの必要性のない場面での簡易なSCT（以下N-SCTと略）と診断の手助けとなる標準尺度検査の開発は急務でもある。何故なら、精研式SCTの読み手育成には長く難しいトレーニングを必要とするため常に読み手不足に悩まされ続けていたからである。聞き取り調査の結果、適応に必要な主な特性は持続性・行動力・成長意欲となり、それを把握するためのN-SCTの刺激文と質問項目を確定することを目的として今回の研究を開始した。期間は数年を要し、今年は第一段階と位置付けている。

【方法】 データ収集は短大生（145）として、精研式SCTと下のマトリックスを仮説枠組みとして試験的に作成した40のSCTの刺激文と項目選択による質問を組み合わせたN-SCTの両方を同一人物に書いてもらい、精研式SCTを基準として新テストの刺激文の効果と質問項目の妥当性を検証する。

	過去	現在	未来
行動力			
対人能力			
目標保持			
粘り強さ			
自己洞察			

1. 精研式SCT（トータルパーソナリティ）とN-SCT（持続性・行動力・意欲）の評価の一致度を見る。
2. 両方で持続性・行動力・意欲ありと評価したグループとそれらがあまり認められないグループを抽出し、精研式SCTに表れる精神的分化度（生きる知恵・適応力）の違いを見る。（参考文献：佐野・榎田, 精研式文章完成法テスト解説, 1995, 金子書房）
3. 両グループの質問項目集計による下記のグラフパターン（自己像の変化）の違いを見る。



4. 両グループの精研式SCTとN-SCTにおける今回把握しようとしている特性が出やすい刺激文を見出す。
5. 両グループのN-SCTの反応文の特徴を見る。

【結果】 結果は旧来のデータに6月実施のデータを追加して現在、再集計・再分析を行っているため詳細については発表までに修正の可能性はあるが、現在のところ言えることは次の通りである。

1. 精研式SCTとN-SCTの評価の一致度は高い。
2. 2つのグループを精神的分化度という尺度で比較するとその違いは見られ、精神的分化度の高い人は持続性・行動力・意欲において高い評価を受け、低い人は低い評価を得ている。
3. 2つのグループの違いで目立つのは未来よりも過去と現在における自己の受容肯定と目標維持の強さであり、持続性・行動力・意欲において高い評価を受けているグループにはそれが顕著である。
4. 全体的印象を重視するSCTにおいて、これという項目は特定しにくいだが、ポジティブな要素として精神的分化度、過去の自己受容、現在の活動性・自己肯定感が表れやすい刺激文、ネガティブな要素として自己否定・悲観性・劣等感などの目立つ神経質傾向（参考文献：前掲）が反応に出やすい刺激文に特徴が表れた。
5. 持続性・行動力・意欲において高い評価を受けているグループでは状況認知・自己認知においてプラス・マイナス両面を見たうえで、楽観的・前向きな反応が多く、低いグループはマイナス面、あるいはプラス面だけにしか目を向けられない反応が多い。また、将来の自己像を肯定的に見ていることと高い評価とは関りがなかった。

【考察】 目標を持つことが持続性・行動力・意欲を強化し、それを支えるのが過去の自分のマイナス面を含めての受容、現在の自分の肯定と言え。目標を保持しているということは経験からの学習力を高め、更に目標保持を確実にするという好循環を生んでいる。これは中途採用場面で多く見られる転職の多い応募者や卒業後長年定職に就かない応募者に目標を持たない人が多いという実感を反対側から裏付けている。目標を持つということはそれを修正、あるいは破棄し、転換するにしても、その柱を求心力として経験から吸収し、成長できると言えるようである。

【今後の展開】 今回の研究の結果を踏まえて、N-SCTを修正し、今後は対象を企業の新人と大学生の入学時に拡げ、それらのケースを数年かけて追跡することになっている。その過程でさらにバージョンアップをして行く予定である。

【引用文献】 なし。

(みうら こういち・たまい ひろし)

基礎看護学実習における3年課程と2年課程の自己像の形成

○高橋友子
 (兵庫医科大学附属看護専門学校)
 キーワード：看護学生 基礎看護学実習

内海 滉
 (千葉大学)
 自己像

【研究目的】看護学生は、臨地実習において患者との相互関係の中で看護を展開するため、自己を見つめる機会が多い。学生個々を支持するには、臨地実習で学生がどのように自己像を変化させているのかを理解することが重要である。本研究は基礎看護学実習における3年課程と2年課程の看護学生の自己像を比較し、両過程の学生の特徴を明らかにすることを目的とする。ここでは、自己像を「自らが自己をとらえたイメージ」とする。

【研究方法】1. 研究デザイン：質問紙調査法。 2. 研究対象：H看護専門学校 3年課程2年 107名、2年課程2年 86名の計193名。実習前と後（合計：386データ）を調べた。 3. 調査日：平成13年～平成15年の10月～12月。 4. 調査方法：自己像に関する42項目の質問からなる自作の自己像のテストを用いた。質問紙は、自己概念の主要な構成要素(梶田徹一1988)に基づき、6つの基本カテゴリー（1 自己の現状の認識と規定 2 自己の感情と評価 3 他者から見られている自己 4 過去の自己 5 自己の可能性と未来 6 自己に関する当為と理想）に分けて作成した。対象が看護学生であるため、性格特性・行動傾向・対人特性を検討した。 5. 分析方法：3年課程と2年課程の学生の実習前後における42項目の質問の回答をt検定した。 6. 倫理的配慮：学生には事前に協力は自由であり、不参加による不利益が生じないこととデータを研究以外に使用せずプライバシーを守ることを説明した。

【結果】1. 3年課程では、Q1 実習に出る時は気分がよい Q2 実習に出る時は体調がよい Q5 私は実習に行くことが嬉しい Q10 私は患者に安全な技術を提供できる自信がある Q11 私は患者とコミュニケーションがとれる自信がある Q22 私は患者の訴えがないと何を看護すべきかわからなかったことがある Q24 私は以前の実習で患者と信頼関係が築けた Q30 私

は患者とコミュニケーションがとれると思う Q32 私は看護計画が立案できると思う Q33 私は自己の判断で援助ができると思う Q35 私は患者から信頼されるようになりたい Q42 私は看護師になりたいの12項目に有意差(P<.05)が認められた。2年課程では、Q1 実習に出る時は気分がよい Q5 私は実習に行くことが嬉しい Q6 私は患者が受け入れてくれたら嬉しい Q8 私は積極的に実習できる Q10 私は患者に安全な技術を提供できる自信がある Q11 私は患者とコミュニケーションがとれる自信がある Q16 私は世話好きである人からみられている Q17 私は思いやりがあると人からみられている Q23 私は入院した経験がある Q27 私は指導者にほめられたことが誇らしい Q28 私は患者に感謝されたことがうれしい Q29 私は教員に自分の考えを受け入れてもらえたことがうれしい Q30 私は患者とコミュニケーションがとれると思う Q32 私は看護計画が立案できると思う Q38 私は人の思いを受け止められるようになりたい Q42 私は看護婦になりたいの16項目に有意差(P<.05)が認められた。

【考察】3年課程は、初めての实習であるため、実習目標の達成に対する意識が強く、また、実習目標が達成できたと実感していることから、基礎実習の目標の妥当性が推察される。また、実習における様々な人間関係においては、患者との関係に意識が専心していることが認められた。教員・指導者からの承認よりも患者からの承認に価値をおいていることがうかがわれる。2年課程も実習目標が達成できたと実感していることから、基礎実習の目標の妥当性が推察される。しかし、実習における様々な人間関係においては、患者・指導者・教員のいずれからも承認を受ける機会が少なく、自己に対する期待が下降している。実習中における教員・指導者の指導のあり方を検討する必要がある。

基礎看護学実習前後の変化

	3年課程 n=107					2年課程 n=86				
	実習前		実習後		t値	実習前		実習後		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1 実習に出るときは気分がよい	1.84	0.60	2.13	0.72	-3.92 ***	1.57	0.61	1.83	0.67	-3.28 ***
2 実習に出るときは体調がよい	2.36	0.70	2.13	0.77	3.12 **	2.15	0.54	2.10	0.77	0.52
5 私は実習に行くことが嬉しい	2.09	0.85	2.77	0.77	-6.25 ***	1.63	0.75	2.43	0.86	-8.47 ***
6 私は患者が受け入れてくれたら嬉しい	3.84	0.52	3.69	0.57	1.94	3.85	0.39	3.49	0.66	4.28 ***
7 私は実習に行くことが嬉しい	2.95	0.62	3.04	0.60	-1.58	2.79	0.60	2.87	0.63	-1.19
10 私は患者に安全な技術を提供できる自信がある	2.10	0.58	2.60	0.66	-7.00 ***	2.20	0.61	2.52	0.63	-4.16 ***
11 私は患者とコミュニケーションがとれる自信がある	2.31	0.65	2.93	0.71	-8.39 ***	2.48	0.61	2.78	0.79	-3.65 ***
12 私は人より判断力が優れていると思う	2.05	0.59	2.04	0.57	0.17	1.92	0.58	1.99	0.50	-1.03
16 私は世話好きである人から見られている	2.64	0.81	2.62	0.75	0.29	2.55	0.75	2.36	0.75	2.18 *
17 私は思いやりがあると人から見られている	2.63	0.67	2.62	0.56	0.18	2.56	0.59	2.35	0.55	3.26 **
27 私は指導者にほめられたことが誇らしい	2.91	0.81	2.80	0.18	1.10	2.86	0.72	2.55	0.76	3.11 **
28 私は患者に感謝されたことが嬉しい	3.73	0.59	3.60	0.66	1.86	3.60	0.64	3.35	0.70	2.82 **
29 私は教員に自分の考えを受け入れてもらえたことが嬉しい	3.27	0.68	3.08	0.73	2.31	3.22	0.77	2.88	0.73	3.42 ***
30 私は患者とコミュニケーションがとれると思う	2.63	0.59	3.09	0.68	-6.19 ***	2.59	0.56	2.88	0.71	-3.52 ***
31 私は看護に必要な知識を身につけることができると思う	2.74	0.68	2.72	0.61	0.24	2.69	0.56	2.56	0.63	1.52
32 私は看護計画が立案できると思う	2.12	0.63	2.56	0.59	-6.23 ***	2.13	0.63	2.41	0.66	-2.95 **
33 私は自己の判断で援助ができると思う	2.16	0.62	2.57	0.65	-5.31 ***	2.21	0.65	2.37	0.63	-1.90
34 私は患者の思いに共感できるようになりたい	3.84	0.39	3.85	0.36	-0.28	3.76	0.51	3.72	0.50	0.47
35 私は患者から信頼されるようになりたい	3.94	0.23	3.89	0.32	2.16 **	3.85	0.36	3.77	0.48	1.41
38 私は人の思いを受け止められるようになりたい	3.90	0.31	3.89	0.32	0.26	3.81	0.42	3.66	0.59	2.40 *
42 私は看護師になりたい	3.67	0.63	3.42	0.80	4.60 ***	3.64	0.63	3.47	0.70	2.47 *

基礎看護技術の効果的教育方法の検討

—デモンストレーション提示方法の違いにおける「無菌操作」技術の習得に関する経時的変化—

○松永保子 小林千世
信州大学医学部保健学科

森田敏子
熊本大学医学部保健学科

内海 滉
千葉大学

Key Words : 基礎看護技術 デモンストレーション 教育方法 看護学生

<目的>

近年急増した医療事故の一因として、新卒看護職者の看護技術実践力低下が指摘されて以来、看護教育関係者が看護技術教育改善の検討を重ねている。看護技術教育の検討にあたっては、看護基礎教育の基礎的段階である基礎看護技術教育に焦点を当てることが重要であると考えられる。

基礎看護技術教育では、教育方法として技術のデモンストレーション（以下、デモ）が多用されている。デモ提示方法には、教員が実際に技術を行う方法（以下、実デモ）と視聴覚教材を視聴させる方法（以下、ビデオデモ）がある。デモを提示する時には、これらの教育効果を認識し、教育目的に沿った使い分けが必要である。しかし、異なるデモ提示方法の教育効果の差異を検証した研究はほとんどなく、学生の技術習得状況の経時的変化を検討した研究も少ない。

したがって、今回、専門知識と2種類のデモ提示方法による専門技術提示後の知識・技術再生の経時的変化を比較することを研究目的とした。

<方法>

A大学看護学科1年次学生60名を対象とし、実デモ群30名とビデオデモ群30名とに分けた。

被験者に提示する課題は、「無菌操作」技術の中の「鑷子の扱い方（万能つまみからの綿球の取り出し方）」を選択した。

まず、被験者全員に専門知識として「感染予防と無菌操作」の資料を渡し10分間読ませて学習させた後、筆記テスト（14点満点）を行った。次に、専門技術として、実デモ群には実デモを提示し、ビデオデモ群には、実デモと同じ内容の自作ビデオを提示した。デモ提示直後、各群に技術テスト（11点満点）を行った。1週間後に、1週間前に提示した専門知識・技術の記憶再生状況を確認するために、同じ筆記・技術テストを行った。1ヵ月後にも、同じ筆記・技術テストを行った。

<倫理的配慮>

研究の実施については、実験実施場所であるA大学の倫理委員会の審査・承認を得た。また、被験者である学生には、事前に、研究目的、プライバシーの保護、研究への参加は自由意志で決められること、研究の参加に同意してもいつでも撤回できること、実験結果が学業成績とは関係しないこと等についての十分な説明を口頭と文書で行い、協力承諾を得た。

<結果>

実デモ群の筆記テストの平均点は、専門知識提示直後が11.8±1.2点、1週間後が11.9±1.2点、1ヵ月後が11.9±1.3点であった。一元配置分散分析では、統計学的差を認めなかった。実デモ群の技術テストの平均点は、専門技術提示直後が10.4±0.7点、1週間後が10.3±0.8点、1ヵ月後

が10.4±0.6点であった。一元配置分散分析では、統計学的差を認めなかった。

ビデオデモ群の筆記テストの平均点は、専門知識提示直後が12.4±1.0点、1週間後が11.7±1.2点、1ヵ月後が11.9±0.9点であった。一元配置分散分析では、経過時間に影響を受けていることを認めた（ $F=4.84$, $p=0.011$ ）。多重比較では、専門知識提示直後以降、1週間後および1ヵ月後が有意に低値であることを示していた。ビデオデモ群の技術テストの平均点は、専門技術提示直後が10.4±0.6点、1週間後が9.9±0.9点、1ヵ月後が9.8±0.8点であった。一元配置分散分析では、経過時間に影響を受けていることを認めた（ $F=6.63$, $p=0.003$ ）。多重比較では、専門技術提示直後以降、1週間後および1ヵ月後が有意に低値であることを示していた。

また、デモ提示方法の違いと経過時間との二元配置分散分析では、筆記テストで統計学的差を認めなかった。しかし、技術テストでデモと時間とに有意な交互作用を認めたものの、デモの主効果で実デモが有意に高値であり、時間の主効果でも実デモが有意に高値であった（表1）。

表1 技術テスト平均点についてのデモ提示方法の違いと経過時間との二元配置分散分析表

SV	SS	df	MS	F
デモ	5.69	1	5.69	7.75 **
時間	2.88	2	1.44	3.13 *
デモ×時間	3.14	2	1.57	3.42 *

** : $p<0.01$ * : $p<0.05$

<考察>

本実験においては、実デモは立体的な三次元の情報提示、ビデオデモは平面的な二次元の情報提示と考えられる。今回の結果では、同じシナリオに基づいてデモを提示したにもかかわらず、専門知識・技術の再生がビデオデモ群においては1週間後に低下したが、実デモ群においては1ヵ月後まで低下しなかった。したがって、デモ提示方法の違いが再生に大きな影響を及ぼしたことは間違いないと推察される。すなわち、「無菌操作」技術の中の「鑷子の扱い方」においては、二次元の情報よりも三次元の情報の方が、臨場感もあり、「長期記憶」での保持や再生がしやすかった可能性がある。

このことから、三次元ビデオの視聴が、教育効果を向上させるデモ提示方法のひとつになるのではないかと考えられ、その開発が期待される。

（まつながやすこ こばやしちせ もりたとしこうつみこう）

看護学生のストレスに関する研究（その1）

—ストレスの内容分類—

○今留 忍 小竹 久実子 内海 滉
(杏林大学保健学部) (千葉大学)

キーワード：看護学生、ストレス、内容、分類

はじめに

われわれは、ストレスを生活上の出来事と関連があるという知見から、看護学生の日常生活場面に焦点をあて、看護専門学校生を対象に質問紙調査を、ここ2年来実施している。前回の調査では、因子分析により看護学生のストレス因子として6つが示唆された。今回は、ストレスの内容を分類し、その分類により看護学生のストレスを説明できるか検討した。

研究方法

1. 研究デザイン

質的・帰納的研究とした。

2. 倫理的配慮

研究対象者である学生には、書面を用いて研究の趣旨を説明し、協力を依頼した。無記名とした。

3. データ収集方法

1) 対象

全日制3年課程と昼間定時制2年課程を併設する看護専門学校看護専門学校の1年次～3年次学生

2) 調査期間および方法

2004年7月12日～23日。郵送質問紙調査法を用いた。

3) 調査内容

学校生活および私生活において、最近(1月～7月)ストレスと感じた事柄上位3項について、具体的に記述してもらった。

4. データ分析方法

何らかの構造あるものに組み立て、統合を見出していくために、KJ法的試行によって、対象者が自由に記載したストレスと感じた事柄を書き出し、グループ編成し、項目を付ける作業を行った。グループ編成および項目の検討は複数で行った。

結果

1. 対象者の背景

全日制89名、定時制96名の計185名(回収率77.1%)。年齢の平均、全日制22.8歳(SD=5.8)、定時制27.7歳(SD=6.3)、全体25.2歳(SD=6.5)。

2. 看護学生のストレスの分類

ストレスの内容としては、4つの項目とそれぞれの項目に含まれる計12の中項目、中項目に含まれる計30の小項目に分類された(表1)。

1) 学校

①学習、②通学・登校の2つの中項目に分類された。①は、試験や課題、授業内容、学習進度、学校の体制、教職員に関するもの、②は、満員電車や時間、遅刻がストレスの内容として挙げた。それぞれ、5つと2つの小項目に分類された。

2) 実習

①学習、②生活の変化の2つの中項目があった。ストレスの内容は、記録の多さ、なれない場所での実習、実習病院の体制、患者にケアを拒否されたときなどであった。①は2つ、②は1つの小項目になった。

表1 看護学生のストレスの内容の項目

項目	中項目	小項目
学校	学 習	‘試験’ ‘課題、事前学習’ ‘授業、内容、勉強’ ‘学校の体制’ ‘教職員’
	通学・登校	‘満員電車’ ‘時間、遅刻’
実習	学 習	‘記録、課題、評価’ ‘実践、実習場所’
	生活の変化	‘ゆとりの欠如’
対人関係	他者との関わり	‘親子’ ‘友人、同級生’ ‘教職員’ ‘アルバイト、職場’ ‘実習グループ、患者’
	他者の態度	‘同級生’ ‘周辺の人’ ‘職場の上司、同僚’ ‘教員、指導者、スタッフ’
生活全般	生活パターンの変化	‘ゆとりの欠如’ ‘新しい環境’
	健康維持・体調管理	‘疲労、体調不良、睡眠不足’ ‘過食’
	経済	‘収入、貯金’ ‘生活費、学費’
被害	物事の進み具合	‘学業、仕事・家事の両立’ ‘将来の見通し’ ‘回顧、自責’
	心理的プレッシャー	‘迷惑、憤慨’ ‘精神的な負担’

3) 対人関係

①他者との関わり、②他者の態度、2つの中項目があった。①は、家族や友人・同級生、教職員に関するもの、②では、同級生、職場の上司・同僚、教員・指導者の態度がストレスの内容である。5つと4つの小項目に分類された。

4) 生活全般

①生活パターンの変化、②健康維持・体調管理、③経済、④物事の進み具合、⑤被害、⑥プレッシャーの6つの中項目になった。試験や実習による睡眠時間の減少、疲労の蓄積、学費の高さ、④に関する内容は、勉強をしない自分や人との関係が不得手な自分などである。①②③は各2つ、④は3つ、⑤⑥は各1つの小項目に分類された。

考 察

看護学生のストレスに関する先行研究では、臨地実習に焦点をあてたものが多い。本調査の結果は、看護学生のストレスは実習に限らず、生活全般に及んでいることを示唆するものである。学業の負担感や対人ストレスがバーンアウトに陥る要因となっており(木村ら, 1999)、本研究における、《学校》の〈学習〉、《対人関係》の〈他者との関わり〉〈他者の態度〉の分類は、看護学生の状況を表すものである。《対人関係》を、関わりをもつことによるストレスと、相手の行動に由来するストレスとは異なるという見解から〈他者との関わり〉と〈他者の態度〉の項目に分離した。実習中は、生活時間も変化する。実習記録を書くことに多くの時間を要することや教員との関係に強いストレスを感じ(正村ら, 2003)、一人暮らしがストレスをもたらす(土屋, 2001)。中項目の〈学習〉〈生活時間の変化〉に該当する。さらに、計30の項目は、24項目に分類したストレス(今留ら, 2004)と若干の名称の違いはあるが、ほぼ類似している。

以上のことから、《学校》《実習》《対人関係》《生活全般》の分類は妥当と考えた。

看護学生のストレス因子に関する研究 その2

— 全日制と定時制のストレス因子構造の差異 —

○小竹 久実子 今留 忍 内海 滉
(杏林大学保健学部) (千葉大学)

キーワード：看護学生、ストレス、全日制、定時制

はじめに

看護学生には、患者と看護学生の関係や看護教員及び指導者と看護学生等さまざまな人間関係が心理的ストレスを生じる。学習を主としている看護学生（全日制）と、仕事と学習を両立させている看護学生（定時制）とはストレスの異なることが予測されるが、その差異を研究したものはみられない。本研究では、全日制と定時制との看護学生のストレスの差異を明らかにすることを目的とする。

研究方法

1. 対象：A看護専門学校看護学生 208名
(全日制 120名、定時制 88名)
2. 期間：H15年7月11日～28日
3. 調査方法・内容：郵送による配票調査法にて実施した。自由記載法にて、最近（1月～7月）ストレスと感じた状況（不安、緊張、気がかり、困難な問題、思い通りにならない事柄）の中で、それが強かった事柄を上位3位まで記載してもらい、それをKJ法にて24項目に分類した。
4. 分析方法：KJ法にて24項目に分類した項目を、1位を3点、2位2点、3位1点と重み付けした後、バリマックス回転による因子分析を実施した。全日制と定時制は別々に因子分析を行った。但し、全日制において削除した項目は回答のなかった「退職」の項目、定時制において削除した項目は、回答のなかった「受験」、「異性関係」、「目標設定の困難さ」の項目、そして、「その他」の項目は両者とも削除した。

結果

1. 全日制と定時制のストレス因子構造

6因子抽出し、全日制の累積寄与率 40.44%であり（表1）、定時制の累積寄与率 43.53%であった（表2）。6因子抽出した結果、全日制と定時制において、因子構造は異なっていた。全日制は「自己と学校を中心としたストレス」で、定時制は「社会的関係と学業との葛藤によるストレス」の構造であった。

全日制の第1因子は、バイト・職場の人間関係において、相手を否定的に評価する内容がみられ、学校の運営においても、学校側の運営の悪さを批判する内容がみられる反面、自ら行動して変化させようとする意志はみられないことから、「目標設定の困難さと他者否定」とした。第2因子は、就職への不安や学習課題がクリアできるかどうかの不安からの緊張によるストレスであることから、「課題達成への緊張」とした。第3因子は、自分の体力や学校の体制が自己イメージと違いアンバランスを感じているストレスであることから、「自己イメージに反すること」とした。第4因子は、学習時間が上手に使えないことや、通学時間が長すぎることなどからゆとりのなさからくるストレスであることから、「量と時間の長さのコントロール不足」とした。第5因子は、受験や看護実践に失敗しないかという不安や友人と信頼関係を築くことができないのではないかとというストレスから、「成功への不安」とした。第6因子は、教師とうまく合わないことや、実習記録を書かなければならないこと、今後の自己のあり方の不安

は、他者評価によって今後が左右されることへのストレスを感じていることから、「他者の評価意識」因子とした。

定時制は、第1因子は、仕事や学校の運営への批判と仕事を退職することへのストレスから、「期待と現実のギャップへの反発」とした。第2因子は、バイトや職場においても、友人における関係も、自分と相手の違いを意識して関わろうとする人間関係にストレスを感じていることから、「自己と他者の違いを意識する人間関係」とした。第3因子は、生計として経済的ゆとりのなさを感じていることから、「経済的・精神的ゆとりのなさ」とした。第4因子は、仕事と学習の両立がうまくいかないことや人間関係がうまくいかないことから、「物事の両立によるアンバランス感」とした。第5因子は、通学時間や人間関係の距離が上手にコントロールできないことからくるストレスから、「距離間コントロールの困難」とした。第6因子は、自分自身をとりまく全ての環境に関するストレスから、「学習環境と将来」因子とした。

全日制には今後の不安や目標設定の困難さの項目がみられるのに対し、定時制ではみられなかった。また、定時制では経済面の項目が挙げられているが、全日制ではみられなかった。全日制では、第5因子に看護の実践のストレスが含まれるが、定時制の因子には含まれていない。

両者の共通点は、第1因子に学校の運営の項目が含まれていることである。

考察

全日制においても定時制においても、「学校の運営」は、第1因子にみられ、学校への期待と現実のギャップによるストレスが認められる。また、両者ともコントロールの困難さや不足の因子が見受けられるが、全日制では量と時間の使い方に対し、定時制では人間関係を築く上での距離感の困難さを感じている。全日制は、自分自身のコントロールを意識しているのに対し、定時制では、他者と自分とを意識していることが窺える。さらに、全日制は、将来の目標設定が定まらず、心理的不安定さがみられ、他者を否定する傾向にある。第2, 5, 6因子に危機的状況を導く要素が考えられるが、定時制に比べて少ない。定時制は、期待と現実の違いを意識し、ゆとりのなさを感じ、環境との調和に苦慮している様子がみられる。全6因子に危機的状況となる要素が潜んでいることから、アイデンティティを確立する段階にあるプラスのストレスとなる反面、マイナスのストレスに影響を及ぼす可能性がある。

先行研究において、今留ら(2004)の因子構造の第1, 3, 6因子と本研究の全日制の第1, 5, 6因子に同様の項目がみられる。また、今留ら(2004)の第2, 4因子と、定時制の第1, 6因子も同様の項目がみられた。また、本研究においては、全日制の第5因子に看護実践が含まれ、物事に失敗しないかという不安の因子であることから、全日制の看護学生の特徴を示していると考えられた。また、定時制の第4因子に、実習記録が含まれ、学習と仕事の両立や人間関係等のアンバランス感を感じ、他者と自己を意識する因子であることから、定時制の看護学生の特徴であることが示唆された。

教育教材の工夫について

— 高校生のやる気を導くために —

○青木憲樹

(桐生短期大学 庶務課)

キーワード：やる気・教材の工夫・教師の姿勢・意識の変容

【研究の目的】 私は、G県にあるK高等学校の非常勤講師で書道Ⅰを担当している。K高等学校は、いわゆる底辺校である。1クラス40人を2クラス担当している。

本校の生徒の特徴として、小・中学校から授業についていけないいわゆる落ちこぼれの生徒が多い。高等学校レベルの学習に生徒が達していないのである。本校の生徒は授業内容が理解できない状態で授業を受けている。生徒にとって、授業は苦痛なのである。

書道Ⅰの目標は、「書を楽しむ心情を育て、書写能力を高め、書の基礎的能力を伸ばすこと¹⁾」である。具体的には、筆と墨と半紙で古典の文字を書かせることである。指導方法は手本を教材にして、手本通り書くことが正しい学習方法である。教材の内容は、古典の文字である。

生徒が提出した作品について、従来の指導方法は手本どおり書いてあるかチェックして正しく矯正するという方法であった。この指導方法は、とすれば生徒の悪いところを指摘し、強制するということになりがちであった。

授業が、生徒のやりたいものや興味のあるもの、役に立つと思われるのではなく、やりたくないもの、興味のないもの、役に立たないと思われるものを強制的にやらせるという構造になっている。この構造が悪循環となり、生徒の意欲・やる気を失わせている。

やる気とは、「価値のある目標に対し、成し遂げたい意欲²⁾」とされている。高校生の興味・関心のある教材にすれば、生徒がやってみようと思ひ、やってみてできれば、生徒のやる気が向上すると考え、従来と異なる授業実践を展開した。

従来の教師の意識は、生徒の校則に合わないところを矯正することが教育であるという意識で生徒に接していた。それに対して、現在の本校では、いわゆる寄り添う指導を推進している。しかし、教師の意識の中には、従来の生徒を校則に従わせなければならないという意識が残っており、生徒を咎めようとする意識がある。それが生徒に敏感に伝わり生徒の教師に対する態度が打ち解けない状況にある。

教師が一生懸命授業しても生徒はやる気をみせない。その結果、教師は生徒にはやる気が無いと判断する。教師にとって、生徒のやる気の無い授業は苦痛になる。生徒は授業がつまらないと感じる。生徒は授業に対してやる気がでない。という悪循環に陥ってしまっている。

生徒のやる気には教師の姿勢も大きく影響すると考え、生徒に接する教師の姿勢を大きく変えたのである。

本稿は、いわゆる底辺校における高校生のやる気を引き出すために実践した授業の報告である。

【方法】

(1)教材の変更

従来の書道Ⅰの授業の道具を生徒達が日常使用している筆記用具に変えてみたのである。すなわち、シャープペンシルやカラーペンなど平日頃自分達が主に使用している筆記具を使用するようにしたのである。また、教材の内容を流行歌の歌詞にした。

(2)教師の意識の転換

私は生徒に対する意識を変え、生徒を咎めようとか校則違

反を注意しようとする意識をしないように心掛けた。

教材の内容を教師自身が楽しい・面白いものを選び、教師である私自身が楽しみながら教材作りをした。

(3)ほめる

生徒達の作品をあるがままに受け入れ、作品の中からどこかよいところはないか探して、少しでもよいところがあれば徹底的にほめることにした。

【結果】 教師である私の生徒に対する意識が、生徒達を咎めようとするのではないことが理解できた生徒達は、授業に安心して参加するようになった。生徒達のあるがままを認め、よいところを伸ばそう、ほめようとしていることが、生徒に理解できたのである。

生徒達は、私の意識を理解し、安心して作品を提出するようになった。教師自身が楽しいと感じる教材については、生徒は興味を示し、授業に参加する生徒が増えた。また、提出する作品の数も、増加したのである。

本校の生徒達は、イヤホンをつけて音楽を聴き、常に流行歌を口ずさんでいる。教材の内容を流行歌の歌詞にしたことは非常に効果があった。筆と墨と半紙で古典の文字を書かせた時の作品の提出率は、1クラス40人で一人平均0.5枚であった。ところが好きな流行歌の歌詞を内容とした手本であれば、書道の授業に全く関心を示さず、作品の提出のなかった生徒が作品を提出するようになり、平均2.4枚の提出率になった。試みに古い諺を手本にしたときは、平均1.7枚まで提出率が落ち込んだのである。

【考察】 生徒にやる気がないと考えて授業をしていた時に比較して、まず、教師である私が教材に対して興味・関心を持ち、楽しい、面白いと感じて教材を作成し、生徒達に提供すれば、生徒達は教材に興味・関心を持つことが明らかとなった。また、教材が生徒の身近で親しみを持てるものであれば、生徒の興味・関心がわき、楽しい授業が展開できることが明らかとなった。

授業に対する教師の姿勢も、生徒のやる気に大きく影響することが明らかとなった。教師が生徒のこと考えて授業をすれば、生徒も教師が自分のこと考えてくれていると感じるのである。教師は常に自分の意識の在り方が生徒に大きな影響を与えることを注意して、授業に取り組まなければならないのである。

生徒のやる気を高めるには、ほめることが非常に大きな効果があることが判った。小・中学校から成績が悪く、教師にほめられた経験があまりない本校の生徒の場合、ほめられることはとてもうれしいことなのである。

生徒達が面白く興味がわき、やってみようと考え、やってみたら楽しく充実感を味わえるものであれば、授業に参加するようになるのである。

【引用文献】

- 1) 文部科学省 1999 高等学校学習指導要領解説 p.168
- 2) 宮本美沙子 2002 新版 現代学校教育大事典 6 p.302
(あおき けんじゅ)

教員免許状取得希望者の意識に関する一考察

— 一般大学の教職科目履修学生を対象に —

小谷 正登

(関西学院大学教職教育研究センター)

キーワード：教職課程、教員免許状、職業選択、大学生

【研究の目的】 全国高校 PTA 連合会とリクルートの合同調査(2003)によると、「高校生のなりたい職業」の男子の第1位、女子の第3位(1位は保育士・幼稚園教諭)が教師である。昨今の経済事情の影響を受け、資格志向、安定性さらに職業としてのやりがいなどの要因が人気職種の一つに押し上げられるとも考えられる。しかし、教育問題の深刻化や、相次ぐ少年事件が発生する中、学生はなぜ教員免許状を取得して学校の教員を目指すのか、学生達の教員に対する意識は複雑な様相を持っていることが伺える。そこで、本学の教職課程科目を履修する学生の実態から、教職志望者を含め教員免許状取得希望者の意識を考察することによって、学生の進路や生き方に対する意識を検証する。さらに、一般大学における教職課程教育の在り方を検討する。

【方法】 1. 調査対象：「教職に関する科目」の中で発表者が担当している科目の一つ「生徒指導論」の履修者約200名

2. 調査日時：2005年7月上旬

3. アンケート内容

①フェイスシート

②教職課程等の授業全体の印象について

1)出席 2)受講生数 3)単位取得 4)授業の静粛度
5)授業の明瞭さ 6)授業内容 7)将来性 8)担当者の熱意

③同科目の履修理由 ④教職を志望する度合い・内容

⑤免許状取得希望数 ⑥免許状取得希望校種

⑦教職以外の希望職種・業種

⑧一般性セルフ・エフィカシーに関する項目

坂野・東條(1986)による一般性セルフ・エフィカシー尺度の16質問項目

⑨不安に関する項目

清水・今榮(1981)によるスピルバーガーのSTAIの日本語版、特性不安に関する20項目・状態不安に関する20項目以上のアンケート内容などについて、評定法・自由記述式などで回答を得た。

【結果】本学は教員養成系大学ではない所謂一般大学である。高野()は、一般大学教職課程教育の機能を、Aを中心同心円をなす形で述べている。つまり、Aは教師を養成すること、Bは、教育者・子どもの生活展開なり人格形成の過程に継続的に関わる仕事・中略・を担う人々になるための基礎教育、Cを教育についての教養を持った市民を育てることとしている。こうして、一般大学における教員養成課程の意義とともに特殊性を示している。

一方、伊田(2003)は、教員養成系教育学部学生に対する研究において、教職を第一志望とする群では、授業内容の職業実践にとっての有用性(実践的利用価値)、授業を通しての自己成長(私的獲得手段)、採用試験にとっての有用性(制度的利用価値)を自律的な学習動機づけを構成する要素としている。さらに、教師志望消極群では、学習内容のおもしろさ(興味価値)と私的獲得価値が自律的な学習動機づけを構成する要素としている。この点については、一般大学における教職課程では、同研究における教員養成系教育学部学生とは異なる様相を示すことが予測される。例えば、本学における2004年の調査では、調査対象の教職科目履修者1600名の66.7%が「免許状修得」を履修理由にあげている。この「免許状修得」

を履修理由にあげた1064名中、13.3%がいわゆる教職を第一志望とする学生(教職志望積極群、「教職しか考えていない」)である。残りの者は理由の違いはあるが教師志望消極群とすることができる。このように、教職を職業の選択肢の一つとして考えるのはどのような要因によるのであろうか。そこで、セルフ・エフィカシー、特性不安及び状態不安の3つの要因をあげ検証する。

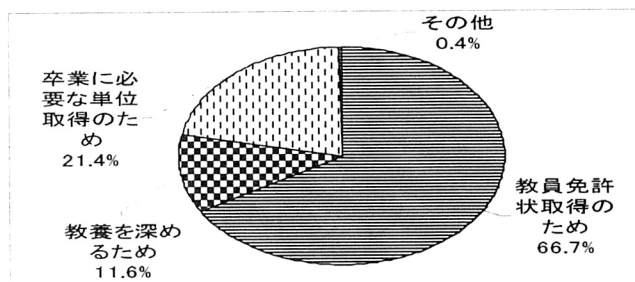


Fig.1. 授業履修の理由

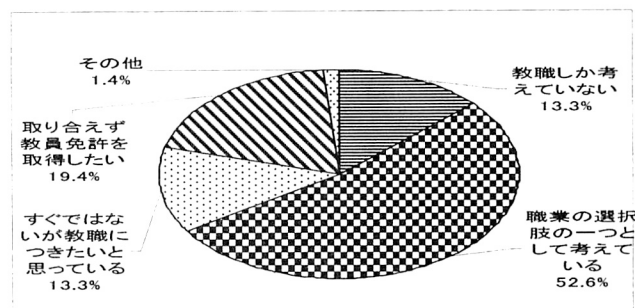


Fig.2. 免許状取得の理由

【考察】3つの要因の中で、セルフ・エフィカシーに関しては、教職志望積極群との関連が見られると考えられる。また、教師に対するイメージ、「教師像」も明確であると考えられる。さらに、不安に関する項目では関連が見られないであろう。一方、大半を占める教職志望消極群については、セルフ・エフィカシーについては関連が見られず、不安に関する項目で関連を見ることができると考えられる。このことから、一般大学における教職課程教育では、高野()が述べる機能の中でCに留意しつつ、セルフ・エフィカシーを高め、不安を軽減するような授業が求められる。このことによって、よりよい職業選択、生き方の探求につながると考えられる。さらに、限られた人数ではあるが教職志望積極群に対しては、よりセルフ・エフィカシーを高める内容を提供する必要が考えられる。こうして、より明確な教師像と志望動機をもって教員となることが可能になると考えられる。

【引用文献】

- 伊田勝憲 2003 教員養成課程学生における自律的な学習動機づけ像の検討 教育心理学研究,51,4, 367-377
高野和子 2001 一般大学における教職課程教育 教職教育研究,14,63-70
清水秀美・今榮国晴 1981 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版(大学生用)の作成 教育心理学研究,29,4,62-67

(こたに まさと)

現代の青年の時間展望意識について (1)

*荷見 一恵
(茨城大学教育学研究科)

安達 喜美子
(茨城大学)

キーワード：青年期・時間展望・ステレオタイプ

1 はじめに

< NHK 中学生・高校生の生活と意識調査 2002 >によると、近年の高校生は20年前のそれと比較して、生活目標に変化がかなり現れている。例えば望ましい生き方として「他人に負けないようにがんばる」よりも「のんびりと自分の人生を楽しむ」ことを望む傾向が強くなり、また、「しっかりと計画をたてて豊かな生活を過ごす」という「未来志向」の生き方より、「その日その日を自由に楽しく過ごす」や「身近な人と、なごやかな毎を送る」という「現在中心」の生き方を選ぶ傾向が増えてきている。この傾向は近年の青年の一般的傾向と思われる。

筆者は高校の教員でもあり、このように変化してきている高校生を始めとする青年に対して今後どのようにかかわって支援していけばよいのかをこの研究を通して考えてたい。

2 研究の目的・調査内容

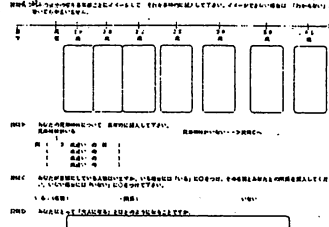
昨今の青年の将来展望感について、高校生を対象に自由記述の質問紙により調査・検討する。

調査対象：I 県内高校2年生 53名

(男子14名・女子39名)

内容：将来の自分の姿について
各年齢（発達段階）ごとにイメージする

分析方法：KJ法



3 結果

(1) 全体像

まず全体像としては、周囲からの情報をそのまま自分のものとして取り入れている・または漠然とした（仕事を続けている・ゆっくりするなど）ものが多く、「自分の将来の姿」として具体的に記述されているものは少なかった。これは文化の中で、制約された情報によるところに、自分の将来を重ねて考える・ステレオタイプ化された傾向といえるであろう。

(2) 各年齢段階における将来像

・20歳

社会で「成人」と認められる年齢になり、男女とも大人としての自覚が生まれてくる。しかし、女性で大学進学を選択した者からは、大人になりきれずにいる自分に対して「子どもっぽさ」「将来の不安」があげられている。自分をネガティブに捉えていると思われる。

・22歳～25歳

男性がこの年齢から「仕事の充実」をイメージするのに対し、女性はさらにステップアップを考えていることがうかがえる。これは男性が自立の自覚が芽生えているのに対し、女性は自立・社会に出る事への不安をこの年齢でも持つことの現れであろう。それは自分に対しての自信のなさとも言えるかもしれない。その一方で、「わからない」と記述した者も多い男性と比較して、女性は「仕事への傾倒」、「結婚」に代表される「人生の大きな選択期」と考えていることがわかる。高学歴を志向してもこの年齢までの結婚

を考えるので、始めたばかりの仕事との両立で悩む部分は、男性には表れていない。またこの年齢から「海外志向」が女性特有のものとして表れている。

・30歳

男性が仕事と家庭を独立して考えているのに対して、女性はこの2つを関連づけてみているところに差がある。さらに女性は「子供を持つ」ことから派生する育児感についても、既にネガティブな面をイメージしている。現在の少子化問題を考える上で手がかりになる情報かもしれない。

・総合観

青年期の各年齢については、進路志向の差はあるが、最終的に就職を希望しており、自立に対する志向があることがうかがえる。しかしながら、具体的な職業名などにまで踏み込んで記述しているものは男子35.7%、女子25.6%にとどまっている。ここから、情報としてはステレオタイプな姿を取り入れてはいるものの、それを具体的な自分の将来像に結びつけるところまで行き着いていないように思われる。

また、この青年期のイメージの捉え方としての特徴は、従来通りの「仕事観の男女差」が挙げられるであろう。男性が仕事と家庭を切り離してイメージできるのに対して、女性は家庭形成が優先で、その上での仕事として捉えている。平成9年の男女雇用機会均等法の改正等で、男女平等とはいいながらも、「男は外。女は内」の日本の歴史的・文化的影響を、既にこの年齢において受けてしまっていると考えられる。

4 考察

調査の結果から、昨今の青年には、情報としての未来認識はあるものの、創造的・より具体的な自己に対する将来展望が開けていないことがうかがえた。その原因の1つとしては、日本経済の恒常的な停滞感があげられるであろう。それによって現代は未来に対して何の保証も見られないのであるから、ステレオタイプの情報として受け入れ、自分の姿を規定しない方が、失敗したときに傷つかないだろう、と考えているのではないか。今の青年の「自分を傷つけない」傾向・依存傾向がここに表れたと思われる。さらに、これまで以上に社会構造は複雑になってきて、マニュアル化の傾向があり、1つ1つの物事に対して自己の達成感を味わえる時間的・精神的なゆとりがないことでの自己肯定感の低さや、これまでの発達課題をそれなりにクリアしきれて来ていないこと（自主性・勤勉性の獲得など）が考えられるであろう。

青年をこのようにしてしまった社会にも問題がある。我々大人自身も、今後の青年の生活環境を真剣に考えていかなければならないと思わせる結果であった。

【引用・参考文献】

NHK 放送協会編 NHK 中学生・高校生の生活と意識調査
—楽しい今と不確かな未来— 2003

川喜田二郎 続・発想法 中公新書 1970

(はすみ かずえ・あだち きみこ)

教育評価の研究（その45）

ヒト 一生の学習時代を考える
岸本 英男

キーワード：子育て情報大爆発時代、その利害得失

目的

今日、少子高齢化社会が、かまびすしく論じられ、悲観楽観、両論とりまぜて、新たなビジネスチャンス到来と、さまざまな企業デベロッパーの食指を刺激して止まない。少子高齢化社会は主として社会経済的軸足の上に立って、それぞれの所属階層の利害得失を代弁するパネリストのライセンスが試される。まさに情報爆発時代の旗手として、その存在理由を明確にしつつある。近未来に於けるシンクタンクを自認しつつ、過去に於ていくつかの予測的中率の上に、評論家としての社会的地位を得てきた点、勿論玉石混合の弊害を多少生じたものの、そこは今日の情報爆発時代の恩恵？を受けてジャーナリズムをにぎわすだけのメリットはある。而し事、子育て情報に関しては、その言論の及ぼす社会的影響は無視できず、当然、そこには理非曲直を糺すスーパーヴィジョンのエンジェンシーが必要となりつつある。日本応用心理学会には、その種の期待がある筈である。本研究は、評価観のゆがみをもたらした今日の教育問題について若干コメントを試みる事を目的とする。

方法

時代認識の乱脈ぶりは、政治家の歴史認識つまり過剰利潤追求のそれであるが、「時代の先どり」という「グローバリズム認識」を金科玉条とした收拾のつかない情報爆発の乃ち情報乱脈時代を到来させてしまった事になる。今日の青少年問題の大半は、そこに帰着する。つまり、何かを信じなければ、人間的成長が不可能である青少年の教育機関そのものが認識論の乱気流に汚染されて、その由って立つ教育力をうすめてしまったために今日の青少年に不幸が襲いかかってしまった事になる。

教育力の稀薄化を実証する事例は枚挙にいとまがなく、而もその根源は相い深くかかわりあっており、それだけに、教育の崩壊の原因である蟻の一穴に対する包括的且認識論的理由帰結関係の分析そのものが、少なくとも、現在以上の教育荒廃にフィードバックの機会を与える事になる。筆者は戦前戦中戦後の動乱期の教育荒廃を具体的な日常生活経験として小学校教職員として生きぬき、45年間のキャリアを積み重ねてきた事になる。その間のライフナビゲーターとしての応用心理学とのかかわりを、唯一絶対の加齢現象の従属概念として、不断のアイデンティティのスクラップ&ビュルトの軌跡として、「わが臨終絵巻」とする方法をとる。つまり本研究の目的を達成するための方法は、仮説演繹論理構造の内包概念であり、科学的という概念には、なじまない点、カウンセリング同様広義人文科学の領域を超えるものである。つまり、ヒト一生の誕生から死去までの統合的な「かかわり」の彼岸にあるもの、時々刻々のトランス、パーソナリティへの洞察一般も亦、本研究の方法として考察の対象とする。

結果

今日の情報爆発時代は、人類社会に無限の繁栄の可能性を保証する反面、生物学的ヒトの実存構造そのもの自体への進化論的変革を促してやまない。勿論その変化は今日の生物学的概念でとらえ得る程可視的現象ではない。而し時とともに

絶滅種が確認される近代生物学の成果から、地球物理学的長期スパンで、あらゆる生物が時々刻々の変異をとげている事は明らかである。今日時間概念は超多時間的構造下にあり、固定的な普遍的概念はナンセンスである。高度情報化社会グローバル化という便利なコトバで超多時間的時空系列の中で、日々の暮らしを営んでいる現代市民社会の生み出す矛盾や不条理に眼をふさいだまま目的を手段をとり違えたままフィードバックへの気づきすなわち情報爆発時代のガン細胞的メタファーの中で最も抵抗力の弱い青少年の絶望的な反社会的非社会的問題とり沙汰されて既に久しい。本学会をはじめ、多くの先覚者が、ライフワークとしてとりくまれてきたが志半ばにして殉教的或いは天寿を全うされてその生涯をとじられた。本学会生みの親の一人であられた故小保内トラオ先生は、「ウスタ ヴレビズ アルス ロンガ」と、よく語られていた。既に没後半世紀になるが、この問題に曙光のキザシはない。

岸本 英男

小児看護学実習における事故と リスク要因の検討（第2報）

○草野美根子
（群馬大学）

林田 りか，中淑子
（県立長崎シーボルト大学）

内海 滉
（千葉大学）

小児看護学実習 看護学生 事故 リスク要因

＜はじめに＞

医療現場では数多くの事故事例が報告されてきている。また、事故事例を検討し事故防止対策マニュアルが作成され、現場ではタイムリーな事故防止のための教育が実施されている。

本研究は、看護学生が臨床現場（小児看護実習）において、事故または事故の危険性があった事例を報告してもらい、その内容を検討することで、今後の教育指導の示唆を得ることを目的として調査を開始した。

＜目的＞

第71回大会では第1報として看護学生が事故になる危険性があったと認識した内容の実態を把握することを目的として、対象患児の年齢、性別、時刻、場所、内容項目の分類を行った。今回の第2報ではTAISの分析結果を加えて更に内容を検討したので報告する。

＜研究対象及び方法＞

看護学生52名に対して、事故または事故の危険性があった事例について、どのような場面でどのような時に事故の危険性があったかなどを自由に記述させた内容を分析。また同意の得られた学生に対して簡単な面接とTAIS（注意対人診断テスト）を実施した。

＜結果・考察＞

事故内容の分析結果

1. 小児看護実習期間中（2週間）

事故の回数；0～10回、受け持ち患児；4か月～12歳。性別；男児18名、女児12名、無回答22名。時間帯；午前中22名、午後17名。場所；病棟（大部屋、プレイルーム、廊下）の順に多い。内容；患児の年齢別、性別、時間帯別に分類した。乳児期は1～2回。内容は抱っこや沐浴、衣服の着脱場面が多い。幼児期は乳児期の内容に加えて遊びの場面や点滴の場面が多い。学童期は遊びやセルフケア場面などがあった。

2. 事故内容（患児の要因別）

発達年齢による特徴が要因となる。特に幼児期は不安と患児の認識不足、点滴実施時が問題となりやすい。学童期は安全確認不足が多かった。

3. 事故内容（学生の要因）

予防知識の不足、技術の未熟さ、観察や確認不足の3つに分類した。

乳児期は技術の未熟さ、幼児期は、予防知識の不足、観察や確認不足、技術の未熟さの順であり、学童期は3つの要因に加えてセルフケアに対する患児への安全指導能力が不足していたことがわかった。

3. 注意・対人診断テスト(TAIS)

表1のようにTAISは17の概念からなり、その尺度は注意のタイプ、行動コントロール、対人スタイルの3つに分類されている。

表1 注意・対人診断テスト(TAIS)

1. 注意のタイプ
BET, OET, BIT, OIT, NAR, RED
2. 行動コントロール
INFP, BCON
3. 対人スタイル
CON, SES, P/O, OBS, EXT, INT, IEX, NAE, PAE

TAISの項目と事故内容を比較した結果、17の概念項目や3つの注意、行動、対人については有意差が認められなかった。

発達年齢とTAISについて有意差が認められたが、判定項目基準では有効ではなかった。また平均値での比較検討を行ったが、明らかな差は認められなかった。

表2 有意差検定 (TAISと年齢別の比較)

1～4歳	： 7～13歳	*T=2.3
28.6±5.6	35.0±6.5	(DF22)

＜まとめ＞

以上の結果から事故の特性を患児、学生の要因に分けた。学生側の要因として、予防知識の不足、技術の未熟さ、観察や確認不足があげられることがわかった。また受け持ち患児の発達年齢とその特徴とくに行動様式についての事前学習は充分必要であることが再確認できた。

TAISとの十分な関係性は認められなかったが、更に今後の検討としたい。事故防止に関する教育内容また実習指導上、重要であり、学生の注意に対する認識を十分に育て上げることは今後の課題である。

（くさのみねこ）
（はやしだりか、 なかよしこ）
（うつみこう）

児童福祉とジェンダー

— 戦後日本の理論的展開を端緒として —

望月雅和

(日本認定心理士会 日本心理学会内)

キーワード：児童福祉、ジェンダー／フェミニズム理論、男女雇用機会均等

【研究の目的】筆者は、これまでの研究に連動して、「母性焦点化における女性労働論考」『日本応用心理学会第69回大会発表論文集』及び、「社会福祉学とジェンダー」『日本応用心理学会第70回大会発表論文集』等、一連の研究報告をしてきた。これは、筆者が、旧文部省や旧労働省婦人少年局の関係者やジャーナリスト、医学者等と共に刊行した、『戦前婦人労働論文資料集成』において、育児や福祉分野の研究に携わったことに端緒しつつ、関連分野の研究を継続してきたことによる。

さて、先の研究でも触れた様に、学術分野としての社会福祉を考える時、ジェンダーの視点を加えることは、戦後日本の理論的展開をみても、必ずしも容易なことではない。これは、つまり、独立した研究分野としての「女性福祉」、及び、「福祉とジェンダー」というものが、個々の研究としては良質な研究が蓄積されつつあるにしても、総体としての研究領域として、いまだ独立して確立したとは言いがたいからである。こうした状況に鑑み、筆者は、まず、より個別研究に近い母性や育児と女性労働との研究報告を行い、他方で、より全体的な社会福祉(学)とジェンダーの研究のあり方について、別々に研究報告をおこなってきた。今回は、さらに、既に社会福祉(学)の中の独立した研究／教育分野である、児童福祉について、ジェンダーの視座からの論考をおこなう。学際的な社会福祉研究分野にあっても、児童福祉領域は、既に独立して研究や教育が確立されているものである。本論では、この児童福祉分野とジェンダーの視座、また、その意義について論及していくことにする。

【対象・方法】社会福祉の研究は、今日、一定の体系を有している。より明示的には、福祉関連の職を担う資格の教育を規定する、社会福祉士及び介護福祉士法施行規則の「社会福祉士試験の科目」において、「社会福祉原論」他の科目が明確に位置づけられ、その中には、児童福祉論も確固としたものと記されている。一方で、女性福祉論、福祉とジェンダー／フェミニズム論というものは、こうした視点に関する限り、「独立」しては存在していない。

では、こうした社会的法的なものでなく、学術研究の体系化としては、どのようになっているか。福祉関連研究について、個別のトピックと共に、総体的な福祉研究の、対象や方法を整理した学術辞典に、京極高宣監修『現代福祉学レキシコン』がある。これは、学術的体系化による福祉辞典として、わが国で先駆とされているものであるが、この体系整理を参照すると、基盤となる学問研究に、女性学が取り上げられており、このことは注目し得る。福祉の独立した研究分野には、児童福祉が取り上げられ(ここでは、「児童・家族福祉」となっている)、福祉とジェンダー関連の学術的トピックは多く扱われている。ただし、「独立分野」としての体系的な女性福祉、ジェンダー領域は特別に置かれていることは無い。

ここで注目すべきは、個々の女性福祉トピックが収録されている配置、分野についてであり、これら大部分が、児童福祉分野に集中して置かれていることである。例えば、「婦人保護」、「母性保護」、「女性(婦人)解放運動」、「子育て支援／家族支援」、「保育ニーズ」、「共働き」、さらには、戦後の日本

のジェンダー／フェミニズム論に大きな影響のあった国連の「国際婦人年」など多数の項目が、「児童・家族福祉」の分野の中に配置され、学術的な論考がなされている。こうしたことは、いわゆる社会福祉(学)の教科書にも散見されるが、元来、広い意味での福祉領域のどの分野にもジェンダー的な視点が可能であり、福祉とジェンダーという論点が既に様々に研究されつつある現在、既成の児童福祉分野に限って、ジェンダーの視座が相対的に強い関連を示すのは、福祉とジェンダー分野の研究や体系化を考える上で示唆的なことと言えよう。庄司洋子は、家族福祉研究の解説の中で、「歴史的にみれば、社会福祉の理論と実践は、当初から家族福祉の視点を含んでいたものであり、その意味では、家族福祉研究のある部分は社会福祉研究に包摂されて未分化な状態で進められてきたといえる」(前掲辞典所収)と述べている。児童・家族福祉が、本質的に社会福祉に包摂されていて未分化なのであれば、その児童福祉に関連のあるジェンダーの視座は、社会福祉論全体の視座としても連関があると推察できる。なお、個別の児童福祉とジェンダーの研究は、戦後のみならず、戦前から活発に行われてきた。筆者による『戦前婦人労働論文資料集成』(第四巻)の福祉関連の論文には、婦人保護や母性保護、保育関連を扱った関連論文が散見されている。

【展開・考察】児童福祉とジェンダーに関する意義は、研究や学術的視点、制度的視点と同様、あるいは、それ以上に、社会的なニーズ、需要の変化という観点が重要と考える。戦後史のジェンダーやフェミニズム運動を鳥瞰するとき、その変化は甚大なものとなっている。先の国際婦人年を経て成立した男女雇用機会均等法や、男女共同参画基本法が謳う「わが国の最重要課題」とした制度的進展は、広範な社会や文化、そして、特に、家族やその育児や母性などの、これまで児童福祉の領域で扱われてきた個別の問題群へと、その本質的な変化を迫り、パラダイム転換をしゆく可能性を孕んでいる。これまで、育児や保育に扱われる問題とは、戦前期に特に強調された性別役割分業観の残滓により、必然的に女性問題と絡めて論じられてきた。しかし、今日の男女雇用機会均等の精神やジェンダーの視座の普及により、それは、男性をも含み、さらには、社会福祉の視点による、個別の家族の育児／保育支援が益々重要となっている。今日、深刻な少子高齢化や、労働力人口減少による女性雇用の重大化という社会的変化にも直面し、家族のダイナミズム、個々人の福祉心理的変容がまさに起こりつつある現在、児童福祉とジェンダーの視座は、その意義を一層深めているといえよう。

【参考・引用文献】望月雅和 2003-社会福祉学とジェンダー- 日本応用心理学会第70回大会発表論文集
望月雅和 2002-母性焦点化における女性労働論考- 日本応用心理学会第69回大会発表論文集
赤松良子・原田冴子監修 福沢恵子・望月雅和編集・解説 2002-戦前婦人労働論文資料集成第4巻- クレス出版
京極高宣監修 1993-現代福祉学レキシコン- 雄山閣出版

(もちづき まさかず)

非言語メッセージの意図帰属バイアス(1)

－ワーキングメモリの個人差が意図帰属に与える影響－

佐々木 美加(Sasaki, Mika U.)
(常磐大学人間科学部)

キーワード：非言語メッセージ、意図帰属バイアス、ワーキングメモリ

【問題】

本研究の目的は、非言語メッセージ(Nonverbal Messages: NVM)の意図帰属バイアスが生じるメカニズムを明らかにするため、関連する要因を探索的に検討することである。いくつかの研究から、受信したメッセージから敵意が帰属されれば対決的反応が促進され(Keltner, Young, & Buswell, 1997, Ohbuchi, Chiba, & Fukushima, 1996)、好意が帰属されると協調的反応が促進されることが示されている(佐々木・大淵, 2002)。佐々木・大淵(2002)は、NVMの意図帰属の好意性が受信者の反応の協調性を促進することを示したが、NVMの意図帰属については、ネガティブバイアスが生じることが示唆された。また、メッセージの受信において認知的負荷が高い条件であると、受信者の反応が対決的になることが指摘されている(Reid, Malinek, Stott, & Evans, 1996)。佐々木(2005)は、連合処理モデルを提唱し、NVMの意図帰属バイアスは、NVMが言語メッセージと連合して処理される場合に生じ、言語メッセージと非連合に処理される場合には生じないことを示した。このことから、言語メッセージを処理する能力が高ければ、バイアスが生じにくく、言語メッセージを処理する能力が低ければバイアスが生じやすいと推察される。本研究では、言語メッセージを処理する能力としてワーキングメモリの個人差を測定し、これと意図帰属バイアスとの関連を探索的に検討する。

【方法】

被験者 大学生 18 名(男性4名、女性 14 名、年齢 20 歳～21 歳)であった。彼らは心理学の講義の際に会話の実験にリクルートされ、自発的に参加した。彼らには謝礼として文房具を渡した。

手続き まず被験者自身のワーキングメモリの個人差を測定するため、日本語版 RST(苧坂, 2002)を受けた。数日後、被験者はふたつの仮想的状況における会話のロール・プレイング実験に参加した。被験者はインターコムシステムを用いて実験協力者と会話を行った。会話においては実験協力者の音声を実験的に操作され、被験者は好意的音声の実験協力者あるいは敵意的音声の実験協力者と会話した(N=11, 7)。なお、予備実験により、好意 NVM は敵意 NVM よりも好意的だと評定されることが確認された。

要因計画 実験要因は受信する NVM の好意性(好意 / 敵意)と RST の得点(高 RST / 低 RST)であった。また、会話の仮想状況(クラブ、アルバイト)は被験者内要因で、提示の順序はランダムに行われた。

従属測定 相手の意図帰属(敵意、好意)は、7 点尺度で測定された(大淵・小嶋, 1999)。

【結果と考察】

NVM の操作チェック NVM の好意性の効果は有意で

($F(1,16)=10.99, p<.01$)、。好意 NVM の方が敵意 NVM よりも有意に非言語の好意性が強かった($M=4.33$ and 3.10)。

RST ワーキングメモリの個人差を測定するため、日本語版 RST を行った。平均得点は 1.75 点、最低得点は 0.5 点、最高得点は 4.0 点、標準偏差が .94 であった。平均得点よりも高い得点を得た群を高 RST(N=10)、平均得点よりも低い得点を得た群を低 RST(N=8)とした。

意図帰属に対する NVM, RST の効果 被験者が受信したメッセージの意図帰属(好意帰属・敵意帰属)について NVM の好意性(敵意 NVM、好意 NVM)、RST(高 RST、低 RST)、状況(アルバイト、クラブ)を要因とする分散分析を行った。その結果、意図帰属 x NVM の好意性の交互効果は有意で($F(1, 14)=6.22, p<.05$)、意図帰属 x RST の交互効果は有意傾向にあった($F(1, 14)=3.02, p=1.0$)。意図帰属 x NVM の好意性 x RST の交互効果は非有意であった($F(1, 14)=1.06, n.s.$)。有意な交互作用を分析した結果、敵意帰属に対する NVM の好意性と RST の単純主効果が有意で($F(1, 14)=7.38$ and $5.49, p<.05$)。多重比較の結果、NVM の好意性については好意 NVM 条件の被験者の方が敵意 NVM 条件の被験者よりも敵意を弱く帰属していた($M=2.02$ and 3.88)。RST の高さに関しては低 RST 条件の被験者の方が高 RST 条件の被験者よりも敵意を強く帰属していた($M=3.63$ and 2.03)。

本研究の結果からは、RST 得点が高い被験者の方が RST 得点が高い被験者よりも好意的な意図帰属を行うことが示された。これらの結果から、ワーキングメモリの個人差が意図帰属バイアスと関連する可能性がうかがえた。

【引用文献】

Keltner, D., Young, R. C, & Buswell, B. N. (1997) *Appeasement in human emotion, social practice, and personality. Aggressive Behavior, 23*(5), 359-374.

Ohbuchi, K., Chiba, S., & Fukushima, O. (1996) *Mitigation of interpersonal conflicts: Politeness and time pressure. Personality & Social Psychology Bulletin, 22*(10), 1035-1042.

苧坂満里子(2002)脳のメモ帳 ワーキングメモリ 新曜社
佐々木美加・大淵憲一(2002)電子メールにおける非言語メッセージの欠如はネガティブな影響を与えるか? 応用心理学研究、28, 17-26.

佐々木美加(2005)協調か対決か コンピューターコミュニケーションの社会心理学 ナカニシヤ出版

(ささき みか)

「血液型性格学」は信頼できるか（第22報）Ⅰ

城田明子の調査を基礎として『ドラえもん』の血液型を推定する

○大村政男 浮谷秀一 藤田主一
 日本大学 東京富士大学 日本体育大学

血液型 性格 ドラえもん 古川竹二 藤子・F・不二夫 城田明子

歴史的回顾 ABO式4種の血液型が人間の性格（情意的な個性）の基礎になっているという学説（血液型気質相関説）は、1927年（昭和2年）に古川竹二（教育学者）によって『心理学研究』2巻4輯誌上に発表された。古川はこれを皮切りに数多くの研究を発表し、'32年には『血液型と気質』という大著を三省堂から刊行するにいたった。わが国におけるこの種の通俗的な読物はすべてこの古川学説の模倣である。そのなかには、数10万人にも及ぶデータに基づいていると豪語している人物もいるが実体はない。このような読物が古川学説の価値を損耗させている。最近、私たちは古川学説の再吟味を意図している。問題がこんがらかっている現在、歴史的回顾はどうしても必要である。

目的 ここでは、血液型 vs 性格の真偽論争を離れて、藤子・F・不二夫の『ドラえもん』に登場するキャラクターの血液型を、条件変容的な操作によって調査をしてみようと思う。

方法 調査の対象は、男女学生140人（男子72人・女子68人）である。第1回目は、それぞれのキャラクターの顔と簡単なプロフィールを配布し、ABO式4種の血液型のどれに当たっているかを推定させる。1週間後、同じ男女学生に『ドラえもん』の「ビデオ」1編を見せて、それぞれのキャラクターの血液型を推定させる。この研究では、この2条件のずれを見ていこうとするのである。それぞれのキャラクターの血液型はわからない。そこで仮説の立てようがない。ただ、どうなるであろうか——を掴もうとするだけである。

ているため2位が載らない欄もある。表1からなにが出来るだろうか。

ドラえもん：Oか、Aになっている。
 のび太：1回目と2回目ではずれもあるが、BかOになる。
 しずか：彼女は完全にAに集中している。
 ジャイアン：Oか、Bになっている。
 出木杉：Aか、ABになっている。
 パパ：Oか、Bになっている。
 ママ：1回目と2回目ではずれもあるが、Aとしてもよいであろう。

表2 左コラムの表1の詳細

キャラクタ	1回目				2回目			
	A	B	O	AB	A	B	O	AB
ドラえもん	26.3	13.7	49.3	10.7	42.8	12.1	29.3	15.8
のび太	24.3	29.4	38.5	7.8	27.9	50.7	20.0	1.4
しずか	62.2	12.8	17.1	7.9	52.2	11.4	21.4	15.0
スネ夫	26.4	30.8	2.8	40.0	18.6	8.6	20.7	52.1
ジャイアン	6.4	42.2	46.4	5.0	2.1	37.9	57.9	2.1
出木杉	53.0	4.2	9.2	33.6	43.0	6.4	5.0	45.6
パパ	16.4	19.9	56.6	7.1	16.5	41.4	29.3	12.8
ママ	44.4	26.8	14.4	14.4	34.4	20.5	27.2	17.9


（注）さらに詳しい数値は当日会場で配布する。

考察 この研究の調査対象になった140人の学生は、第Ⅱ報（筆頭者：浮谷秀一）の492人とはまったく関係がない。それにもかかわらず第Ⅰ報と第Ⅱ報におけるキャラクターの血液型の推定には、いちおう了解できる一致が見られる。藤子・F・不二夫は登場キャラクターの血液型にはまったく触れていないし、『ドラえもん』の研究者として有名な横山泰行も“なんで血液型なのか。血液型判断をすること自体おかしいのだ”というスタンスをとっている。これが日本の良識なのである。私たちは、かなり以前からわが国の大衆文化になっている血液型性格判断とか、血液型運勢判断の蔓延には疑問をいっている。ただ、心理学の研究者として、その現象自体の解明に並べられない興味を持っているだけなのである。

エピソード認知 (Episode cognition) 「血液型人間学」と呼ばれる偽科学（この概念は再検討されなければならないと思う）を信奉している人たちがいる。この人たちのなかには非常に狂信的な若者がいて、昭和57年（'82年）5月、「NHKテレビ」が放映した『ウルトラアイ』の内容に異議あり——ということで、抗議文を提出している。また、昭和59年11月には、こんどは「TBSテレビ」が放映した「ブームに異議あり！血液型を斬る」に学生たちが抗議に押し寄せた。かれらはもう45歳ぐらいになっていると思う。当時、かれらがどのくらいの血液型人間学の知識を持っていたかは全然わからないが、いまでもA型は温和で気配り上手、B型は気軽でマイペース——というような「エピソードの虜囚」になっているのではなからうか。

（注）城田明子（現姓：赤羽根）は現在子育て真っ最中なので大会には参加していない。

（おむらまきお／うきやしゅういち／ふじたしゅいち）



本名は「野比のび太」。
 しょうがくせい。勉強もスポーツも苦手な「いじめられっ子」。
 遅刻と宿題忘れが多い。「ドラえもん」は彼を助けに未来からやってきたネコ型ロボット。

結果 表1は、8人のキャラクターについての2回にわたる推定の結果である。この表は、右コラムに掲載されている表2の資料の要点をまとめたものである。

表1 各キャラクターにおける血液型推定の要約（%）

キャラクター	1回目		2回目	
	血液型	%	血液型	%
ドラえもん	O	49.3	A	26.3
のび太	O	38.5	B	29.4
しずか	A	62.2	A	52.2
スネ夫	AB	40.0	B	30.8
ジャイアン	O	46.4	B	42.2
出木杉	A	53.0	AB	33.6
パパ	O	56.6	B	41.4
ママ	A	44.4	B	26.8

1回目および2回目の欄に記載されている%は、そのキャラクターに与えられた推定の1位と2位である。25.0%で切

「血液型性格学」は信頼できるか (第22報) II

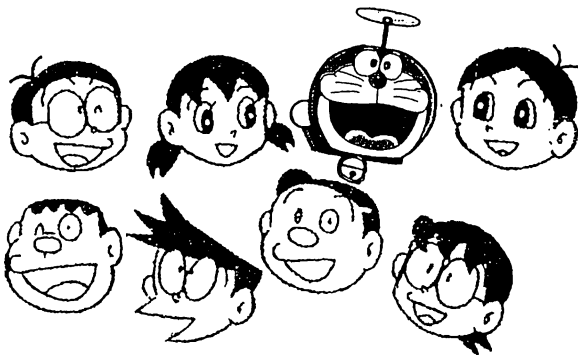
『ドラえもん』から「ホリエモン」まで9人のキャラクターの血液型を推定する

○浮谷秀一 大村政男 藤田主一
東京富士大学 日本大学 日本体育大学

血液型 性格 ドラえもん ホリエモン 藤子・F・不二夫 堀江貴文

研究目的 この研究では、藤子・F・不二雄の『ドラえもん』に登場するキャラクターと、平成17年春にマスコミ界を震撼させた「ホリエモン」こと堀江貴文(ライブドア社長)の血液型を学生(男女)に推定させている。対象となる9人(正確に言えば1個と8人であるが)の血液型はオープンにされていない。作者にはその気がなかったようである。堀江貴文は実在の人物であるが、ここでの「ホリエモン」はマスコミが生み出した1種のキャラクターとして見ることにしている。

研究方法 それぞれのキャラクターに対してABOABの選択肢が用意されている。なお、「ホリエモン」を除いた他のキャラクターについては顔の絵が並べられている(下掲)。調査紙には記入者の血液型や性格についての24項目にわたる質問があるが、それについての整理はしていない。また、キャラクターの血液型の推定と記入者の特性との関連にも触れないことにする。調査対象は2校の大学生男女合計492人である。



結果 ドラえもん、のび太(野比のび太)、しずか(源静香)、スネ夫(骨川スネ夫)、ジャイアン(剛田武)、出木杉英才、のび太のパパ(野比のび助)、のび太のママ(野比玉子・旧姓片岡)の8人のキャラクターについての血液型の推定は次の表1~表3に示したとおりである(数値は%)。

表1 男子学生303人の推定

	ドラえもん	のび太	しずか	スネ夫	ジャイアン	出木杉	パパ	ママ
A	38.6	17.2	67.0	23.4	8.6	53.8	19.8	52.8
B	8.9	27.7	8.6	40.3	51.5	6.9	17.8	24.8
O	39.0	44.2	18.8	12.2	31.7	7.6	57.8	16.8
AB	13.5	10.9	5.6	24.1	8.2	31.7	4.6	5.6

表2 女子学生189人の推定

	ドラえもん	のび太	しずか	スネ夫	ジャイアン	出木杉	パパ	ママ
A	31.7	20.6	74.0	24.3	3.7	52.9	13.8	60.9
B	6.4	29.1	6.4	32.8	52.9	3.7	11.6	15.3
O	47.1	44.4	14.8	6.4	37.0	7.9	70.4	15.9
AB	14.8	5.9	4.8	36.5	6.4	35.5	4.2	7.9

表3 男女学生492人の推定

	ドラえもん	のび太	しずか	スネ夫	ジャイアン	出木杉	パパ	ママ
A	36.0	18.5	69.7	23.8	6.7	53.5	17.5	55.9
B	7.9	28.3	7.7	37.4	52.0	5.7	15.4	21.1
O	42.1	44.3	17.3	10.0	33.8	7.7	62.6	16.5
AB	14.0	8.9	5.3	28.8	7.5	33.1	4.5	6.5

表1~表3において、25.0%以上の推定を示しているこ

ろは太字になっている。表1と表2のスネ夫のABを除いて、男女学生の推定はおどろくほどの一致を示している。表3の結果によってまとめてみると、ドラえもんはO、のび太はO、しずかはA、スネ夫はB、ジャイアンはB、出木杉はA、パパはO、ママはAということになる。それでは、ホリエモンはどうなのであろうか。表4に男女2群とその総合が示されているが、ここでもある血液型への集中が見られている。

表4 ホリエモンの血液型の推定

	男子学生303人の推定	女子学生189人の推定	総合欄(492人の推定)
A	11.2	11.6	11.4
B	37.6	39.2	38.2
O	19.2	13.2	16.9
AB	32.0	36.0	33.5

「ホリエモン」といって呼ばれた堀江貴文の血液型はわからないし、調査もしていない。実態がどうであっても大勢の人たちがどう見ているかということなのである。ホリエモンはBかABらしいということになる。

ドラえもん研究 「ドラえもん」については'81年1月に南博編の『ドラえもん研究』があるが、横山泰行による『ドラえもん学コロキウム('05年5月最終更新)』が有名である。ある漫画についての汗牛充棟の研究は珍しい。その横山も血液型については触れていない。横山は「血液判断をすること自体、のび太君の優しさや公共心から大きく外れることになりまので控えることにしたのです。皆さんの周りで血液占いを好む人間はいらっしゃいますか?」と述べている。私たちは占いは信じていないが興味は持っている。一般の人びとがどのような認知を持っているかという興味によって動機づけられているのである。調査の対象になった大学生のどのくらいの人たちが『ドラえもん』を理解しているであろうか。それについての資料はない。おそらく断片的な情報しか持ち合わせていないと思う。それなのに推定に高い一致率が見られている。『ドラえもん』に登場する8人のキャラクターについてのわずかな情報が全体を制御しているのである。

ホリエモン研究 「ホリエモン」のキャラクターを生み出した堀江貴文という人物に直接会った学生は492人中1人もいないと思う。私たちが会ってはいない。ここにおける推定もすべてテレビからの情報だといってもかまわないと思う。ここでも血液型の推定は集中的であった。「ホリエモン」についての表4の各欄(男子・女子・総合)を試みにカイ自乗検定によって検定してみると、男子欄では $\chi^2_0=52.5$ 、女子欄では $\chi^2_0=48.2$ 、総合欄では $\chi^2_0=98.1$ になり、いずれも1%以下の危険率で、BとABの優位を示している。「ホリエモン」がAやOだと思っている人はごく少ない。堀江貴文をOとしてもさしつかえないと思うが、「ホリエモン」と「ドラえもん」というユーモラスな名前の連合が強くはたらいたようである。

結論としてのエピソード認知 血液型と性格を係留する情報は、断片的で、それなりに強い印象を持って記憶され、きわめてつごうのいい維持リハーサルによって強化されている。A型の人は温和で気配り上手——というぐあいである。私たちはこれを「エピソード認知」と名づけている。『ドラえもん』や「ホリエモン」の血液型もこの機制で推定されている。

(うきやしゅういち／おおむらまさお／ふじたしゅいち)

柔道の応用心理学的研究

(2) 柔道に対するイメージ調査の検討

○森脇保彦* 中島 猷* 山本洋祐** 田辺 勝** 藤田主一** 飯田穎男***

(*国士館大学 **日本体育大学 ***日本武道学会名誉会員)

<キーワード> 柔道, 柔道イメージ, 大学生, 一般社会人

I. 緒言

一般的に、柔道とは「心」「技」「体」の統合されたものであると言われ、関口流柔術では「心気力」として、また起倒流では「志気力」の語で用いられる。技を發揮する際に心と氣と力が一体となり働くことが必要なことを言い、今日の柔道では心気力が一致したときに「一本」の技となるとされている。

1965年度の日本体育学会において「武道の体育的意義」についてのシンポジウムが企画され、そこにおいて武道の現代化についてさまざまな意見が論議された。

篠原らの1975年の報告によれば、柔道はスポーツの一種だと思ふ指導者が61.7%にのぼることが明らかにされた。

阿部は「今日、武道のスポーツ化が完全になされているとはまだ考えていない。一部においては今もなお、過去の武道が持っていたような階級制とか権威主義的なものが残存しているような気がする。武道の真のスポーツ化というのは、ルールや審判規定を改正すると言った民主主義的原理に立脚し、ヒューマンズムの精神に支えられているかによって決まってくるものだと思う」と述べている。

II. 目的

今日、柔道への捉え方や位置づけが大きく変わろうとしている。それは柔道を本来の「道」を核とする伝統的な立場と、「勝負」を核とするスポーツ競技の立場との葛藤である。

本研究では、わが国における柔道の発展に寄与するために、柔道経験者や柔道観戦者（他スポーツ経験者、女子大学生、一般大学生、一般社会人）等が、柔道に対してどのようなイメージを持っているかを明らかにすることを目的とした。

III. 研究方法

(1) 調査対象者：調査対象者の総数は741名である。全対象者の平均年齢は23.3歳 (SD=10.1, 18歳~67歳) である。

- ① J-1：柔道を専攻している大学柔道部員群91名。
- ② J-2：他スポーツを専攻している大学スポーツ群99名。
- ③ J-3：女子大学に在籍している女子大学生群 143名。
- ④ J-4：一般大学生群 241名。
- ⑤ J-5：一般社会人群 167名。

(2) 調査材料：応心第71回大会(2004)で報告した「柔道に対するイメージ調査の検討(1)」の結果に基づいて、新たに選択した36項目の質問項目(表-1参照)を使用した。フェイスシートに続き、各質問項目を5件法にて回答させた。

(3) 調査方法：調査は2005年3月から5月までの間に6大学の学生および東京都内在住の一般社会人に依頼し、各集団ごとに調査用紙を配布して実施、回収した。

IV. 結果と考察

得られた資料はすべて得点化した。記述統計に続き相関行列を計算した後、不完全主成分分析を施し固有値 1.0以上の主成分についてノーマル・バリマックス基準による直行回転を適用して多因子解を求めた。今回は、全調査対象者741名による「全体群」と、その中に含まれる241名の「一般大学生群」とを比較検討する。

1. 全体群について 36項目を得点化した結果、最も高得点が得られた項目は、Na(3)「柔道は日本が発祥の国である」(4.42, SD=0.97)であった。反対に最も低得点項目は、Na(4)

表-1 全体群の回転後の因子負荷行列 (N=741)

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
1. 柔道は常に1本の世界である					0.596
2. 柔道といえば谷亮子(旧:田村)である					0.524
3. 柔道は日本が発祥の国である				0.689	0.560
4. 柔道をする人には太っている人が多い					0.545
5. 柔道は激しいスポーツである					0.499
6. 柔道は相手の力を利用する					0.606
7. 柔道をするとき身体が丈夫になる					0.473
8. 柔道はスポーツではなく武道である					0.660
9. 柔道を通して心・技・体を学ぶ		0.428			0.646
10. 柔道は奥の深いスポーツである	0.492				0.579
11. 柔道は1本勝ちに魅力がある					0.584
12. 柔道はケガの多いスポーツである			0.531		0.499
13. 柔道をするとき手の指が太くなる			0.539		0.390
14. 柔道には礼に始まり礼に終わる精神がある				0.471	0.536
15. 柔道は世界で親しまれているスポーツである	0.604				0.540
16. 柔道は格闘技である					0.511
17. 柔道の試合に時間制限は必要だ					0.495
18. 柔道といえば嘉納治五郎である					0.458
19. 柔道は日本が誇れるスポーツである				0.575	0.581
20. 柔道は自分との戦いである	0.415				0.557
21. 柔道は痛しいスポーツである			0.705		0.592
22. 柔道をするとき耳がつかれる			0.614		0.567
23. 柔道は世界に通用するスポーツである				0.455	0.386
24. 柔道着の白と青は必要だ					0.585
25. 柔道には純白のイメージがある					0.467
26. 柔道は日本の伝統文化である				0.567	0.565
27. 柔道はカッコイイスポーツである	0.745				0.652
28. 柔道は楽しいスポーツである	0.718				0.584
29. 柔道をするとき身体が筋肉質になる			0.451	0.454	0.526
30. 柔道の勝敗に判定制度は必要だ			0.530		0.561
31. 柔道は自分を成長させるスポーツである	0.500		0.477		0.594
32. 柔道は相手の一瞬のすきをとらえる			0.714		0.578
33. 柔道をするとき精神力・集中力がつく			0.697		0.597
34. 柔道はスポーツである					0.617
35. 柔道には汗のイメージがある					0.446
36. 柔道には精力善用・自他共栄の精神がある		0.403			0.497
貢献度	3.205	3.092	2.306	2.214	
貢献%	8.435	8.137	6.070	5.825	
積算%	8.435	16.572	22.642	28.467	

「柔道をする人には太っている人が多い」(2.94, SD=1.21)であった。全体群を因子分析した結果、全分散に対する累積貢献度は55.3%で、11因子が抽出された。因子負荷量 0.4以上の項目を取り上げたところ、4因子が解釈可能となった。

①第1因子は、項目Na(10)(15)(27)(28)(31)から構成されているので「心理的」因子と解釈した。

②第2因子は、項目Na(9)(29)(30)(31)(32)(33)(36)が抽出されたので「技術的」因子と解釈した。

③第3因子は、項目Na(12)(13)(21)(22)(29)が抽出されたので「身体的」因子と解釈した。

④第4因子は、項目Na(3)(14)(19)(23)(26)が抽出されたので「文化的」因子と解釈した。

緒言の項でも述べたように、柔道は「心」「技」「体」が統合されたものである。本研究で説明可能なイメージも三者が見事に表現されており、加えて柔道はわが国の「文化」を象徴する位置にあることが明らかになったと思われる。

2. 一般大学生群について 最も高得点が得られた項目はNa(32)の4.32 (SD=0.91), 反対に低得点の項目はNa(18)の2.80 (SD=1.22)であった。全体群との差異に注目したい。なお、因子負荷量 0.4以上で5因子が解釈可能となった。

①第1因子：(9)(10)(15)(20)(27)(28)(31)(34)(36)

②第2因子：(3)(14)(19)(23)(26)

③第3因子：(7)(12)(13)(22)(29)

④第4因子：(6)(32)(33)

⑤第5因子：(1)(2)(11)

第5因子の項目は「常に1本」「谷亮子」「1本勝ちの魅力」から成り、谷選手への期待が込められた内容となった。(もりわきやすひこ, なかじまたけし, やまもとようすけ, たなべまさる, ふじたしゅいち, いいだえいお)

終末期うつ病に関する実態調査

— 気持ちを語る場に携わる人々の意識調査を通して～必要とされる人的環境についての一考察～

○幸野 里寿¹⁾

(¹⁾ 京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻)

キーワード：ターミナルステージ、うつ病、語り

【研究の目的】本アンケートでは、先端医療の行われる大学病院で働くスタッフの「死」に対する基本的な意識調査を行った。この結果より、理想と現実とのギャップについて臨床で働く人々がどう感じているか調査し、病院の効率化・在院の短縮・人員削減によって引き起こされているのではないかと仮説の下に検証する。

【方法】A 大学病院血液腫瘍科のスタッフ 60 名に対しアンケートを行った。調査期間は 2005 年 6～7 月、アンケートは記入式で死に対する一般的な意識調査を行った。調査項目は次のとおりである。

- 質問 1：自分の「死」について考えることがあるか
- 質問 2：患者の「死」について考えることがあるか
- 質問 3：「死」について語ることは必要か
- 質問 4：終末期患者への告知について
- 質問 5：ターミナルステージの定義に関する見解
- 質問 6：終末期患者の心理的援助に必要とされていること

配布後 2 週間でアンケート回収した。回収されたアンケートの集計結果により、現状に対する考察を行った。

【結果】血液腫瘍科のスタッフ 60 名（医師 30 名、看護師 30 名）に対しアンケートを配布し、2 週間後に回収した。回収率は、医師、看護師共に 40%であった。アンケートでの質問項目の多くは 2～3 択の回答様式で、その理由を記入してもらった。

調査結果は以下のとおりである。

質問 1・2 では、普段、「死」について考えることがあるか、その対象を「自分の場合」と「患者の場合」に分けて尋ねた。「自分の死について考えることがある」と答えたのは医師では 67%、看護師では 75%、「患者の死について考えることがある」と答えたのは、医師では 92%、看護師では 100%であった。

質問 3 では、「死」について語ることと、「死の教育」について尋ねた。「自分の死について語る自分が自分にとって必要である」と「いつも思う」と答えたのは、医師、看護師共に 0%、「たまに思う」と答えたのは医師 33%、看護師 67%であった。また、「患者が自分の死について語ることは患者自身にとって必要である」という問いに対し「いつも思う」と答えた医師は 17%、看護師 0%、「たまに思う」と答えた割合は医師 60%、看護師 75%に上った。更に「ターミナルステージに於ける death education の必要性について」は、医師の 8%、看護師の 17%が「いつも必要だと思う」と考え、医師の 59%、看護師の 50%が「たまに必要だと思う」と考えていた。

質問 4 では、告知と希望するかどうかについて、その対象を「自分の場合」「家族の場合」、そして「患者の場合」に分けて尋ねた。「自分が終末期患者なら、そのことを知りたい」と考える医師は 92%、看護師は 83%、「自分の家族が終末期患者なら、このことを知らせたい」と考える医師は 66%、看

護師は 84%であった。また、「患者が終末期患者であると診断されたとき、患者にこのことを知らせたい」と考える医師は 33%、看護師は 50%、「ケースバイケース」と答えた医師は 51%、看護師 25%に上った。

質問 5 のターミナルステージの定義に関する見解については新たな見解は得られなかった。

質問 6 の終末期患者の心理的援助に必要とされていることについては、時間的余裕・心理的余裕・心理的援助を行う専門家を必要との回答が得られた。

【考察】 今回のアンケートでは、立場の違いによる対処法の違いに興味深い結果が出た。自分が望むことを他人にも勧めるという道徳的構図は必ずしも臨床では適応されないようだ。スタッフの多くは患者の心理面に対して更なる援助が必要だと感じていることが今回明らかとなった。患者の心理状態が安定する要素の一つに「語り」の効用は大きいと考えられているが、患者の語りを聞くことのできない現実が臨床には潜んでいるようである。現代社会の中でもっとも多く死の機会に触れる医療の現場で、理想と現実とのギャップに気づきながらも何とかならないものかと模索しているスタッフの様子が伺われる。終末期患者の精神的ケアは医療の現場では日々の業務に追われ、気づいてはいるもののどうしようもない問題として雑務の隅に追いやられがちである。

更に、そのことについては医療従事者自身も自責を感じている現状もある。終末期の臨床においてはそのような若干の「ギクシャク感」を感じながら終末期医療が行われている。終末期医療の心理ケアは、患者のみならず医療従事者にも必要な時代となっているようだ。

【引用文献】

柏木哲夫 2001 緩和ケアマニュアル—ターミナルケアマニュアル 最新医学社

トリシャ・グリーンハル、ブライアン・ハーウィッツ 2001 ナラティブ・ペイスド・メディスン—臨床における物語と対話 金剛出版

スザンヌ・ゴードン 1998 ライフサポート—最前線に立つ 3 人のナース 日本看護協会出版会

(この りじゅ)

ソーシャルワークにおける臨床の意義

岩崎 久志

(流通科学大学 サービス産業学部)

キーワード：臨床、ソーシャルワーク、固有性

【研究の目的】近年、福祉系学部において「臨床」という用語を冠した学科が新たに設立されてきている。しかしながら、そのコンセプトは概してわかりにくく、隣接領域との差異があいまいな場合もある。本研究では、いわゆる「臨床の知」の知見を踏まえ、わが国のソーシャルワーク領域における「臨床」概念の固有性を明らかにするとともに、対人援助におけるその位置づけを行うことを目的としている。

【方法】研究方法として下記の4つを設定し、実施した。

- ① 文献および筆者の臨床実践などにに基づき、知としての「臨床」の概念と意義について検討した。
- ② わが国ではまだ浸透していない臨床ソーシャルワークの概念および方法論を内外の文献などを参照にしつつ明らかにした。
- ③ わが国の福祉系学部(一部大学院を含む)のうち、「臨床」というタームを連字符的に名称に付与している機関を抽出し、それらの大学案内や入試要項などの内容を分析し、その「臨床」概念の特徴およびコースのコンセプトなどについて確認、検討した。
- ④ ①～③の内容を踏まえ、臨床心理学などの隣接領域における「臨床」概念の特徴と比較しつつ、ソーシャルワークにおける「臨床」の概念について明らかにした。

【結果】

- ① 本来、臨床(clinical)という用語にはベッドサイドにおいて死の床にある人とともにいるという意味があるとされる。今日では、主に医療において、患者に直接的診療を施す医療行為を意味し、基礎・実験医学と区別して用いられている。医療に限らず、対人援助に関わる領域では「実践の場」あるいはそこでの関わりと同義に捉えられているようだ。

佐藤俊一(2004)は、「よく聞かれる『臨床の経験があるか、ないか』という質問は、臨床の場にいたことがあるかどうかを聞いている」とし、臨床とは、実践の場やその場の機能と同じ意味合いで使われると述べている。このように、「臨床」という言葉は、多分にヒューマンサービスの現場感覚に根ざして用いられてきたといえる。

また、科学に代表される「近代の知」の限界が指摘されるなか、学術的に「臨床」の持つ豊かな側面に着目し、「臨床の知」を提唱したのが哲学者の中村雄二郎(1992)である。それは、「近代の知」における普遍主義、論理主義、客観主義の3つの構成原理を批判的に検討し、知の組み換え(パラダイム転換)のための立場を明確にしたものである。

しかし、「臨床の知」自体が学問の世界でまだ確固とした位置を得てはいない。ただ、対人援助に関わる分野に限定すると、個別の事例に即して実践理論を構築していくための新たな視座として、「臨床の知」は今後ますます適用する可能性が高まっていくものと推測される。

- ② わが国においてはまだ十分に認知されているとはいえない臨床ソーシャルワーク(Clinical Social Work)であるが、米国では1960年代から社会福祉の専門領域の1つとして定着している。また、援助専門職として臨床ソーシャルワーカーの資格制度も整備されているとのことである。

全米ソーシャルワーカー協会(NASW)の定義(1984)によれば、「個人、家族、小集団の心理社会的機能の向上と維持の目標を、すべてのソーシャルワーク実践と共有する。その実践は、情緒障害や精神障害を含む心理社会的機能不全、障害、損傷への処遇や予防に対してソーシャルワークの理論と方法を適用する」などとしている。

臨床ソーシャルワークは、いわゆる「状況にある人」の将来的展望を見据えつつ、十分に満足が得られる創造的な社会適応を達成できるように援助することを中心的な命題として位置づけている。

- ③ 「臨床」という用語を名称に冠した福祉系学科は全国で7つある(2005年度)。それらに大学院の研究科を1つ加え、ここでは計8つの学科等についてその記述を分析した。まず全体的な特徴としては、たとえば臨床福祉学科という共通した名称であっても、大学によってその学科が所属する学部にはバリエーションがあり、社会福祉だけではなく、社会学系、文学部、さらに看護との学際性を示したものと、相当の広がりがあることがわかる。

「臨床」の概念に関しては、その特徴として大きく2つの傾向を示している。1つは従来の見方と同様に現場と結びついた「実践の場」として。もう1つは、「心のケア」を「臨床」の意義に含めて用いている学科が目立つことである。なかには心理療法的な機能を有する専門職としてワーカーを位置づけているところもあった。しかしながら、社会福祉分野において「心のケア」を「臨床の」中核に据えることは、ソーシャルワークの専門性をかえって曖昧にするものではないかと危惧される。

- ④ 【考察】の項を参照。

【考察】一般に、臨床心理学(カウンセリング)は適応上の課題や精神的な内面の問題に対して行われる心理的援助であり、心理治療的な性格をもつ。それに対してソーシャルワークは独自の視点および価値観として、人間の「全体関連性」や生活全般を見ていくとともに、地域社会のニーズに対応した使命を帯びている。そこで、ソーシャルワーカーの仕事は、対象者本人だけではなく、家族や他の人々との人間関係への介入や調整、生活保障制度の利用などに拡大していく。

したがって、ソーシャルワークにおける臨床の意義も、自ずと幅の広い概念となる。それは、「利用者の生活全般に関わる支援に必要な実践の場」、およびそこへの「関わり」と定義することができると考えられる。またそれだけに、今後ともわが国におけるソーシャルワーク自体の固有性を明らかにし、対人援助における位置づけを明確に示していくことが今後の重要な課題であると考えられる。

【引用文献】

- 佐藤俊一 2004 対人援助の臨床福祉学 p.83 中央法規
 中村雄二郎 1992 臨床の知とは何か 岩波書店
 Barker, R. L. 1995 The Social Work Dictionary (3rd ed) p. 62
 DC:NASW Press

(いわさき ひさし)

高齢者介護に従事するケア・スタッフの蓄積的疲労

— CFSI 調査用紙を用いての検討 —

○多久島 寛孝, 山本 勝則

(熊本保健科学大学保健科学部看護学科)

キーワード：高齢者介護，ケア・スタッフ，蓄積的疲労

【研究の目的】我が国では，高齢者施設が急速に増加しつつある。入居環境の整備だけでなく，職場としての環境整備も喫緊の課題である。そこで我々は，労働者の健康状態について比較的多面的な調査が可能である CFSI を用いて，高齢者介護施設で実態調査を行った。

【方法】A 県および B 県の老人保健施設（以下老健）；2 施設，特別養護老人ホーム（以下特養）；2 施設，グループホーム；2 施設に勤務し，看護・介護業務に従事しているスタッフを対象にアンケート調査を行った。調査期間は，平成 17 年 1 月から 3 月。調査は蓄積的疲労徴候インデックス調査用紙（以下，CFSI）を用いて行った。この CFSI は，越河ら（労働と健康の調和—CFSI（蓄積的疲労徴候インデックス）マニュアル，2002）によって開発されたもので，仕事や生活場面での負荷事象を，「自責される心身症状」から探ろうとする「評定尺度」である。尺度は「一般的疲労感」「慢性疲労徴候」「身体不調」の身体的側面 3 特性，「抑うつ感」「不安感」「気力の減退」の精神的側面 3 特性，「イライラの状態」「労働意欲低下」の社会的側面 2 特性の全 8 つの特性からなるものである。倫理的配慮として，対象者には配布したアンケート用紙と共に調査の趣旨を文書で説明し，調査への参加は自由であり，参加されずとも何ら不利益を被ることはないことを明記し，回収をもって同意とみなすことを説明した。また，個人情報の保護のため，調査用紙は本調査以外で使用しないことを明記し，無記名回答とした。分析は，調査対象者を性別，施設種類別に CFSI の 8 つの特性別に平均訴え率を算出し，越河らの男女別の基本パターンと 70% タイル値と比較検討した。

【結果】調査用紙は対象施設に 50 部配布し 48 名から回答を得た。そのうち，看護・介護など高齢者と直接関わりをもつ職種からの回答者である女性 38 名，男性 8 名の計 46 名分を対象とした。調査用紙の結果によるケア・スタッフ男女別の平均訴え率は，レーダーチャートに示す（Fig.1, 2）。

1. 性別での比較

1) 女性：基本値との比較では，女性は 8 つの特性全てで上回っていた。また，70% タイル値との比較では，概ね同程度か或いは上回っていた。70% タイル値を上回っていた特性は，「身体不調」，「不安感」，「抑うつ感」であった。また，レーダーチャートによる歪みでは，社会的側面も負荷が高い状況ではあるが，精神的側面や身体的側面の負荷が際立っていた。

2) 男性：基本値との比較では，「身体不調」が上回り，「不安感」がほぼ同程度であったが，他の特性は下回っていた。また，レーダーチャートによる歪みでは，全般的に訴え率は越河らの示した基本値，70% タイル値より低い傾向であった。

2. 施設種類別の比較

1) 女性：グループホームが，「一般的疲労感」，「慢性疲労徴候」，「身体不調」，「抑うつ感」，「不安感」，「気力の減退」において，老健や特養を上回っていた。

2) 男性：得られた結果は特養，老健であった。特養が「一般的疲労感」，「慢性疲労徴候」，「身体不調」，「不安感」，「気力の減退」，「労働意欲の低下」において老健を上回っていた。

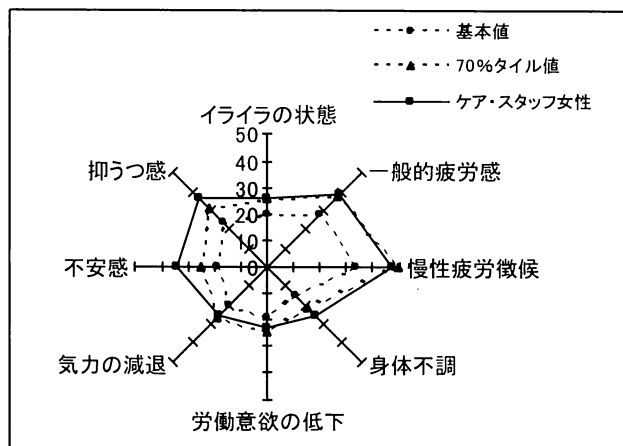


Fig.1. ケア・スタッフ（女性）のレーダーチャート

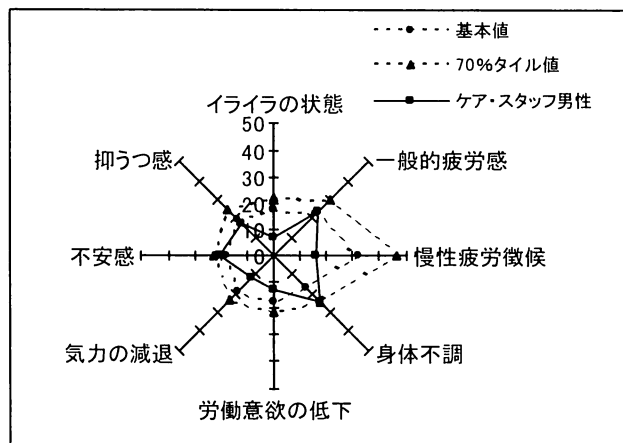


Fig.2. ケア・スタッフ（男性）のレーダーチャート

【考察】高齢者介護に従事するケア・スタッフの CFSI 応答パターンの特徴として，女性では，平均的基本パターン値よりも全ての特性で上回っていた。また，70% タイル値との比較でも，「身体不調」，「不安感」，「抑うつ感」が上回っていた。これらは，心身にかかる負荷があること，不安感・情意面での不安定さなどの精神的側面の負荷があること，さらに鬱積した感情や気分の停滞が特に強いことを示している。また，レーダーチャートの歪みからは，身体面，精神面の負荷が突出しており，心身の疲労の蓄積が強い職場環境であることがうかがわれた。男性では，訴え率が低い傾向の中でもレーダーチャートの歪みでは「身体不調」「不安感」が他の特性より突出しており，高齢者介護施設が心身の疲労が蓄積される職場環境であることが示唆された。施設種類別では，女性ではグループホームが老健，特養に比して，男性では特養が老健に比して疲労の強い職場であることがうかがわれた。現在は，グループホーム，ユニット・ケアなどの小規模多機能型のケアが盛んである。高齢者へのより良いケアの追及や提供の一方で，こうした施設では，ケア・スタッフにとっては疲労がより蓄積的な環境であることの示唆を得た。（この研究は，平成 16 年度熊本保健科学大学特別研究費の助成を受けたものである。）

（たくしま ひろたか・やまもと かつのり）

育児と仕事の両立に関する意識調査

○雫石礼子 井上孝之

(岩手県立大学社会福祉学部)

キーワード：育児と仕事 次世代育成支援 育児休業制度利用 心理的抑制因

[目的]

総合的な少子化対策を推進するため、平成 15 年 7 月、国は「次世代育成支援対策推進法」を策定した。これにより少子化に歯止めがかかることが期待されるが、悲観的な予測も可能である。岩手県女性労働者雇用管理基本調査(平成 15 年度)によると、調査対象 622 の事業所のうち 543 (87.2%) の事業所で育児休業制度を運用していたが、そのうち賃金を支給しないとするものは 477 (87.8%) であった。また、出産した女性労働者の 75%が育児のため休業したが、配偶者が出産した男性労働者は 1%しか休業しなかった。このように制度はあるがその利用は十分といえない状況にある。理由の 1 つは、休業期間中に賃金を支払わない事業所が多い点にあるだろう。しかし、本研究では労働者の意識や心理的な態度の側面に焦点を当てる。

本報告の目的は、乳幼児を持つ親の育児と仕事に対する価値観とそれらの両立のための意識、さらには育児休業制度利用の心理的抑制因の有無を明らかにし、次世代育成支援のための基礎資料とすることである。

[方法]

<対象> M市内に居住する 0～4 歳の乳幼児を持つ 1000 世帯の世帯主とその配偶者。

<手続き> 質問紙による郵送法の調査。回収率は 32%であった。質問紙の内容は、フェースシート、育児、仕事、育児と仕事の両立に関する意識、職場の休業制度やその利用経験、利用時に懸念する(した)事項等の 65 項目である。

<調査時期> 2005 年 2 月末から 3 月初旬である。

[結果]

<対象者の属性> 対象者の年齢は 20～29 歳の女 24.7、男 13.2%、30～39 歳の女 63.6、男 62.8%、40 歳以上の女 11.7、男 22.7%、50 歳以上女 0、男 1.3%であった。育児の対象児童の年齢は、0 歳 16.7%、1 歳 22.7%、2 歳 21.1%、3 歳 21.1%、4 歳 18.3%であった。育児の主担当は女(母親)で 93%であった。対象者の就労の状況は「働いている」が女 43.5、男 94%であった。そのうち、フルタイム就労は女 63、男 92%であった。

<育児と仕事の両立> 仕事と育児の両立について、

「うまく両立できている」は女 30.4、男 29.5%、「仕事の影響があり、育児が満足にできない」は女 22.5、男 46.3%で、その逆の「育児の影響があり、仕事が満足にできない」は女 6.5、男

2.7%で僅少であった。両立させる上で大変だと感じることは、「子どもと接する時間が少ない」女 58.0、男 56.0%、「自分や子どもが病気るとき、代わりに面倒を見る人がいない」女 40.6、男 19.1%、「急な残業が入ってしまう」女 29、男 37.9%、「職場の理解がえられない」女 8.7、男 14.4%であった。

<育児休業の取得> 育児休業を「取得した」は女 28.1、男 1.3%であった。取得しなかった理由は、女(88 人)で「取得できる雰囲気ではなかった」26.1%、「育児休業制度がなかった」22.7%、男(285 人)で「妻が育児休業を取得した」57.7%、「給料が入らないと経済的に困るから」34.2%、「仕事の都合がつかなかった」30.2%、「前例がない」27.2%であった。

<仕事と育児を両立しやすくするために必要な施策> 両立のための施策として必要だと考えることは、女で「労働時間の短縮など柔軟な働き方の推進」が 60.4%、「病児・病後児保育の充実」45.9%、「一時的な保育など働き方に対応した保育の充実」39.9%、「保育所の整備」39.6%、「男性が育児へ参加することへの職場や社会環境の整備」32.9%であった。一方、男は「男性が育児へ参加することへの職場や社会環境整備」が 54.6%で 1 位、次いで「労働時間の短縮など・・・」43.4%、「一時的な保育など・・・」28.0%、「保育所の整備」27.0%、「育児休業制度の充実」24.7%と続いていた。また、<事業主が行う育児支援>で利用したいものは、女で「残業の免除」46.8%、「事業所内託児施設」40.5%、「休日労働の免除」39.9%が多く、一方、男は「一日あたりの勤務時間の短縮」33.6%、「フレックスタイム」31.9%、「始業・終業時刻の繰り上げまたは繰り下げ」28.0%であった。

[考察]

規模の大小はあれ、労働者は実際に業務を行う比較的小規模の職場集団の中で働いている。自分自身の行為がその職場集団の利益にかなうかどうかは、その労働者にとって重要な判断材料になる。休業制度はあるものの、実際に取得を考えるとときには、その時点の業務の状況、職場の雰囲気によっては取得をためらうことが明らかになった。仕事と育児の両立に必要な施策として男(父親)が 1 位にあげた、「男性が育児へ参加することへの職場や社会環境の整備」こそが、次世代育成支援対策推進行動計画の主眼になると考えられる。

(しずくいし れいこ ・ いのうえ たかゆき)

中年期に在る「親」の将来展望

—「自我同一性／配偶者との関係性／子どもとの関係性」との関連において—

○滝澤 麗 南 隆男 高橋 漢

(慶應義塾大学大学院社会学研究科) (慶應義塾大学文学部人間科学専攻)

キーワード： 中年期の親・自己の将来への展望・自我同一性の達成度・家族との関係性

【問題の所在】 中年期は「人生の転換期」とも見られている。Levinson (1978) や Clausen (1987) は、中年期を「変化」あるいは「推移」の時期としているが、この時期には身体的変化・環境の変化・こころの変化など実に様々な変化が生じる。これらの変化は「中年期の危機」(mid-life crisis)とも言われているように、歓迎されるものとは限らず、むしろ定年や子どもの自立により生き甲斐をなくす、身体的不調や精神的不調によりうつ病になる、等々、変化に対して新しく適応することが困難となり、様々な葛藤を覚えることもある。

中年期とは、成人男女が「これからの人生を考える」とき、同時に、「これまでの人生を見直す」必要に迫られる時期でもある。本研究の課題は、中年期に在る成人男女が、自己の将来(＝向後の人生)への展望をどのように捉えているのか、自我同一性の達成度と、そして、家族との関係性のありようから、探索的に考究することである。

【研究の方法】 20代の子どもをもつ成人男女123名(父親55名と母親68名とからなる計123名/年齢：範囲40～61歳、平均49.6歳、標準偏差4.39歳)を対象に無記名の留置式の質問紙調査を実施。調査の時期は2003年の7～9月。

測度(＝変数)： 自己の向後の人生への「将来展望」を19項目で尋ねた。因子分析の結果、2因子が抽出され、①将来への不安(5項目)と②サポート期待(3項目)として変数化した。「自我同一性の達成度」はErikson(1956)の心理社会的段階目録検査から、「同一性／親密性／生殖性」の項目を援用、因子分析の結果、1因子が確認されて③「自我同一性の達成度」(20項目)として変数化した。「家族との関係性」は21項目で尋ねられ、因子分析の結果、2因子が抽出されて、④「配偶者との関係性」(7項目)および⑤「子どもとの関係性」(9項目)として変数化した。これら5変数は、表1に見る通り、 α が.74から.90のあいだに在り、尺度の信頼性に問題はなく、以降の分析にあたっては、項目への反応の合計点を項目数で除した値が使用された。

【結果と考察】 まず、5変数に対する父親／母親間の反応の違いを一元配置分散分析により確認した。表2に見る通り、「サポート期待」と「子どもとの関係性」とが、いずれも母親の方であってより高かった。これら2変数には強い相関があり、恐らくは、現在時点において子どもとの関係性が充足されていれば、将来時点での子どもからのサポート期待も、自然と高く希求されるといったことの反映かと推量される。

つぎに、父親／母親を個別に、「自我同一性の達成度／配偶者との関係性／子どもとの関係性」が「将来への不安」と「サポート期待」とにどのように影響するかを、重回帰分析により確認した。結果は、表3に見る通り、「子どもとの関係性」は、父親／母親のどちらでも「サポート期待」へとポジティブに連動しており、一方、「自我同一性の達成度」は、父親においてのみ「将来への不安」へと連動していた。その連動の在り方は、自我同一性の達成度が高い父親ほど自己の将来への不安は低いということであり、解釈に困難はない結果と言えよう。興味深く、ちなみに、今後の研究課題は、①サポート期待と子どもとの関係性は何故に母親にあってより高いのか、②母親にあっては何故に自我同一性の達成度が将来への不安へと連動していないのか、である。

表2 「父親／母親」の反応のちがい (分散分析の結果)

変数	父親 (N=55)		母親 (N=68)		F
	M	SD	M	SD	
①将来への不安	2.94	.85	3.03	.69	.40
②サポート期待	2.42	.86	3.04	.84	16.16***
③自我同一性の達成度	3.53	.38	3.46	.46	.73
④配偶者との関係性	4.05	.67	3.88	.77	1.66
⑤子どもとの関係性	3.41	.64	3.96	.52	27.84***

***p<.001

表3 「将来展望」のありよう (重回帰分析の結果)

説明変数	父親 (N=55)		母親 (N=68)	
	将来への不安	サポート期待	将来への不安	サポート期待
自我同一性	-.35**	-.27	-.22	-.18
配偶者との関係性	-.09	-.27	-.01	.14
子どもとの関係性	-.15	.50**	.14	.38**
R ²	16.5**	13.5**	0.9	11.4*

*p<.05, **p<.01

表1 分析に使用した「変数」一覧

変数	項目数	α	M	SD	相関			
					①	②	③	④
①将来への不安	5	.77	2.99	.76				
②サポート期待	3	.74	2.77	.90	.29**			
③自我同一性の達成度	20	.84	3.49	.42	-.28**	-.07		
④配偶者との関係性	7	.90	3.96	.73	-.13	.04	.24**	
⑤子どもとの関係性	9	.84	3.71	.63	-.07	.43***	.29**	.34***

p<.01, *p<.001

調査票/質問項目の実際・具体は、紙幅の関係上、割愛のやむなしです。口頭発表の当日に供覧いたします。

たきざわ うらら
みなみ たかお
たかはし けい
たかはし けい

男子大学生の「就労」への将来展望

—「処遇原理」との関連において—

○高橋 溪 南 隆男 滝澤 麗 外島 裕
 (慶應義塾大学文学部人間科学専攻) (慶應義塾大学大学院社会学研究科) (日本大学商学部)
 キーワード: 男子大学生・大学生生活満足感・就労観・処遇原理

【問題の所在】フリーター、ニート…と「教場から職場への移行」(transition from school to office)をめぐる論議が、このところ俄かに喧しい。教師となるべく出身中学校で“教育実習”をした或る大学生が「実習の教室に『13歳のハローワーク』(村上龍/幻冬舎)が備えつけられていた”ことを大いなる感慨をもって語っていたが、よい幼稚園→よい小・中・高→そしてよい大学へ、そこまでの“受験戦争”を生き抜いてきた青年学徒を待ち受けているものは“社会への巣立ち”である。「おまえ、大きくなったら何になる?」との親や親類縁者オトナたちからの友愛的な問いかけも希薄になったと言われる21世紀の初頭、大学(生)から社会(人)への移行の過程の実情は、さて、いかなるものであるのか?

本報告は、首都圏の某私立大学の商学部に在籍する男子大学生(182名:平均20.1歳:標準偏差1.2歳)の協力を得て、当該大学での生活実感(大学生生活満足感/ソーシャル・サポート・ネットワーク/孤独感/抑うつ傾向)と世の中や職場における処遇原理(実績/努力/必要/平等)への親和性を尋ね、相互連関の構造を探った、その結果の供覧である。

【研究の方法】2004年の6月に留置式の質問紙調査により上記大学生182名より資料を得た。尋ねた事項は、表2~3に示した通り、8種の人口統計学的属性、9項目からなる大学生生活満足感($\alpha=.74$)、8項目からなるソーシャル・サポート・ネットワーク($\alpha=.92$)、17項目からなる孤独感($\alpha=.91$)、13項目からなる抑うつ傾向($\alpha=.84$)、であった。

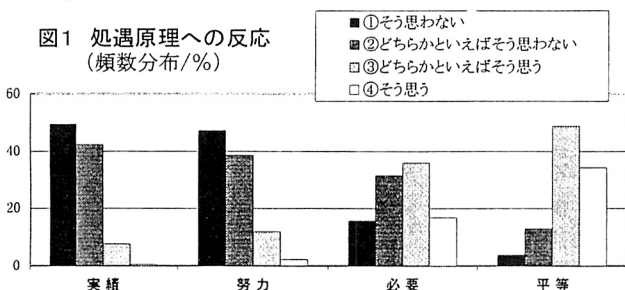
大学卒業以降の就労生活との接点での処遇原理とは、Hofstede, G.の研究(『Culture's consequence』1980)や労働政策研究・研修機構での研究(『勤労意識のゆくえ』2004)などで問われてきた、①「実績をあげた人ほど多く得るのが望ましい」という実績原理、②「努力した人ほど多く得るのが望ましい」という努力原理、③「必要としている人が必要なだけ得るのが望ましい」という必要原理、そして、④「誰でも同じくらいに得るのが望ましい」という平等原理、の4つであり、それぞれへの親和性が「①そう思わない」~「④そう思う」の4件法で尋ねられた。この4通りの処遇原理のそれぞれを従属変数として、それ以外の変数を独立変数とした、重回帰分析が試みられた。

表1 「処遇原理」間の相関

処遇原理	①	②	③
① 実績			
② 努力	.31 **		
③ 必要	.08	.25 **	
④ 平等	-.13	.13	.24 **

** p<.01

図1 処遇原理への反応(頻数分布/%)



【結果と考察】表2は、「大学生生活満足感」の9側面のそれぞれが「処遇原理」にどのように連動しているのかを確認した結果であり、表3は、9側面を一括した場合の「大学生生活満足感」、「ソーシャル・サポート・ネットワーク」、「孤独感」、そして、「抑うつ傾向」の4変数が「処遇原理」にどのように連動しているのかを確認した結果である。見る通りで、「実績原理」にあつて、「抑うつ傾向」が強まるほど当該処遇原理への親和性は低まること、また、「努力原理」にあつて、「大学生生活満足感」が高まるほど当該処遇原理への親和性が低くなる傾向にあること、が確認された。「必要原理」と「平等原理」にあつては特定の有意な連関は認められなかった。

この事実は何を反映しているのか?/この分析結果はどのように読み込まれるべきなのか? は、たった一つの大学のデータであり、学部も商学部に限定されていることなど(外的妥当性の問題)もあつて、慎重な検討が必要であろう。我々の推量/解釈/仮説の詳細は口頭発表時に報告する。

表2 重回帰分析の結果(その1)

説明変数	処遇原理			
	実績	努力	必要	平等
・第1ステップ				
1 年齢(19~24歳)	.04	-.05	-.05	-.05
2 学年(2~4年)	-.02	-.05	-.08	.05
3 卒業高校(0=公立,1=私立)	-.14	.02	-.07	.03
4 入学経緯(0=浪人,1=現役)	.04	-.07	-.09	-.05
5 居住形態(0=自宅外,1=自宅)	.17 *	.02	.04	-.01
6 サークル所属(0=非所属,1=所属)	-.09	.24 **	.17 *	.05
7 家族年収(1~6段階)	-.03	.04	.01	.11
8 一ヶ月あたりの小遣い(1~7段階)	-.01	.11	-.09	.02
・第2ステップ				
9 学業カリキュラムの在り方	-.07	-.03	.17	.03
10 学生に対する先生の対応	-.09	-.02	.01	.01
11 先生との個人的接触の機会	.11	.02	-.02	.03
12 学生に対する教務部・学生部の対応	.12	-.15	-.12	-.11
13 食堂などの厚生施設の在り方	.06	.23 **	.13	.07
14 学内での友人関係	.07	.05	-.04	.01
15 学内サークルなどでの課外活動	-.12	.13	.14	.10
16 社会人として成長するための経験をうる機会	-.06	-.10	-.03	-.09
17 学業成績そのもの	.01	.15	-.02	.03
R ²	.05	.06	.03	.02
△R ² (第1ステップ→第2ステップ)	.09	.14	.09	.04
△R ² (第1ステップ→第2ステップ)	.04	.08	.06	.02

* p<.05, ** p<.01

表3 重回帰分析の結果(その2)

説明変数	処遇原理			
	実績	努力	必要	平等
・第1ステップ				
1 年齢(19~24歳)	-.05	.09	.02	.05
2 学年(2~4年)	.04	.02	.08	-.07
3 卒業高校(0=公立,1=私立)	.18 *	-.01	.04	-.04
4 入学経緯(0=浪人,1=現役)	-.03	.10	.08	.06
5 居住形態(0=自宅外,1=自宅)	-.19 *	-.02	-.05	-.02
6 サークル所属(0=非所属,1=所属)	.03	-.21 *	-.09	.01
7 家族年収(1~6段階)	.05	-.02	-.02	-.11
8 一ヶ月あたりの小遣い(1~7段階)	.01	-.16 +	.11	-.03
・第2ステップ				
9 大学生生活満足感	-.05	-.15 +	-.06	.03
10 ソーシャル・サポート・ネットワーク	.09	-.02	.10	.02
11 孤独感	.04	-.17	.09	-.01
12 抑うつ傾向	-.19 *	.08	.14	.13
R ²	.05	.06	.03	.02
△R ² (第1ステップ→第2ステップ)	.08	.09	.08	.04
△R ² (第1ステップ→第2ステップ)	.03	.03	.05 +	.02

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01

(たかはし けい・みなみ たかお・たきざわ うらら・としま ゆたか)

他者理解と自己理解

—他者理解に関する概念枠組みの検討—

○山本勝則¹⁾ 吉田一子¹⁾ 多久島寛孝¹⁾ 内海滉²⁾

(¹⁾ 熊本保健科学大学保健科学部看護学科 (²⁾ 千葉大学)

キーワード：他者理解 自己理解 看護

【研究の目的】 これまで「患者（他者）理解は重要である」という立場で、四回に渡って「プロセスレコードを用いた他者理解と自己理解に関する計量的分析」を報告してきた。プロセスレコードの分析が一段落したので、今回は研究の根底にある、「患者（他者）理解は重要である」ということの意味を再検討する。看護の場における患者（他者）理解の歴史、意味、種類、研究の概念枠組みなどについて述べる。

【方法】 ①これまで、医療・看護の場で、患者理解がどのように考えられてきたかを概観する。②看護における患者理解の意味について検討する。③他者理解の（三つの）起源について検討する。④他者理解の種類について検討する。⑤患者は医療者から何を理解される必要があるのかということを検討する。⑥他者理解を取り巻く概念図を提示する。

【結果・考察】 <1. 患者理解の歴史的概観>看護論の中には、患者理解を重視するものがある。例えば、ヘンダーソンは基本的看護の構成要素の一つに、「患者が他者に意思を伝達し、自分の欲求や気持ちを表現するのを助ける」ことをあげ、ニードを知るために患者の内面にまで入っていくことが必要であると説いている。また、トラベルビーは、看護師は、個人との関係を確立することによって、援助を行なうのであり、その関係とは、あなたは理解されており孤独ではないということ、病気の人に伝達するものであると述べている。一方、看護診断を含む看護過程の考え方では、患者の健康上の問題に焦点が当てられるので、患者理解は強調されない。

<2. 看護における患者理解の意味>現代医療では、人生の一部であるはずの病気は、医療者によって患者から取上げられ、客観化され、画一化されたものになる。どんな風に苦しみ、どんな風に手当てして欲しいかということとは関係なく、エビデンスに基づいた‘正しい’診断・治療が行なわれる。しかし、一人一人の患者にとっての病気は、生活の中で主観的な意味を持って体験される出来事である。患者はその意味を理解され、それに沿ったケアを受ける必要がある。医療者から理解されないことは、きわめてネガティブ（苦痛、不安、困惑、落胆）な体験である。科学としての病気は客観化される必要がある。しかし、それを体験している患者の思いは、患者の主観に沿って理解されるべきである。

<3. 他者理解の起源>それにしても、何故患者は理解される必要があるのだろうか？ 生物が他者の行動や意図を予測する必要がある場合として、次の三つの場合が考えられる。

第一は、被食・捕食関係にある場合で、相手の行動予測に成功した方が生き延びる。この場合は、他者の行動あるいは意図を理解する必要はあるが、自分の意図や行動は理解されてはいけなない。

第二は、集団を形成する種に見られるもので、敵対・協働の意図を読み取ることに失敗すると孤立する。この場合は、他者の行動あるいは意図を理解する必要があるとともに、自分の意図や行動についてもある程度理解される必要がある。

第三は、被保育・保育関係であり、保育者は子どもの意図や行動を理解する必要があり、被保育者は十分に理解される必要がある。ただし、この場合に理解される必要があること

が意図なのかニードなのかという議論は残る。

最後に、意図、行動、ニードではなく、不安、苦痛などの心的状態を理解される必要性についてであるが、この起源は明らかではない。上記の第二や第三の場合に一部は当てはまるであろうが、それだけでは十分な説得力は持たない。

<4. 他者理解の種類>他者を理解する方法として最も一般的な方法は心理学である。心理学は主に行動と認知を扱うが、他者理解という面では、心の特性（性格など）の理解と状態（その場の気分など）の理解という区別が相応しいように思われる。また、他者理解の発達には、ピアジェの心理学や心の理論などに関連して研究が進んでいる。しかし、心理学はいずれにしても客観的・理論的立場を取り、他者の生活体験を意味的に理解するわけではない。精神分析は、ある意味では最も深い理解に達するが、それは患者の生活体験に即した理解ではなく、無意識に即した理解としてである。

看護界では、他の分野で開発された方法を応用して、様々な種類の患者理解が試みられてきた。患者の体験に即した理解の手段として、コミュニケーション技法やプロセスレコード、ロールプレイが用いられている。

<5. 患者は何を理解される必要があるか>患者が客観的心理ではなく主観的側面を理解される必要があるとしたら、その主観的側面とはなにか。それは、一つは、治療的観点からの周辺事項と生活に関する瑣末事であり、もう一つは、ナラティブである。

<6. 他者理解を取り巻く概念図>以上の議論に、この概念図には二つのものを付け加えた。他者理解の必要性は、医療者からの無理解に直面した体験と裏腹の関係にある。また、多くの文献において、他者理解のためには自己理解が必要であるということ的概念的に説明している。従って、概念図の中に記載した。しかし、それらの関係を具体的に説明した文献には容易に出会わない。

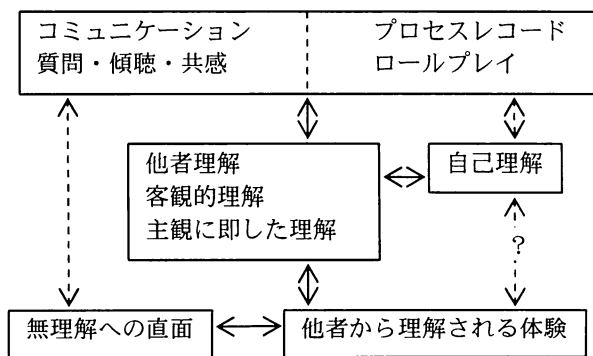


Fig.1. 他者理解を取り巻く概念図

【まとめ】 以上、医療・看護の場において、主観に焦点を当てた患者（他者）理解が必要であるということの意味、およびその枠組みについて述べた。

(やまもと かつのり・よしだ いちこ・たくしま ひろたか・うつみ こう)

パートタイム従事者の職業意識

森下高治

(流通科学大学)

キーワード：パート労働，職業意識，年齢階層

1. **問題**) 2004年の労働力調査では、正規の職員、従業員は3400万人、パート他非正規は1560万人、2001年のパート人口は950万人のうち、女性が75%強で圧倒的に多い。

本研究は、女性のパート従事者の職場についての就業意識と働くことと家庭生活の職業意識から今後強まるであろうパート問題を明らかにする。

1. 職場に関する18項目と仕事と家庭との両立の20項目からなる就業、職業意識から項目の特徴をまず明らかにする。
2. 年齢階層からみた就業、職業意識の違いについて 具体的には40歳未満までの年齢群、40-44歳群、45-49歳群、50歳以上の群の計4群にわけ検討する。
3. 生活時間からみたパート従事者の実態について
4. 働くことの目的について-3, 4とも正規従業員(正社員)との比較において-

II. **方法**) 調査期日:2004年10-11月に行われた。対象:生協組織、大手スーパー、その他コンビニ、ファーストフードなどに働くいずれも女性パート211名を対象とする。

表1.年齢区分による対象者人数

-24歳	8	40-44歳	50
25-29歳	9	45-49歳	48
30-34歳	10	50-54歳	45
35-39歳	19	55歳-	22

表2.子どもの人数

いない	24
1人	36
2人	104
3人	42
4人-	5

211名のうち、既婚は179名で84.8%、未婚は16名で7.6%。

一方、正規従業員(正社員)は、2003年8-9月男女合わせて526名のうち女性は210名である。調査方法:質問紙調査で18項目からなる職場についての意識と20項目からなる働くことと家庭との両立についての意識、いずれも「強く思う」から「全然思わない」の4件法による。それに生活時間や働く目的についても尋ねた。

III. **結果と考察**) 1-a: 職場についての就業意識 以下の項目に特徴が見出される。

Q12a「休みが必要な時の休業希望」は2.89で「強く思う」が4、「全然思わない」が1で言いにくいと思うに70.6%が傾いている。次に、Q14a「金銭的に潤う」は2.67で63.0%の人たちが思うと答えている。これは後述の働く目的と関連する。Q15aの「家事の負担の増加」は、2.70を示し思う傾向が過半数の57.8%である。また、Q4a「正社員の人数が適度か」は、2.27で逆に「余り思わない」、「全然思わない」が60.2%で適度でないとの回答を寄せている。Q6a「自分の仕事の範囲や役割が任せられている」は、3.08で全体の80.1%が任せられているとし、Q2aの「仕事量について」は、多いが59.2%を占めている。

以上から、現実の職場環境は厳しい会社環境を反映してか各職場人員は正規従業員が少なく、その分をパートで補っているものとみられる。また、結構仕事量が多いが、8割がパートの仕事の範囲と役割を任せられていることを考えると今回の調査対象組織にはパートタイム従事者の一定の地位、立場が確立されていることが裏付けられた。

1-b: 働くことと家庭生活についての職業意識 20項目を因子分析(主因子法、バリマックス回転)を試みた結果、

以下の6因子を見出した。①パート労働に対する考え方の因子 ②家族への関わり方の因子 ③パート継続意志の因子 ④パートタイム労働そのものの因子 ⑤在宅希望の因子 ⑥仕事と家庭の両立を支える因子 次に、特徴のある項目をあげるとQ1b「働くことは人生にとっての当然のこと」は、3.30で88.2%の高率で殆どのパート従事者は当然と思っている。一方、Q7bの「余暇より仕事を優先」は、2.15の値である。「余り思わない」、「全然思わない」が67.8%を占めている。これに関連する質問のQ4b「なるべく契約時間外の労働」は2.88で、したくないと思うが64.4%から働く人たちにとっては、パート労働の限定的な取り組み(関与)が窺われる。

2. 年齢階層による就業、職業意識の違い

職場に関する18項目と働くことと家庭生活に関わる20項目について4群間の年齢階層による分散分析結果は、4項目のみに有意な差異($p < .05$, $p < .01$)を認めることが出来た。

次に、多重比較でどの群との間に違いが見出されたかを検討したが、ここでは2*2の4分割表から説明を加える。

Q2b「これから先もパートを続ける」は、39歳以下と50歳以上の両群に違いがみられ、後者の年齢層の高い群が働く希望が強い。Q7b「余暇より仕事を優先」は、39歳以下と45-49歳群との間で、また40-44歳群と45-49歳群との間で後者の45-49歳群の方がともに仕事を優先している。

Q20b「働くことに役立つ資格、勉強」は39歳以下の年齢群が、50歳以上の群、45-49歳群に比べると若い人たちの年齢群がしてみたいとしている。

3. 生活時間からみたパートタイム従事者の実態

正社員既婚者(60名)との生活時間を比較すると、労働、通勤、家事、睡眠、家族との時間、自分のための時間、生理的時間のうち労働時間は明らかに違いがあり、パートが373.16分に対して正社員は518.40分である。また、通勤はパートが36.94分に対して正社員は85.20分でパートが近隣の通勤範囲内の職場である。次に、料理、洗濯、片付けなどの家事はパートが212.50分に対して正社員は153.60分で約60分の違いがある。これに対して、睡眠時間はどちらも6時間20-30分で変わらない。さらに、家族との時間はパートが159.80分に対して正社員が116.40分で、パートは40分ほど多い。自分のための時間、食事や入浴などの生理的時間は、いずれもパートが正社員より倍以上の時間を取っている。

4. 働くことの目的について

その他も含め12の目的について、最も近い考えかたを尋ねた結果、①現在の生活のためが38.9%で最も多く、次に②子どもの養育費のためが16.6%これらは経済的生活示す目的で過半数を占めている。これに対して、③人間的なふれあい、④余暇の充実が合わせて15%であった。一方、正社員(173名対象)は、①人間的なふれあいが19.1%、自分の可能性や能力を確かめたいが18.5%、余暇の充実が12.1%、金銭的により豊かが17.9%を示す。これから、パート従事者は金銭による目的が大であるのに対して、正社員は経済的により豊かと並んで自己成長と対人欲求充足にねらいをおいて両者の違いがかなりあることが明らかになった。

*正社員のデータは、内田富起子氏から提供を受けた。ここに謝意を表します。(もりしたたかはる)

精神的負荷を与えた場合におけるタッチングの効果

— 心理的・生理的側面から —

○小西 奈美¹⁾ 森千鶴²⁾

(¹⁾ 山梨大学大学院医学工学総合教育部 人間環境医工学 (²⁾ 国立看護大学校 精神・老年看護学講座)

キーワード：タッチング、精神性発汗、パーソナルスペース

【研究の目的】看護師は、バイタルサインの測定や清拭など、さまざまな援助行為において、患者にふれることが多い。なかでも、検査や手術などで不安や緊張を抱えていると思われる状況において、患者に触れるタッチングは、その精神的負担を和らげ、その後の治療行為を円滑にすすめるための重要な看護介入である。実際に、タッチングの効果はさまざまな場面において示されているが、心身両面から多面的に捉え、明確にされたものはない。そこで、本研究ではタッチングに関する基礎的データを得るために、精神的負荷を与えた場合におけるタッチングの効果について、心理的・生理的両方の側面から捉えることとした。

【方法】被験者は、研究参加に同意の得られた健康な学部学生 48 名である。被験者には研究の趣旨を書面と口頭で説明し、承諾を得た。また、研究にあたり山梨大学倫理委員会の承認を得た。学生は、試験により評価され進級が決定するため、試験に対する不安を有していると考えられたため、精神的負荷としては実験当日に試験を実施することを告知することによって、精神的負荷を与えることとした。そして、精神的負荷の影響、タッチングの影響を明らかにするために、被験者を①精神的負荷を与え（試験の告知）、タッチングを行った群（以後、試験タッチング群）、②精神的負荷を与えず（試験の告知をせず）タッチングのみを行った群（以後、タッチング群）、③精神的負荷を与え（試験の告知）、タッチングを行わない群（以後、試験群）、の 3 群に分けた。

測定内容は、心理的指標として、主観的側面から気分調査票に含まれる 5 つの下位項目のうち、不安感、緊張感の下位項目と、客観的指標からパーソナルスペースを用いた。パーソナルスペースはタッチング前後の形態の変化を検討するために、投影法によるイメージよりも、そのときの実際の構造を測定することが妥当であると考え、接近法を用いた。生理的指標として、精神的興奮に瞬時に微量な分泌で反応を呈する精神性発汗を用いた。

環境は、湿度、温度、照度を一定に保ち、一定の時刻に行った。

実験は、試験タッチング群については、安静時の精神性発汗を測定し、その後試験を実施することを初めて告知し、気分調査、パーソナルスペースを測定し、被験者の背後から 2 分 30 秒間タッチングを行い、その後試験を実施した。試験後、再度気分調査、パーソナルスペースを測定した。他の 2 群については上記実験内容からそれぞれ、試験、タッチングを除き、その間は閉眼座位を保つこととした。

タッチング（試験）前後の各測定値の差を算出し、一元配置分散分析、多重比較（Bonferroni の検定）を行った。

【結果】心理的指標としての気分調査からは、不安感、緊張感の得点の差において有意な差はみられなかったが、不安感、緊張感は 3 群とも減少、緊張感は試験を行った 2 つの群が増加を示していた。次に、パーソナルスペースについては、タッチングを行った 2 つの群は、右方向は短くなる傾向にあったが、タッチングを行わなかった試験群では試験後に長くなる傾向にあった。

生理的指標としての精神性発汗については、試験を告知した群（試験タッチング群、試験群）において、安静時と実験内容説明時（試験告知（精神負荷）時）の精神性発汗量の差を比較したが、有意な差はみられなかった。次に、3 つの各群において、安静時とタッチング時（タッチングを行わない試験群は試験前時）の発汗量の差を比較した。タッチング開始後 3 分 50 秒後（試験前安静開始 4 分 50 秒後）、4 分後（試験前安静開始 5 分後）の時点で有意な差がみられた（3 分 50 秒後 $F=3.868$ $p=0.032$ 、4 分後 $F=3.590$ $p=0.040$ ）。その後、Bonferroni の検定を行ったが、群間に有意な差はみられなかった。特徴としては、タッチングを行った 2 群が安静時よりも増加しない値を示したが、試験群では安静時よりも増加の値を示していた（図 1）。

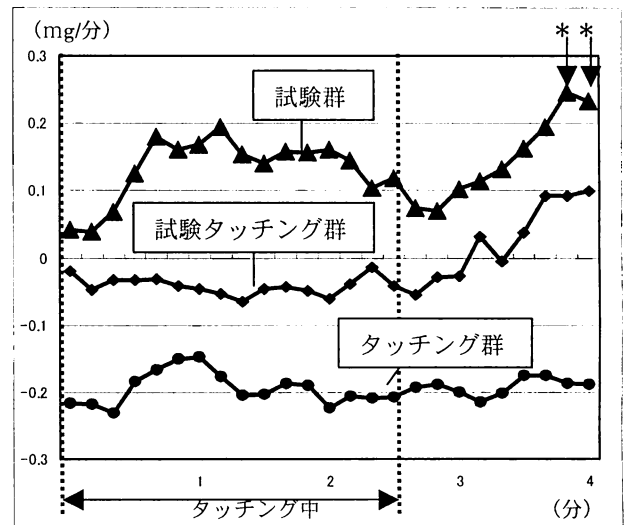


図 1. 時間の経過に伴う精神性発汗量の差の 3 群の比較 (* $p<0.05$)

【考察】気分調査の結果からは、不安感、緊張感の変化に 3 群の特徴は明らかにならなかった。パーソナルスペースから考えられるタッチングの影響については、タッチングによって相手（験者）を受け入れやすくなり、タッチング後に接近距離が短くなると考えられたが明らかにすることは出来なかった。精神性発汗からは、試験タッチング群はタッチングを離れた後からさらに増加したのに対し、タッチング群ではタッチングを離れた状態でも減少していた。このことから、タッチングによって精神的興奮は抑えられたが、タッチングを離れたことによって、試験タッチング群では試験を受けなければならないという心理的影響が考えられる。このことは、試験群ではどの時間帯でも安静時よりも増加していたことからいえる。つまり、タッチングを行うことによって、精神的興奮は抑えられ、試験を受けなければならない者に対して効果が得られたと考える。今回、心理的効果を明らかにすることはできなかったが、援助の結果として安楽が得られたことを確認することは重要である。今後、精神的負荷やタッチングの方法を再検討し、心理的、生理的両側面からタッチングの効果を明らかにしていく必要がある。

(こにし なみ・もり ちづる)

看護学生の精神看護学実習前後における不安

—2年間の基礎項目の調査結果から—

○宮原紀子 内海晃
(千葉大学)

キーワード：精神看護学実習・基礎調査項目・29の不安項目の因子分析

【研究目的】 看護学生が精神看護学実習で、過度の不安や緊張感から躊躇して行動が萎縮し、実習が躓かないよう不安緩和のあり方を求めて、2年間にわたり調査した。今回は基礎項目の調査の結果を報告する。

【研究方法】 1. 調査対象 3年課程の看護学校3年生(延べ239名) 2. 調査期間 平成11年5月から平成13年12月までの2年間 3. 調査方法 実習前と実習後にそれぞれ質問紙を配布、回収した。4. 調査内容 自作の基礎9項目および不安の要因と考えられる29項目の質問用紙を作成し、t検定と因子分析をおこなった。

【研究結果】 「精神看護学実習における実習前・後の不安項目とバリマックス回転後の各因子の負荷量」は、下記表1の通りである。2年間を通して、共通的にあげられた不安項目の第1因子は「患者因子」であり、第2因子は「実習因子」、第3因子は「患者・学生関係因子」、第4因子は「人間関係因子」、第5因子は「患者への興味関心・学習因子」第6因子は「自己の内面因子」であった。

表1 精神看護学実習における実習前後の不安項目とバリマックス回転後の各因子の負荷量 例数=478

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
	患者因子	実習因子	患者・学生関係因子	人間関係因子	患者への興味関心・学習因子	自己の内面因子
1 患者は突然不明の苦痛をいう	0.78	-0.07	0.09	0.03	0.15	-0.07
2 患者は突然一言発せぬ	0.77	-0.11	0.05	0	0.08	-0.01
3 患者は理屈解した愛護・処置等の精神療法に反応しない	0.71	-0.14	0.17	-0.01	0.15	0.08
4 患者は治療が定まらず目つきや顔つきがらみ	0.68	-0.04	0.12	-0.15	-0.03	-0.05
5 患者は治療しなかつたり苦痛を忘しなかつたり目の中に涙や汗を流したり不潔である	0.67	0.03	0.21	-0.12	0.01	0.04
6 患者は日常では考えられないことをする等たいの知れない存在である	0.58	-0.14	0.26	-0.18	-0.19	-0.13
7 患者が突然暴れたり驚いたり何をされるかわからない状態がある	0.56	-0.23	0.2	-0.21	-0.22	-0.11
8 患者が病状で苦痛を訴えない	0.41	-0.24	0.39	-0.25	-0.28	-0.28
9 患者の病状が不安である	0.1	-0.78	0.08	-0.18	0	0.11
10 疾患の重症度の高い人の援助ができるか不安である	0.08	-0.72	0.12	-0.07	-0.06	0.02
11 疾患や症状、病態生理解、知識不足の不安がある	0.05	-0.7	0.1	-0.19	-0.01	-0.14
12 実習内容が理解できない不安がある	0.13	-0.67	0.24	-0.04	0.09	-0.09
13 自己の学習態度に自信がない	0.03	-0.64	0.04	-0.18	-0.06	0.38
14 実習内容が不安である	0.1	-0.59	-0.06	-0.35	-0.02	-0.01
15 保護者・作業治療が不安である	0.13	-0.59	0.16	0.18	0	-0.03
16 患者が病状で苦痛を訴えない	0.12	-0.16	0.78	-0.17	-0.02	0
17 患者と実習生との間に苦痛を感じない	0.24	-0.09	0.76	-0.1	-0.07	0.09
18 患者は自分の世界に閉じこもっており実習生は受け入れられない	0.31	-0.11	0.7	-0.13	-0.04	-0.13
19 実習生が原因で患者との人間関係が悪くなる	0.07	-0.11	0.6	-0.11	0.17	0.25
20 精神科病棟のイメージは怖い怖い病棟の様子である	0.38	-0.12	0.5	-0.2	-0.17	-0.31
21 患者は言葉も通じず支障が与えられない	0.42	-0.14	0.47	-0.04	-0.15	0.04
22 実習生は看護士と良い人間関係がとれるか不安である	0.1	-0.29	0.14	-0.83	-0.03	0.07
23 実習生は実習組織の職員と良い人間関係がとれるか不安である	0.08	-0.23	0.16	-0.8	0.05	0.09
24 実習生は保護者などと良い人間関係がとれるか不安である	0.13	-0.33	0.14	-0.77	-0.02	0
25 精神を障害した人の看護に興味・関心がある	-0.03	-0.11	-0.16	-0.03	0.73	0.08
26 あなたが事前学習として読んで来た実習で役に立つと思うか	0.08	0.18	0.09	-0.01	0.61	-0.09
27 患者は言葉も通じずやむを得ない	0.11	-0.22	0.04	-0.1	0.39	-0.47
28 患者との学生が怖い	0.97	-0.15	0.12	-0.16	0.04	0.71
29 実習生に患者への心配やとりこしき苦労が多い	0.16	-0.11	0.25	-0.35	0.1	-0.01

表1. の29項目の因子分析された結果を基に、次の基礎項目がどの因子に関するのかをt検定した。すなわち、1. 年齢を20歳の学生と21歳以上の学生とを比較すると、実習後に第2因子の「実習因子」にt検定2.773(p<.01)で有意差がある。2. 性別では、女性と男性を比較すると実習前は第2因子の「実習因子」に、実習後は第1因子の「患者因子」に前者のt検定は2.367(p<.02)で、後者のt検定は2.125

(p<.05)で有意差がある。3. 出身地では、東京都と埼玉県を比較すると、実習前も実習後も第2因子の「実習因子」に、前者のt検定2.660(p<.01)、後者のt検定2.276(p<.05)で有意差がある。4. 居住場所では、学生寮と自宅を比較すると実習後に第4因子の「人間関係因子」にt検定2.501(p<.02)で有意差がある。5. 精神を障害された人の看護を最初に聞いたのは誰からか(講義者、家族、親戚・知人)では、家族と講義者を比較すると、実習前は第5因子の「患者への興味関心・学習因子」に、t検定3.115(p<.01)で有意差がある。また、親戚・知人と講義者を比較すると、実習前は第4因子の「人間関係因子」にt検定2.846(p<.01)で、実習後は、第5因子の「患者への興味・関心因子」にt検定2.005(p<.05)で有意差がある。6. それをどのように聞いたのか。怖い話として聞いた場合と、怖くない話として聞いた場合を比較すると、実習前は第1因子の「患者因子」にt検定2.365(p<.02)で有意差がある。7. 精神障害者の出来事を新聞や映像を通して見聞きしているかないかを比較すると実習前は第2因子の「実習因子」にt検定2.303(p<.05)、第3因子の「患者・学生関係因子」にt検定2.054(p<.05)、第4因子の「人間関係因子」にt検定2.12(p<.05)で有意差がある。8. それらの事柄は現在の自分に影響を与えているか、影響を与えているか、いないかを比較すると実習前も実習後も第5因子の「患者への興味関心・学習因子」にt検定が前者は3.604(p<.001)、後者は2.286(p<.05)で有意差がある。9. あなたの家族に看護師はいるかでは、いる、いないを比較すると実習前・実習後も第2因子の「実習因子」前者のt検定2.244(p<.05)、後者はt検定2.927(p<.01)で有意差がある。

【考察】 年齢が21歳以上の学生の方が実習後自己の学習状況を振り返り不安が高い。また実習前・後を通して男性の方が患者の精神症状への不安は高い。東京都出身の場合は実習前に、埼玉県の場合は実習後に実習内容に関しての不安が高い。学生寮の場合は実習後に人間関係の不安が残る。また、家族から精神障害者の話を先に聞いていないと、患者への興味関心・学習意欲は実習前に高い。しかし、実習後は先に講義者から聞いた場合の方がそれは高くなる。精神障害者の事件や出来事を見聞きしていない場合には実習内容と患者と学生の関わりへの不安が高い。見聞きしている場合には人間関係への不安が高い。それらの自己への影響は実習前・後も興味・関心・学習状況等に現れている。家族に看護師がいない場合は実習前、実習内容に不安が高く、いる場合には実習前より実習後に不安が残る。(みやはらのりこ。うつみこう。)

慢性的健康問題を持つ患者の保健行動

—糖尿病療養指導場面から—

○坂本知子

(静岡県立大学短期大学部)

キーワード：患者教育、保健行動、糖尿病

(目的)

慢性疾患は、長期的な経過をたどるので、患者の病状と生活障害に対応することが求められる。さらに、糖尿病療養状況は、療養過程が自身による治療への参加過程でもありと考える。

そのため、生活の仕方の見直しと治療への参加過程を組み入れた生活の再構築を考える必要がある。

しかし、これまでの生活の秩序の存在、自身の役割や家族の分担とのバランス、味覚や嗜好との年月を経た食習慣や家族団らんの食文化など、新たな治療参加型生活の再構築には、いくつかのハードルがある。

また、糖尿病は、血糖コントロール可能であるが、治療しないため、様々な生活や身体状況の変化で、コントロールが変動する。その結果、症状の出現や合併症の進行に影響することが指摘されている。

従って、治療参加型の生活の実行過程にある対象者の指導場面から、糖尿病自己管理行動の分析を試みた。

(方法)

2002年、2003年、の病院外来糖尿病指導場面での参加観察から糖尿病患者自己管理行動を分析し、コード化からカテゴリー化した。

(結果および考察)

本研究の結果、カテゴリーは、食事療法の実行、運動療法の実行、服薬の実行、インスリン自己注射の実行、自己血糖測定の実行、フットケアの実行、定期受診の実行、低血糖自覚の訴え、体調変化の訴え、があげられた。

1)カテゴリー毎の内容

①食事療法の実行では、目分量のご飯量、茶碗半分のご飯量、野菜中心の献立、自家野菜ジュースの飲用、外食計算、など、献立の工夫や調理の工夫が含まれた。また、量の測定では、目安になる物を基準にして、日常行動に組み入れていることが伺えた。

②運動療法の実行では、万歩計の携帯、運動時間の測定、などがみられ、運動の種類では、犬との散歩が多かった。また、犬との散歩ではスピードの差が指摘され、年齢や筋力低下や神経障害との関連が示唆された。

③服薬の実行では、薬の変更、薬の追加、薬効の説明、服薬と食事の関係など、経過や病状による変更や追加、それに伴う説明を受けていた。

④インスリン自己注射では、インスリンの種類確認、インスリンの単位の確認、インスリンの種類と単位の再確認など、インスリン注射の実行では、誤りのない実行のための確認が多かった。そのため、インスリンの種類と量の糖尿病手帳の記載など、実施時の再確認を方法の提案が成されていた。また、インスリン拒否などもみられた。

⑤自己血糖測定の実行では、自己血糖測定の継続、経過記録ノートの記載と作成などが主だった。

⑥フットケアの実行では、足の観察、清潔保持、毎日の入浴、軟膏塗布があげられた。

⑦定期受診の実行では、眼科受診行動、循環器科受診行動、皮膚科受診行動、整形外科受診行動、消化器科受診行動などの複数の診療科への受診が実行されていた。

⑧低血糖自覚の訴えでは、低血糖症状自覚の有無の確認、低血糖症状の確認、低血糖予防方法の提案など、無自覚な低血糖への注意の喚起や、対象による低血糖症状の出現の違いへの対応が必要であることが推測された。

⑨体調変化の訴えでは、無理な自己管理行動実行の確認、風邪や合併症の徴候の確認があげられていた。

2)カテゴリーとサブカテゴリー

①食事療法の実行では、イベントによる過食、不規則な生活と夜食、塩辛い物への嗜好、甘い物への嗜好、欠食、曖昧な指示カロリーの把握が、関連していた。

②運動療法の実行では、痛みによる動きへの影響、動きの鈍さの自覚など、運動の障害になることや対象者の加齢、合併症など複合要素が示唆された。

③服薬の実行では、薬の飲み忘れが多かった。また、他の診療科薬が多いことや加齢から、家族による服薬管理もみられた。

④インスリン自己注射では、家族によるインスリン注射の実行や、インスリン携帯、職場での自己注射の実施など、確実な実行に必要な複数の実行場所や実行場所の確保と関連していた。また、インスリン自己注射は、食事療法や低血糖のカテゴリーとの関連が示唆された。

⑤自己血糖測定の実行では、自己血糖測定再学習の機会

、簡易血糖測定器の習熟や視力などの操作の忘れや身体状況との関連が示唆された。

⑥フットケアの実行では、皮膚科受診行動と関連していた。

⑦定期受診の実行では、検査結果の受け取り、検査日の予約など、おのおの診療科での検査とその結果の参考・確認が関連していた。

⑧低血糖自覚の訴えでは、インスリン自己注射の実行や食事療法の実行カテゴリーとの関連が示唆された。

⑨体調変化の訴えでは、自己モニタリングの実行や勧めなど、合併症に関連した症状や値との関連や、仕事の状況や変化との関連が示唆された。

(結語)

糖尿病療養指導場面での糖尿病患者自己管理行動を分析してきたが、コード化しカテゴリー化の段階であることから、今後カテゴリー間の関連の分析を勧める必要がある。また、現時点でのコード化カテゴリーであり、今後のデータの集積での収束の過程で、ネームの変化や追加が予測される。

さかもとともこ

達成動機を刺激する模擬患者を用いた看護技術教育方法の開発に関する研究

— 模擬患者を導入した看護技術試験に対する学生の認識から —

○森田 敏子 松永 保子 内海 滉
 熊本大学医学部保健学科 信州大学医学部保健学科 千葉大学
 Key Words : 教育方法、看護技術、模擬患者、達成動機、看護学生

【研究目的】

看護学生の看護実践能力を高める教育は、看護教員の課題である。通常、学内における教授・学習活動として看護技術演習や看護技術試験を行うが、看護師・患者役割を看護学生が相互に果たす教育方法では臨場感に欠け、看護技術の習得には限界がある。特に、患者に説明責任を果たす学びとして、何のためにその技術を行うのかという目的や必要性を患者の個々の状況に応じて説明する能力の修得には限界がある。したがって、模擬患者を導入した教育の効果を検討する意義がある。模擬患者を導入した授業や授業評価に関する研究はみられるが、模擬患者を導入した看護技術試験の観点から教育効果を研究した報告は少ない。そこで、模擬患者を導入して看護技術試験を行い、この看護技術試験を受けた学生の認識に焦点をあてて検討したので報告する。

【研究方法】

1. 対象者：K₁大学の看護学生2年生30名。
2. 調査方法：①“模擬患者を導入した看護技術試験”に関する認識について質問紙で回答を求めた。②看護技術試験の課題“吸引”の学習は1年次に終了しているが、模擬患者を導入した“吸引”の看護技術試験を行うにあたって、看護学生が技術を再確認し内容を想起できるように“吸引”が必要な事例及び評価用紙（チェックリスト）を配布し技術のデモンストレーション（以下、デモ）を行った。デモから1ヶ月後の看護技術試験までに練習を3回以上行うよう教示した。③質問紙は平野らがThe Hoste Scaleを翻訳して作ったのを参考に研究者らが作成した23項目からなる質問紙を用いた。④調査は前と後の2回行い、前は研究の同意が得られた9月、後は12月の看護技術試験を受けた直後に行った。⑤模擬患者はK₂大学に登録して定期的に訓練を受けている6名に協力が得られた。⑥“吸引”の看護技術試験を行うにあたって、模擬患者の役割演技の水準の統一を図るため、事前説明を含めて4回の訓練を行った。⑦分析方法は、質問紙の各項目について7段階評価の平均値を算出し前後で比較した。

【倫理的配慮】

K₁大学医学薬学研究部に倫理審査申請を行い、承認が得られた。この承認にもとづき、研究対象者に研究の主旨と研究への参加は自由意志で決められることを口頭および文書で説明した。また、匿名性を保障し、得られたデータは研究目的に使用すること、成績とは関係しないこと、協力しなくても不利益にはならないことを説明し、承諾が得られた。模擬患者には、研究の主旨と患者役割を口頭と文書で説明し承諾が得られた。また、守秘義務を要請し理解と了解が得られた。

【結果】

調査した23項目の平均値で高得点を得た上位3項目は、前では、1位6.30点「緊張感がある—緊張感がない」、2位6.27点「効果的—効果的でない」、3位6.23点「重要な—不必要な」であった。後では、1位6.03点「よい—よくない」、2位6.03点「有用な—有用でない」と「継続してほしい—継続してほしくない」の2項目、3位6.0点「有益—有益でない」と「緊張感がある—緊張感がない」の2項目であった。

低得点を示した下位3項目は、前では、1位3.00点「易しい—難しい」、2位4.6点「明確な—混乱した」、3位5.00点「実力を発揮できる—実力が発揮できない」であった。後では、1位3.9点「易しい—難しい」、2位4.10点「明確な—混乱した」、3位4.77点「創造的な—平凡な」であった。

前後で評点が上昇したのは、「易しい—難しい」0.9ポイント差、「有益—有益でない」0.23ポイント差、「良い—良くない」0.2ポイント差、「(模擬患者を導入した試験を)受けた—受けたくない」0.16ポイント差などであった。前後で評点が低下したのは、「やる気ができる—やる気がでない」0.53ポイント差、「達成感がある—達成感がない」0.46ポイント差、「コミュニケーションを学ぶ機会—コミュニケーションを学ぶ機会にならない」0.43ポイント差などであった。前後で得点に変化がなかったのは、「刺激的な—刺激のない」と「実力を発揮できる—実力が発揮できない」であった。

【考察】

模擬患者を導入した看護技術試験に対する学生の認識は、実際に試験を受ける前は、緊張感があるが有用で効果的と認識し、後は、有用で有益で良い、継続してほしいと認識していることが窺える。また、試験を受ける前は、難しくて混乱してしまうのではないかと、実力が発揮できるだろうかと不安に思っているが、後は、思ったほど不安でなく、模擬患者を導入した試験をまた受けたいと認識していることが窺える。やる気や達成感、後に若干低下したが、これは前の期待感が高い得点として示されたのかもしれない。結論として模擬患者を導入する看護技術試験は、看護技術獲得に効果的な教育方法であると評価される。また、学生に過度の緊張を強いることがない配慮とコミュニケーションスキルが身につく教育の効果があがるような工夫の必要性が示唆された。

[平成16年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号16592111)の助成による]

文献：平野由美他：模擬患者を導入したヘルスアセスメント実習に対する授業評価、日本看護学教育学会誌13、p234、2003。(もりたとしこ)(まつながやすこ)(うつみこう)

看護学生の怒りの表出方法

—— 事例分析による類型の試み ——

弓削美鈴 金子潔子 渡辺ナツ子 網野寛子 内海澁

(足利短期大学) (呉大学) (都立広尾看護専門学校) (都立板橋看護専門学校) (千葉大学)

キーワード：患者と看護学生の怒り、患者と看護学生の怒りの表出方法、看護学生の怒り表出パターン

1. はじめに

看護学生の怒りの表現は、一般学生と相違がある。患者が怒りを喚起した場合、看護学生がその心理状態を推測し、対処行動のとり方を検証することは有意義である。患者が怒りを喚起した事例を読ませ、看護学生の感情の表出方法を分類した。

2. 方法

1) 対象： K 看護専門学校 3 年次生 63 名

2) 質問紙： 質問紙には怒りを喚起させる仮想場面を提示し、学生自身が想定する患者の反応、仮想患者がとる怒りの伝達方法としての対応、学生自身がとる行動を自由記載させた。

3) 倫理的配慮： 事前に研究の目的と成績に関連ないことを説明し、文書で同意を得た。

4) 分析： 木野 1)の怒りの表出方法 7 種類を参考とし、その表出方法を類型化し、文節ごとに研究者 4 名が K J 法でカテゴリー分類を行った。

3. 結果および考察

1) 文節の分類は総計 48 項目であった。「患者の反応」27 項目の内訳は、観察して表現 7 項目（攻撃・怒り・不満・反発・不信・期待・裏切り）、患者の思いを推測して表現 12 項目（観察の反発を除く 6 項目+不快・焦燥・失望・寂寥・信頼・疑問）、患者の感情を推測して表現 8 項目（怒り・攻撃・反発・不満・不快・不信・期待・裏切り）であった。「患者の伝達方法（対応）」は 11 項目、「看護学生の行動」は 10 項目であった。

2) 「患者の反応」のとらえ方を表 1 のように、観察し推測した者、思いを推測した者、感情を推測した者にとり 3 区分し、全てが推測できたパターン（I）、2 つ（II・III・IV）、1 つ（V）の 5 パターンに分類した。

3) 患者の反応パターンから、対応、行動をみると、I パターンは、関係修復としての行動が強い傾向にある。II パターンは、患者の側に立った感情の記述がなく、患者の思いの記述が最も高いグループであるが、患者の怒りに対しては直接的攻撃を受けると捉えるため、まずモラル違反として内省するよりは謝罪し、関係修復する者が多い。III パターンは、表現が間接的攻撃を多く記述している。内省し、現状を説明説得するといった関係修復する者が多い。V パターンは患者の怒りの感情をストレートに推測し、患者の怒りの伝達も直接的な攻撃を受けるとする割合が最も高い。そのためまず、看護学生としてモラル違反であると一応謝罪している。しかし、その患者の思いを推測できていないためか内省する者は少ない。対応としても、関係修復努力や指導者から助言を受ける姿勢はあるものの、自己中心的判断がみられた。

表 1 看護学生の怒りの表出方法

		反応			対応			行動				計
		観察	思い	感情	直接	間接	その他	謝罪	内省	関係修復	看護技術	
I パターン	件	14	13	15	13	3	2	7	3	13	1	84
(9人)	%	18.7	15	17.9	15	3.5	2.3	8.3	3.5	15.4	1.1	100
II パターン	件	4	33		17	4	2	11	3	13	5	92
(12人)	%	4.3	38		18	4.3	2.1	12	3.2	14.1	5.4	100
III パターン	件	15		31	20	9	3	11	8	12		107
(15人)	%	14		29	19	8.4	2.8	10.3	5.6	11.2	0	100
IV パターン	件		22	28	12	6	1	9	4	10	4	98
(11人)	%		23	29.2	13	6.2	1.0	9.3	4.1	10.4	4.7	100
V パターン	件			45	25	8	1	15	4	14	7	119
(16人)	%			37.8	21	6.7	0.8	12.6	3.3	11.7	5.8	100

参考文献 1) 木野和代：日本人の怒りの表出方法とその対人的影響、心理学研究、70(6)、2000

(ゆげみすず、かねこきよこ、わたなべなつこ、あみのひろこ、うつみこう)

四つ這い移動をする重度重複障害児についての授業の研究

～第3者を第2者と共有し、人格の発達の基礎を豊かに形成する授業のあり方についての検討～

羽田 千恵子

(龍谷大学大学院生文学研究科)

キーワード：共感、意味、友だち、自我形成

1. 研究の目的

重症心身障害児といわれる子どもたちは、重度の肢体障害を持ち、下部連関（運動機能）や基本連関（手の操作機能）に大きな制約があり、てんかん発作など脳に様々な障害を併せ持ち、その認知や内面世界の形成に大きな不自由を持つ。しかし、この子どもたちの多くは学齢期になると外界に関心を持ち、微細でも自らの活動を介して外界の対象に働きかけ、具体的な実体験と感情の高まりを通して外界と自らの活動の意味を理解し始める。

こうした子どもたちに人格発達を基本目標とした教育のあり方の一つとして、これまで劇遊び的活動を展開してきた。一般的な劇遊びは子どもたちどうしで‘みため’活動が展開される通常の4才頃にみられるが、劇遊び的活動においては、もっと幼い段階における絵本の読み聞かせという文化的活動を具体的な活動を介して体験させていくねらいを持っている。劇遊び的活動ではストーリーに基づいて、各場面の意味が明解にあり、山場に向けての情緒的展開があり、展開への予測・見通しが持ちやすく、また子ども達の自発的活動を位置づけることで活動出番への期待や達成感、集団としての共鳴・共感を引き出すことが出来る。さらに集団的評価を通して‘良き自我’形成をねらうことができる。と考える。

これまでの実践から、「可逆操作の高次化における階層一段階理論」における生後第2の新しい発達の原動力の誕生が課題と思われる子どもたちから、その量的質的發展とともに次の階層である次元可逆操作の発達の階層への飛躍期、そして1次元可逆操作獲得期の子どもたちも、この学習活動に高い関心を示し、場面の意味に応じた操作を自発的に行う姿を多く見せた。また、教師にとって子どもたちの内面的な発達力量を再検討・再分析する機会ともなっている。

今回は、四つ這いで目的移動するA児の授業における姿を分析し、生後第2の発達の原動力の量的質的發展と、次元可逆操作の階層への飛躍的移行について検討する。

2. 方法

(1) 対象児

A児。S県立K養護学校小学部2年生（当時）女子。

障害：水頭症、発達遅滞、點頭てんかん。

病歴・生育歴：生後2週にシャント手術、8か月頃、點頭てんかんが出現し1か月以上入院、退院後大発作は抑制され、療育が開始される。1才頃、四つ這い・つかまり立ちをしきりにし集団から出たがる、2才頃絵の具・粘土は嫌がるが絵本の読み聞かせに興味を持つ。3才で保育園へ、4才頃「おめめは？」で目を指す、バイバイをする。5才でシャント摘出。保育士に応じて態度を変えるなど感情・思いがはっきり出てきた分、夜泣きなど出る。

入学・1年生時：連結可逆操作獲得の課題から1次元可逆操作獲得の課題の子どもたち5名の集団。キーボード、音楽付き絵本などを操作し耳に押し当てて聴き入る遊びを好み、また特定の絵本の特定の頁を何度も指さし「アッアッ」と要求し、読んでもらおうと大喜びするが、相手からの

働きかけを受け止めることは難しかった。

しかし入学後、‘朝の会’に期待を表し、呼名・返事や握手のやりとりにおいて共感的関係が形成されはじめた。‘みる・きく・はなす’の学習『ももたろう』ではキビ団子の受け渡しをし、『101匹ワンちゃん大行進』では子犬役として小屋の扉から自分から出てビックマックまで這って操作した。しかし、股関節手術の入院転校を2回くり返し、学校生活や学習活動での蓄積が不十分となった。

2年生時：1年生時に同じクラスであった4年男子と1年生男子、転入してきた3年男子との4名（2学期10月6年女子が転入し5名）の2次元形成期の子どもも含む集団。学習活動への期待や学校生活への見通しが育ち、意味に応じた操作や応答が明確になり、友だちへの関心、友だちがしていることへの関心が見られ始めた。

すなわち、A児は1次元可逆操作力の獲得の原動力と考えられる言葉を介しての定位的操作や第2者との豊かな共感関係、第2者と第3者を豊かに共有する課題に力を発揮し始めた。

(2) 対象授業

2004年度‘みる・きく・はなす’『雷の落ちない村』。1学期、2学期前半までの7時間（全13時間）を対象とする。

導入では琵琶湖の映像を見ながら語りを聞くが、魚採りの網を引っ張り上げる、舟に向かって這う、雷獣をやっつける網を引っ張る、など場面の意味に応じた操作や目的行動を引き出す活動を設定した。

(3) 方法

VTR録画と授業記録をもとに以下について、表情、視線、指さし、発声などの行動を量的質的に分析を行う。

①場面の意味や声かけに応じた定位的操作がどのように自発的に表出されるか。

②特に手あそびの場面では、相手の動作にどれだけ注目し、模倣しようとするか。

③「もう一回」の要求や相手との応答的交流がどれほどみられるか。

④他児の活動にどのように注目するか。

3. 結果

1時間めは、授業の始まりには注視するがブロックから降りて寝ころぶなど学習忌避の様子がみられたが、3時間めから大きな変化をみせた。活動全体に期待や関心をよせ、画像や人形、登場者をよく注視し、手遊びで「もう一回」を要求し、舟へ這う、網を自ら持つなど主体的行動が各場面で見られた。さらに4時間以降、「ジャンケン」にパーを出すことが見られ始めた。

4. 考察

授業分析からA児は生後第2の発達の新しい原動力を発揮し次元可逆操作の階層への飛躍的移行にある。授業は情緒的共感と共に意味理解と自意識を促した。（はだちえこ）

コンピュータ入門教育における諸問題 (3)

— EXCELの操作方法と初心者の反応 —

○伊藤 典幸

(関東学院大学人間環境学部)

キーワード：コンピュータ、入門教育、EXCEL

【目的】

コンピュータの能力の向上に伴い、アプリケーションプログラムの機能も強化され、「より便利な機能」が追加されてきた。その結果、ある特定の目的を達成するための操作方法が複数存在する状況となっているが、この新しく加わった「便利な機能」は、すべての操作をカバーしているわけではなく目的に応じて従来の操作方法を併用する必要もある。

初心者に対するコンピュータ教育を行う際、これらどのの操作方法を中心として学習を進めるのが受講者の混乱を引き起こさずに理解を促進できるかが大きな課題となる。本研究では、MS-EXCEL について、各操作方法に対する初心者の評価を調査した。

【方法】

調査方法；MS-EXCEL に関する学習が進み基本的な操作に習熟した時点で、コピー操作を行う6通りの方法（1.メニューバーから操作を選択(以下メニューバー)、2.ツールバーのアイコンを使用(以下ツールバー)、3.右クリックで表示されるメニューから選択(以下右クリック)、4.Ctrlキーとアルファベットキーの組合せのショートカットを使用(以下 CTL キー)、5.Alt キーとアルファベットキーの組合せのショートカットを使用(以下 ALT キー)、6.マウスを使ってのドラッグ&ドロップ(以下 D&D))について、(1)操作方法の理解のしやすさ、(2)操作の煩雑さ(面倒くささ)、(3)操作の難しさ、(4)今後この方法を使いたいと思うか、(5)便利な方法だと思うかの5項目について5段階で評価させた。また、同時に最も使いやすいと思う操作方法はどれか、現在主として使っている方法はどれかについて回答を求めた。

調査対象者；コンピュータの基礎科目(必修半期27回)を受講している文科系学科(幼児教育系)所属の大学1年生45名(男子13名、女子32名)を対象とした。これらの調査対象者は、EXCELの前にメールの送受信、インターネット検索、MS-WORDについて学習している。また、この授業を受講する以前にEXCELを本格的に学習した経験はない。EXCELの課程の中では、前述の方法をメニューバー、ツールバー、右クリック、ショートカット(Ctrl)、ドラッグ&ドロップ、ショートカット(Alt)の順で学習している。

調査の実施；それぞれの操作方法について再度、説明をした後、シート上の表(縦6×横4セル)を同一シート上の別の場所にコピーする作業をそれぞれの操作方法で実際に行わせ、すべての操作を全員が理解していることを確認した後に調査用紙を配布、回答させた。

【結果】

「現在主として使用している方法はどれか」の問に対して、1人を除き「右クリック」を使用していると回答したため、その1人を除いた44人のデータについて分析を行った。

分析対象者は、主として使用している「右クリック」を(1)から(5)の項目のすべてにわたり最も好ましいと評価(通常使い慣れている「右クリックが理解しやすく、単純・簡単・便利で今後も使い続けたい」)した。

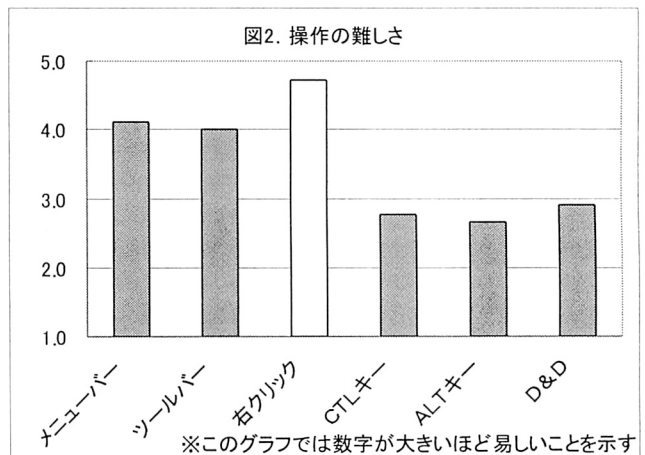
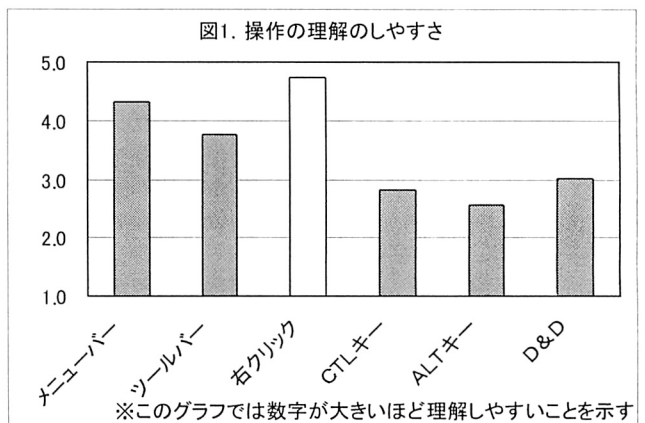
これを除く他の操作方法についての評価は、「理解のしやすさ」に関しては、「メニューバー」が最も理解しやすく、次いで「ツールバー」が理解しやすくと評価され、「CTL キー」

「ALT キー」「D&D」は理解しにくいという評価となった。

「操作の煩雑さ」については、「ツールバー」と「メニューバー」の順に他の方法に比べ単純であると評価されたが、評価値の平均は「ツールバー」においても3.4にとどまった。

「操作の難しさ」については、「メニューバー」「ツールバー」が簡単であると評価されたのに対し、他の方法は難しいという評価が多くなった。

「今後使ってみたいか」「便利な方法だと思うか」では、いずれの操作方法も中程度または低い評価となった。



【考察】

この結果は、「メニューバー」、「ツールバー」、「右クリック」といった、操作を行う際に文字または図形で機能を容易に理解できる操作方法が初心者にとって分かりやすいと評価され、CTL キー、D&D のようにその操作を行うためには、該当するアルファベット、あるいは、ポインターの形と機能の関係を記憶しておく必要のあるものは初心者にとって敷居の高いものとなっていることを示すといえる。また、前3つの方法の中で「右クリック」が操作が最も単純なため主として使う方法として選択されたと考えられる。

今回の課題は右クリックが使える課題であったが、右クリックが使えない他の課題ではどうか、課題ごとにどのような操作方法が選択されるか等についてさらに検討する必要がある。(いとう のりゆき)

障害児者に関する態度の発達的变化（2）

～身体障害について～

○豊村 和真

（北星学園大学 社会福祉学部）

キーワード：障害，態度，発達

【目的】

障害児者に対する態度に関する先行研究数は少ないとはいえないが、主としてその規定要因の検討をすることを主眼としていたため、発達的な検討はほとんどなされていない。そこで本研究では、小学生から大学生までどのような発達過程を辿って障害児者に対する態度やさらに、交流経験、知識等が変化していくのか研究した。今回は、小学生を対象を含むため、認知度が比較的高いと思われる身体障害について検討した。第一報（豊村,2005）で方法の詳細および結果の概略を示したが、本報告では交流経験と知識の発達的变化およびそれらの態度との関連性について述べる。

【方法】

被験者：

札幌市に在住する小学生から大学生を対象に質問紙調査を行った。最終的に分析に用いた被験者は、小学校5年生73名、6年生61名、中学校1年生148名、2年生168名、3年生193名、高校3年生223名、短大生67名、大学生68名の全合計1001名であった。

手続き：

小学校から高校までは、それぞれの学校でホームルームの時間を使って質問紙を実施、短大生は授業の中で実施、大学はゼミの中で質問紙を実施した。

質問紙は質問紙の内容は、以下のように、身体障害者に対する態度18項目、身体障害者との交流経験4項目、障害（者）に対する知識75項目とした（詳細は豊村(2005)参照）。

(1) 身体障害者に対する態度項目について

豊村（2003）、豊村（2004b）による「態度項目」を参考に小学生にも理解できる18項目を1（全く思わない）から5（とても思う）までの5段階評価させ、そのまま得点とみなした。

(2) 身体障害者との交流経験項目について

豊村（2004a）による「交流経験5×3（障害別）項目」の中から4項目を使用し、質問項目内の「身体障害」という言葉を「体の不自由な人」と変更した。4項目はそれぞれ、「はい」「いいえ」「わからない」の中からひとつに○をつけさせた。

(3) 障害（者）に関する知識項目について

豊村（2004b）を参考に研究協力者7名により独自に追加選定した項目と、予備調査によって社会福祉学部の学生から募集した福祉に関する項目を追加し、大学生用に75項目を設定した。その中から用語の難易度を考慮して小学校・中学校について11項目、高校について13項目を大学生用の項目の中から身体障害者に関する項目を抜粋し、さらに専門的な項目を削除して作成した。以上の各項について小中学生に悪影響が出ないように項目の表現を工夫した。

【結果と考察】

身体障害者に対する態度について主因子法、バリマックス回転により因子分析した結果3因子が抽出された。それぞれ、因子負荷量の大きな項目を考慮して、「個人的関与因子」「障害者の能力肯定因子」「社会的関与因子」と命名した。

1)交流経験について

性差、学年要因について分散分析をした結果、性、学年とも有意($P<0.01$)であったが、性×学年の交互作用は有意ではなかった。学年について多重比較を行った結果を考慮すると、男子よりも女子の方が経験が多いこと、中2および、小5女子、男子大学生を除けば学年が上がるにつれて身体障害者に対する交流経験が上がっていた。

2)知識について

身体障害に関する知識（小学校から大学まで共通の11項目）について、性、学年要因の分散分析を行ったところ性、学年の主効果が有意 ($P<0.01$)、性×学年は有意でなかった。

3)態度3因子と交流経験、知識との関連性について

調査研究であるため本来因果関係について論ずることはできないが、ここでは因果関係とみなして重回帰分析を行った。

a)個人的関与因子について

身体障害者に対する個人的関与因子を従属変数に、交流経験と知識を独立変数にして学年と性別別に重回帰分析を行った。その結果、有意であったのは、高3男子（重相関係数 $R=.295, p<.05$ 、交流経験の標準化偏回帰係数 $\beta=0.258$ ）、高3女子（重相関係数 $R=.393, p<.001$ 、交流経験の標準化偏回帰係数 $\beta=0.227$ 、知識 $\beta=.278$ ）、大学女子（重相関係数 $R=.428, p<.005$ 、知識 $\beta=.351$ ）のみであった。

b)能力肯定因子について

同様に能力肯定因子について分析したところ、小5女子 ($R=.566$ 、交流経験 $\beta=.512$)、中2女子 ($R=.283$ 、知識 $\beta=.280$)、高3女子 ($R=.352$ 、知識 $\beta=.337$)、大学女子 ($R=.452$ 、知識 $\beta=.403$) のみ有意であった。

c)社会的関与因子について

同様に社会的関与因子について分析したところ、中2男子 ($R=.303$ 、知識 $\beta=.294$)、中3男子 ($R=.281$ 、知識 $\beta=.215$)、高3女子 ($R=.423$ 、知識 $\beta=.403$) のみ有意であった。

以上の結果から、態度と関連する要因については、態度因子に共通で、より低学年では交流経験が、学年が上がるにつれて知識がより大きく寄与する傾向が見いだされた。

なお、本研究は非会員の佐藤真衣子氏との共同研究である。

【引用文献】

- 豊村和真(2003)「障害児者に対する学生の意識に関する研究～障害児者に対する受容的態度について～」日本応用心理学会第70回大会発表論文集,82
- 豊村和真(2004a)「学生の障害児者に対する受容的態度に関する研究（第1報）」北星学園大学社会福祉学部北星論集第41号 85-98
- 豊村和真(2004b)「障害者に対する受容的態度と知識の関連について」日本福祉学会第51大会発表論文集, 118
- 豊村和真(2005)「障害児者に関する態度の発達的变化（1）障害者に対する受容的態度と知識の関連について」日本福祉学会第51大会発表論文集, 118

（とよむら かずま）

発達と発達保障への研究

—人間発達における創出の階層について—

○小倉 昭平 (京都発達研究会) 田中 昌人 (人間発達研究所)

キーワード：成長連関野、創出的自己、創出対称性、教育的発達の源泉

1. [研究の目的]

前回(2004年次)発表の内容は、『発達と発達保障への研究—人間発達における創出の階層への移行について—』ということであった。今回の研究発表は、その「創出の階層」を内容的に明確にする必要がる、という課題に答えるところにある。「創出の階層」は、年齢的に大学生の後期、そしてさらに年齢が進んだところの、青年期と呼称される年齢期のところにある。発達のひとつ前の階層である「抽出の階層」ともあって、この階層は「人間発達」にかかわって固有の位置をもち重要性をもつ。階層形成の様相、内容そしてこの階層のもつ特性などが巾広く具体的に明らかになることが、「人間発達」にかかわる今後の研究の深まり、進展のために必要である。

2. [研究の方法]

A. 研究の方法は基本的に前回と同様である。すなわち、観察し考察と研究を深めていく方法は、「前向きに活動をもつ青年」とともに動いているようにしている、ところにある。そこから、動態の機微をとらえ学ぶことを得て、そして発達にかかわる今までの研究結果と成果を基礎とし共同して分析し考察を深めるようにする。その場合科学的な研究の深まりと成果を得て行くには、客観的にして具体的な事態と資料となるものを得ていることが必要である。この点は強い留意事項である。そして実際そういう事態と資料となるものをもち得るところで、新しい研究の深まりが得られている。

B. この研究の基礎には、以下に列記する諸点が前提的に存在する。1) 田中昌人の『可逆操作の高次化における階層—段階理論』、『人間発達の理論』及びそれを基本にもつ一連の研究と実践。2) (したがって)可逆操作、可逆対操作、連関、人格の発達の基礎、発達の原動力、教育的発達の源泉、発達保障の階梯などの概念。3) とくにこの発表では、発達の第5の階層(抽出の階層)から第6の階層(前回発表においてとらえた)への移行が起きて、そこでの諸活動が存在しているという状況把握とともに観察、分析を深めている。

3. [結果と考察]

大学生期を過ぎて、大学院生であることなどの形で青年期にあって、なお学習を深め研究的姿勢をもって「独自の対象」に迫ることが、本人の基本的意志と課題としてもたれている。～この状況の存在することが、この研究と研究発表の前提であり土台である。なおその点は、前回発表の土台にも通じていることであり、以下の内容は、前回発表の内容を引き継いで、新たな資料を発展させ深めているというようになっている。すなわち、前回発表では、観察・考察の結果としての把握内容として、1) 発達としての「移行」のこと、2) 「移行への抽出可逆対操作」のこと、3) 「可逆操作」創出の誕生」のこと、4) 「群性体」、「対称性」のこと、を着眼点としてあげて、そこに具体性を添えるようにして研究結果としての内容を固めている。今回ここでの発表内容は、それらのことを含み、生かし、そしてさらに観察と分析、検討、そして研究の深めを進めた結果からのものである。以下に記述している内容は、その進展と成果を見渡し整理して要点となっているものであり、そしてなお今後一層研究を深めていくことにおける糸口のところに位置付けられるものである。

a) 観察を深めていて注意にのることは、「可逆操作」創出」とともにある階層がもつ「固有性」である。すなわち、この創出の階層は、青年個人とともにあって「固有の内容」をもつとともに、そこに「発展性」をつよく宿している状況が基本に存在していく。この点に注目することが重要性をもつ。このことをもう少し深めてとらえて；本人個人がこの創出の階層に立つほどに、取り扱う内容に、「専門性、独自性」の語をもってすべき「独自分野」となるものが生じ、そして「独自展開」が起きる。そこに「本人からの独自努力」が必要ということがあり、そして「取り組む目標と意志を支える力」も必要であることになる。ここにこの階層の重要な独自性がある。

b) 上記の注意をもつところで、注目しとらえることになるのが、「連関」である。ここで「成長連関野」の概念をおく。すなわち、この創出の階層においては、内容的に「独自分野」「専門性、独自性」という点があり、そこにかかわり発達としての連関の成長、が強く存在するからである。真剣、固有、新鮮、独自の前向きの「活動」などがあって、発展のステップと成果が創り出されていく。極めて貴重な連関野が築かれていくという動向がある。例えばとしてここに具体的な場合をおくと、それは学問的・研究的に一層独自の前進を開こうとするところに在る。

c) 別の角度から注意を深めて；それは「人間個人」の存在である。先の連関成長には、「人間の存在」があり、人間がもつ、不思議とも見るべき力がそこに誕生している。別の表現をもってして、この階層を特徴付ける「創出」の可逆操作のもつ素晴らしい力内容と性質：それは脅威的と感じさせられる性質をもち、ときにものごとに見れる難解性を超える。この性質の操作を生む根源に人間自身の存在がある。このところに注目して、まずは「創出的自己」の概念をおく。それは人格の発達の道筋にある。それまでの人格形成のうえに、この創出の階層において、重要な役割をもって必要であり、重要性をもつ。その存在には、努力を必要とし、条件あつての存在ということになっている。

d) さらにもうひとつの注目点を設けて；それは発達における「段階性」と「対称性」とである。人間個人の取り組み諸活動の中で、発達の第1次段階、第2次段階というところが成立して、そこで力の源となる具体的現実的地盤が形成され、そして可逆操作「創出」の誕生から成長が現出する。その段階の充実とともに「対称性」の存在化が進み、そして「対称性の転倒」、「対発生」という状況に至る。ここまで来ると、発達の第3次段階の形成と、「発達の原動力」の発生が起きる。創出の力はここに本格的に発揮され、「対称性」も高まる。そのことが大きな発展性の源を成すようになる。ここに至り、人間の基礎的な発達の重要な極点を実現・実在化していく。

e) (むすびとして)この階層の形成、成長にとって、それを生み育てる「教育的発達の源泉」が必要、重要性をもつ。例えば、「書籍、文化作品などとなっていて、読みとり鑑賞などにより学ぶことができる」、それに「学習へ適切な助言と指導が有り得る」、「学費が必要とあれば無償となり、発達保障が基本に存在する」ということであれば、青年の前進、創出の活動は、そのことに応じ、豊かな成果を築く力となるであろう。(おぐらしょうへい、たなかまさと。)

索 引

人名索引

ア	青木憲樹	90	大久保康彦	16	瀨瀨葉月#	34
	安達喜美子	92	大島典子#	11	幸野里寿	100
	網野寛子	112	大澤 光	50	小竹久美子	88, 89
	新井雅人#	13	大澤靖彦#	13	小谷正登	91
	荒木英幸#	5, 6	大村政男	5, 97, 98	小西奈美	108
	飯田頼男	99	岡田恵理子#	13	小林千世	36, 87
	家本 修	78	岡村一成	62	小松桂子#	72
	伊賀憲子	31	荻野七重	64	近藤俊明	13
	石垣一司#	40	奥村隆志	45	サ 齊藤 勇	64
	石川清子#	13	小倉昭平	116	坂本知子	110
	石橋里美	67	小野寺理江	56, 69	坂本正裕	70
	井手口範男#	55	力 垣本由紀子	79	櫻井 薫	37
	伊藤嘉余子#	12	柏木恵子	1	佐々木美加	96
	伊藤典幸	114	片岡杏子	18	指田直毅#	40
	井上枝一郎	45	片岡大輔	42, 46, 48	佐藤恵美	42, 46, 48
	井上孝之	103	加藤奈保美	35	佐藤祐基	24
	井上洋平	17	金子潔子	112	施 桂栄	45
	今泉紀嘉#	13	金子久美子#	9, 10	雫石礼子	103
	今留 忍	88, 89	神谷有里子	22	品川満紀#	7, 8
	岩崎祥一	53	蒲生澄美子#	34	篠原一光	51
	岩崎久志	101	川島大司	28	菅原博嗣	80, 82, 83
	宇惠 弘	26	河野 望	66	杉村正子	39
	浮谷秀一	5, 97, 98	神田和美#	38	鈴木大輔	53
	白井恵美	34	神田幸治#	51	須田弘子	7, 8
	白井伸之介	51, 75	岸本英男	93	角野善司	30
	内海 滉	32, 33, 35, 86, 87, 88, 89, 94, 106, 109, 111, 112	北村康宏#	77	関 陽子	80, 81
	梅宮れいか#	9	木村たき子	62	関口恵子#	34
	閻 喜	65	木村友昭	59	夕 高嶋正士	25
	遠藤竜馬#	19	桐生正幸	56, 69	高野隆一	31
			草野美根子	33, 94	高橋 溪	104, 105
			久保田健市	63	高橋友子	86
			久米 稔	28, 31	高原素子	34

滝澤 麗	104, 105	畑山俊輝	77	三宅義和	19
瀧本孝雄	3	蜂屋 真	47	宮原紀子	109
多久島寛孝	102, 106	服部 環	84	宮原道子	49
太刀掛俊之	51	花沢成一	37	望月雅和	95
田中翔子	54	馬場史津#	13	桃井真帆#	11
田中真介	23	濱 保久	41	森 千鶴	108
田中朋子#	13	林 潔	29	森 昇子	70
田中昌人	116	林田りか	33, 94	森下高治	42, 46, 48, 107
田中道弘	27	原千恵子#	13	森田敏子	87, 111
田辺 勝	99	深澤大地#	13	森脇保彦	99
田原理恵	61	福岡欣治	68	八木孝彦	29
玉井 寛	85	福田 廣	73	矢島彩子	40
玉木ミヨ子	34	福原真知子	15	安田道子	7
手島茂樹	13	福本純一	73	八つ橋のぞみ#	71
寺澤美彦	31	藤島和子	34	柳澤利之#	13
銅直優子	42, 46, 48	藤田圭一	5, 25, 97, 98, 99	山岡 淳	59
外島 裕	105	藤原正子#	12	山極和佳#	13
殿村由希	37	星 薫	71	山本勝則	102, 106
豊村和真	115	星野仁彦	1, 5, 11	山本洋祐	99
ナ 内藤哲雄	60, 65, 67, 72	細田 聡	45	湯浅とも子#	13
内藤美智子	31	本田久市#	7	弓削美鈴	112
中 淑子	33, 94	マ 前田明日香	20	横井幸久	57
中井 宏	75	前田恵利	32	吉田一子	106
中島たけし	99	正田 亘	39	吉光 清	43
中田 栄	21	間島英俊	38	余村朋樹	43
中野泰志#	55	松浦常夫	76	ラ 劉 莉	78
長野祐一郎	54	松田浩平	42, 46, 48, 54, 61	ワ 若原克文	80, 82, 83
中村隆宏	51	松永保子	36, 87, 111	和田一成	51
成田 猛	31	松本 洸	44	和田美知子	52
布川清彦	55	三浦公一	85	和田裕一	53
ハ 萩原元昭#	13	三井利幸	80, 82, 83	渡辺俊彦#	3
橋本泰子	58	三井真紀#	13	渡辺ナツ子	112
橋本輝雄#	7	三戸秀樹	42, 46, 48		
荷見一恵	92	南 隆男	7, 104, 105		
羽田千恵子	113				
畑 哲信#	9, 10				

(#は非会員)

日本応用心理学会第72回大会 準備委員会

大会準備委員長・大会会長	星野 仁彦	(福島学院大学福祉学部)
事務局長	玉井 寛	(福島学院大学福祉学部)
委員	三浦 尚之	(福島学院大学福祉学部)
	河野 毅	(福島学院大学福祉学部)
	渡辺 俊彦	(福島学院大学福祉学部)
	品川 満紀	(福島学院大学福祉学部)
	中西 弘則	(福島学院大学福祉学部)
	福島 匡昭	(福島学院大学福祉学部)
	大野 道德	(福島学院大学福祉学部)
	田中 正敏	(福島学院大学福祉学部)
	本田 久市	(福島学院大学福祉学部)
	安田 道子	(福島学院大学福祉学部)
	板垣 健太郎	(福島学院大学福祉学部)
	大倉 健宏	(福島学院大学福祉学部)
	渡辺 哲	(福島学院大学福祉学部)
	藤原 正子	(福島学院大学福祉学部)
	梅宮 れいか	(福島学院大学福祉学部)
	桃井 真帆	(福島学院大学福祉学部)
	大島 典子	(福島学院大学福祉学部)
	大澤 麻子	(福島学院大学福祉学部)
	伊藤 嘉余子	(福島学院大学福祉学部)
	阿部 好恵	(福島学院大学福祉学部)
	佐藤 佑貴	(福島学院大学福祉学部 メンタルヘルスセンター)
事務局	香野 時夫	(福島学院大学)
	ニヤゾヴァ・ニゴラ	(福島学院大学)
	伊東 希望	(福島学院大学)
	五十嵐 智美	(福島学院大学福祉学部 メンタルヘルスセンター)

日本応用心理学会第72回大会論文集

発行日 2005年8月1日

発行者 日本応用心理学会第72回大会準備委員会
準備委員長 星野仁彦

〒960-0181 福島市宮代乳児池1-1

福島学院大学福祉学部事務室

TEL: 024-553-5926

FAX: 024-553-3252

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jaap>

印刷 株式会社 国際文献印刷社

* 本発表論文集に掲載された論文の著作権は日本応用心理学会に帰属する。